

一章 はじまり

その朝。

イタリアでは子どもの学校は6月半ばに早々と終わり、それ以降、母親はのうのうと寝坊ができる。わたしは久しぶりにふとんの中で乳房を触っていた。「月に一度は自己検診」というけれど、最近してないような気がする。ま、大丈夫だろうけど。

おや。

ここに、触るのは、何だろう。

右の乳房の内側のやや上。親指と人さし指で丸をつくったほどの、ぐりぐり。

これがあの、しこり、というものなのだろうか。

がん？

まさか。

でも、ほうっておくわけにもいくまい。医者に行って、良性なら良性との診断を受けねば。

いつ？

あと1週間で日本に一時帰国。イタリアだと専門医がどこにいるかわからないから、まず友人知人に尋ねてまわらないといけない。そして診察を申し込んでも予約がひと月先、なんてことはザラ。1週間で受診はとうてい無理だ。日本で診察だけは受けよう。そのあとのことは、そのとき。

とはいえ、日本の家に帰ったら、夏休みが始まるまでのわずかなあいだに、以前行っていた小学校と中学校に体験入学という形で4人の子どもたちを通わせる予定である。いずれ日本に戻って生活するときのための、わが家の毎夏の恒例行事だが、親にとっては体操服から習字道具、上履き、通学用自転車まで他の子と同じものを4人分そろえてやるのが、並みの忙しさでは

ない。今までの経験から、毎日駆けずり回ってたっぷり 1 週間かかるのがわかっていて。上の娘の頭痛が続くのに、検査をしてやらなければならない。わたし自身のごことは、そのあとになるだろう。

この優先順位は、母としての意識と責任感から来るものであった、とエラソーに言ってもいいのだが、やっぱりわたしは、ひよっとしたら待ち構えている宣告が無意識のうちに恐かったのだと思う。

実のところ、それまでのひと月がムチャクチャ忙しくて大きな変化もあったから、頭の切り替えが難しかったというのも、もうひとつの言い訳である。

そう、がんの可能性なんて、誰だって、あらゆる理由をつけて、考えたくないものではないか？

イタリアに来て 3 年が過ぎていた。

たまたま夫は長期のアメリカ出張で家にずっといない。

最初の予定ではこの出張後、この 8 月いっぱい夫のイタリア勤務が終わって家族で日本に帰国し、大好きなイタリアとはおさらばになるはずだった。

それを年の初めから覚悟していたら、案の定（じょう）学年終わりの 6 月は目が回るほどの大忙しだった。まず、インターナショナルスクールに通っていた子どもたちの発表会や遠足、友だちの誕生パーティが次々にある。送り迎えは当然、母たるわたしの仕事で、発表会にも行かなければいけない。わたし自身が通っていたイタリア語学校のお別れ遠足もある。4 人の子どもたちの送別会を開くのも親の仕事で、ディスコ、ボーリング場、屋内の遊戯スペースの 3 カ所を開くべく、場所を選んで予約してそれぞれ友人たちに招待状を出す。

引っ越し前には、日本ではワット数が違うので使えない電気製品全部と車を 2 台、広告を出して買い手を見つけ、引き渡す。日本に連れて帰る猫の健康診断と予防接種もしなければならない。それから、イタリアに来てわたしが習い始めたオーボエの最初の発表会。しかし、先生の選んだチャイコフス

キーの小曲が難しすぎて息が続かないうえに、国際クラブのパーティの準備が忙しくて、猛練習すべきときにまるで時間がとれない。わたしは国際クラブの会長をしていたから、他の 4 人の役員とともに夏のパーティを主催する責任があった。

パーティの準備でアレーゼの店を何軒も回って、くじの景品にする手描きの絵のついた灰皿や音楽の CD、香りのいい石鹸（せっけん）セット、アイスクリームの引換券、ヘアドライとブローのサービス券などを寄付してもらい、会場としてわたしの住んでいた団地の集会所を借りる申し込みをし、「トイレはこちら」の貼り紙を書き、ワインを何本買うか役員会で話し合い、音楽とゲームの担当者を募り、くじを娘につくらせ、と大車輪で動いていると、くじを売るフランス人との打ち合わせは夕食後の 9 時という日もあった。「ひとに動いてもらおうと思えば、自分はひとの 3 倍働け」という、いつか聞いたことばを実践しているつもりだった。いや、単にわたしはなんでも自分でやりたがるタイプの人間なのかもしれない。

わたしのイタリア暮らしはこの国際クラブ抜きには語れない。わたしは棚ボタで会長になった。

クラブは正式には「アレーゼ国際歓迎クラブ」という名前で、イタリア人もいるが主に外国人の集まりで、23 カ国から来た女性約 100 人が会員である。夫の転勤で外国暮らしとなったものの、ことばがわからない、習慣も故国と違う、という夫人たちが助け合う必要から生まれたらしい。別の見方をすれば、外国から来た有閑夫人の集まりだと思ってもいい。日本人はわたしひとり、公用語は英語。もっともわたしは最近では半分以上イタリア語を使っている。アレーゼは、ミラノの北の郊外にある人口 2 万 5 千人ほどの町の名前である。

イタリアに住み始めるとき、わたしと夫とのあいだでは、せっかくイタリアで 3 年間暮らすのだから、なるべく日本人とはつきあわず、できるだけイタリア人や、イタリアでしか知り合えないひととつきあい、イタリアらしさ

を満喫しよう、というポリシーが一致していた。

では子どもの学校も現地のイタリア学校か、となるが、行ってすぐから親がイタリア語で教師と細かい話をするのはしんどいし、子どもの宿題を充分にみてやることもできない。ではせめて英語環境かと、アメリカンスクールを見学に行ったら、まるでアメリカを移してきたような雰囲気であってしまった。ヨーロッパまで来てアメリカ式にすることはない。で、イギリス式のインターナショナルスクールに決めた。5歳入学の小学校が5年、中学校が4年である。初めは毎晩2時間、上の2人の子の宿題を親2人が付きっきりでみてやるハメになったが、その時間はしだいに減っていった。

わたしは3年前イタリアに来るなり、夫の上司夫人のイギリス人に誘われて国際クラブに足をつっこんだ。日本人がほかにいないものだから何もかも新鮮でおもしろく、2年目に恐るおそる雑用係、3年目にも続いて雑用係を引き受けたら、イタリア人の行事係が引っ越していなくなってしまったので、行事係も思いきって引き受けた。行事係は最低月一度のお出かけを計画する、かなりハードな係である。土地勘がなく、ことばも不自由ななかで、外国人どうしがひとを誘って行くようなきれいな楽しいところを探そうというのであるから、勇気と知恵と馬力がないと務まらない係で、一番なり手がない。なんとかかんとかやっていたら、カナダ人の会長まで突然帰国していなくなってしまった。会長の任期は残り4カ月。そこで、「わたしやってみようと思うのだけど」と名乗りをあげたのである。

会長。

いっぺん、やってみたいではないか。

前の年に会長だったイギリス人のカレンは、歳は40過ぎと若いですが、小学校の校長を務めていたというだけあって器の大きい人材だった。が、次に会長をしたカナダ人のアンナは高卒の元銀行員という気さくな人柄で、見ていると、これならわたしにもできるのではないか、と思われたのである。

カレンと会長職を争って敗れたドイツ人のアンドレアは、やり手ながら傲慢で失礼なところのあるひとだったが、「国際クラブの会長なら履歴書にも

書けるもの」などとも言っていた。わたしも会長職に興味はあったが専業主婦暮らしが長かったあとでもあり、1年間やるほどの自信はなかった。それが今回はたったの4カ月、なおさら魅力的ではないか。

なにせ誰かすぐ必要、という非常事態だったので、役員会で「言うことなし！」とは残念ながら言われなかったが、「まあ大丈夫なんじゃないの」と決まった。

会長職といっても一番大きな仕事は毎月の例会で挨拶（あいさつ）をすることと、月報に一筆書くことで、わたしは人前で話すのは何語でも妙に好きだったから、苦にはならなかった。英語で冗談も言えた。雑用係として最初に外国人40人の前に立って話した時はさすがに胸がドキドキしたが、会長のカレンが、「わたしが会長ですが、一番仕事は軽いんです、ほかの役員がみんな仕事はしてくれますから」と自己紹介をしたあと、隣がたまたまわたしだった。即興で、「日本から来たマドカです。とっても緊張しています。だって、わたしが一番重大な仕事をするからです。……コーヒーを入れることだけど……」と言ったら、何人かクスクスと笑ってくれ気が楽になった。

ヨーロッパの年度は9月に始まり、長いながい夏休み前の6月に終わる。国際クラブはその年度末の6月に、例年家族をも含め100人近くの大パーティを開く。クリスマスパーティが会員だけの小規模なものなのに比べ、夏のパーティは会長職を締めくくる、1年で最大の行事なのである。忙しいのは当然だった。

食べるものは各自持ち寄りで、わたしはいつも握り寿司を出した。ねじり鉢巻で朝から1升の米を炊き、カンパチ、鮭、チヌの3匹を買いに行って自分でさばいてつくる寿司が、大人気で30分でなくなる。どうも、ちょうどヨーロッパでは日本食、特に寿司が流行し始めた時期だったらしい。日本でもイタリア料理がある時期からはやったようなものである。

話はそれるが、クラブのメンバーのひとりに隣町ローの高級海鮮レストラン「バルカ（小舟）」の娘がいて、わたしの握り寿司を美味しいおいしいと

喜び、レストランの厨房でつくって見せてくれないかと頼んできた。プロの前でとんでもない、わたしは日本ではつくったことがない、イタリアでは寿司は売ってないし食べに行く高いから、見よう見まねで握っているだけ、と驚いて断ったが、どうしても、と言われ、炊飯器持参で行くことにした。ずうずうしいのは生まれつきだ、うん。

コックは50センチを超える大きなピカピカしたスズキを用意していた。さすがにそれはわたしの手に余る。コックが鮮やかな手つきでさばくのを見ていると、わたしは何しに来たんだかとげんなりしたが、素人の主婦と承知でわたしを呼んだのは向こうである。開き直って、昆布を入れて炊いた米に酢や塩、砂糖を混ぜて握っていると、じっと見ていたコックが真似し始めた。が、米粒が掌（てのひら）にくっつくばかりでうまくできない。首をひねった彼は大匙（さじ）を取りだして2本両手に持ち、ニョッキ（じゃが芋団子）をつくる要領で、匙を八の字に合わせ、あわせして三角柱のような塊（かたまり）を米でつくってみせた。スズキを乗せるとコテッとこけるので2人で大笑いした。

「どうしてまたわたしを呼ぼうなんて思ったの？」と尋ねてみると、コックは「なに、好奇心さ」と言う。イタリア人には珍しくあまりしゃべらない男で、わたしが「ヨーロッパにない味なら中華でもいいじゃないの」と聞き返すと、「いや、俺は市場に魚を仕入れに行くが、中国人は俺が買わないような質の悪い魚を買っていく。あんな奴に料理を習おうとは思わない」と答える。

そういえばここでは中華料理店が、総じて安い。イタリア料理店は基本的に高く、日本で言うと料亭に近い感覚で、イタリア人が安く食べたり親どうしで打ち上げの宴会をしたりというときにはピザ店か中華に行く。利にさとい中国人は異国で商売をするのにそういう食いこみ方をしたのか、と感心するが、おかげで高級中華料理店は見たことがない。反対に日本料理店は高く、これはこれで高級感で商売しているのかな、と思う。バブル崩壊後は日本人ビジネスマンも観光客もガタ減りしたので、半分近くつぶれた、という噂も

聞いたが。

しかし日本料理店なるものに行っても、コックが中国人だったりウェイトレスが韓国人だったりすることも多い。ヨーロッパ人からみれば東アジア人の区別はつきにくく、また気にする風でもない。確かに日本でもイタリア料理店で働いているのが白人なら、何人（なにじん）でもかまわないという感覚かもしれない。

一度、日本料理店で天ぷら定食を頼んだら、天ぷらはカラリとあがって美味しかったが、ごはんが温かいすし飯で、わたしはこんなものが食えるか、日本ではこんなことは絶対しない、と店のひとに怒ったこともある。すると、「確かに板前は中国人だが、ミラノの日本料理店で修行したのだし、イタリア人にはこのほうが人気があるのだ」とウェイターはケロリとしたものである。ほかにも、日本料理店の焼きそばの麺がスパゲッティだったとか、具体的に説明しにくいがなんとも日本的な味ではない、ということもあった。思うようには手に入らない材料で、異国の地で作るのだからしかたがあるまい。

わたしたちはイタリアに来る少し前に 1 年間アメリカで暮らしていて、そこでも中華料理をよく食べていたのだが、おもしろいことに、その味が、アメリカで食べたときと、日本で食べたときと、イタリアで食べたときと、あきらかに違っていた。同じ中華料理でも、それぞれの国民の好みに合わせて変えてある。

一番美味しかったのは？ イタリアである。食に対するこだわりが一番強いからではないかと思う。そのうち中国に行って、本家本元の中華料理をぜひ食べてみたい。

この日はイタリアンレストランの厨房で握り寿司の実演がなんとか終わったあと、コックの兄貴で給仕長のアンドレアから「お礼に今度は旦那と食べにおいで」と申し出があった。わたしがあつかましくも正直に「日本では子どもを置いて夫婦で外食なんてしないんだけど」ともちかけると、「いいよ、連れておいで」とアンドレアはにこやかに笑う。わたしはさらにニヤリ

と笑い、「子どもね、4人いるの」と上目遣いに見やった。アンドレアは大笑いして「いいよ、みんな連れておいで」と寛大に言ってくれた。

昼下がりで暑かった厨房から家に帰ってみると、スカートの後ろのファスナーがぱっくり開いていてショッキングピンクのパンツが丸見え、ひとりで盛大に赤面した。いったい何時（いつ）から開いていたのだろうか？

さて国際クラブの夏の大パーティが無事に終わった翌朝、役員のクリスティから電話がかかってきた。

「ねえ、マドカ、きのう会場をかたづけるとき、椅子を中に入れたっけ？今朝起きてみたら雨でしょう。わたし気になって。もし傷（いた）めてたら弁償だものね」

「クリスティ。あんた疲れてない？」とわたしは聞き返した。

「クタクタよ」

「あたしも。今朝起きてみたらね、上半身裸なの。きのうの晩確かにTシャツ着て寝た覚えあるのね。何をまちがえたか夜中に起きて脱いでるのよ。でもまったく記憶がない。疲れ過ぎよね。あんたも疲れ過ぎて椅子を入れたのにさっぱり忘れてしまって、心配だけしてるんじゃない？大丈夫よ。あんたが心配ならわたし見に行くけど」

クリスティはわたしの間抜けな慰めに笑いだした。役員はみんな、最大の行事を終えて調子が狂ってしまっていた。

一方、オーボエの発表会は壊滅的な出来で終わった。数少ない日本人の友人で東京芸大を歌で出たというひとにピアノ伴奏をしてもらおうという、たぶん一生に一度の身分不相応な豪華演出だったのに、何がいけなかったのか途中でオーボエの音が出なくなり、冷や汗を流しながらそのまま終わった。あんなひどい出来は、練習のときでさえなかった。

旦那がいないんなら、と来てくれたフランス人と南アフリカ人の友人に礼を言い、がっくりきてことばもないまま、子どもたちとジェラート（アイス

クリーム)をなめて家に帰るはめになった。

夏至(げし)前後のこの時期、ミラノは夕方が長い。日が暮れるのは10時ごろである。夕飯を終えて子どもたちを次々に風呂に追いやる。涼しくなり、空が落ち着いた色に美しく、鳥のメルロが遠く近くで豊かな声で鳴きかわすのをわたしは庭でぼうっと聞いていた。夫の植えていったチシャが雑草の中に伸び、イタリア特有の大きなカタツムリの殻が見える。

ああ、終わるんだな、と思った。

わたしの人生でこんなに大変で、こんなに楽しいことはなかったイタリア暮らしが、もうじき終わるんだ。

イタリア人のパトリツィアやシルヴィア、ルチア、フランス人のクロード、リディア、アメリカ人のクリスティ、スウェーデン人のエヴァ、ドイツ人のモニカ、インド人のミリー、みんな会えなくなる。日本に帰ったら英語もイタリア語も話さない。彫刻に縁取られた華麗な噴水も、浮き彫りをほどこした古く美しい建物も、教会でのコンサートもない。おしゃれをして出かけていく国際クラブの例会もない。

帰りたくないなあ……。

でも、帰らないと。

しょうがないよ。

クラブ最後の例会で、英語で発表した自作の詩が、心をよぎる。涙とともに読み終わったら、10人ほどが、マドカ、よかったわ、わたしももらい泣きした、と言ってくれた、自分でもお気に入りの作品である。

たんぽぽ

来年の春、わたしはここにいない

だから、あなたが教えてくれた道から見える
畑のなかに一列に並ぶ樹に
わたしは頼んでおいた

一年たって
春の風が吹きはじめたら
やさしい梢のざわめきとともに
わたしの歌声（ハミング）を
あなたの耳に届けるようにと

それからまた
道端の眼に染みる青い草と
黄色いたんぽぽにも
よくよく頼んでおいた

四月の太陽がまた輝いたら
わたしの笑顔を
かならずあなたに思いださせてくれと

りんごの白いはなびら わたしの涙
枝垂れ柳はわたしの指先
鶺鴒（ひわ）のさえずり わたしのささやき
濃い八重桜よ わたしの弾（はず）む笑い声

わたしはあなたを忘れない

電話が鳴った。あら、珍しい。アメリカにいる夫からだった。国際電話だ

というのにえらく話が長くゆっくりで、嬉しいけれどどうしたのだろうと思っていると、夫は驚くべき知らせを告げた。「日本への転勤がなくなった」と言う。もう2年イタリア滞在。

何ですって？ 嬉しいけど、でももう、諦めてたのよ？ 心の準備はしてたのよ？ それが帰らなくていいって？

わたしは自分のまわりで世界がドンガラガッシャンと音をたててひっくり返し、そしてガラガラと勢いよく回り始めるのを感じていた。明日から、車を売る約束を取り消して前金を戻し、電気製品を売るのも断り、そして何よりインターナショナルスクールの小学校と中学校にとんでいってそれぞれ校長先生に会い、来年度のクラスの定員に空きがあるかないか確かめて、子ども4人の在籍継続を申し込まなければいけない。空きがあるといいけど。子どもたちは2歳違いの男、女、男、女で、上から中学4年、2年、小学5年、3年になる。それぞれの送別会も、誕生日パーティに変更して実行。猫は預ける手配をしなければ。一時帰国まであと3週間しかない。

夫には「よっしゃ、こっちはわたしがなんとかするから、あんたはアメリカで安心して仕事しておいで」と胸をはって見栄をきったけれども、実際にはクラクラするほどの忙しさが、もう一度目の前に見えていた。

それから2週間、イタリアでやるべきことをすべて終わり、わたしは4人の子を連れて日本に一時帰国した。そしてさらに半月後、日本で子どもたちのためにやるべきことを一通り終わり、それまで棚上げしていた不安と向き合う覚悟を決めて、まず地元の産婦人科に行った。

診察後、医者は詳しくは言わずただ精密検査を受けろと言ひ、他の病院を紹介してくれた。外科であった。

外科？

無条件で切らなければならないということか。

しかもわりと田舎の、ただの外科医院のようだった。たぶんコネがあるのだろう。

正直、ぞっとした。

専門のところでなければ、と時間の限られたなかで乳腺科を探して行くことにした。

しかし、最初の医者 of 診断が気になる。紹介状には宛名が書かれ封がされていたが、迷った末に、わたし自身に関することであるから、と開けて読んだ。が、診断名は医者 of 崩し字が読めなかった。封筒には開封したとの旨（むね）を書いた。正直に言うが、紹介状に封をするというのは、たぶん相手の医師に敬意を払って、とか途中で改ざんされないように、とかいう理由なのだろうが、患者の立場からすると、患者からその情報を意図的に隠したい、というふうにも見える。ばかにしているのか、と思わないでもない。紹介状を書く医者には、そう思う患者の気持ちを理解してほしい。少なくとも、相手の医師に対するのと同等の敬意を、患者にも払ってもらいたいと思う。患者への説明が普及していない時代の話である。

乳腺科に行き、「告知」を受け、泣いた。

わたしが抱えているのは、まぎれもなくがんであった。

ハンカチ 1 枚をわたしがビチョビチョにしているなかで、医師が 1 時間ほどもかけ、きちんと説明をしてわたしの質問に答えてくれたのはありがたかった。事情を話すと、最初に全摘手術を日本でし、化学療法をイタリアですることを勧められた。

暑い夕暮れだった。病院が遠くて家まで車で 1 時間かかったのは、いいことだったのだろうか。ふだん冷房が嫌いで窓を開けて運転するわたしも、その日は窓を閉め、ラジオを大きくかけて泣きわめきながら帰った。

イヤだーっ！

どうしてわたしががんにならなければいけないの？

それほど悪いことはしていないのに、どうしてこんな目にあわなくてはいけないの？

それともわたしは、そんなに悪いことをしていたのだろうか。

わたしはまだ 42 歳。まだやりたくてやっていないことがたくさんある。

子ども4人を残して、死ねるものではない。

お乳をなくすのもいやだ。

イヤだーっ！

でも、家に帰ったら、普通の顔で子どもに晩ご飯をつくってやらねばならない。涙は見せられない。言うにしてももっとあと、治療にかかってからだ。

家に着く前に思い切り泣き叫んでおこうと、ラーメン店のがら空きの駐車場の片隅に車を止めて叫ぼうとしたら、もう涙は出なかった。

今日夫がいてくれたら。

なんでいないのよ、バカヤロウ！

アメリカにいる夫から電話がかかったのは、3日後だった。泣きじゃくるわたしに彼も動転したらしいが、どうしようもない。

次に告げなければならないのは、夫の両親だった。

毎夏わたしたちは茨城県で子どもの体験入学をすませたあと、山口県の夫の実家でひと月の夏休みを過ごしていた。わたしの実家もわりに近く、手術をするなら山口県になる可能性が高かった。

電話で何日に帰る、と告げたあとで、わたしは夫の母に「お願いがあるんですがの」と明るくもちかけた。「乳がんになったんで、治療するならどこの病院がええか、お母さんの友だちにもなったひとがおってじゃろうけえ、聞いちょいてもらえませんか」

乳がん！

義母は一言鋭く叫んだ。その声はその後何度かわたしの胸に蘇り、ああ、あのひとにあんな声を出させたくはなかった、と繰り返し思わせた。しかしその後義母は現実的に「わかった、聞いちょこう」と引き受けてくれた。

ここからが大変だった。わたしは手術と化学療法を、できればイタリアで受けたいと願っていた。精神的な問題である。イタリアのほうが、明るい。わりきっている。日本は、気持ちが暗い。見舞いも暗い。みんなまじ

めに、悩む。もちろんわたしも暗くならないわけではない。さんざん泣き嘆いたが、1日中暗いのはイヤである。忘れてほかのことを考えたりしたりする時間がなければやっていけないではないか。

しかも、化学療法は6カ月かかるという。わたしがそのあいだ日本にいるとしても、夫は仕事でイタリアにいななければならない。で、4人の子どもたちはどこにいる？ まだ子どもたちだけで家事がこなせるほどの年齢(とし)ではないし、夫ひとりでも無理である。子どもたちの気持ちのうえでも母親は必要だ。では日本にその期間だけ子どもたちを転校させるのか。しかも今まで慣れた茨城ではなく、祖父母はいるが周(まわ)りに友だちのいない山口に？ それはあまりに厳しい。で、夫は単身赴任？ こんな病気にかかって夫と離れているなんて、わたしには考えられなかった。

何より、日本の病院では茨城と山口の両方で、右乳房の全摘しかないと言われていた。わたしが「イヤだーっ」と泣きわめいた理由の半分は死ぬ確率のあるがんであることで、もう半分は乳房を失うことだった。たまたま夫の勤務先は製薬会社で、しかも夫はイタリアで抗がん剤の研究ばかりしていたので、がんに関してはわたしよりはるかに知識があった。その夫がイタリアでは乳房温存手術が盛んだというのだから、わたしは何が何でもイタリアで治療が受けたかった。

しかし茨城の医者、「温存温存と患者は言うが、欧米人の乳房は大きいから、がんを切り取っても乳房が充分残るけれども、日本人の小さい乳房では、がんを取り除けば全部なくなってしまう、同じに考えるな」と釘をさした。それは実際どんぶりを伏せたようなイタリア人の巨乳を見ていたから納得できたが、ではすぐに諦められるかということ、とてもそうはいかない。男のおまえに何がわかるか、というほどの未練執着がある。最善を尽くす前には、とうてい諦める気にはなれなかった。

一方で夫の両親からすると、だいじな跡取りの嫁に、日本の、しかも近い病院で治療してほしい、と願うのはあたりまえの話であった。海の向こうでは何をやっているやらわからず気をもむばかりだし、嫁の入院中孫の世話に

行きたくとも、買い物ひとつ、ひとりでできないのでは行きようがない。

結婚以来、夫の両親にはかなり世話になっている。出産から留守宅のことまで、わたしは自分の子に将来ここまではできまい、と思うほどで、また、わがままでいつも飛び跳ねているようなわたしに、義父も義母もずいぶん寛容だった。そのふたりへの心配は減らさなければならない。乳房の温存だの再建だのは当時の日本の常識では贅沢の極みで、単なるわたしの我儘でしかない。意地を張るわけにはいかなかった。

やむをえまい。おそろしくイヤであるが。

わたし自身のからだであるのに、どうしてわたしの希望が一番にならないのか。どうしてまわりの事情のほうが優先するのか。わたしは口惜（くや）しかった。

夫に予定を繰り上げて早く帰ってきてくれるようわたしは頼んだ。夫の両親の説得には夫が要る。

そして医者のことばが。

お盆の最中だったので、山口の日赤（山口赤十字病院）の医者は行くたびに替わった。最初の診察から検査、入院の準備を経て日本での全摘手術という方向へと話は順調に進み、わたしは毎日泣いていた。

去年まで、海の大好きなわたしは夏になると夫たちと釣りをするか泳ぎに行くかで、波の穏やかな瀬戸内海の沖へ2、300メートルも平泳ぎや横泳ぎで出、そのまま仰向（あおむ）けに浮いて休んでいるのが大好きだった。

わたしの上には空、下には海。このふたつしかない。

浮かんでいると、水がたぷ、たぷ、とゆっくりからだに打ち寄せる。大きなものに安心して包まれている感じがする。泳いでいると、海水という、空気とは違う抵抗をからだでかきわける感覚がおもしろい。人工の、複雑で、面倒で、きれいでないものなんて、なんてつまないんだろう、ここはなんて単純で広々として、豊かなんだろう、とつくづく思う。海藻やくらげはいつも快適とはいえず、ひどくかぶれたこともあるが、夏の海でしか味わえない楽しみは捨てがたいものだった。

おまけに前の年はサザエが豊漁で、わたしは 40 歳過ぎて生まれて初めて素潜りでサザエを取った。密漁になるのかもしれないが、売るのでなく自家消費なら当時とはやかく言われなかった。大潮の 1 日目は岩と貝の区別がつかないで坊主（収穫ゼロ）、2 日目には夫に「サザエを見つけたら、取る前に海の中でわたしに見せて教えてくれ」と頼み、やっと見分けがついた。そうになると、すぐ火になるたちのわたしはおもしろく、20 ほどサザエを見つけては、自分の水着の胸の中へ次々とほうりこんだ。肌に吸いつくなよ、と念じながら。

中のひとつは握りこぶしほどの大きさで、刺身にしてもうまかった。よし、また来年、と楽しみにしていたのに、義父と義母のふたりがかりで「海に行きどもせんこと（海に行くなんてとんでもないことはまちがってもするな）」と厳禁されてしまった。わたしにしてみれば、乳がんは自覚症状ゼロ、手術もまだなのに、どうして海水浴がいけないのかわからないのだが、病人はおとなしくしていなければいけないらしい。

わたしってやっぱり病人なの？

鬱々（うつうつ）とした日々の慰めは、イタリアから持ち帰ったクラシックの CD だった。パーセル作曲の「メアリー女王の葬送の音楽」と、オーランド・コンソートという男声四重合唱団が歌う 1400 年ごろのイタリア宮廷の古楽。葬送曲は重々しいなかに美しいのがわたしの落ちこんだ気分ぴったりだったし、合唱は無伴奏で古いだけにメロディがわりに単調なのだが、やはり美しく、心に響くものがあった。心身に不安のないときならそれほどいいと思わないかもしれない。が、死の影におびえるわたしにとっては、まさに癒（いや）しの音楽であった。

日赤病院はわたしの実家に近かった。わたしの両親は、イタリアからわたしが毎年一度帰るたび、少しずつだが確実に年老いて体力が衰えつつあるのがわかり、ふたりして「もうどっちがいつ死んでも不思議はない」と言い合っているようだった。父は酒びたりで、母は尋常ではないだるさを訴え、肝

硬変から肝臓がんをおこしていた。母娘 2 代で同時にがんになっていたのである。大学教授だった母にとって、わたしは出来の悪い育てそこなった娘で、40 歳過ぎてもよく嘆かれた。口にはしなかったがわたしが専業主婦なのを惜しむ気配があり、たかが親睦団体とはいえ、国際クラブの会長になったのを喜んでくれていた。わたしが行くたびに服をとっかえひっかえし、ミラノじこみのおしゃれを見せるのも、母は楽しみにしているようだった。

とうとう入院の日が来た。無念の思いでパジャマや着替えを詰め、わたしのためにアメリカから予定を切り詰めて帰国してくれたばかりの夫と日赤病院に行った日は、外科部長の診察だった。

ここで、彼はわたしの救い主となった。

「手術は日本、化学療法はイタリアと聞いちょるが、できたら両方同じ病院がええねえ。手術で取った細胞の検査で化学療法の薬も変わってくるし」

わたしはどれだけ喜んだかしれない。

強い望みはかなう、という経験が今まで何度かあるけれども（もちろん、かなわなかったことも同じくらいあるが）、今回も信じられないほど嬉しかった。医者が勧める、とは錦（にしき）の御旗（みはた）である。夫の両親の心配そうな顔には申し訳なかったが、わたしは自分の強運を信じた。

イタリアで手術を含みすべての治療を受けることが決まったのである。

二章 化学療法開始

4年目のイタリア暮らしが始まった。去年までのアレーゼ国際歓迎クラブの会長と行事係を退いたので、「公務」がなくなって暇になった。

暇になったもうひとつの理由はもちろん、療養というか闘病のためである。

イタリアに帰ってすぐの8月28日、イタリア人の友人が予約をとっておいてくれた(感謝!)国立がんセンターに行って、治療方針が決まった。はじめに化学療法を6カ月やって、うまく腫瘍が小さくなったら右乳房の部分切除手術、大きいままなら全摘出手術をしてから再建手術、そして1カ月の放射線療法、という変則的なやりかただ。長期戦である。先に全摘出、再建、それから化学療法、という一般的な手もあったのだが、わたしはものすごく、このさして大きくもない胸のふくらみを失うのに抵抗があったので、全摘は避けたかった。夫も、同じ辛い化学療法をやるなら、腫瘍が小さくなるのが目に見えてわかる手術前のほうが、耐える甲斐があると賛成してくれた。

イタリアは世界で一番の乳房温存手術国である。日本は手術で切り取るのが好きだが、ヨーロッパはできるだけ切るのを避けてほかの方法を探すようである。日本にはハラキリの伝統があるからか、切ってなくしてすっきりしようという感覚のせい、それとも職人芸的なすぐれた外科技術があるためか、我慢が美德の国だからかはわからないが。

イタリアで温存が盛んな理由は、住んでいるとよくわかる。

まず見かけがひどく大切な国である。ミラノはファッションが有名な町だけあって、市場に買い物に行くのにも背広にネクタイが珍しくなく、散歩でさえ女性がスーツを着ている。ジーンズにもアイロンがぴしりとかかり、おまけに階級社会だから、アジア人がボロを着て歩いているとたちまち召使扱いされる。店や役所のひとの対応がはっきり違うのだ。それはもう日本では考えられないくらい露骨で、4人の子の育児に追われて身なりに気を使う習

慣が消え失せた「山だしの猿」であったわたしは、かなりの目にあった。レストランでは空（す）いているのに席がないと断られたことがあるし、ブティックの2階に上がったら灯りを消されて、「どうして？」と尋ねると「だってあんた買わないでしょ」と言われたときにはずいぶん頭に来た。

しかし、実はもっと、ひどく苦い経験がある。

最初の冬だった。

すてきな深紅のハーフコートをスーパーで見つけたが、腕の長い白人用のつくりではわたしには袖が長過ぎて手が隠れる。とりあえず買って、家の近所で補正してもらうことにした。

行きつけの小さなブティックで紹介してくれたお針子さんのアパートを訪ねると、エプロンをかけた年配の女性が、たったの900円でダブルの袖口を短くしてくれると言う。あら安い、嬉しいわ、と喜ぶわたしに、「どこに住んでいるの？」と彼女は尋ねた。

わたしが通りの名前を答えると、「誰と住んでいるの？」と彼女は重ねて聞く。妙な質問だと思ったが、年配のひとが突っこんで聞きたがるのは日本の田舎と同じかと考えた。

「亭主と子どもたちとだけど」

「で、旦那さんは何してるの？」

初対面の客相手に、たて続けの立ち入った質問である。それになんともなく雰囲気は気に食わない。いつものイタリア人の、ひとなつっこい明るい感じではない。なぜか彼女の夫とおぼしき老人まで隣室から出てきてじろじろわたしを見ている。

「科学者（シェンツィアート）よ」

日本だと「研究者」と言うところだろう。しかし、英語ではサイエンティストと言うのが普通だから、それをそのままイタリア語にしたのである。これがまちがいだったとは、そのときは知らない。イタリア語でも日本語と同様、夫の職業は研究者（リチェルカトーレ）と言うそうなの。「科学者」は日

本語でもノーベル賞級の研究者にしか使わないのと同じような感覚である。

「へ～え、シェンツィア～～～ト～！」

ご亭主は思い切りからだを反（そ）らし、そのことばを不自然に長々と伸ばして発音した。やっぱり何かひっかかる、不快な感じだった。

「ああら、そうなの。わたしゃまたどこかの奥様のところに住みこみで女中してるのかと思ったわ」

奥さんのことばに、わたしはにっこり笑って「違うわよ」と金を払ったが、アパートを出て寒風に髪を吹き上げられながら身を縮めて歩いていると、だんだんムカムカしてきた。

なんだあの態度は。

なんだあの物言いは？

なんだあの目つきは!?

突如、その理由に思い当たり、わたしは突きあげてくる怒りにかられて思わず立ち止まった。

彼らはわたしの言うことを信じていなかった。わたしを嘘つきだと思っていた。わたしの夫は科学者などではなくもっと「低級な」仕事をしていて、わたしはやっぱり住みこみの女中で、コートの袖が長過ぎるのは奥様のお下がりののに、見栄をはって「科学者だ」、「新品を買った」と嘘を言っていると彼らは思い、わたしを見下していた！

信じがたかったが、そう考えるとすべてが腑（ふ）に落ちた。

わたしは嘘が嫌いだ。もちろん、小さな嘘をつくことはある。セールスの電話に今から出かけるところだとか、約束したことができなかったのは、怠けていたのではなくて忙しかったのだとか。しかし、こんな大切な、職業や生活そのものにかかわることで嘘をついたことはないし、ましてやひとから嘘つきだと軽蔑されたことはない！

侮辱だった。

そして侮辱がこんなにこたえるものだとは知らなかった。わたしはこのとき初めて、なぜ世間や歴史の中で侮辱が原因で殺人や戦争が起こっているの

かということ、身をもって理解したのである。

そしてその屈辱感と怒りは意外に根強く、わたしは 3 カ月たっても忘れることができなかつた。ちょうど日本の母から電話がかかり、わたしがその一部始終をぶちまけると、母は共感や同情を示してくれるどころか、いつものようにお高く「そりゃあんたがみっともない格好をしたからでしょ」と、顔をしかめているのが見えるような冷たい語調で言い放つたので、わたしはブチ切れ、生まれて初めて会話の最中に電話を切つた。

しかし、お針子さんのところに行ったときに、わたしがみっともない格好をしていたのは事実だつた。色こそ茶で統一していたが、普段着というより寝巻きに近いような毛玉だらけのセーターにしわしわのコールテンのジーンズ、色の褪（あ）せたコートにぼさぼさの鳥の巣頭で、ピアスも指輪もしていなかつた。

そのうえ、わたしはアジア人。

怒って国際クラブで話していると、この手の「まちがい」や侮辱はアジア人にあまり珍しくないことがわかつてきた。

インド人の友人は、ブティックを出る際に「また来るわね」と言うと「買わないなら来なくていいよ」と言われている。彼女は怒って「わたしの趣味に合えば買うわよ」と言い返した。別のインド人の友人は、自宅の門の前で立ち止まり鍵を開けようと手を前に出したら、傍で立ち話をしていた男が小銭をくれようとした。乞食とまちがわれたのだ。そしてインドネシア人の友人は、家のベルが鳴って出ると必ず「奥様は？ と聞かれるのよ」とフンと鼻を鳴らした。女中だと思われているのである。「頭にくるからいつも、奥様はいない！ って言ってやるのよ」

ミラノでは貧富の差が激しく、多くの金持ちの家では使用人を置いているが、その使用人にはフィリピン女性が多い、という事実のせいもある。

わたしがおしゃれに本気で身を入れ始めたのはこのときからである。自分がきれいになりたいからではない。二度と侮辱されないように自分を守るため、というのがフツーと違うところだろう。

まず、きちんとした服を選んで念入りに色合いを合わせる。外出用にジーパンは履（は）かない。ここでは労働者っぽいから。で、必ずアクセサリもつける。そのアクセサリもプラスチック製のものはつけない。化粧はイタリア人でもしていないひとが珍しくないから、あっさりめの口紅とアイシャドー程度でいい。そして仕上げに、「ワタクシ、奥様でございます」という気合いで心もち顎をあげ、欧米人のように背筋を伸ばして歩く。

これでもう、いやな目にあうことはなくなった。

高い授業料を払ったものである。

そしてミラノではおしゃれだけではなく、女らしさ、男らしさが大切である。年配の女のひともジムに通ってウエストを引き締め、からだの線が出るぴっちりした服をよく着ている。

おしゃれで、きれい。

ほんとに。

ずいぶん勉強になった。当然、カジュアルな格好よりはエレガントなほうがいいと判断されている。日本では当時、中年以上の女性は中性的な存在に近づく感じがあったが、ここではいつまでたっても女は女である。夫婦のあいだでも、わりに男と女としての関係が続くらしい。

だからたとえ 50 になろうと 60 になろうと女が乳房を失うということはショックな、避けるべきことで、その肉体的精神的な傷を補うために、再建手術は国民健康保険でまかなわれる。

ついでにいうと、イタリアは毎月の税金・保険・年金の負担料がムチャクチャ高い国で、ウチの亭主殿の給料の半分はもっていかれる。結果、脱税がこれまたあたりまえのように盛んというのは日本と違うところかもしれないが（イヤ、同じか？）、その高い国民保険を使うがんや胆石のような手術をとまなう病気の治療は、このころはタダであった（そのあとはさすがに変わったらしい）。ふだんからかかりつけ医の診察は無料でも、専門医の診察や検査には一定の費用が要る。しかし、がんの治療を受けるという書類をか

かりつけ医に提出してからあとは、わたしは病院で一銭も払っていない。税金が高いと文句を言うのはピタリとやめた。日本だと保険がきいても数十万円かかっていたのではないか。特に、この夏帰国した際、一時は日本で乳がんの全摘手術、イタリアで化学療法、という方向で話が決まりかけていたのだが、その場合、イタリアで国民保険に入っているわたしは日本では無保険で、最低 100 万円の入院手術費を自費で覚悟していた。帰国しだい、役所で手続きをすれば国民保険に入れることをそのときわたしは知らなかったのだった。

さて、実はイタリアで化学療法に入る前に一騒動あった。血液、肝臓、骨、心臓、肺、と一通り検査をしてからでないとい治療には入れないわけだが、がんセンターでは、心臓検査の日がとれないので、どこかほかの病院でやってくれとわたしに言ったのである。

オイオイオイ、日本だと休み時間削ってでも押しこんでくれるぜえ。でもここは休むことが大切で、あたりまえの国だからなあ。労働者には楽だよな。

内心ぼやきながら、わたしは隣町ガルバニャーテの公立総合病院に行った。1年前にわたしが肩を脱臼したり、掌の骨を折ったりしたときにお世話になったところである。

ここで対応した若くて清楚な受付嬢がハズレだった。わたしに真っ赤な大嘘を言ったのである。

なんで事務の女ってのは若くて美人で無能なのか、ブスで有能なのか、どっちかしかないんだ！ とイタリアで働いている日本人の友人が怒って言ったときには、男というのはまったく、とわたしは睨（にら）みつけた覚えがあるが、イヤイヤ、この分類は案外当たっているかもしれない。

長い髪を後ろですっきりと束ねた彼女はまず、10 日以内には空きがないとわたしに告げたあとで、考えこみ、つけ加えた。

「でもね、がんセンターのお医者さんがこの検査の依頼状に『緊急』って書き込むか、緑のシールを貼ってくれるかしたら、できるわよ。『緊急』な

ら救急にかかれるし、緑のシールがあればどこの病院でも 72 時間以内にやるから」

翌日がんセンターに駆け戻って『緊急』と書いてくれ、と頼むと、女医さんは眉をしかめた。

「変ね。そんなの聞いたことない。そりゃ書いてあげるけど」

そう、女医さんは正しかった。救急に行くと、

「なんでここに来たんだ？」

「だってこれ、緊急なもの」

「あのな、ここは生命（いのち）にかかわる緊急だぜ。おまえさんの治療ができるとかできないとかいう話だろ。あてはまらないよ」

「でも受付がそう言ったのよ。だからわざわざ書いてもらったの。わたしには必要なんだから。がんを治すのよ！」口をとがらせてわたしはまくしたてた。

「そりゃここの仕事じゃない」

わたしはひるまずなおもゴネまくり、なんとか心臓専門医の診察と、心電図だかなんだか検査のひとつはやってもらうことになった。こんな面（つら）の皮の厚いことは日本ではやりたくないが、イタリアはやってあたりまえ。というか、やらないと生きていけない。店で苦情を言っても、「できない」とすげなく言われるのはごく普通で、そこでちゃんと修理なり注文なりしてもらうには、言って言って言いまくらないとダメなのだ。慎しみ深さの通じるお国柄ではない。わたしは性格が変わった、と思った。

……もつとも、以前からの知人に言わせると、「あんた昔からそうじゃなかったっけ？」ということになるが。

ともあれ、もうひとつ検査が残っている。同じ町の別の大きい病院へ行く。ダメ。もうひとつ、心臓ではすぐれていると評判の、自宅から反対側の隣町ローの総合病院。しかし、係が昼休みでいない。廊下で待つこと小一時間。やっと戻ってきた看護師に言うと、

「あなたそりゃ無理よ」

「でもガルバニャーテの病院の受付がそう言ったのよ」

「緑のシールがなくちゃあねえ」

「え、じゃあ緑のシールさえあればやってくれるのね？」

「72時間以内にやるわよ」

「確かね。今日は木曜日。金、土、日曜日でもやってくれるの？」

ここを先途と眼を吊り上げてわたしが詰め寄ると、

「土日は休みよ。明日の午前中にいらっしゃい。押しこんであげる」

ところで、イタリアで国民健康保険の一般町医者診察時間は一定していないが、このあたりでは夕方のみである。なぜか。午前中は大病院に勤務し、昼休みはたっぷり取るから。1日8時間以上の労働は法律で禁止されている（ホント!?!）。夕方の5時になるのを待って、わたしは前もって保健所に指定されていた「かかりつけ医」のところへ文字通り、駆けこんだ。つまり、べっぴんの受付嬢の二番目のまちがいは、必殺の緑のシールを出せるのが「かかりつけ医」だけであって、がんセンターの医者にその権利はないことだったのである。

翌日、2時間待って、心臓の検査はみな終わった。

やれやれ、これで治療に入れると胸をなでおろしながら、つくづく、ここは難儀な国やと思う。イタリア人にこぼすと、そうね、あんたみたいな強い性格じゃないと、やってけないわよ、とうなずかれた。

さあ明日から化学療法、という夜、とんでもないニュースを聞いた。アメリカで飛行機が5機乗っ取られ、それぞれビルに突っこんで何千人が死んだ、という信じられない話である。あの、2001年9月11日の同時多発テロだった。おかげでわたしががんの治療開始日が正確に記憶されることになった。日付変更線をはさみ、9月13日である。

実を言うと、イタリアに帰ってからの日々は日本で告知されてからのひと月と比べると、気分的にはるかに楽だった。誰でもそうだろうが、告知は、衝撃である。そして、その前の診察に至るまでの疑惑と心配に満ちたモヤモヤも、いいものではない。ましてや告知後の、どこで治療するかが決められ

ず、自分の意思に背（そむ）かざるを得ない状況も苦痛だった。しかし、いざ治療が始まればそこに迷いはない。

行動あるのみ。

イタリアでの典型的な化学療法というのは2期に分かれる。

はじめは3週間ごとに点滴を4回繰り返す。わたしの場合9月13日、10月3日と24日、そして11月14日である。

あとになって、日本ではそんな強烈なことはまずしないと日本の医者に驚かれたが、アドリアミチーナ（日本名アドリアマイシン）とタキソーロ（日本名タキソール）というきつい薬を2つ、同時に使っていた。薬液が赤い色なので通称ロッソ（イタリア語で赤）。次は薬剤を変えて3週間に2回、黄色い液の点滴を4カ月続ける。通称ジャッロ（イタリア語で黄色）。この2つのうち最初の点滴は、正直なところ過酷な治療と言わざるを得ない。

副作用がすさまじい。

聞いてはいたが、わたしも、脱毛、嘔吐、吐き気、口の乾き、胃と食道の焼けただれる感じ、下腹部と膝の痛み、便秘、口内炎に膣炎、手足の指先の無感覚、そしてはなはだしい倦怠感と、ひどい足の裏の痒みに見舞われた。

全部の症状が長く続くわけではない。日によってかなり違い、点滴の翌日に車を運転して隣町まで出かけたこともある。

個人差も大きく、うらやましいというか頭にくることにというか、ケロツとしているひともしれば、眼が腫（は）れて痛んだ、というひともある。日本でケロツとしていた、などという運のいい話は聞いたことがなかったが、ここではポロポロいて、喫茶店の仕事を平気で続けていたわよ、頭はハゲたけど、というひとに会って話している。わたし自身は、毎回1週間吐いて寝こんだというわけではないにしろ、2回目の点滴のあと、1週間胃と食道が焼ける思いをしたときには、「もう煮るなと焼くなとしてくれい」「がんなんぞ治らなくてもいいから、この苦しいのをなんとか、して、欲しい……」という気になった。

10歳の次男は、ソファでひっくり返っているわたしに、どうして薬で具合が悪くなるのかと不思議そうに尋ねた。もっともな疑問である。薬なら具合が良くならなければいけないではないか！ 母親が昔同じ治療を受けたというフランス人の友人は、あれは毒薬よ、と断言していた。同感である。それに、40代の体力でさえこれだけこたえるのだから、60代70代ではたまるまい。

もうひとつ耐えがたかったのが、痒（かゆ）みである。これは不思議な症状で、薬剤が神経にきたのだ。副作用としては、さほど珍しいものではないし、重くもない。はじめは、よくあるように手の指先と足の指が、正座したあのように触（さわ）るとジンジン痺（しび）れていて、手の指の先っぽは温度さえ感じなくなっていた。このジンジンは英語ではピンズ・アンド・ニードルズ（針千本、と言ったところか）、イタリア語ではフォルミコリイ（蟻〔あり〕が這〔は〕い回る感じ）と言う。このジンジンだけで終わってくればよかったのだが、そのうち、ジンジンが続くと痒みになった。少し歩き回ると、足の裏全体が猛烈に痒くなってくるのである。皮膚ではなく内側が痒いから少しくらいかきむしっても一時しのぎにしかないうえに、搔（か）けば搔くほど刺激を与えるので、痒みは止まらなくなる。

まったく、これほどの痒みは生まれてこのかた経験したことがない。今までにじんましんも毛虫かぶれもくらげかぶれもやったが、とても比べものにはならない。痒みがおさまるまでの30分ほどは、「かいーっ！」と絶叫せずにはいられない。ほとんど拷問である。そしてこの発作のような痒みが終わると、わたしはぐったりと消耗していた。

医者はいの副作用は把握しており、一応は対症療法として薬の一覧表をくれた。しかし副作用はひとによって違い、しかも医薬分業であるから、薬は自分で買いに行かねばならない。最初の点滴のあとで胃液を吐きはじめたので長男を薬局に走らせたら、「この嘔吐止めは高いから医者の方箋で無料にするほうがいいのではないか」と薬剤師から電話がかかってきた。処方箋なしだと1日分で1万円すると言う。

かかりつけ医に子どもを行かせるのは14歳とはいえ、ちと荷が重い。本人が行ったことのない場所だし、イタリア語でしゃべらせなければならない。前からノルウェー人のカーリーが「マドカ病気になるって大変ね、できることがあったら何でもしてあげる。言いなさい」と言ってくれていたから、遠慮なく電話をかけて頼んだ。こんなときは国際クラブの人脈がどんなに重宝したかわからない。

嘔吐止めといえば、イギリス人のアンが、以前に母親が抗がん剤治療をしていたと言う。

「あれは辛いわよね。覚えてるわ。母は点滴から帰るたびに吐きづめに吐いてた。吐いたものが緑色をしてたのは胆汁の色だったのね。でね、マドカ、息子のサッカーの送り迎え、どうせウチの子も行ってるんだからあんたの息子もウチの車に乗ればいい。わたし車出してるのよ、どうしてわたしに言わないのよ」と詰め寄る。

「ありがとう。でもわたし嘔吐止めを点滴に混ぜてもらってから、1回も吐いてないの」と言うと、アンは眼を丸くした。

「嘔吐止めですって！ そんなものがあるの？ 聞いたことないわ！」

「あなたのお母さん、治療受けたのいつごろよ？」

「今高校生の息子が生後3カ月だったわ」

「じゃあ十数年前ね。それじゃあなかったでしょうよ。治療薬だって変わってると思うわ。考えてごらんなさい、製薬会社は毎年新しい薬を出してるのよ。もう10年たったら副作用なんて全然ない薬が出てるんじゃないかしら」

そうね、と言いながら、彼女の顔は曇っていた。十数年前にイギリスですでに抗がん剤治療をしていたとは驚いたが、可哀そうに、とわたしもしみじみ思った。十数年前に「そんなもの」があれば、彼女のお母さんはゲーゲー吐かなくてもすんだのだ。

あとで夫から聞いた話だが、この嘔吐止めというものは、化学療法をするようになってから開発されたらしい。嘔吐は通常、悪いものを身体(からだ)

から出すという行為であるから、止めてはいけない。「嘔吐止め」なんぞという薬は元々なかったのだ。化学療法が一般的になってから開発された新しい薬だから、その分値段も高いのだろう、と夫は言う。

しかし、それを言えば、100年前の日本で死病であった肺結核は、二次大戦後の一時期は手術で切除していたが今では薬だけで完治可能だし、今恐れられているがんだって、100年たてば数ある病気の中のひとつに過ぎなくなっているかもしれない。ひとは誰しもその時代の子である。時の流れと運命、ということを変えて思った。

九月

雲ひとつない九月の空の下

わたしたちすべてのいきものの命に限りがある

薄茶の兎は五年生きるか

鴨（かも）は十年

あの首を伸ばす小さな亀は

三十年も生きるだろうか

けれどわたしの命の可能性は

これら他のすべてのものより

ほんの少し限られている

夏が終われば

草はまだ青いけれど

太陽は輝いているけれど

雲雀（ひばり）はもう唄わない

そしてわたしが生き延びる可能性は

可能性は

あのすべての他のいきものより

ほんの少し限られている

ほんの 少し

嘔吐止めは効いたが、吐き気は薬でも治らない。胃と食道の焼けるのにも指定の薬は効かなかった。家にある、ふだんは胸やけによく効く制酸剤も。膝の痛み止めをのむといっそう胃が焼けた。便秘止めをのんだら下痢した。痒み止めはなんと抗うつ剤で、さすがにためらったが、試しに一度だけのんでみたら12時間眠った挙句(あげく)あくる1日眠かった。そして医者は、痺(しび)れは中枢神経、つまり手足ではなく脳ミソで感じているもので、わたしのように長期に続く場合は、注意して薬をのまねばならない、と言った。つまり、うかつにはのむな、ということだ。

3回目の点滴前の診察で、わたしはもう胃、食道と足の副作用には耐えられない、と正直にぶちまけた。副作用は黙って我慢すべきものではなく、医者に正確に報告するべきものである。それから吐き気止めも家に帰ってからのむのでは効かない、説明書をみれば化学療法の前にのめと書いてある、と言うと、「わかった、抗がん剤の量を20%減らそう、吐き気止めも点滴に混ぜよう」ということになった。

抗がん剤の用量を減らした効果は抜群だった。胃も食道も焼けなくなったのである。楽になった。しかしわたしに言わせれば、2割減がはじめからわたしには適量である。なぜなら、市販の小児用の薬の場合、欧米では年齢だけでなく体重ももとにして量を加減する。製薬会社の研究員をしている夫に聞いても、経口であれ注射であれ薬は血液にのって体内を循環し、患部にたどりついて効果を発揮するわけであるから、薬が効くか効かないかは血中濃度による。血液量は体重に比例するから、体重が少なければ同じ量の薬でも

血中濃度が濃くなって効きめが強いだろう、と言う。

日本人は白人に比べて小柄である。どのくらい小柄か。ここでわたしはエレベーターの壁の数字を参考にする。エレベーターにはたいてい「何人、何キロまで」という重量制限が書いてある。これが、日本だと8人480キロまで、といった数で、1人あたり60キロ換算が多い。ヨーロッパのアパートだと2人160キロ、てなもんで、1人あたり80キロになる。かなりおおまかなやりかただが、おおよそのところ、まちがってはいまい。

つまり、80キロのヨーロッパ人に普通効く量の75%で、60キロの日本人に適當、ということになる。もっとも、このすさまじい抗がん剤は量が多かったせいか、わたしの腫瘍を小さくするには非常によく効いて、3回目の点滴の前には医者でさえ、指で探ってどこだったっけ、というほどになっていた。最大1.5センチね、と言う。治療前は触診で3センチ超、写真で2センチ×2.2センチだったのだ。わたしにはさすがにどこかわかったが、3回目の点滴をして1週間もすると、自分でもどこかわからなくなっていた。

万歳！

レントゲン写真は点滴に行くたびに撮（と）らない。日本だとおそらく毎回撮っては眺めているのではないかと思うが、ここではどうせ規定回数ほこなすのだから、という考え方なのか、触診で充分だと思うのか、それとも必要以上の放射能被曝を避けるためか、無関心である。

写真といえば、イタリアらしいゲゲッと言う経験をした。

日本の日赤病院で撮ったレントゲン写真と超音波写真のコピーをイタリアまで持参したら、がんセンターではちゃんとそれを放射線科の専門家に回してサイズなどを鑑定させ、撮りなおすような無駄なことはしなかった。それはいいのだが、まだ治療にかかる前のある日、診察室のわたしのいる前で看護師が医者に向かって、なんとかさんの写真がなくなった、と告げるではないか。

管理不行き届き、無責任な話である。え、と女医がさすがに眼を剥（む）

き、「あのひと確かもう手術終わったよね」と確かめたあとで、「わたしにどうせえって言うのよ」と看護師を睨（にら）んでぼそりつつぶやく。看護師も看護師で、「わたしも知らん」と同様にぼそりと言って首を振る。中年小太りの女性ふたりは睨みあったまま、「わたしにどうせえって言うのよ」、「わたしも知らん」、と二度繰り返し、そして沈黙した。

こんなとんでもない話を聞かされて、わたしが「頼むから患者の前でそんな話をしないでくれ！」と内心叫んでいると、その日のうちに、似たような事態が自分にふりかかってきた。医者に、もう一度写真をよく見たいから、写真部にとりに行ってくれ、と言われて写真部に行ったら、棚をあらいだらい見て「ない」と言われた。

わたしは欧米風に眼をぐるりと回して思いきりイヤな顔を試みせた。

「どうしても要るのか？」

「スイ」（はい、の意味）

「今日診察か？」

「スイ」

「わかった。探すから待っててくれ」

彼は棚と引き出しを全部、隣の部屋まで二度見たあと、電話をかけ始めた。待つこと1時間半後、やあ、あったよ、と彼がにこやかに笑う。

「文書庫に行ってくれ」

なくなっちはいなかったのだ。

腹を減らしてわたしが腫瘍科に戻ると、ふだん仏頂面（ぶっちょうづら）の女医さんが妙に愛想がいい。

「悪いけど、明日またそれ持ってきてくれる？」

「あら。また明日。じゃあここに写真置いといていい？」

「ダメ。置いとくとどうなるか今日よくわかったでしょ」

おっしゃるとおり。

ハンドバッグを片手に持ち、版の大きいレントゲン写真を別の手に抱えて路面電車に乗ると吊り革をつかむ手がなく、揺れた拍子にわたしは派手にこ

ろげた。

事態はここで止まらない。こういう話をイタリア人にすると、もう一度絶句するはめになる。

「ねえ、ちょっと聞いてくれる？ 今日こんなひどいことがあったのよ！」

当然わたしは、「んまっ、あきれるわねっ」という受け答えを期待しているわけだが、外国人ならともかく、イタリア人はまずそんなことは言わない。少し眉をひそめて、「そう」と言うのがせいぜいである。「自分で用心しないとダメね」

つまり、ここではいいかげんなのがあたりまえなのだ！

これを読んでいるあなたは言うかもしれない。

「マドカ、悪いことは言わないから、そんないいかげんなところはやめて、もう日本に帰ったら？ 日本で治療したほうがいいんじゃない？」

そう、イタリアはつくづく、しみじみ、信じられないくらいいいかげんな国である。たいていの外国人は、怒る。激怒する。何度も。そして、いくら怒ってもこの国に変わりようはないのを悟って、ぶつぶつ文句を言いながらも、慣れていく。

その代わりにいいことが山ほどあるからだ。

美術、音楽の美しさ。食べるものの美味しさ。ラテン特有のひとなつっこさ、温かさ。明るさ。

わたしも魅せられたひとりである。

三章 プラス思考

がんにかかったことは天災のようなものとして仕方がないが、そのほかの一連のことに関しては、自分は運がいい、とわたしは信じている。

もちろん、こんな病気にかかった以上、絶望や自棄（やけ）をおこす気持ちは当然ある。それでも自分が幸運だと信じるのは、きのうも今日もまだ死なないうで生きている以上、自分の気持ちを明るい方向にもっていくのが、賢くもあり、楽でもあると思うからだ。若いころは落ちこみ出したら止め処（ど）がなかったが、歳をとると熟してくるというのか、諦めが早くなるのか、それとも諦めの早い男と結婚したのがよかったからなのか、ある程度自分の気持ちが操縦できるようになったような気がする（気がするだけかもしれないが）。

何か自分の気持ちをひきたてることが要る！ と思ったわたしは、ツルツパゲになる日に備えて、帽子を縫うことにした。

何色にしよう？

わたし自身が一番好きな色は青みがかった深緑。次は、子どものころ 24 色の色鉛筆の中にあつた群青（ぐんじょう）色という、わずかに紫がかつた鮮やかな青。夫はこれを矢車草（やぐるまそう）の青だね、と言う。三番目が赤ワイン色。

幸いミラノのフツの洋服は日本の感覚からするとかなり安いので、田舎者のわたしもおしゃれに精を出して、この 3 色を中心に山ほど服を買っていた。その服に合う色の帽子ならば、ミラノファッションの基本である「色調をそろえる」に従っていっそうおしゃれができるではないか。

ちょうど、マントを縫うために買っておいた深緑と赤ワイン色の厚い生地が冬用の帽子にも最適だった。手持ちの帽子の中からこれは、というのを選んで、それを元に 6 枚はぎの型紙をつくる。

まず深緑。手縫いでちょこちょこ 2 度縫いをする。でかい。かぶり心地

はよく、非常に楽だが、今ひとつおしゃれでない。次の赤ワインは全体を少し小さくし、その代わり縁（ふち）の折り返し部分を大きめにしたら、我ながらなかなかのものに仕上がった。

気をよくして、今度はトルコブルーの帽子を縫う。この目にも鮮やかな色は、ミラノの暗い憂鬱（ゆううつ）な秋を一度に明るくしてくれるのだ。

帽子づくりは大成功だった。ただひとつの欠点は、帽子ではもみあげが隠れず、そこにあるべき髪の毛がないという違和感が生じることだが、まあそのくらいはしょうがない。メリットのほうがはるかに大きい。

かつらも注文した。週一度掃除に来てくれるシルヴィアのお母さんは1年前にやっぱり乳がんの手術を受け、化学療法で頭の毛が全部なくなったので、3万円足らずでかつらをつくり、喫茶店で働き続けたが、客の誰ひとりとしてかつらだとは気がつかなかったと言うのである。そのかつらをつくる美容師は自分も化学療法の経験者で、非常に理解があって親切だとも勧めてくれた。

行ってみてわけがわかった。髪の毛が抜けてしまう前に必ず一度行って、ふだんのヘアスタイルを見せておくように、と言われていたのだが、髪質と値段で材料を決めたあと、元のスタイルにできるだけ近く美容師がカットしていくのである。ただし、わたしの元々のヘアスタイルはかなり短めだったのに、美容師のカットはそれより長い。

「ねえ、もう少し短くしてもらえない？」

「あのね、かつらで同じくらい短くすると、地のネットが見えてしまっかつらとバレルのよ。特にもみあげのところが問題」

「あ、確かに。見える。こりゃダメだわ」

「でしょ。まあうまく似せてあげるから、これで我慢しなさい」

「わかった。でもサイズゆるくしてもらえない？ これじゃ苦しいわ。ふだんからわたし、きつい帽子でさえ苦手なの」

「ダメ、これはあなたのサイズよ、測ったとおり。あのね、かつらはズレても、風で飛んでしまっても困るでしょう」

「そりゃかなわないわ。大笑いになるか、大恥かくか。おしゃれも何もあつたもんじゃない」

「でしょ」

かくしてできあがりのほどは、あら美容院変えたのね、というくらいの違いしかなく、きわめて自然で、皆がほめる。髪が元の長さに戻るまで数カ月はかかるから、5万円ほどの値打ちは充分にあった。

ただ、サイズのきついのは、特に体調の良くないときには耐えきれず、結局わたしはもっぱら自家製の帽子をかぶっている。

最初の点滴の10日後に、日本から母が入院したと知らせがきた。今までにも入院はしているはずなのに、どうして今回わざわざ知らせてきたのか、わずかに違和感がある。わたしは化学治療を始めたものの、1回目のせいか、聞いていたのと違ってほとんど体調が変わっていなかった。これならば今帰れると、1週間の予定で飛行機に飛び乗って日本まで見舞いに帰った。気持ちのいい秋晴れの日で、関西空港から実家に電話をかけると、父親が、いつもとは違う、なんとも言えず独特な調子でゆっくりと一言、あのなあ……と言った。

その瞬間、わたしは自分が遅過ぎたことを悟った。

わたしがまだミラノの空港にいるあいだに、母はすでに亡くなっていたのだ。携帯電話がまだ普及していない時代で、それを知らずに、わたしはずっと飛行機に乗って、美術館の学芸員をしているというイタリア女性とおもしろく話をしていた。

父との話を終えたあと、ひとが後ろに来た気配を感じながらも、わたしは公衆電話の前で顔を伏せ、こぶしを握ってからだを突っ張らせ、声を殺して涙を流して立ちつくしたまま、しばらく動けなかった。

山青く空青くして母逝（ゆ）きぬ

陽は輝き稲は実りて母逝きぬ

スーツケース下げて通るは通夜の門

両親が長年つくっていた俳句が、わたしにも真似ごとながら浮かんだ。

母は夏の酷暑の中であえて肝がんの治療にとりくみ、がんは消えたが体力を落とし、同じくがんにかかった娘を案じながら、秋になって死んだのである。わたしはずっと母の期待に応（こた）えずよく心配させてもいたが、最後まで親不孝な娘であった。

母とわたしの共通の友人からは「まどかちゃんのがんになったけえ、心痛で先生の寿命が縮んだんよ」とまで言われ、「そんなこと言われたって、わたしだって好きでがんになったわけじゃない」と思いはするものの、親の気持ちとしてはやはり、子のがんになるというのは耐え難（がた）い心痛だろう。

地方名士であった母の、次々とひとが訪れる通夜と、200人の参列者のあった葬式を終えて、明日はイタリアに帰るという晩、妙に細い髪の毛が大量に抜ける。髪が汚かったが、洗うともっと抜けるのを見るのがコワイ。わたしを案じた夫から国際電話がかかってきたので告げると、「汚かろうがなんだろうが、恐れりゃ洗わんとき（洗わないでおきなさい）」と言われ、もっともだと脂照りする頭で飛行機に乗ったら、トイレに立っては肩の上の抜け毛を指でつまんで捨てる始末だった。

母の死に間に合わなかったのは無念だったが、このタイミングでなければ葬式にも出られなかっただろう。まだよかったと思うほかはない。体力が弱ってもがんの治療を選んだ母は、同じようにがんの治療をするわたしに、がんばれ、と伝えたかったのかもしれない。そう思うと泣けてくる。

髪の毛の抜け方には、最初の点滴をしたその日家に帰るやいなや抜け始めたというひともいれば、2カ月たってもまだ髪があったというひともいるくらい、

個人差がある。わたしの場合はそれから1週間ほど、指で髪をつまんで引っ張ると数十本すっと抜け、床の上から肩からイヤになるほど抜け毛を集めてまわり、地肌が見えるようになったときには、幽霊屋敷のお岩さん役がつとまるほどの醜さ、気味悪さに、鏡を見るたび、ぞっとした。

もうこうなったら一刻も早く全部抜けてくれたほうがすっきりする、とぼやくと、亭主殿が「じゃあぼくの髭剃り（ひげそり）で剃ってあげようか」と言う。それはいい考えだと、さっそく自分で残りの髪を全部短く刈ったあと、洗面所で石鹸を塗っては頭を剃った。夫が外国で理髪店に行くのはいやだと言うせいもあり、子どもも含め家族の髪はわたしがずっと切っているが、自分の頭をいじることはあまりない。が、丸坊主なら簡単だった。

1時間ほどできれいサッパリ尼さんのような頭になり、亭主は「チンネンさんみたいだよ。なかなかいいじゃないか」と笑う。

チンネンさんがどこの誰だか知らないが、わたしも結構気に入った。なんというか、わたしらしい、という感じである。子どもたちだけは、14歳から7歳まで口をそろえて嫌がったが、ひと月もすると慣れて何も言わなくなった。

子どものためもあって、ふだんわたしは今までと変わらず、冗談を言い、叱り、笑って過ごしている。まあ子どもが4人もいれば、気がまぎれるところの騒ぎではない。食卓では、いつも2人3人が同時に話すのを交通整理しなければならない。くたびれるが、実に楽しい。

子どもたちには、がんだと正直に告げてある。ただし、ケロリと笑って。だからお医者さんにかかっているんだよ、薬が効いて腫瘍は小さくなったんだよ、と。そうしていれば、たぶん、子どもたちもわたしの病気に、やたらと怯（おび）え、不安がることはないだろうと信じている。この子たちの生活を守らなければならない、という気持ちは、わたし自身にもプラスに働いている。

人間現金なもので、そうやって半分は芝居のようでも、言っているとだんだんその気になってくる。泣く日がないとは言わないが、忘れていられる時

間が長いのである。幸運だ、幸運だ、と繰り返しひとに言っていると、信じる気持ちも強くなる。

こうして、ひたすら強気で押して、「帽子を3つ縫って3つ買ったら、亭主が、おまえの頭は何個あるんだ、と言うのよ」と冗談を言って笑っていると、ヨーロッパ人は、いいことね、勝たなきゃね、その勢いなら大丈夫だわ、とにっこり笑ってくれるのだが、日本人にはとまどうひとがいる。なかには

「無理してるんじゃないですか？」

とご親切にも忠告してくださる方があって、わたしは猛烈に腹が立った。

「ええ、そりゃあもう無理をしまくって自分を明るくしているんです。でも、効きますよ。やっぱり、自分が自分のコントロールしなくっちゃ」

幸運のなかには、滞在4年目でわたし自身がイタリア語にずいぶん堪能になっていたこともある。よく勉強したものだ。

イタリアに到着する半年前から1年後くらいまでは、週20時間くらい文法だのなんだのみっちりやった。それまでは通訳か翻訳屋をめざして英語の勉強に週20時間かけていたのを、全部イタリア語に変えたのである。基本は英会話の勉強と同じ。基礎的な文法の習得に加え、日常単語と定型文の暗記・暗唱。しっかり暗唱しておけば、実際の場面でことばがスラスラと次々に「口をついて」出てくるようになる。

3年前にアメリカで1年を過ごしたときには、4人の子どもたちが7歳、5歳、3歳、1歳と手のかかる盛りで、わたしはかなりの覚悟で飛行機に乗った。そしてアメリカに着いてから2週間のあいだに、時差ぼけと猛暑とで4人のうち3人の子が熱を出し、最後の子は中耳炎だった。幸いアパートの向かいの部屋の住人が幼児連れのオーストラリア人で、小児科医を教えてくださいましたのですぐ行ったが、このときほど自分が英語ができてよかったと思ったことはない。母親にとって、外国でも子どもを医者連れて行って医者ちゃんと話ができるというのは、安心できる最底辺である。

子どもを育てたことのあるひとならみんな経験があるだろうが、小さい子

はお出かけや行事の日、「何もこんなときに限って」というときに熱を出したり腹をこわしたりするものと相場が決まっている。今回のイタリア滞在でも最悪の場合、日本からの飛行機を降りたとたんに子どもを医者連れて行くハメになるかもしれない、そのときわたしはイタリア語で医者と話ができる必要があった。その強い目的意識に支えられて猛勉強し、わたしはイタリアに着いたときには自分の言いたいことはとりあえず言えるようになっていた。

その後もイタリアでは夫の会社がつけてくれる個人教授に習い、市の無料講座や友人が開催する有料の会話クラスに通い、図書館で児童書を借りて読み、イタリア語で日記をつけ、外出するたびにおしゃべりを心がけ、友人と新聞を読み、英語とイタリア語の会話サロンを国際クラブの行事として主催し、とありとあらゆることをやった。たぶん、わたしは元々語学が好きなのだ。それに将来、英語に加えてイタリア語の翻訳もできるようになればいいな……という下心もあった。もちろん生活も便利になった。

とはいえ、実際には、当然ながら山ほどイタリア語をまちがった。

青果店に行って硬い白キャベツ（カーボロ）が欲しいときに、まちがってカバロ（馬）をくれと言ったことがある。青果店で馬を売っているはずはなく、小太りの女主人は両目をひん剥（む）いて「ない！」と即答した。が、そこは商売、30秒後、ひょっとしておまえの欲しいのはこれか、というふうに、不愛想に黙ったまま白キャベツを指さしてみせた。「そうそう、それよ！」とわたしはニッコリ笑い、続けて「わたしまちがえたのよね？ それ、イタリア語で何て言うんだっけ？」と尋ねた。女主人は憮然としたまま「…カーボロ」とつぶやいた。

実はカーボロとは、悪口のカツォのお上品版である。カツォは元々「オチンチン」の意味だが、なぜか日本語の「クソッ！」と同じ感覚で使われている。下半身関連という点では同じということか。イタリアで何年か働いている日本人の友人によると、さあここは派手に厳しく抗議しなければ、とい

うときには、まず「カツォ！」と大声で怒鳴ってテーブルをこぶしで一発ドンと叩いてから、とうとうと抗議を言い始めるもの、なのだそうだ。「おい！ ふざけるなよ！」のニュアンスだろうか。

が、慎（つつし）みのある女性はおチンチンなどという恥ずかしいことばは口にできない（もちろん、日本の「クソツ」と一緒に、女性でも言うひとは言うらしい）。で、代わりに、同じ「カ」から始まる「カーボロ」と言う。息子のサッカーの試合に行ったときにも、誰かが凡ミスをした場面で「カーボロ……」という母親の声を聞いた。この場合は「バカ……」というニュアンスである。つまり、青果店の女主人はわたしに「……このバーカ」と言ったと同じことになったのだった。

ハイハイ、ま、バカですねえ。

鮮魚店ではボンゴレ・ヴェラーチェ（あさり）をまちがえてボンゴレ・ヴェローチェと言って、店の女性に、あさは走らないわよ、と笑われた。ヴェラーチェは「本物」の意味だが、ヴェローチェは「速い」という意味なのだ。

でもね、わたしの買いたいキャベツもあさりもちゃんと買えたよ。

イタリアに来て半年もたたないころ、車の暖房が故障した。車を修理業者を持って行って説明しなければならない。辞書をひくと、イタリア語で暖房はリスカルダメントとある。「ややこしいわね、リスカルダメント、リスカルダメント」と何度か口に出して言ってみたが、亭主の運転する車に乗った5分後にはすっかり忘れていた。一生懸命脳ミソの隅々まで探してみるが、その日初めて学んだややこしいことばは1音たりとも残っていない。

しょうがない、別の知ってることばでなんとか説明しよう。

考えたあげくに「寒いとき、暑い風欲しい。でもわたしできない」と言ったら、修理業者の目は一瞬点々になったが、すぐに理解した。「あ、暖房が効かないんだな（イル リスカルダメント ノン フンツィオーナ）」

要するに通じればいいのよ、ことばなんて！

別の幸運には、わたしが長年英語の勉強をしているあいだに多少の医学用語にも慣れていたことがあった。乳房 X 線撮影を意味するマンモグラフィ（イタリア語ではマンモグラフィア）程度ならすでに知っていた。英語の医学用語はラテン語起源のことばが多く、ラテン語はイタリア語ときわめて近い。だから、英語を元にしてイタリア語の医学用語の意味を推測することが、かなり簡単にできた。子どものインターナショナルスクールのイタリア語教師はこの2つの言語について、似ているが「ラテン語は死んでいる（今は誰も話さない）けど、イタリア語は生きている（今使われている）」と言っていた。

こういったことばの自信がなければ、とても外国で長期の治療を受ける気にはなれない。もちろん、すべてがわかるわけではないが、わからなければ尋ねるし、イタリア人は一般におしゃべりで親切だから、よく説明してくれる。

それから、同じ外国でもアメリカではなくイタリアであったこと。夫によると、アメリカではイタリアほど乳房温存が盛んではないらしかった。リスクを避けるため、潔く全部摘出して、オシマイ。わりきるのが得意なアメリカの国民性を考えると、納得できる。

最大の幸運は、国際クラブのおかげで多数の友人がいて、信じられないくらいあれこれと手伝ってくれていることである。イタリアで治療、という方向が決まったとき、わたしは長くミラノに住んでいる友人 9 人にメールで連絡をとった。イタリア人 5 人、フランス人 1 人、インド人 1 人、日本人 2 人である。日本人以外は全員クラブのメンバーだった。まだイタリア人の大好きなヴァカンスの季節だったから、大事をみこんで多めに連絡をとったのだが、一般的なものから個別の情報まで、あっという間に手に入った。ミラノの病院の基礎知識がまるでないわたしにとって、9 人のうち一番多くのひとが推薦する病院が一番良からう、というもくろみもあったのが大当たりで、国立がんセンターの予約などは、友人 3 人がわたしの知らないうちに申し

込んでくれていて、受付が「またマドカ？」とあきれたほどだったのである。

日本人のひとは、イタリアの病院の仕組みをよくよく説明してくれた。

日本だと、まずどこの病院に行くか、という選択をする。が、ここでは、治療を国民保険で受けるか民間保険で受けるか、から話が始まるというのである。イタリアの国民健康保険については前に少し書いたが、金銭的には基本的に無料あるいは低料金で治療をしてくれるし治療の質も悪くはないのだが、時間的にはひどいもので、総合病院の専門医にかかるには3か月以上待つのがまれではない。日本では無理をしてでも予約を押しこみ、患者にとっては「3分診療」、医者にとっては「長時間の過重労働」となるのと対照的に、イタリアでは受診予約がとりあえずいっぱいになるとそれ以上は押しこんでくれないのだ。わたしのように口が悪いのは「自然に治るか、ほっといて悪くなって死ぬかどっちかだよ」と評する。

これを嫌って、民間の医療保険を使って、日本で言う「いわゆる保険外」または自由診療のみで、病院にかかるひともいる。その保険代は決して安くはないから、民間保険ですべてをまかなうのは、はやい話が金持ちと会社がかりの外国人のみである。当時の総中流階級の日本とは違って、イタリアは貧富の差が激しい。最貧層にあたる乞食（こじき）、すり、泥棒、売春婦は日常的にめずらしくない。

交差点の停止線の前に立って、止まる車に手をさしだすぼろを着た男や女はなんだろうと思ったら、乞食である。中には『わたしは戦乱のユーゴから来た。イタリア語はしゃべれず職もない。お恵みを』と書いた段ボール紙を片手に持っているひともいる。最初は慣れないせいもあり無視していたが、そのうち可哀そうになり100円くらい恵むようになった。昔読んだ児童文学全集の中の一節を思い出し、善行を積んでいけば天国に行けるのかな、などとぼんやり考える。

地下鉄の中では中年男がバイオリンを弾き、子どもが金をくれとコーラの紙コップをさしだして乗客のあいだを回る。旋律は短いが音色は悪くない。

道端にミニスカートで立って車の来る方角を見ているのは売春婦である。男が車を止め、商談成立なら女が車に乗りこみ、モーターだか青天井だか男の自宅だか女の部屋だか知らないが、人類最古と言われる商売をおこなう。縄張りがあるらしく、たいてい同じ場所に同じ女性が立っている。もちろん背後にはマフィアがついていると言うが、白人も黒人もいる。黒人は、地中海のすぐ向こうのモロッコ出身者だろう。冬のミニスカートは寒げで女性は股火鉢（またひばち）をしていることもあり、本来の行為そのものもだが、楽な商売ではないなとつくづく思う。なかにはどう見ても40歳過ぎ、という女性が町はずれの高速道の降り口付近にいつもいて、あれで食べていけるのだろうか、いつまでもやってはいけまいに、とわたしが妙な心配をしてフランス人に聞くと、年金のおじいちゃん相手にね、安くしてるのよ。特別サービスしたりしてね、だからお客はいるの、と説明された。

夏になると娼婦のなかには豊かな乳房を丸出しにして道端に立っているのもいて、朝の10時に子どもの通学路でそれを見たとき、わたしはおったまげて、もう少しで車を電柱にぶつければよかった。ミラノの豪華なチミテロ・モニュメンターレ（記念墓地）のあたりでは、車が通るたびにスカートをまくりあげる女もいるわよ、とドイツ人が言っていた。もちろんスカートの下には何もはいていない。

信じられない、とイギリス人の元校長のカレンが嘆く。まだ売春宿のほうがいいわ、通学路に出ないだけ。通学路だけは勘弁してよ。

わたしのイタリア語の個人教師だったパトリツィアの解説によると、昔は日本同様に赤線地帯があったのだけど、なんとかという女の大臣がけしからんと廃止にしたせいで、売春婦がいっせいに路上に出ることになったのよ、あれは浅知恵だったわね、となる。

売春婦は直接わたしたちの生活に害をおよぼさないが、泥棒やすりは害がある。

ポーランド人のヴィエシャは、施錠し忘れたガレージの扉から夜泥棒に入られて貴金属をやられた。インド人のエリザベスはミラノの街中で車を運転

して、道を聞かれて答えているあいだに、助手席側の窓から別の男にハンドバッグを盗られた。道を聞いたのももちろんグルである。イタリア人のルチアでさえ、地下鉄から降りてみたらハンドバッグの口が開いて財布がなくなっていた。わたしは家族でローマ観光に行った際、赤ん坊を抱えたロマ（当時の呼び名はジプシー）にバスの中で財布をすられた。赤ん坊を抱えるのは、わたしのようなお人好しを油断させる巧（うま）い手である。

そのため、ロマは赤ん坊をさらう、と言われていた。パトリツィアが言うには、母親がスーパーで赤ん坊を乗せたカートを離れて隣の列に行って戻ると、赤ん坊がいなかったことがあるそう。スーパーの店主は賢明で、すぐさま出入り口を全部封鎖した。警察が探したところ、トイレから出てきたロマの女性の長〜いスカートの下に、眠らされ、頭を剃られた赤ん坊が隠されていたという。

とんでもない話で、「マドカ、子どもから目を離しちゃダメよ。子どもだけで外出させてもダメ」と大マジメな顔でパトリツィアはわたしに注意していた。実際、子が小学校のあいだは、イタリアの親や祖父母は毎朝毎夕通学に付き添う。どの学校も校門には鍵がかかり、インターフォンを鳴らすと中の事務室で鍵を開ける。校門の外には駐車場がある。ウチの子どもたちは、これも鍵付きの門のある団地の外でスクールバスに乗っていたし、なにせ4人いたから、わたしはさほど神経質にはならずすんだが。

しかしこれだけ治安が悪くても、アメリカと違い、すぐ銃でパン、ということはないので、生命の危険はほとんどない。まだマシだと思うことにしている。

一方、子どもたちの通っているインターナショナルスクールなどには、文字通り桁（けた）が2つ3つ違うイタリア人の富裕家庭の子がゴロゴロいて、ウチの子が誕生日パーティに招かれたあとでわたしが迎えに行っても、住居の広いこと、家具の趣味がよくて高そうなこと、結構な絵だの置き物だのがちょうどいいところにポツポツとあること、住みこみの召使のいること、とまるでショールームか映画の中のような別世界である。けばけばしく品の

悪い成金趣味は、さすがミラノ、見たことがない。子どもたちにもその豪華さと美しさはわかると見えて、ぼうっと夢でも見ているような顔をして帰ってきて「ねえ、母さん、ウチももう少しきれいにしようよ」などと言うものだから、恐い顔をして言い聞かせねばならない。

「眼をさましな。あのね、2倍くらいの金持ちなら少しは真似ができるよ。でもね、10倍100倍の金持ちのやることはとうてい真似できないよ。無理、絶～対無理。ウチはウチ、よそはよそ！」

さて、民間保険利用、つまり日本で言う保険外診療のみの医療を受けている場合、かかりつけの医者で紹介などで、指名して高名な医者にかかることができるらしい。わたしが勧められたのは、直前に厚生大臣をし、数年前にヨーロッパがんセンターを設立したというヴェロネーヅィ氏の息子で、1回30分の診察が日本円換算で2万円だった。

手術の場合は公立ないしは私立の病院の手術室を「借りて」おこなうという。出張サービスのようなものだろうか。請求書は、医者からと病院からと別々に来る。入院中の環境が豪華ホテル並みとなるか、まずい食事と暗い部屋になるかは、医者がどの病院にコネがあるかと、患者の懐具合などを考えての選択によるらしい。

わたしの場合、民間保険には入っていないから、初めからできたら公立病院のほうががいいと思っていたが、幸い、ミラノには2つ、がんだけを対象としているがんセンターがあった。民間保険の患者も、国民保険の患者も、受け入れるという。

ひとつは正式名称「腫瘍の研究と治療のための国立研究所」という名前で通称「国立がんセンター」、もうひとつは今書いた「ヨーロッパがんセンター」である。こっちのほうが新しい。国立がんセンターにかかるのに必要な紹介状をもらうため近所のかかりつけ医に行った際、ついでにヨーロッパがんセンターについても尋ねてみた。彼女が言うには、治療の質は同じ。ただヨーロッパがんセンターのほうが5年前かそこらにできたばかりで新しい

からきれいだし、あれこれときちんとしている、のだそうだ。少し迷ったが、その程度の違いしかないのならば、すでに予約がとれている国立一本でいこう、と腹を決めたのだった。

数え切れない幸運のもうひとつは、この「国立がんセンター」はがんの治療に関してはヨーロッパでも何本かの指に入るすぐれた病院で、イタリア中から患者が集まってくるという評判だった。その結果、日本では地方住まいで、東京のがんセンターでさえかかれる可能性は皆無だったわたしは、日本にいるよりはるかに高い質の治療が期待できたのである。

さらに、夫の勤務するアメリカ系製薬会社のイタリア研究所は、がんの治療薬だけを研究開発しているのだが、この病院と提携して新薬を試す臨床試験をしていた。つまり、ここでは夫関連のコネがきく。実際、わたしの友人の夫であり、わたし自身の友人でもあるイタリア人のジャンフランコは夫の会社の重役クラスで、わざわざわたしのためにがんセンターの医者と話をしてくれた。イタリアでコネはものをいうから、わたしはいい治療を受けられる可能性が高い、というわけだ。

夫もがんの薬の開発にたずさわっているから、あれこれと知識がある。夫によると、「欧米ではがん専門の『腫瘍科医』がたくさんいて、抗がん剤の治療つまり化学療法を担当し、一方外科医は手術だけを担当するのが普通だけれど、日本には腫瘍科医がすごく少なくて、外科医が化学療法も担当することが多い。でも化学療法は元々外科医より内科医の分野に近いから、日本だと副作用の管理に自信がなくて、ずっと入院になる。ここは腫瘍科医が担当してるから、通院で抗がん剤治療ができる」ということらしい。わたしにしてみれば、4人の子を家において長期間入院するよりは、通院のほうがよほどいい。

あんたの副作用も、そりゃあキツイのは可哀そうだけど、医学的には軽度のものばかりだね、と夫は涼しい顔をしている。「重度の副作用とはね、白血球の減少なんかだよ。それに1週間吐き続けて寝こんでいるわけでもないだろう、あんたは軽いほうだね」。そう言われても、わたしの実感がキツ

イのに変わりはないのだけれど。

また、日本でも知られているように、日本の厚労省が許可している薬よりは、イタリアで使われている薬のほうがはるかに種類が多く、しかも最新のものがたくさん含まれているそうである（その分リスクも高くはあるが）。だから、わたしが寝こんでいるのは毎回3日程度なのも、薬の種類が違うせいなのかもしれない。

ところで、わたしに闘病生活の援助を申し出てくれたのは、クラブで10人以上いた。フランス人、イタリア人、イギリス人、アメリカ人、南アフリカ共和国人、インドネシア人……。中には、点滴へ通うのに運転してやろう、と言ってくれるひともいた。身内に化学療法の経験者がいて、どんなに辛いかわっているひとたちである。

この国で、あまり日本人とはつきあわず、もっぱらイタリア人や外国人と親しくしていると、だんだん考え方も影響されて変わってくる。ひとつは、妙な遠慮をする必要はない、ということだ。欧米人は「お義理」を言わないから。イタリア人は多少お義理も遠慮も言うので、日本人に近いところがある。が、あの、お茶漬けでも食べていきなはれ、と言われたら、実はもう帰りなはれという意味だという「京のお茶漬け」ほどではない。他のヨーロッパ人は、イギリス人にしろ、フランス人やスウェーデン人にしろ、家に来ないか、と言ったら本気で誘っているのであり、乗せて行こうか、と言ったらほんとに乗せていくのに何の不都合もないから言っているのである。日本のように、「ホントは今日は寄るところがあって困るんだけど、このあいだ乗せてあげたから今日も言わないわけにもいかないわ、あのひといつも当てにしてるんだから」といった、腹と口が違うことは、まずない。用事があれば「ゴメン、今日は乗せてあげられない」とシンプルに言う。

最初はかなりとまどった。

日本式に一度目に礼儀正しく遠慮して断ったら、その気がないと判断されて、二度とお呼びがかからない。こっちは当てがはずれて、さみしささえ感

じる。だんだんこのやりかたがわかってくれば、今度は自分から、ねえ、お願いできる？ と尋ねていいとわかるのだが、あまり親しくない段階で、そんなずうずうしいことは言えない、というのが身に染み付いた日本の文化である。わたしはここで初めのころ、自分が思っていたよりずっと日本人らしいことを発見して驚いた。今度こそは思い切って言ってみよう、と覚悟していたつもりでも、いざその場になると遠慮してことばが口から出てこず、機会を逃がすのである。

最初の1年はこの調子で、友人は少ないわ、英語はともかくイタリア語はヘタだわ、あたりの様子はわからないわ、イタリアのいいかげんなのにはとことんくたびれるわ、で暗いまま終わった。たぶん、イタリア暮らしの長い日本人にもっと頼っていたら、そんなに苦労しなくてすんだのだろうが、「イタリアに来たからにはなるべく日本人とつきあわない」というポリシーは死守するつもりだった。

いいかげんさの洗礼は、イタリアに着いた翌日だった。夫の会社の人事課の、ウチの家の鍵を預かっていた担当者がヴァカンスでいないので、決まっていた家にわたしたちは入れなかったのである。それも2週間。わたしは開いた口が塞（ふさ）がらなかった。日本なら、ウチの到着日が知らせてある以上、誰か他のひとに鍵を託しておくものではないか？

代わりに会社が金を払ってくれた台所付きのホテルでは、わたしたち親子6人に対して2人部屋2つで、ベッドは追加が2つ入っていたが、食卓の椅子は追加されていなかった。気が利かないではないか？ 夫とわたしは下の子をそれぞれ膝に乗せて食事していたが、3日目に夫が音（ね）をあげた。フロントに文句を言っても、椅子が届いたのは明朝だった。

そのホテルの部屋の台所の電気コンロをふたつ使うと、ショートして部屋は真っ暗になった。翌日も、その翌日も。わたしはそのたびに思い切り罵声をあげて、熱い鍋を抱えて隣の部屋の台所に移り、結局は冷蔵庫の中身や調味料も全部隣に移動させた。怒り狂ってフロントに行って抗議したが無駄だ

った。これが G7 の文明国家のホテルか！

夫の会社が申請したビザには不備があり、住民登録はしばらくできず、したがって車も買えなかった。わたしが役所の窓口で泣きつくと、「自転車に乗ったら？」と冷たく言い放たれた。これが多国籍企業か！これが先進国の役所か！

そのうち人事の担当者が入社してきて、わたしたちはやっと鍵を手に入れて家に入れることになったが、日本から送った簡易畳とふとん一式はまだ届いていない。船便は 2 カ月で着くという話だったのに、2 カ月半かかった。夫の上司が貸してくれたエアマットレスは、どれだけ一生懸命空気を吹き込んでもパンパンにはふくらまず、横たわるとからだのどこかが木の床に当たった。

この調子で、毎日何かがうまくいらず、猛烈に腹をたてたり、ガックリきたりする繰り返しだった。おまけに、異国では何かと勝手が違う。

車が買える前にレンタカーを借りたら、ヨーロッパは基本マニュアル車。さっそく左折の際に交差点のど真ん中でエンストして、どえらい冷や汗をかいた。それにミラノ市街は一方通行だらけで、あらかじめ地図で予想していた道順はたどれず、すぐに迷う。日本の道路は基本的に碁盤の目状だが、ヨーロッパは大きな教会や広場から放射線状に道が伸びているから、道を 1 本まちがえると、元の道に戻るのが容易ではない。ナビなどまだ存在していない時代である。

生活も、わたしがイタリア語を多少わかるとはとっても、洗剤ひとつ買うのにも長いことかけてラベルを読んで、それでも自信が持てない。肉は薄切りを売っていない。イタリアにリゾットという味つきの米料理はあるが、その米を白ご飯にするとまずい。日本から炊飯器を持参したがうまく動かず、生まれて初めて鍋で 6 合の米を炊くと、米に芯が残ったり、粥になったり、鍋をひどく焦がしたり。スチールたわしでゴシゴシ 30 分かけて焦げを取っていると、涙がでてくる。

2 カ月たつと秋の半ばにさしかかって、なんとも言えず陽射しが弱く、あ

たりが暗くなりつつあった。毎日の生活はなんとか軌道に乗ったが、わたしは精神的に疲れはてていた。鬱（うつ）っぽくなって夫が心配したほどである。夫の上司夫人のカレンがそれを伝え聞いたらしく、わたしをイタリア語の会話教室に誘いに家まで来てくれたが、親切心は嬉しくても、落ちこんでいたわたしは家から出られず、そのうちにね、と断った。

変わっていくことができたのは2年目以降で、それでも、どれだけ「勇気をもって一步踏み出す」ことを繰り返しただろうか。「清水の舞台から飛び降りる」というが、ほんとに息をつめる思いでひとに話しかけたり誘ったりしたものである。慣れない外国でひとが寄ってきてくれるのを消極的に待っていたら、友人ができるわけではない。それなら自分から、ひとが寄ってくるようなことを積極的にしよう、と決心して実行することにしたのだ。

寿司に人気があるから国際クラブの行事として、手巻きや握り寿司の料理教室は3年間で10回ほど自宅で行っている。台所が小さいので、基本的に参加者は1回4人までと規模は小さい。一度クラブのメンバーの夫のほろが興味津々（しんしん）だと聞き、土曜に夫婦同伴の寿司教室を開いたときには3組6人来た。握りなど日本では買うばかりでつくったこともないのいい度胸だが、正月には着物の着付け教室まで、自宅とイタリア語学校でやった。なに、日本人はひとりも見に来ていないのだから、まちがっても誰にもわからない。洋服と違ってボタンもファスナーもなしに着る服という、あくまで文化紹介である。ドイツ人やアルゼンチン人、トルコ人、フランス人に着せつけて、見ているだけの参加者にもかなり喜ばれた。

自宅にひとを呼ぶとなると、ふだんろくに掃除をしないから、台所の掃除から居間のかたづけから一仕事あるのだが、友人を増やすにはずいぶん効果があった。国際クラブの行事係を引き受けたからには、スイスの湖行きも、美術館めぐりも、絹製品の買い物ツアーも組んだ。教会のガイドさえイタリア語と英語のちゃんぽんでやった。当たり外れもあって、3人しか来ないこともあれば、十数人来たこともある。まったくの自由参加なので、規模は小

さい。

そしてまたこうした行事を公的に組むのは、自分に積極的なサービス精神があるからで、お義理の口先だけではない。自分がやっていれば、ひとの誘いにもぽんと乗りやすいというもので、わたしとしては、「あれだけひとの世話をしたのだから、今度はひとの世話になってもよかろう」という、貸し借りの清算に近い感情で、闘病中はひとの親切を受けることにした。

ところが亭主殿は、「気兼ねだ」と言う。なにせわたしは、「マドカ、何をしたい？」と友人に聞かれたときに、きわめてすなおに「晩ご飯持ってきてちょうだい」と言ったのである。

手伝ってあげるわ、と言われても、ひとの家の掃除や洗濯に来てくれとは言えないではないか。家事のなかで頼みやすいのは料理と買い物くらいではなからうか。それに、実際問題として主婦のわたしが動けなければ、子どもたちの世話の応援を頼むにしても、残りの家事育児は全部亭主の肩にかかってくるから、それを軽くしてやりたいのは当然である。

毎回点滴後の1週間のうち週末をのぞく5日間、毎日誰かが晩ご飯を持って来てくれることになり、フランス人のマルティンは調整係をかってでて、当番表までつくってくれた。この当番は毎回変わり、最初の6カ国のひとのほかに、スペイン人、トルコ人、オーストリア人、ドイツ人も加わってくれた。

すると、各国の本場の家庭料理は、いつも日本人にとって口当たりがいいものとは限らず、子どもたちがやれ臭いだのまずいだの文句を垂れる日があったのは、いたしかたない。豆のスープ1品だけが届いて、大慌てで亭主がソーセージと野菜を炒める日もあった。それでも、異国の味に文句を言っても、なんにもなくて会社から帰った亭主が一から十までつくるのに比べたら、夕飯宅配サービスはありがたいことこの上なかった。

とはいえ胃の悪いわたしは一口も食べることができず、粥と白菜の漬物を嚙（か）んでいる。もうじき点滴、という日が迫ると、多少無理をしてでも

中華スーパーまで遠出し、白菜を買ってきて漬けるのである。これだけは口に入った。

さて、亭主殿の「気兼ね」である。

この感情はヨーロッパ人にはひどくわかりにくいものらしい。

「何なのよ、それは」と尋ねられる。

「施しは受けたくない、という意味なの？」

「違う、違う、悪いなあ、と思うのよ。申し訳ないって気持ち」

「あなたは何も悪いことはしてないでしょ、何が申し訳ないのよ」

「だってあなたに迷惑をかけてるじゃないの」

「迷惑？ そんなことないわ。負担だと思えば言うてない。あなたが困っているから手を貸してあげる、それだけのことよ。どうしてそれがイヤなの？」

わたし自身は、クラブのために貢献したから今度はひとに手伝ってもらってもいいと思ってる、と打ち明けると、

「あんた性格悪いわね」とくる。

口々に「考え、おかしいんじゃない？」だの「会長とかなんとか関係ないわ。会長やってなくたって、困っていれば助けてあげるって」だのと続く。

確かに、子どもがよその家に遊びに行ったりお泊りに行ったりするとき、初めごろわたしは日本での習慣そのままに、駄菓子 1 袋でも何でも持たせていた。向こうはありがたいとは言えども、反対に向こうの子がこっちに来るときは、まず手ぶらである。三度続けてわたしが子どもに何か持って行かせると、「マドカ、まあ、そんなことすることないわ」と言うけれども、だからといって同じように向こうが持たせるか、というと、そんなことはまったくない。

どうもヨーロッパでは、車を出す出さないレベルならば、このあいだあなただっただから今度はわたし、くらいのことはあるが、いろんなことで、いわゆる「お返し」をしなくてはいけない、という観念がごく薄いような気がす

る。もちろん、お互い外国で暮らす苦勞をわかっているから助け合わねば、という国際クラブ特有の理由もあるだろうし、感謝の気持ちもそれなりに表しはするが、受けたことと与えたことが同じでなくていいらしい。

できるときに、できることを、ごく気軽にやる。やったら、それでおしまい。

初めのころこそ落ち着かない気持ちにつきまとわれたが、慣れてくると、これだけ気楽なことはなかった。

亭主はこの、わたしへの手伝いの申し出の背後にあるのはキリスト教的博愛精神ではなからうか、と推論する。確かに西洋では、日本で考えるよりずっとキリスト教がひとの思考パターンにしみこんでいて、困っているひとがいるなら助けてあげる、困っているひとはそれをすなおに受ける、という傾向があるように思う。

亭主はまた、これは欧米の文化にあるボランティア精神の発露ではないか、と考える。ボランティア（ボランティアの）というのは「個人の自発的な意思に基づいて」という意味であり、集団的で強制的な社交儀礼や義務感、すなわち義理からくるものと正反対である。だから、「義理という感覚の薄いヨーロッパではお返しは要らないんだろうけど、ぼくは日本人だからやっぱり気になるんだよね」ということになる。

わたし自身も、「お返し不要」の背景に「個人主義」があり、それは日本の「集団中心主義」と対極的だという気が強くする。日本人は自分の属している集団をおそろしく重視し、他人と違う意見を言うことや違う行動をとることを嫌うから、もし誰かにご飯を持っていくとなったら、たぶん「みんな同じように」持って「いかなければならない」。そして義理から言ってお返しは絶対必要だし、みんなへのお返しが同じでなければ、ややこしいことになる。妙な平等思考だ。

一方個人主義では、それぞれが自分の価値基準や行動パターンに従って行動する。自発的でもあると言え、他人が何をするか、があまり判断の基準に

ならない。しかし、それぞれの良心や道徳観念があるのだから、利己主義ではない。自分がされてイヤなことは他人にしない、というのはここでの基本的な考えのひとつである。

同じように、わたしには自分の意見がはっきりある。それが通らないならしかたないし、他人に別の考えがあるなら、それはわたしの考えと同じように大切だから、無理に押しつけないとは思わない。が、言うだけは言いたい。やりたいことはやりたい。ひとが大勢やっているというのは、自分がそれをやる理由にはならない。自分が興味を持てるか、適当と思うかどうかが基準である。

この性格、日本では、我が強い、と言われる。特にわたしの世代の女にとって、ほめことばではない。

それがヨーロッパにいくと、なんと自然なことか！

わたしはイタリア生活がきわめて気に入っている。

四章 最悪の落ちこみ

黒唄鳥（くろうたどり）が庭の芝まじりの土の上を、のんきそうにピョンピョン跳（は）ねては、みみずをつつついている。イタリア名メルロというこの鳥は、ウチの猫の餌食になるくらい太平楽でとろい。赤胸の駒鳥が細いほそい脚でこれも現れ、黒白の四十雀（しじゅうから）も、生垣やもみの樹の枝のあいだを上になり下になりしてチヨロチヨロしている。外に出れば、ツィー、ツィー、と意外にきれいな声で鳴いているのが聞こえるだろう。

しかし今のわたしにその気力はない。イタリア語で言う「扉から鼻も出さない」ような家に閉じこもった日が、もうひと月近く続いている。抗がん剤はがん細胞を破壊するが、同時に正常な細胞をも痛めつけてしまう。その毒が蓄積し、3回目の点滴以降疲労感がとれないのである。家事は台所仕事をかたづけるのが精一杯で、洗濯は夫がしてくれる。掃除は、居間と台所の床を掃くくらいのもものだから、週1で掃除に来てくれるシルヴィアでなければ、わたしか夫、子どもたちの誰かがする。買い物は、これも副作用で足の裏がジンジンチリチリとくるのがひどくなり、100メートルも歩けなくなってから、出なくなった。

アレーゼには、毎週土曜日の午前中に数十台のトラックが来て、500メートルほどの通りひとつの両側に荷台を開き、野菜や魚、肉、お菓子に衣料・日用品が屋台のようにずらりと並ぶメルカート（市場）となる。わたしたちはほぼ毎週行っていた。野菜はスーパーより新鮮だし、魚に至ってはこのメルカート以外では、新鮮なものが手に入らなかった。外を歩きながら買うのも楽しい。

一度などは、その市場に行くために夫が自転車の荷台にわたしを乗せて、イタリア語で「気違い栗」と呼ばれるマロニエや、カナダ楓に似た大きな楓の枯葉をがさごそと踏みしだきながら、押して歩いてくれた。まさに身体障害者である。夫の優しさは涙が出るほどありがたかったが、寒いのとひとが

見るのには参った。以前なら週末にはたいてい家族で釣堀に行ったり散歩に出たりしていたのだが、今では歩くところではないし、体力が落ちては、釣堀に行っても車の中で寝ている始末である。

たまにイタリア人のルチアが電話をくれ、フランス人のマルティンが様子を見にのぞいてくれるが、ほかの友だちは一通り心配してくれたあとは、わたしの休養を妨げては、という思いやりもあってだろう、夕飯配達サービス以外に訪れるひと少ない。去年までは、イタリア語の勉強に国際クラブの行事、計画、オーボエのレッスン、コンサートと毎日のように出歩いたりひとが来ていたりしていたのと比べると、雲泥の差である。

11 月初めの国際クラブの例会には、風が冷たいなと思いながら、大判のスクarfを巻いて久しぶりにおしゃれをして出て、坊主頭をさらして今までの闘病の経過と、誰にでも可能性があることだからと自己検診法の説明を英語でしたら、50 人ほどの出席者のあいだに一言の私語もなく、子どもも騒がず、緊張と集中感があふれていた。役員をしていた時分には、挨拶や行事説明のあいだいかにして私語を防ぐかに頭を悩ましたものだが、話題が話題とはいえ、これほどの「謹聴」はかつて経験したことがなかった。そして、手で触って腫瘍がどこにあるかわからなくなったと告げたときには拍手がわき、

「乞食と役者は 3 日やったらやめられないと言うが……その気持ち、うん、わかる、ねえ」

というほどいい気分だったのが嘘のようだ。

時期もよくなかった。緯度が高いため、秋から冬にかけて北イタリアは暗い。日本では太陽の国、というイメージがあるが、ナポリやシチリアなどの南部はともかく、ミラノは日本でいうと北海道をはるかとおり越して樺太くらいの高緯度になるので、晴天の日でも陽（ひ）ざしが弱々しい。ふとんは干せない。ミラノ名物の霧が出た日には、片道二車線の道を通りの反対側がまったく見えなくなるくらいだから、服を干してもじっとりと湿気を含んでしまう。洗濯物を外に 3 日干しても乾かなかったので外干しは諦めた。代わ

りに家の中の階段の上の手すりに紐を張り、ずらりと 6 人分の洗濯物を吊っている。おまけにアルプス山脈の南の巨大な盆地とあってミラノには風が絶え、イタリア人は環境汚染にひどく鈍感なもので、冬は排気ガスに暖房装置からの煙が重なり、スモッグが町を覆う。警報が出る日もある。タンジェンツィアーレと呼ばれる準高速道路のようなミラノの周りをぐるりと 1 周する道路を走っていると、道路の外側は空気がまだ澄んでいるが、内側は汚い黒っぽい空気が、ミラノの上空だけに巨大な帽子のようにかぶさっているのがはっきりわかる。

余計暗い。

1 日中どんよりとしていて、わたしは基本的にイタリアが大好きだが、これだけはかなわない、と思うのが秋から冬の暗さである。気持ちが落ちこんで、毎年鬱（うつ）っぽくなるのだ。今年はそのうえ闘病中で、気候には慣れたといっても、いいものではない。

駒鳥の夢

知ってる？

今朝きみの夢を見たんだ

外は白く霜のおりた生垣に

赤い胸の駒鳥が訪れ

わたしは暖かいふとんのなかで

うとうととまどろんでいた

きみはラジオでしゃべってた

ああ きみの声だ

もうじきここへ来るんだ

いっしょに出かけるから

そう思って眼を覚まして
茶色いセーターに琥珀（こはく）の耳飾りをつけたら
きみが来ていた
わたしの育った
明るくて古い木の部屋だった

すると
きみにこの夢のことを語りたいなと思い
でも口に出すことはないだろうと
しずかに泣いたのは
いったいいつの夢だったのだろうか？

きみも
わたしの夢をみることがあるのだろうか
わたしに語らぬままに

そして白く凍った池の底に
夢をみんな閉じこめるのだろうか

それとも
ハーブシコードの音にのせて
町中の通りに響きわたるように
高らかに歌いあげるのだろうか

それとも
わたしが逝った後

糸のような三日月の晩
夢でわたしに逢って
ひとりむせび泣くのだろうか

知ってる？
きみのことを想っては
告げなかったことが
こんなにたくさんあるんだよ？

1 日が長い。

本を読む。日ごろから年間 100 冊は読むが、それも 1 週間 2 冊のペースだから楽しいので、1 週間に 10 冊も読めば飽きる。英語の本もイタリア語の新聞も、体力が落ちていると手にとる気にもならない。母国語しか受けつけない。

残る時間つぶしはコンピュータの一人遊びのトランプゲームだが、からだを真直ぐに保てず、椅子からずり落ちそうな格好でやっている、まさにかからだ中の細胞が、あちらでもこちらでも音をたててポロポロと壊れて死んでいくのが実感されるようなだるさである。

煙草も増えた。元々「ライトスモーカー」で、一番軽い煙草を、吸わない日もあれば多くても日に 5 本程度しか吸わなかったのだが、毎晩コンピュータの前に座りこんで、夜中の 2 時、3 時まで自棄（やけ）のやんばちでゲームをやっていたら、煙も絶えない。亭主は「俺を愛しているなら煙草をやめてくれ」と言う。乳がんで怖いのは乳がんそのものよりも、その後のほかの場所への転移なのである。特に骨、肝臓、そして肺。いくら軽い煙草を少量といっても、吸っていれば吸わないよりは肺がんの可能性が高くなる。その理屈はわかるが、この暗くしんどい時期に、「煙草でもふかさなけりゃやっ

てられっか、おい」というのが正直なところで、禁煙する気にはとうていなれなかった。結果体調は悪化しているにちがいない。しかし、どう思っても、「今だけはほっといてくれ」という心境だった。

そして体力が落ちれば気力も萎（な）える。

悪い知らせも重なった。夫が勤め先の製薬会社から持ち帰ったイタリア語の雑誌によると、イタリアにおける乳がん患者の5年生存率は71%であるという。これを高いとみるか低いとみるか。

もし29%に入ったら。

わたし自身の人生はまだいい。ひと並み以上にいろんなことに挑戦し、やりたいことはおおかたやった。喜びも哀しみも十分に味わった。自分の人生には満足している。しかし5年後、末娘はまだ12歳、その上に15歳の次男と17歳の長女、長男でさえ19歳でしかない。思春期の難しい年ごろから、ひとりだちするまでまだまだ間がある年ごろである。とても、とても、おいては、逝（ゆ）けない。

そして亭主。もしもそうになったら、心残りで逝くわたしと、弱っていくわたしを日々見守り、その後はわたし無しに、4人の子どもを抱えて生きていかなければならない亭主と、いったいどちらが辛いだろう。

わたしは1週間ゲームをしながら独（ひと）りぼろぼろと泣いた。

もちろん、これは日本に比べて乳がんそのものの発生が格段に多いイタリアでの数字で、抗がん剤の効き方にも人種差があり、日本人のほうが少ない用量でよく効くそうだから、この数字が信頼できるものであっても、一概にわたしにあてはまるわけではない。それに71%に入るか29%に入るかは、生きてみなければわからない。そういう意味ではこれはただの無意味な数字である。しかし、そういう「達観」の境地に達することができたのは、1週間泣いたあとであった。

しばらくあとの話になるが、この医学的用語の「生存率」なるものは、素人の感覚では「非再発率」とでもいうべきものであることが判明した。夫が

ふとそう言ったのだ。

「何ね？ 英語でサバイバル、イタリア語でソプラヴィヴェンツァて言うたら『生き残り』っちゅう意味やないの」

「そうなんだけどね、専門用語では意味が違うんだよ。5年生存率、って言ったら5年間再発しなかったひとの割合なんだよ。だいたいそんな死ぬわけないだろ」

わたしは呆（あき）れた。意味が違い過ぎる。

「でも、若いときのがんは進行が早いから、40代で死んだなんてぼろぼろ聞くじゃない。そんなもんかな、って思うわよ」

「あのね、乳がんは閉経後の白人女性の5人に1人、っていうくらい多い病気なんだよ。それが5年で3割ずつ死んでたら、ヨーロッパに女はいなくなっちゃうよ」

「……で、あんた、それ知ってたの？」

「そりゃ商売だからね」

「なんでわたしに言わなかったのよ！ あたしや死ぬ覚悟をして泣いてたんだよ！」

要は夫がそこまで気がまわらなかった、ということらしく、わたしが真実を知ったときはもう「悟りを開いた」あとだったが、ひと騒がせな話である。わたしは英語の翻訳をひと月したことがあるから、駆け出しでもプロというかセミプロのつもりでいるのだが、そんなことは知らなかった。そう言うと、ジャンフランコの妻で、わたしの友だちのダーリーンが笑った。

「マドカ、わたし英語は母国語よ。言ったらあなたより英語はよく知ってるのよ。それでもやっぱり知らなかったわ」

あとになっては笑い話だが、そのころのわたしは「死ぬ確率」だと信じ、ただ打ちのめされていた。

もうひとつの悪い知らせは、3週間ごとに4回の点滴という前期が終わって後期の化学療法に移る際に、久しぶりにマンモグラフィつまり乳房のレ

レントゲン写真を撮ったら、腫瘍は全然小さくなってなかったことだった。

治療に入る前に医者の方から、必ずしも全部の患者に効くわけではない、との説明は受けていたが、なにせ触診では確実に小さくなり、医者もわたしも触ってまったくわからなくなるくらいになっていたのだ。全部小さくなったと思うではないか！

実際のところは、夫の説明によると、腫瘍というのはいわば桃や杏（あんず）の実のようなもので、柔らかい果肉の部分と硬い大きな種の部分とに分かれ、果肉の部分は触るとわかるが写真には写らず、種の部分は、そこから四方八方に突き出した刺（とげ）とともに、素人目にもはっきりと写真でわかる。だからわたしの場合、果肉の部分は、触ってもわからなくなったのだから確かになくなった、あるいはかなり減少したのだが、種の部分、つまり芯は小さくならなかったのだ。

ついでに言うと、わたしが見つけたしこりが日本で7月にがんであろうと強く疑われたのは、触診での医者感触と、レントゲンならびに超音波の写真で、しこりとしこり以外との境界線がきわめてあいまいなこと、さらにしこりに棘があったことで、ほかにあった、乳腺のカルシウムがたまってできた無害なしこりでは境界線が非常にはっきりしていたのと対照的であった。この境界線のあいまいさと棘は、がん細胞が周りにどんどん広がっていている証拠なのだ。診断を決定するとどめは細胞診といって、しこりにぐいぐい注射針を突き刺して組織をとり、検査した結果である。

イタリアではさらに治療に入る前、9月にビオプシア（英語でバイオプシー）、日本語で言う生検（せいけん）を受けた。胸に麻酔注射をしておいて1センチくらいメスで切り目をいれ、5ミリくらいの太さの極太の注射針を、ピストルの引きがねをひくように、ばね仕掛けでしこりに打ちこんでは引き抜くのだが、方向を変えてはそれを5、6回繰り返す。組織をとり、培養して腫瘍が悪性かどうか調べるのだ。好奇心旺盛なわたしはその針が打ち出される様子を見ていたら、見ないときより痛かった。「あなたが見るから痛いよ、ハイこっち向いて」と看護師がにっこり笑い、医者は「あなた歳はい

くつ、イタリアに何年いるの」などと話をして患者の気をそらしてくれる。
わたしも2回見たら気がすんだ。

この生検は結構こたえた。部分麻酔でも痛みが鋭く、6回目は、「まだやるの！」と叫んで、「うん、検査するほうがやかましく言うんだよ、これで終わりだからね」となだめられ、ビーカーに入った液体の中に、色形といい大きさといいまるで糸ミミズのような「わたしの細胞」が漂っているのを見せてもらった。妙な代物であり、妙な感じだった。その後30分くらい軽いショック状態のようなものにおちいていた感がある。気丈なつもりのわたしだが、それほどでもなかったか、それとも麻酔の後遺症か。車を運転して帰りながら、なんだかふわふわと雲の上でも歩いているような頼りなさだった。

話を12月5日のレントゲン写真に戻そう。

写真に写った腫瘍が9月の写真とまったく同じ大きさなのを見て、がっくりくるわたしに、レントゲン科の医者が、腫瘍を木にたとえて説明してくれた。写真に写らない葉っぱの部分はなくなったけれど、枝や幹は小さくならなかったわけだと。わたしが、桃の実の果肉はなくなって、種は変わらないようなものか、と問いなおすとそうだと言う。夫は、しかし、どんどん広がっていく攻撃的な部分は果肉の部分だから、それが消えただけでも化学療法の効果はあったんだよ、と冷静に解説する。ほら、ジャンフランコも種の部分が小さくなるのはあまり期待するなと言っていたらろう？ と臨床にたずさわる友人のことばを思い出させる。

あんなに辛い思いをしたのに、全然芯が小さくなっていないなんて。

またわたしはぼろぼろと泣いた。

泣いていると、鼻水が妙にすぐにポタッと落ちる。不思議に思って鏡を覗（のぞ）いてみると、鼻の穴がばかに白く、広い。抜けたのは髪の毛だけでなく、眉毛や鼻毛もだったのだ。おかげで、鼻水が鼻の穴の中に留まることがなくすぐに落ちてくる。寒いところに出ても同じ。鼻毛がないだけで鼻水の落ち方が違うのだ。

悲しいなかで、これは珍妙なおかしさであった。

鼻毛まで抜ける！

人生なんてそんなものだ。どんな状況だって、ひとつやふたつ、笑えることはあるものなのだ。高校生のころ読んだ、エリヒ・パウル・レマルクというドイツ人の書いた『西部戦線異状なし』という本を思い出す。戦争の最前線という、わたしとは比較にならない過酷さのなかでも笑いころげるシーンがあり、そこで、「どんな悲惨な状況のなかでも、笑えることはあるものだ」と主人公は思う。

このことばはその後、折に触れてわたしの支えになり、辛い時期でも生活を明るくしようとするために役立った。

2期目の化学療法は1期目の薬ほど強くないので、これ以上腫瘍が小さくならず、したがって期待していた部分切除ではなく、乳房を全部取り除かなければならなくなる可能性が高い。主治医に聞くと可能性が高いとは言わず、可能性があると云ったが、わたしとしてはそれを受け入れるのに心の準備が必要である。乳房再建手術をするならどんなものかと尋ねてみると、「摘出するやいなや同じ日に引き続いて仮の乳房をつけ、半年か1年後に本手術をおこなうやりかたと、摘出してひと月ほどたってから再建するやり方とあり、美容的には前者のほうが優れている、ま、詳しいことは手術する形成外科医に聞いてよ」とわりに素っ気ない。

主治医自身は腫瘍科医である。だから形成外科領域には詳しくない。レントゲンの説明でもそうだが、ここでは分業が徹底している。9月に腫瘍の大きさを決定したのも主治医ではなく放射線科の医者で、判定が主治医と放射線医とで分かれたときも、主治医は放射線医に尋ねなおした。日本なら外科である主治医が全部判断し、説明するのではあるまいか。

このころは副作用が最高潮に達していて、疲労感だけでなく、病院内を採血室からレントゲン室、診察室、と移動するのも足ジンジンがひどくて、おそろしくゆっくりとしか歩けなかった。ひとが珍しげにじっと見つめて、

さぞや重病人と思うのか、扉を開けてくれる。この足ジンジンが始まったのは最初の点滴の1週間後で、次の点滴の1週間後に悪化し、3回目の点滴のあとはもっとひどくなった。つまり、「毒」が蓄積していつているのだ。4回目のあとは、ほとんど歩けなくなるのではないか、という恐怖感があった。はじめの9月に入った毒が消え始めない限り、この副作用は軽くなりようがない。足だけでなく掌にもジンジンチリチリが出てきて、料理や衣類の整理でさえ、しばしば中断せざるを得なかった。

「ほんとに、なんにもできないわ。何にもよ。いったいいつになったら軽くなり始めるのよ!」

イタリア人のように腕を振り回して唾(つば)をとばし、医者に詰め寄る。先が見えないというのはまことに辛かった。

「いつ、と言われても困るけど、必ず軽くなるから。もうこの薬は終わりにんだから、これ以上ひどくはならないから、ね」

患者をなだめるのも医者の仕事のひとつとは言え、副作用に個人差がある以上、確答はできない。愛想なしの主治医の女医はそっぽを向き、若い男女2人の医者が同席するうち、イタリアらしく男性のほうがしきりにわたしを慰めようとする。

「そんなこと言ったらって買い物にも行けないし、オーボエも吹けない、クリスマス前のコンサートも全部おじゃんよ!」と盛大に愚痴ると、

「なんだ、それは?」

「わたしはクラシック音楽が大好きで、イタリアに来てからオーボエを習い始めたのよ。それが化学療法を始めてからは体力がないからで吹けないでしょう。でもそれはまだいいわ、終わったらまた吹き始めるから。でもね、コンサートにもう半年も行ってないのよ。去年の今ごろなら週に2回は行っていたのに。バッハの宗教音楽を聴くならクリスマス前か復活祭前が一番、それがこの調子ならせっかくミラノにいながら1回もコンサートに行かずに今年は終わるわ!」

ここまで来ると医者の領分ではない。あら、そう、てなもんである。

この暗かった時期に、西洋人が口をそろえて言うのは、「マドカ泣いてよかったわね」という台詞（せりふ）だった。泣いて泣いて悲しみや絶望を発散したら、あと楽になるでしょ、泣かなかったらいつまでも胸の中にたまっていて、苦しさはつものばかりよね、と、イタリア人もフランス人も南アフリカ共和国人も異口同音に言う。

実感である。

最初は、へ？ と思ったが。

日本ではおとなが、特に人前で泣くのはみっともないというかはしたくないとか、要するに感情の抑制が効かない、あんまりよろしくないことのように言われる。儒教の影響だろうか。このごろ泣いてばかりいて、と言おうものなら、「まあそんなに泣かないで」というひとはいても、「そうよ、泣きなさい」というひとは少ない。わたしは元々涙腺がゆるく、悲恋小説を読んでいてさえジワリ、ポロリ、というほうだが、確かにある時期泣きまくったあとは、ずいぶん気が晴れた。

そして幸いなことに、医者にぶちまけたころから、薄紙をはぐように、というがまさにそのとおり、劇的な変化とはほど遠いが、少しずつこしずつ、1週間ごとにからだは軽く楽になっていくのが、はっきりとわかりだした。その次の週、そう告げると、あまりの現金さに3人の医者がいっせいに声をあげて笑いだした。

「ほら、長くは続かないって、ぼくが言ったとおりだろう？ ね？」

五章 回復

あとから考えてみれば、体力より先に気力が回復し始めた、ということなのだろうが、どん底状態が1カ月近く続いたころ、「もうたくさんだ」と思い始めた。家に逼塞（ひっそく）して、精神的に死んでいるのも同様な状態から、どうにかして脱け出さねばならない、と思い始めたのである。

ちょうど、近所の音楽店からレンタルピアノの代金を払ってくれと催促の電話がかかってきた。横着を決めこんで、8月分から払ってなかったのだ。日本で子どもにピアノを習わせると、何年続くかわからなくても、中古だろうが電子ピアノだろうが、でかくて値の張る楽器を買わなくてはしようがないが、ここでは月いくらでレンタルができるので、引っ越しするうえでもまことに重宝である。会社が引っ越し代を出してくれるといってもピアノの移動代金は個人持ちだから。

やっこらさと着替え（これがけっこう面倒くさい）、車を出し、駐車場からよちよちと歩いていくと、店につくころにはもう足の裏が耐え難いほどジンジンしている。カウンター式のレジの前に座りこんで、払いに来たよ、と言うと顔なじみの親父が帳面を出してきた。

「はい、月7万リラで3カ月21万ね」

7万リラは円に換算すると4千円くらいにあたるが、食料品や衣類の安さを考えると、生活実感としては6千円か7千円くらいではないか。

「え？ 去年は月6万じゃなかった？」

「そうだった？ ちょっと待ってね。去年の契約書は……あ、確かに奥さんの言うとおりの、去年は6万でした」

「どうして上がるの。7万は出さないわ」

値上げするにしたってなんの予告も説明もなしでは、納得がいかない。わたしはむかつ腹をたてた。

「そりゃ奥さん、これはわたしが決めることではない、ピアノの会社が決め

ることで」

「おかしいわ、そんなの。ピアノの値段はものの良し悪しと新しいか古いかで決まるのよ。毎年ピアノは古くなっていくでしょう、あなたこれを今年新しく貸すなら2年前と同じ値段はとれないわよ。去年より価値が下がるものにわたしが去年以上のお金を出す理屈はない」

「でも奥さん、この値段は元々奥さんのために特別サービスしてあったんですよ。6万は最低値段です」

「バカなことをおっしゃい。わたしは2年前ここで借りることに決める前、ミラノの楽器店にも値段を聞いているのよ。あそこでは月4万が最低だった」

「わかりました……けど無理ですよ」

「じゃ月1万の値上げをせめて半分にしなさい。5千なら払うわ」

「は……5千、ま、いいですよ。負けときましょう。月6万5千リラですね」

フンッ、となおも鼻息荒く楽器店を出て歩きながら、イタリアに来て丸3年が過ぎたが、値切ったのは初めてではなかろうか、と苦笑いが湧（わ）いてきた。なんといってもだまされ、ボラレたのが、1回や2回ではすまない。特に車のディーラー、車の修理業者、美容院、電気の修理業者。

ボラレ初めはイタリアにきて直（じき）に6人乗りの車を中古で買ったときだ。ディーラーの親父は最初、車の引き渡し時に代金200万リラの半分で現金で払ってくれたら、残りの金はクリスマスでいいと言っていたのに、二度目に行ったら代金は230万に上がり、しかも現金一括払いを要求したのである。この日本人はこの車をのどから手が出るほど欲しがっている、絶対に買う、と睨（にら）んで足元を見たのだ。やむなくそうしたが、その帰り、ふだん穏やかな夫が一言も口をきかなかった。激怒していたのである。

その後もあちこちでいようにカモにされてきた。日本人だからか、と思ったが、外国人連中と話していると、そうでもない。軒並みやられている。甚（はなは）だしいのはスウェーデン人のレーナの場合で、彼女がアレーゼに引っ越してきたとき、庭が荒れはてていたので庭師を呼んだら、1時間につき5万リラ（約3,500円）を請求された。1日で2万円以上の出費である。知り合いに

こぼすと、

「なんですって、時給 5 万？ そりゃ詐欺師だわ！ いいこと、うちの庭師を紹介してあげる。時給 1 万でそりゃあよく働くわよ」

というわけで、来た新しい庭師は……同じ男だった。

「感激の再会」を果たした 2 人は同時に口をあぐりと開けたが、次の瞬間彼女はこらえきれず笑い転げ、庭師のほうはさすがに恥じたとみえて、見る見るうちにトマトほどに真っ赤っ赤な顔になり、それからは初めの 5 分の 1 の料金でよおしく働きましたとさ。

無知、不用心ではだまされてあたりまえ、ボラレたくなかったら、前もって評判と相場を聞き集めて誰かの紹介で雇い、なおかつ仕事にかかる前に料金を聞いておくことである。

しかし、友だちに「あそこの修理業者なら、だまさないから行きなさい」と勧めるたびに、こういう台詞（せりふ）を吐かなくてはいけないとは、イタリヤはたいした先進国だと思うことである。

断じてこの国は先進国ではないっ！

そう怒鳴ったほうがいっそすっきりする。

フランス人のリディアが夕食を持ってきてくれたとき、ごめんね、遅くなって、娘をカラテに連れて行ったらそこで車が動かなくなったものだから、と息をはずませて謝るので、

「そんなことはいいけど、どこに修理に出した？」とわたしは尋ねた。

「どこってスポーツジムのすぐ隣よ。車が動かないんだから選びようがなかったわ」

「あ、あそこなら大丈夫。ちゃんと修理するし、正直。だまさない。だけどあそこはエンジンやギアなんかのメカだけ修理するのね、車体や電気関係は別の修理業者になるの。あそこが勧めるところには 2 軒とも、絶対、行っちゃダメよ。2 軒ともわたしをだましたわ」

「どうやってだましたのよ？」

「ここに来て2年目のことよ。1軒は事故のあとに車体修理の見積もりを150万リラと言っておいて、できあがったら300万リラと言った。保険屋さんのほうからひとを差し向けてもらったら、300万リラなんて言ってない、30万リラ余計かかるって言っただけだって言うのよ。言い訳までちゃんと用意していたのね。それだっで見積もりより余計かかるなんてまともなところじゃないわ。拳句（あげく）1カ所は修理しなかったのよ。イタリア人の友だちにどうしたらいい？ って聞いたら、そういうときはとにかく怒鳴りつけろ、って2人も言うから、わたし腹をくくって辞書引いて、3日かけて言いたいことを全部決めておいて、近所中に響くような声で怒鳴りあげてやったわ。おかげでイタリア語が格段にうまくなったけど」

「もう1軒は？」

「パワーウインドウが動かなくなったのよ。そしたら小さなモーターごと取り替えたって部品見せてくれたのに、半年後また動かなくなったから、今度は別の修理業者に行ったの。このあいだ修理したばかりなのに、って。そしたら『奥さん、この部品は取り替えてないよ』だって。『そんなバカな』って言うのと、『ほらこれを見てごらんささい、車と同じぐらい古いよ』って素人目にも古そうな枠とモーターを見せるのよ。イタリアは油断できないわ。あなたも気をつけたほうがいいわよ。特に女とみると車のことなんかわからないとなめてくれるから」

これを聞いたリディア、バッテリーの交換に、しょっぱなからぶちかましたという。

「低価格よ、低価格、だいたいこの車たったの100万リラで中古を買ったんだから、高いバッテリーなんかつける気はこれっぽっちもないわよ。それからわたしを外国人と思ってだますんじゃないわよ、いいわね？ わかった!？」

……とてもかなわない。

鬱（うつ）状態を脱するために、わたしはこのリディアに、買い物につきあ

ってくれないかと頼んだ。肉体的にはひとりで車を運転して買い物に行けないわけではない。が、氣力がなかった。こんな勢いのいいのと話していたら、こっちの元氣も出てこようというものではないか。

正解だった。弾（はず）みがついた。

次はコンサートに行きたい。

しかし、ひとに病院に迎えに来てもらったうえに晩ご飯まで持ってきてもらって、自分はコンサートに行こう、とは、いくらずうずうしいわたしでも気がひける。

ちょうど化学療法の前半がすんで、きつい薬はおしまい、次からは副作用のずっと軽い薬を3つ組み合わせて4週間に2回の注射を4サイクル、という後半に入るところだった。薬剤の名前を夫に見せると、うちふたつは夫の会社の製品だと鼻で笑う。初回は血液検査、心電図、レントゲン、診察、注射と時間がかかって、いつごろ終わるかわからない。今まで4回の点滴の際は、いつも誰か友だちが病院まで車で迎えに来てくれていた。恐縮したが、これは必要だった。初めは車内で吐いていたし、嘔吐止めをもらっていても決して気分がいいわけではなく、バスや地下鉄を乗り継ぎ、駅から自分の車を運転して帰れる体調ではとうていなかったからである。しかし次からは副作用は軽いというし、4週間に2回ずつでは頻繁すぎて、頼みにくい。

「大丈夫。ひとりで行ってひとりで帰る」と言うと、助っ人の調整役をしてくれているマルティンが怖い顔をする。

「気に入らないわ、その考え。誰か一緒のほうがいい。化学療法に変わりはないのよ」

「だから最初は亭主に1日休みをとってもらって、行きも帰りも運転してもらおう。で、様子を見て、こりゃダメだと思ったら2回目からお願いするわ。でもその日大丈夫だと自信がもてるようなら、ひとりで帰る。ならいいでしょう？ そりゃあなたたちの親切はありがたいし、必要なときは遠慮せず頼んできた。だけど自分でできることをひとに頼むことはないじゃない？」

「うーん、だめ」太った二重顎をふるわせてマルティンは頑固に首を振る。

「わたし家で待ってるから電話しなさい。地下鉄の駅のマリノ・ドリーノまで迎えに行く」

点滴を受ける際、薬が体内に入ると同時に腕の中の静脈に冷たさを感じる。血管がどこにあるかわかる、今までにない感覚である。そして2、3分後に、薬が脳に達するのがあきらかにわかる。急に思考力が落ち、霞がかかったような、ぼうつとした感じになるのである。同時に、視力にも変化が生じる。見えてはいるのだが、何かを集中して見てただちに理解するのが難しい、といった状況で、看護師にそう言うと、「ワイン飲んだときみたいって言うわね」とニッコリする。まさに酔ったときの感じと同じで、違うのは陽気にもおしゃべりにもならないことだろう。

ついでに言うと、酔っぱらった、というのをイタリア語の標準語ではウブリアーコ、女の場合はウブリアーカ、と言うが、ミラノ方言ではチュッコ、チュッカ、ひとによってはシュッコみたいに言う。フランス語に近い。それを知ったのは、イタリア語学校でファッションの記事を読み、話し合ったときに、わたしがちょうどはいていた紫色のパンツは今の流行色ね、という話になったときである。1999年だったか。すると、ミラノっ子の先生がクツクツ笑いながら、ミラノ方言でその色はトゥラ・ス・ディ・チュックって言うのよ、と教える。意味は、なんと、「酔っぱらいのゲロの色」。

とたんに隣の日本人生徒は頭をゴンと机にぶつけた。あまりに「美しい」表現の仕方にずっこけたのだ。しかしわたしは先生の説明がわからなかった。先生は、トゥラ・スはティラーレ・スウということね、と言いながら手を腹から口へ向けて持ち上げて見せた。吐く、と言いたかったらしい。しかしわたしの知っていたティラーレ・スウは、ティラミスというケーキの名からだが、引き上げる、つまり気分をひきたてる、という意味でしかなかった。ティラ・ミ・スウというのは、わたしの気分を明るくする、元気づける、という意味なのである。美味しいお菓子の名前らしい。

「チュックはウブリアーコね」と先生は付け加えた。これはわかった。しかしまさかゲロの色とは。

わからなかったもうひとつの理由は、日本では、少なくともわたしがよく飲み歩いて酔っぱらっていた 20 年前ごろは、あまり赤ワインを飲まずビールや日本酒のほうが多かったから、反吐（へど）もイタリアでのようなワイン色ではなく、ベージュ色だったからである。授業が終わってから隣の生徒に尋ねなおすと、彼は正直に言うのが気がひけたのだろう、「酔っぱらいの色っていうことだよ」とニヤリとするだけである。

あとでイタリア人に説明してもらって、わたしは吹き出しながら愕然とし、そして先生の心理を疑った。わたしの好きな色だって知っててあんなこと言うなんて、あの先生わたしに恨みでもあるのかしら？

さて、点滴のあとのこの「ウブリアーカ」な状態では運転は少々危険である。が、幸いなことに、長くは続かなかった。初日は夫の運転で中華街まで行き、米の麺がスープに入ったお気に入りの料理を食べ、中華スーパーであれこれ買い物したら、もうすっきりしていて、思考力も視力も戻っていた。これなら次の週からは、病院で少し休んで「酔いをさました」あと、自分ひとりでバスと地下鉄、自動車を乗り継いで帰れる。

マルティンはあくまで駅まで迎えに出ると言い張っていたので、わたしは病院から電話をした。「今日は亭主の都合が悪くて、朝わたしが運転して駅まで出たの。このあいだの調子だと大丈夫と思うから、あなた迎えに来ないでね」。そして帰ってから、「大丈夫だったわよ、安心してね」と再度電話をしておいた。

その日わたしは病院の帰りに地下鉄の駅間をひとつ分歩き、半年ぶりにミラノの都心を見たのだった。ドゥオモと呼ばれる大聖堂はいつ見ても美しく、荘厳で見るものを圧倒する。そのまわりの建物も浮き彫りをほどこして飾り立てたものばかりで、見ていると生き返ったような気になってくる。まだ足ジンジンがひどくて歩くのは少々難儀で、何度も立ち止まって休まねばならなかったが、観光案内所まで行ってコンサート情報をどうにか手に入れた。さらにもうひとふんばり、地下鉄を乗り換えて日本領事館まで行った。9 月に母が亡くなったあと、相続のために「サイン証明書」なるものが要ったのである。体力が

ないから、地下鉄の階段を登るのがきつい。貧血でもある。階段途中で何度も立ち止まって休んだ。

相続とは人生で一度か二度しか経験しまい。まして海外にいるあいだに起こることはめったにないから、この「サイン証明書」がどんなものかわかるまでに、かなりの時間がかかった。実際は、日本の実印に伴う印鑑証明書の代わりとして、領事館員の目の前でわたしが自分の名前をサイン(署名)として書き、領事館員がそれを本人の自筆にまちがいなし、と証明する文書だった。が、日本の家族から説明を聞いてわけがわからなかったあとにわたしが領事館に電話で尋ねても、説明がいきとどかず、やっぱり何だかよくわからなかった。わたしは誤解をし、さらに日本に問い合わせたがそれでも正確なことが理解できず、しばらくのあいだ混乱していた。それに領事館が、当日には出せないこと、1通2千円近い料金が必要なことなどを告げてくれたのは4度目の電話でのことだった。不親切きわまる。

行ってさらに腹をたてたのは、住所の書き方を「あなたそれは違ってます、ミラノ県アレーゼ市と書くんです。ミラノ市ではありません」と窓口の係員が頭ごなしに言う言い方だった。20年前ならともかく、今では田舎の役場でももう少しマシな口をきく。

わたしたちが初めて記入する書式がわからないのはあたりまえで、それを、学校の先生がものわかりの悪い生徒を叱るように非難される筋あいはない。「あ、そこはこういうふうに書いてください」と言うのが、行儀を心得た大人というものであろう。ましてや係員はその事務手続きで給料をもらっているのである。その給料はどこからくるのか。それに年内に取りに来いだの、もし年を越してもエウロ(英語ではユーロ)でなくリラで払え、それも釣銭のいらないように持ってこいだの、いちいちやかましい。こっちにはこっちの都合がある。帰って夫に話すと、「外務省の人間くらい威張っているやつはいないね」とやっぱり言う。「外国で暮らす個々の日本人を大事にする、って考えはアイツらの頭にないんだよ。いつも顔が本国に向いてる」

あんまり頭にきたから、わたしは領事館長ならびに全館員様あてに手紙を書

いてやろうかと思った。「あなたがたは、わたしたちの税金から給料をもらっておられる『公僕』、つまりわたしたちのために働いてくださる召使いのような存在であります。しかし、今のあなたがたは威張っていて、わたしたちには不愉快です。『お客様は神様』という民間の店や会社を見習って、もっとわたしたち利用者を主体に考え、配慮がいきとどき、しかも下手にでた、わたしたちの気持ちを傷つけないような対応をされることを、切に希望します」

夫に言うと、「そんなの握りつぶされるだけだよ。それより日本人会報に書いたほうがいい」と笑って断言された。

よっしゃ、書いてやる。

ちょうど間（ま）のいいことに、この「ミラノで乳がん切りました」はタイトルが多少違うが、当時、北イタリア日本人会の毎月の会報に連載中だった。

日本人会の編集長はしたたかで、まずこの原稿を領事館に持って行って領事に見せ、「あなたにはまあ一応見せますが、失礼ですから実際には会報に載（の）せません」としゃあしゃあとやってのけた。領事は「かまいませんよ、どうぞ載せてください」と言ったので、問題なく活字にしたのだと、あとで編集長の奥さんから聞いた。そしてその回の会報の発行後、さほど親しくない2人の日本人から、よくぞ書いてくれた、とわたしに感謝と激励の電話がかかってきた。領事館にはひとり威張りくさった「お局（つぼね）様」がいて、みんな腹をたてている、これで溜飲（りゅういん）が下がったと言うのである。意外な反響だった。

ところでコンサート情報は、観光案内所ではあまり手に入らなかった。それより国際クラブを通じて手に入れた「Hello Milano（ハロー・ミラノ）」という月間情報誌のようなもののほうが役に立った。わたしがクラシック音楽に興味をもち始めたのは4人の子を産んでからのことで、あまり知識はない。日本の田舎に戻ったら、とてもコンサートに行けないどころかロクに開かれてもいない、行けるのはミラノにいるあいだだけだ、という思いがあるから、2年ほど前から手当たりしだいに行っていると、だんだん自分の好みがわかってきた。

元々「バッハ馬鹿」じゃないかと自分で思うくらい、バッハの音楽はわたしの心の中心にまっすぐに入ってきて琴線（きんせん）を揺さぶり、よくもまあ200年前に死んだドイツの音楽家が、わたしの魂のありかを正確に知っていたものだと思うほど、わたしはヨハン・セバスチアン・バッハの音楽に惚れているのだが、なかでも気に入ったのはカンタータという種類の、楽器と声の混ざった宗教曲だった。これは1年の教会行事のあれこれのためにバッハが何年もかけて作曲し、実際の演奏も指揮したもので、約200曲が残っている。これにまた、わたしの大好きなオーボエがけっこう入っているのだ。

オーボエというのはきわめてマイナーな、あまりひとに知られていない楽器である。クラリネットによく似た木管楽器、つまり縦（たて）笛の一種で、わたしの通う音楽学院の院長夫人で事務をしているおばあちゃんに言わせると、「世界で一番美しい音を出す楽器は人間のからだ、その『声』に一番近いのはオーボエ」となる。

わたしはそのオーボエの甘くもの悲しい音色に、1995年アメリカにいる時分に魅せられた。当時8歳と6歳の子を小学校に、4歳ともうじき2歳の子を託児所に送りこみ、英語で英語を習う一生一度の機会だろうと公立短大にとびこんだのだが、好きでとった文化人類学のレポートや、創作の短編小説や詩を外国語で書くのは、このうえなく楽しく、同時に芯（しん）の疲れる作業だった。短大からの帰り、車の中でロック並みの大音量でクラシックのラジオを流す。疲れた脳ミソの中を、川の水がゆったりと流れるように音楽が通り抜け、凝（こ）りをほぐしてくれる。「この曲はいいなあ」と思うたび、バッハだった。しかし「この音色はいいなあ」と思う楽器の名を、数カ月間わたしは知らなかった。知らないまま、好きだった。

オーボエだと知ったのは、翌年日本に帰ってからである。いつか、この楽器が自分でも吹けるようになったらいいなあ。歳をとってから楽器をやるのもいいじゃないか、人生が豊かになって。その思いをかなえようと決心したのは、それまで予想もしていなかったイタリア、しかもオペラの盛んなミラノに住むことになったからだった。これだから人生はわからない。楽しい。アメリカに

住んだことでさえ、実際に行く半年前までは夢にも思わないことだった。

それでも、慣れない土地ではどこに先生がいるかわからない。娘のピアノの先生から聞いて役場に行き、次に図書館に行き、それから公立学校に行って尋ね、最後に隣町の音楽学校にたどり着くまで、途中勇気がなくて逡巡（しゅんじゅん）し、何カ月かかかった。習いだしたら若い先生のお師匠さんが昔スカラ座で吹いていた、という古い、しょっちゅうあちこち故障して音が出なくなる楽器を貸してもらい、おぼつかないイタリア語でわからないところは、先生が吹いてみせてわたしにわからせ、1日1時間をめどに家でプープー吹いた。初めは吹き始めるたびに猫が戸口の傍へ行き、外へ出せとせがんだのは、猫にも音の良し悪しがわかったのだろうか。

そうして、めったにはないオーボエのコンサートにもできるだけ通った。その、わたしの魂を潤してくれるコンサートに、闘病生活に入ってからずっと行っていなかったのだ。わたしの中には飢えと渇きがあった。

どうしても行きたかった。

あくる日に寝こんだとしても。

ドゥオモの近くの教会の一室で、バロック音楽のクリスマス曲の合唱を、室内楽程度の楽器つきでやるというので、わたしが行きたいと言うと夫が俺も行く、と言う。ふだんクラシック音楽に関心のあるひとではないのでわたしがいぶかると、彼は、体調が完全でないあんたをひとりで出すわけには行かない、家で心配しているよりはついて行くほうが安心だ、と言う。優しいひとだ。わたしがやりたがることをやめておけと言うことのまずない、きわめて寛容なひとでもある。もっとも外国暮らしをすると、「なんでもやってみてやろう」式の好奇心に馬力のかいモーターがついたようなわたしは、伴侶としてすごく便利らしく、店や修理業者との交渉はみなわたしまかせで、本人は家でのほほんとしている。ミラノ市内だって、わたしは道を知っているし、地図を片手にどこでも怖（お）じずに運転するが、亭主殿はすごく嫌がる。ま、わたしが今までにさんざん迷って高い授業料を払っただけのことはあるわけだ。

最初にひどく道に迷ったのは、イタリアに住み始めて1週間目だった。夫がミラノ郊外のネルヴィアーノという町の研究所まで初出勤の日で、地下鉄の駅から直通のバスが出ているというから安心してると、1時間ほどして帰ってきた。通勤時間帯をはずれるとバスがなく、タクシーも拾えないから帰ってきた、ここからタクシーを呼んで会社まで行くと言うのである。

タクシー代に1万円はかかりそうな距離だった。そのころは部屋に台所のついたホテルに住んでいたのだが、洗濯機もコインランドリーもなかった。一家6人の衣類を手洗いする余裕がないからパンツまでクリーニングに出していたら、1週間で10万円かかった。手持ちの金はみるみる乏しくなっていく。

わたしは自分がレンタカーを運転して夫を送っていくと言った。

土地勘はゼロ。

無謀の限りである。

行きはよかった。夫がなんとなく方向を理解していたから。

ひとりでの帰りが悲惨だった。とにかく「ミラノ」という表示を頼りに右に曲がり左に曲がりしていたら、気がついたときには信号のない高架道を走っている。

知らずに有料高速道に迷い込んだか!?

ホテルをあわてて出てきたのでわたしは国外免許証（国際免許証）も財布も持っていなかった。出口で料金が払えない。

どうしよう？

心臓はのどのあたりまでせりあがってバックンバックン鳴っている。

しかし、何はともあれ走り続けるほか、ない。

幸い、しばらく行くと一般道になった。あとでわかったが、その高架道は準高速道のようなもので無料だったのだ。

安心して深いふかいため息をついて走っていると、また高架道に乗ってさっき見たのと同じ大きなワインの広告が見えた。途中で道をまちがえて1周し、ご丁寧にもまた同じ高架道に同じ方向から迷い込んだわけである。ゲゲッと思いながら高架道をおりて走っていると、どうも見覚えのある複雑な交差点に出

た。ここで同じまちがいをしたらまた1周高架道を走るハメになる。いくら方向音痴のわたしでもさすがに、同じ方向に曲がってはならないことだけは、わかった。

では、どっちを向いて走るのか？

とりあえず、ここはまっすぐ！

結局、行きは40分だったのに帰りは2時間かかった。どうにかこうにかホテルにたどり着き、ヘトヘトに疲れて足をひきずりながらに部屋に入ると、4人の子がベッドの上でトランポリンよろしくはねまわり、騒ぎまくっている。が、わたしは精魂尽き果てていて、叱るところか一言もしゃべる元気がなく、しばらくはただすわりこんでいた。

その後も、郊外に大きなスーパーがあると聞いて行っては迷い、子どもの同級生の自宅に行くのに迷い、学校に行くのにも病院に行くのにも迷った。そのたびに、「う～ん、ここはどこなんだろう？」「あー、またまちがえた！」「しまった、今アレーゼ行きの標識を通り過ぎた！」と悲鳴をあげていた。でも、どれだけ時間がかかっても、たいてい最後には無事たどり着いた。毎回家にもちゃんと帰れた。そのうち、同じ車に乗っている子どもが「ねえ母さん、ほんとに無事に家に帰れるの？」と不安がって尋ねてきても、「まだ国境を越えてフランスにもスイスにも行ってない。イタリアを走っているから大丈夫！」と答えるようになった。親子して鍛（きた）えられたのである。

さて音楽に話を戻すと、ミラノでのコンサートはたいてい夜の9時から。イタリア人は食べることを大事にするから夕食後ということだろうか。場所は、わたしが行くのは教会が多い。無料のも多い。主催者の負担のしかたによるので、タダなら下手、というわけではないらしい。教会の石や煉瓦づくりの壁はよく音をこだませ、いっそう美しく響かせる。教会によっては、説教壇の後ろに聖歌隊が立つので、ミサの最中に信者からは見えないが、声は天井に昇ってそのまま水平に進み、教会の入り口の壁に沿って、信者の後ろ側から下におりてくる、という音の伝わり方をするとところもあるらしい。建築家もよく心得

ていて、設計のときにそういう配慮をするのだ。まさに千年を越えるカトリックの歴史がなくては演奏の舞台としての教会はなく、わたしの好きな宗教音楽は生まれなかったわけである。

バロックの時代、教会音楽は音の美しさのためではなく、教会のために存在した。聖歌隊で毎週歌っているイタリア人の友だちによると、歌は全部祈りの歌だから、わたしたちは歌いながら祈っていることになるのよ、と言う。ただの歌ではないのだ。

わたし自身にキリスト教の信仰はない。仏教よりは自然信仰の気のある神道のほうにより親しみを感じており、キリスト教の、万物を創造した神というものがある、という考えにはどうも大きな抵抗がある。この世は作られたものではなく、在（あ）るものではないかという感じがするのだ。また、よく言われることだが、ダーウィンの進化論は聖書の天地創造とは違っているじゃないか、とも思う。それをイタリア人に言うと、

「それは昔は科学が発達してなくて、知識がなかったんだからしょうがないよ。でもね、この広～い宇宙の中で生命がいるとわかっているのは地球だけだよ。温度だとか酸素だとか水だとか、ものすごい偶然の積み重ねが、たまたまここで、ここだけで起こったから、生命が生まれ、わたしたちがいるんだよね？」と言う。

「で？」

「それはほんとうに偶然なんだろうか。偶然というにはできすぎじゃないかねえ。むしろ、何者かの意思が働いてそうなったと考えるほうが、納得がいかないか？ つまり神があえて、そう創ったんだよ」

はあ。そうか、ねえ？

しかし、人間を超越し、世界の上に漂っているがごとき、なんらかの意思を持つような持たないような「何か」が存在する、ような気はするし、何人かの友だちから、「毎日お祈りするときに、マドカ、あなたのことも付け加えているのよ。神様に、あなたがよくなるように祈っているから」と聞くと、まことにありがたい話で、苦しいときの神頼みではないが、信仰をもち信仰に支えられ

て暮らすのは決して悪いこととは思えない。

インドネシア人のラニーなどは、がんにかかったわたしのために何人か友人を招き、自宅でわざわざ昼食会を開いてくれた。食べる前には「みんなで祈りましょう」と声をかけ、「天の神様、今わたしたちの友人のマドカががんと闘っています」から始まって最後は「アーメン」で締めくくった。わたしはこういう経験が初めてで、とまどいがなかったとは言わないが、それ以上になんとも説明できない感動があった。ラニーの信仰と友情には、ひどく純粋なものをわたしは感じた。信仰にはこんないいところがあるのに、どうして日本人は「心の弱い人だけが宗教にハマる」という考え方をするのだろうか？ ひとはみなどこかで「迷える子羊」ではないか？

キリスト教に対する第2の疑問点は、キリストは人間の罪を救うために父である神から遣（つか）わされ、人間のために十字架にかかって果てた、というところである。その犠牲精神には頭が下がるが、なんというかあまりに高潔過ぎてずっと受け入れがたいものがある。それよりも、わたしの琴線（きんせん）に触れるのは罪と赦（ゆる）しの考えかたである。どうもわたしの中で、昔自分のおかした罪に対する罪悪感は何年がたっても消えないらしく、どこかで赦されたいと思っているらしい。キリスト教の歌や音楽があれば異教徒のわたしの心を動かすのは、「祈り」と「罪」と「赦し」ではないかという気がする。

しかしその夜のコンサートは、イタリアでは珍しいほどのハズレだった。バイオリンも、何人もの独唱も、あちこちで音はずしてくれた。素人に毛が生えたような、というか毛も生えていないようなレベルだった。しかも満席で立ちづめだったので、体力の衰えた身にはきつかった。それでも、生の楽器の音は美しく、わたしの心を潤してくれた。

もうひとつ、サン・マルコ教会でのバッハの「クリスマス・オラトリオ」という合唱・独唱つきの器楽曲は、音楽には縁のない夫でさえ「絶品だね」というすばらしいできだった。わたしの好きな楽器や演奏者がよく見える祭壇わきの席で、隙間風が吹き込んで寒いには閉口したが、ドイツから来たというソ

プラノが見事だったうえに、途中で合唱隊から女性がひとり抜けて壁際に立ち、ソプラノの独唱者が一小節だけ「キリエ……」と歌うと、まるでこだまが響くように、一拍おいて同じ澄んだ声質でそれを繰り返すのである。「きゃーっ、いい！」内心わたしは叫んでいた。

こうして、幸いなことに1月に入ると足ジンジンも薄らぎ、買い物にも出られるようになった。体力が完全に戻ったわけではないので、冬のバーゲンはほとんど逃したが、それでも、夫が飲むビールの1箱10キロが、元のようにスーパーでえいやっとかごに入れられる。どうしようもない疲労感が1週間ごとに減っていく。わたしの故郷で言う、日薬（ひぐすり）という言葉思い出した。ひにちが薬、時間がたてば病気は治る、という意味である。

したがって気持ちも明るくなり、人生が戻ってきた、としみじみ思う。

人生はうつくしい。

その美しさとは、白い霧の中に浮かぶ樹の細い梢や、春の光にきらめく若葉であり、大理石の彫刻に覆われたドウオモや、ミラノの建物の各階ごとに異なる窓枠の装飾であり、妙（たえ）なるバイオリンやオーボエの音であり、また家族の愛情や、異なる国から来たひとびととの友情である。

この先何年生きられるかわからない。しかし最後の日まで、あるいは体力気力の続く限り、わたしは人生を楽しもうとするだろう。今できることを追うだろう。その意味では、何年生きようと変わりはない。誰もいずれは死ぬのだ。あなたも含めて。わたしの好きな作家である池波正太郎も、「明日何が起こるかは、誰にもわからない。唯一確かなのは、誰もがいずれは死ぬ、ということである」と書いている。何年生きられるかわからないゆえに、いっそう人生を楽しもうとする、という点ではわたしは得かもしれない。

もちろん不安が全部消えたわけではない。ときおり思い出したように泣く日がある。けれど、その一方で、生き続けている喜びが消えるわけでもない。5年

生存率 71%という数字におびえているころ、このイタリアだけでも何千人とい
るはずの、乳がん患者のことを思った。あのひとたちは、泣かなかっただろ
うか。恐くなかったのだろうか。

泣いたはずである。恐くて、不安だったはずである。運命を怨（うら）んだ
はずである。それでも、10年たったのよ、というひとと病院で話をした。15年
前だったわ、取ったのは、というひともいた。そのひとたちは、恐怖や不安と
同居しながら、その10年、15年を生き抜いてきたのだ。

特別なひとびとは思われぬ。ごく普通のひとびとである。

「マドカ、わたしもよ」と、何人のひとたちがわたしに言ったろうか。子ど
もの学校の元の担任の先生からはあたたかい励ましの手紙をもらった。彼女は
20代と40代と2回、手術と化学療法を繰り返し、今は50代であろう。だいた
い1割くらいの割合で、乳がん患者は両方の乳房にがんができる。わたしにも、
数年後に左の乳房も取り去らなければいけない可能性があるのだ。

母の葬儀で20数年ぶりに会ったところは、元々小柄なひとだったが、そのま
ま可愛らしく歳をとっていた。「まどかちゃん、わたしもよ」と言われて何がわ
たしもかと思ったら、彼女は可憐な中に毅然とした表情で、自分の胸を指差し、
「7年になるわ、わたしもまどかちゃんと同じ病気で手術したのよ」と告げた。
彼女も、不安を抱えて、あるいは越えて、7年の月日を生き抜いてきたのだ。

「まわりのひとには言わないで、でもわたしもよ」と告げた別のイギリス人
は「具合はどう？」とわたしに尋ねた。

「今はいいわ。たくさん泣いたからだと思う」とわたしは答えた。

「ほんとね。わたしもすごく泣いたわ。おかげで今では小さなことでは涙が
出なくなった。そして人生観が変わったわ。明日のことはわからない。確実な
のは今日だけ。だから今日が大事」。彼女は一種の静謐（せいひつ）さ、とでも
いうべき静かな落ち着いた雰囲気をもっていた。その静謐さが、涙が枯れるほ
ど泣いたあとで得られたものであるとは、ある意味壮絶な話である。イタリア
語の家庭教師のパトリツィアはそれを聞いて、「マドカ、代償を払わなければ手
に入らないものがあるのよ」と言った。

わたしは独りではない。仲間がたくさんいる。パトリツィアは、「あなたには夕食を持ってきてくれたりして助けてくれる友だちがたくさんいて、運がいいとひとは言うけれど、でも、死の恐怖を感じ、戦うのはあなただけよね、独りよね。わたしならどうしていいかわからないわ」と一緒に涙を流してくれたが、乳がんが特に白人女性にはありふれた病である、という意味では、わたしは孤独ではない。

そして、何千人という「普通のひとびと」が不安や絶望に耐えられたなら、おそらくわたしにも耐えられるだろう、と思う。わたしは、そのひとたちと同じように、3年先か、30年先かまで、再発や転移があるにしろなにしろ、生きていこう。

繰り返して言う。

人生は美しい。

第六章 副作用

外から帰ってきたわたしを門番さんが呼び止めた。預かっていた小包を渡してくれたあと、わたしの具合はどうかと尋ねる。彼女自身は50歳代だろう、1年ちょっと前に旦那さんをはがんで亡くしている。わたしたちが引っ越してきた4年前にはすでに、旦那さんは咽頭だか甲状腺だかのがんの手術を終えたあとで、旦那さんに代わって彼女が門番を勤めていた。

葬式が終わったあとで知ったわたしは、驚いて悔やみに行った。といってもここで金を包んだり仏壇を拜んだりする習慣はないから、もう門番の仕事を再開していた彼女のところに立ち寄って、まことにこのたびは……と言っただけである。ありがとう、と言いながら彼女の目には涙が新しく浮かんできていた。

去年わたしが化学療法で具合が悪いく所、夫と腕を組んで、おそろしくゆっくりと歩いて市場に行くのを見て、どうしたの、ころんだのか、と尋ねられた。ううん、乳がんでね、頭もハゲちゃって、ほら、と帽子をもち上げてあっけらかんと告げていたから、彼女はわたしのことは承知している。12月、ほとんど外出できなかったときには、このごろ見かけないけど、どうしてるの、と電話がかかってきたこともある。気づかいが嬉しかった。シルヴィアもそうだが、身内にがん患者がいると、仲間意識と連帯感が生まれる。

「今のわたしは手術をひかえていて、体調はいいのよ、あなたは？」と尋ねかえすと、

「わたしはいまだに亭主が死んだのが辛くて」

「まあ、そう。わたしの母も去年亡くなって、父はいまだにしょっちゅう泣いてるみたい。でもそれはそれだけいい伴侶であったということだから、ある意味では幸せなことだと思うわ」

「わたしは幸せじゃない。悲しくてたまらない。ほかの年寄りを見ると、どうしてあのひとたちは生きているのに、わたしの亭主は逝（い）ってしまったのだろうかと思うの。すべては神様のおぼしめしなのだけどね」

神様のおぼしめし。

イタリア語では神の意思だと言う。わたしは特に神を信じているわけではないけれども、わたしの人生がわたしの自由にならない、という意味では同じである。

運命がわたしの手にはない。

今まで、自分の人生は自分で切り開くものだ信じ、欲しいものには手をグイと伸ばして握り取ってきたわたしにとって、人生の根本である生き死にが思いどおりにならないとは皮肉なことである。

しかし、これだけはどうにもならない。

多少の再発予防手段があるだけだ。

夫が禁煙してくれ、と言ったときにはうんと言わなかったわたしも、続けて2人の友人にやめろと言われて、前期の化学療法が終わったあとで体調がよくなってからは4カ月吸っていない。折りに触れて、

吸いたいなあ……

と思うがなんとかこらえている。たぶん慣れれば平気になるだろう。これで肺がんの可能性は多少減る。

化学療法の効果は、驚くことに、わずか30%程度だという。がんの手術のあとで化学療法を受けた100人と受けなかった100人を比べると、受けたグループの中でがんが再発したのは、受けなかったグループより30人だけ少なかったということである。ほんとうか、と言いたくなるが、がんの治療薬を開発している人間が言うのだから確かだろう。ゲンナリしていると、それでも他の治療法に比べれば高いのだと言う。

そこへ、その夫がある日何やら英語の文献を持って帰ってふんふんと読んでおいて、おい、毎日茶を10杯飲め、化学療法後の再発予防に効果があるそうだと、言う。埼玉大学かどこかの研究だった。

「へ？ 茶って緑茶？ 紅茶じゃダメなの？ コーヒーは？」

「紅茶は効かない。コーヒーは害にしかならない」

「ほうじ茶は？ 麦茶は？」

「わかっているのは緑茶だけ」

「1日10杯を毎日飲めって言うの？ ちょっとできそうにはないわねえ」

「でも副作用はないよ。トイレに行く回数が増えるくらいかね」

「はあ。確かに副作用がないってのはいいわねえ。で、どのくらい効くの？」

「この資料によると30%」

「え。化学療法と同じくらい効くの？ これは……試してみる価値があるわねえ」

「だろ」

「ねえ、でも化学療法で30%、お茶で30%、合わせて60%効くっていうわけにはいかないでしょ」

「60%にはならない。けど、何%か増えるのは確実だよ。だいたい先進国の中で、日本だけが例外的に乳がんが少ないんだよ」

「そりゃあんだ、日本以外はみな白人国家でしょ、そのうえ食生活から家から何から習慣がみな違うんだから、同じにはいかないわよ」

「でもね、日本でも最近増えてるのは食生活の欧米化だと言われてるだろう。だからイタリアに来なかったら、あんたもがんにならなかったかもしれないんだけどね。ま、いまさら言ってもしょうがない」

「あら、あんたもそれを考えた？ わたしもよ。でも日本にいたからってがんにならなかったとは言えないし、交通事故でもう死んでたかもしれない。それにイタリアは充分楽しかった。起こったことはもう変えられないわ」

できるのは運命を受け入れることだけである。そしてその中で楽しむこと。わがままなようだが、夫も、「病は気からと言うが、反対に生きたい、という欲望が強ければ体力も増すはずだ」と楽しむことには肯定的である。病気のことばかり考えてクヨクヨしてたって、ロクなことはない。

スキーにも2度行った。

後期の化学療法中で、ずいぶん体調がよくなったがまだ完全ではないというころ、さすがに例年並みにはいかず、滑ったのはふだんの3分の1ほどだろうか。途中でああもうダメだ、くたびれた、と思うとそこで座って休む。それで

もだるさが抜けないうちにはスキー板をはずし、雪の中で寝っころがって暫く（しばらく）休む。そしてまた起き上がって滑るのだが、スキー場で寝ているひとはそういない。大丈夫？ と英語がそうっと頭の上から降ってきたこともある。眼を開けて、ええ大丈夫、ありがとう、疲れたから休んでるだけ、と笑顔で答える。

泊りがけで行ったときには、さすがに半日は宿で横になったり、新聞を読んだりしていた。それくらいなら行かなきゃいいのに、というのが多くの日本人だろうが、スキーの魅力の半分は滑る楽しさで、もう半分は雪山の美しさである。わたしがスキーを始めたのはイタリアに来てから、つまり40歳過ぎてからで、今やスキー板を八の字から平行にしようと努力しているまっ最中だ。滑る、という動作は、ふだんの摩擦に満ちた生活ではありえないか、たまにあっても危険である。直後に痛い尻餅（しりもち）が待っている。それが雪の上では楽しい。快感である。

それに加えてアルプスの美しさ。標高1千メートル、2千メートルと高くなると森林限界を超え、周りには樹木の1本もない岩山が灰色にそそり立つ。角度は45度を越しているのではないか。器具のない人間にはどうてい登れまい。日本ではあまり見たことのない、硬い、厳しい、断崖絶壁である。

そしてゲレンデー面の雪の白。高山特有の空の青。いつも夕方になって降りるたび、ああ下界には戻りたくないなと思う。

このときは、ついでに小さいころからの憧れの消えない城をふたつ見た。フランスから何度も攻めて来たり行ったりしたというアオスタ谷（ヴァルダオスタ州）には100を超す城が残っており、中世の香りが漂う。谷に沿って高速道路を通るたび、城や要塞がひとつ、またひとつと小高い岡の上に見えて、敵が来たとの狼煙（のろし）の知らせが次々と本城に送られるさまを彷彿（ほうふつ）とさせた。

なかでもヴェレスの城は実用一点張りの要塞型で、四角い影が夕焼けの空に黒々と浮かび上がる。ぜひ一度行ってみたいものだとして以前から興味をそそられていた。

ガイドつきで初めて入ってみて、中が暗いのに驚いた。14世紀の技術で頑丈な石造りを選び、外からの攻撃に弱い窓を減らした結果だろう。装飾ひとつない殺風景な大壁、雨水を飲用に貯える仕組み、井戸、狭そうな兵隊用の寝室、食堂、と戦時の不自由な生活がしのばれた。そういえばイタリア語で2段ベッドは「城のベッド」という言い方をする。なぜなのか不思議だったが、王女様用ではなく、兵隊用だったらしい。

そこで、別の、もう少し広い山城を見たときのことを思い出した。大きめの部屋の壁際に、座るのにちょうどいいくらいの高さと奥行きのでっぱりが3メートルかそこら続いていた。窓はないが出窓のような感じである。その、床と平行な面のところどころに丸い板が置いてあって、持ち上げてみると穴が開いていた。はて、と覗（のぞ）いてみると下は崖で、かなり遠くに緑の草が見える。

「何、これ？」と聞いてみると、なんと、トイレだという。兵隊が壁を背にしてズボンを下げて穴の上に座り、排泄物を城の外に出すわけだ。汲み取りの手間が要らない。とはいえ、尻は寒くなかったろうか。わたしが子どものころはポットトイレがあたりまえで、冬の夜に腹をこわして長時間しゃがんでいると、足は疲れるわ、時折下から吹き上げてくる寒風に股は冷えきるわ、でたまらなかったことを思い出す。それに比べれば、こっちのほうが外気にさらされる領域は小さいけれど。そしてここでは何で尻を拭いていたのだろう？ 紙は貴重品だったはずだから、干し草かな。

それに、トイレが個室でないのが不思議だ。他人から見えるところで用を足していたわけ？ そういえば、レマルクの『西部戦線異状なし』でも、戦争状態でないときに何人か若い兵隊が便座を外に持ち出し、野原で気持ちよく用を足す、というシーンがあったような気がする。そのときも、仲間内とはいえ若い男というのは平気で人前に尻その他を出すのか、「連れション」ということばがあるくらいだから男は平気なのだろうか、と女子高に通っていたわたしはずいぶん不思議に思った記憶がある。

城のガイドに「日本ではある時期から人間の糞尿を肥料として使っていたが」

と尋ねると、珍しくいやな顔をして「ヨーロッパには家畜がたくさんいたから、その糞だけで充分だった。人間のは使わない」と言われた。なるほど。

さて、もうひとつは対照的に、妃のための別荘として建てたという豪勢居住型のグレッソネイの城を選んだ。とんがり屋根の塔がついた小宮殿で、子どものころ読んだ童話の舞台さながらである。しかし格子天井や華やかな壁布はわたしには装飾過剰だし、煮炊きの匂いを嫌って別棟に立てさせた厨房から地下通路で食事を運ばせたというエピソードからは、いかにも冷え切ってまずそうな食事が想像され、庶民の理解を超えていた。

楽しかったのはいいが、疲れたせいだろう、膣炎が再発した。尿道口も排尿が終わるときに痛痒（いたがゆ）い。普通なら、錠剤を毎晩膣の中に入れて2、3日で痒みがとれるのだが、今回はとれない。おまけに、今までなら外側が痒かったのに、今回は中が痒い。おそろしく痒い。とても人前ではかけない場所である。どこか痛いのもいけないが、痒いのもいいものではない。1日中痒いのを我慢するのもけっこうくたびれる。

薬局で相談すると、なじみになった店長が説明してくれた。

「化学療法で抵抗力が落ちるからね、口の中が乾くのと一緒に膣の粘膜も乾きやすくなるのよ。でもこのカンジダという菌は、大腸菌がおなかの中にもいるのと同じように、いつも体内にいる菌なのよ。ただ体力が落ちると異常繁殖して痒くなるのね。口の中に出ることもあるのよ」

口の中の粘膜が猛烈に痒くなるなんて、まるでぞっとしない。

普通の薬がだめなら、薬草系の石鹼で洗ってみましょうか、と店長が言う。膣の中も洗うのか、と尋ねるとそうだと答える。少々抵抗があったが、ビデというものがある国である。効果があるものなら、と試してみたが、まったく効かなかった。困り果て、そうだ、がんセンターの医者にご相談する手があった、と行って泣きついてみると、産婦人科の医者にかかれと言われた。無理押しで翌日の予約をとってもらい、行ってみると、錠剤が溶けているので粘膜の様子に正確にわからないがおそらくカンジダであろう、と別の薬を処方してくれた。

錠剤と、中を洗う液状の薬、そしてのみ薬までであった。外から効かないのなら体内から治すしかない。こののみ薬、1週間に1錠、という不思議な処方で、2錠で2千円という高い薬である。

薬といえば、38度以上の熱が出たら、赤血球の数が多いときであれば通常の解熱剤と一緒にこれをのめ、と指定された薬は、アメリカのテロで炭そ菌騒ぎがあったときの薬と同じ代物だと夫が笑った。かなりの種類の感染症に効く強力な薬だったのだ。化学療法ではどうしても免疫機能が大幅に低下する。熱が出てもただの風邪や流感で終わればいいが、肺炎だのなんだの併発したら厄介だから、それを防ぐためである。

この冬のインフルエンザは強力で、例によって4人の子どもたちが次々に罹（かか）り、最後に夫もやられた。年末のことである。8度5分の熱が5日続くという惨状だったが、半病人のわたしが病人の世話を焼くのはまことに行き届かず、夫もそれがわかっているから、ふだんほどには騒がなかった。今までなら彼は「高熱は発汗で冷ます」という信奉の持ち主で、いつも日に4、5回もわたしを呼んでは、汗びっしょりの下着から寝間着まで着替えていた。

その話をあとになってイタリア語学校ですると、

「だけどさあ、おんなじ熱出したって、子どもと亭主とじゃあえらい違いだよねえ」と遠慮のない調子でスウェーデン人が愚痴る。ほかの生徒がどっと笑うのをなんのことかと聞いていると、彼女は続けて

「子どもは熱があったって遊んでるけど……」と言うからわけがわかった。

「亭主ときた日にゃ『もう俺は死ぬう』でしょ？」とわたしがあとを続ける
と

「それぞれ！」

女房連中がいっせいに笑い、先生は唯一の男性生徒に気をつかった。その彼はアメリカインディアンの末裔（まつえい）であるが、反駁（はんぱく）しなかったところを見ると、ご同類らしい。

要は泣き言を言えば「よしよし」と甘やかしてくれるひとがいるかどうかの問題で、女房連中は普通自分で着替えをしたり粥をたいたりしなければしかた

がないから、しょうもない泣き言はくらないだけの話であるが、同じことを南アフリカ人もこぼしていたから、西洋でも東洋でも男には甘えん坊が多いらしい。

インフルエンザは、夫の熱がひいた日の晩からわたしにうつった。一家全滅は結婚以来初めてである。今までなら、自分に熱があるのにぐずる子どもの面倒なんかみるのはたまらない、と思っていたせいか一緒に寝込んだことはなかったのだが、さすがに体力が落ちてはかなわなかった。熱が出ると、きつい。それこそ「もう死ぬんじゃないだろうか」と思う。

台所へ下りてみると亭主殿がかたづけをしてくれているが、わたしがあとで食べようと思っていた残り物は捨ててあるし、休みというのに子どもたちは宿題もせずに1日ぐうたら遊んでばかりいる。病人特有の癩（かん）をたてたわたしがつけつけと文句を言いたてると、病みあがりの身をおしてなんとか動いている哀れな亭主殿は、これでも一生懸命やってるんだよ、とため息をつく。

「おまえが歳をとったら、さぞかし口やかましい婆さんになることだろうな」
運よく婆さんになれるのは、この先がんで死ななかったときだけだと言い返しかけたが、さすがに口から出さずに呑みこんだ。

化学療法の予約があった水曜日、まだ37度の熱があったが予定を遅らせたくなかったので行ってみると、熱があってはだめだと月曜日に延期になった。その月曜日も、白血球の数が少な過ぎると若い医者が2人頭を寄せて何事か相談している。化学療法の常で、白血球の数はとうから標準値を下回っているが、この日は、これ以上下がったら治療が続けられないところまで来ていたのだ。

「今日はなんとかできるけど、来週もっと下がったら困るから、白血球を増やす薬を注射しましょう。自分でやったことある？」

「ないけど、やりかたを教えてくれたらやるわ。でもどうして今日ここでできないの？」

「今日はどうせ化学療法で白血球が死ぬから無駄なのよ。土曜日ぐらいになったら回復するから、そのとき注射すれば次の月曜日には白血球が増える」

というわけで、看護師に皮下注射のやりかたを教わった。薬の種類によって、筋肉注射がいいのと皮下注射がいいのがあるらしい。筋肉注射なら、吐いていたころすでにやりかたを教わっている。嘔吐止めの薬は口からのむより注射したほうが早く効くから自分でやれ、と言われたのだ。

まず手をきれいに洗い、アルコールと綿花を用意する。掃除用に買った工業用アルコールでもいいかと尋ねるとかまわないと言う。綿花は化粧用の拭きとり綿でもティッシュでもいいそうだ。パンツをおろして尻の上のあたりを出し、なんだかよくわからないが長方形の3辺を描くようにして位置を決め、アルコールで皮膚を消毒する。注射器の針の蓋をはずし、薬液のアンプルびんの首をへし折る。昭和レトロの子どもころ、近所の医院で見ていた風景である。液を注射器に吸い込む。そして、針を皮膚に直角に深く突き刺す。ここが肝要で、脂肪層ではダメ、筋肉層に入らなければいけないので、5センチ近くある針の根元まで一気に突き刺せと言う。ゆっくりやるより痛くないと。もし血液が注射器に逆流してきたら、針が血管に入ったということでよくないから、1度抜いて刺し替えるべし。で、ゆっくりとピストンを押して、ハイおしまい。あとはもう一度アルコールで拭くだけ。

フムフムこれならできそうだと、全部ノートに手順を書き留めておいて、帰って亭主にとくとくと話して聞かせると、彼は露骨に顔をしかめた。

「いびせえ」

山口県東部の方言で、可哀そうだとか、気味悪いかいいう意味である。

「どっちよ」

「気味悪いほう」

「何よ、あんたがやるんじゃないじゃない。わたしが自分にやるんだからいいじゃないのさ」

「よくやるね」

「簡単よ。なんてことないわ」

「俺はイヤだ」

元々いい歳をして注射が大嫌いなのだ。この「針恐怖症」は洋の東西を通じ

てなぜか圧倒的に男に多いらしい。

日本で注射が医者だけに許されているのは、麻薬、覚醒剤の乱用を防ぐためだというのが、欧米では別に禁止されてはいない。かといって、誰もが平気でやるわけではないらしい。シルヴィアは「やあだ、わたし絶対看護師の友だちのところへ行ってやってもらう」と断言したし、音楽をやっている友人の話では、歌の先生のところで先生の具合が急に悪くなって、さあ備えつけの薬を注射しなくちゃ、ということがあったそうなの。先生は高齢で、これも高齢の御主人があたふたと近所の獣医を呼びに行った。御主人には注射をする自信がなく、あのひとは注射がうまいから、ということだったらしいが、友人は「なんで獣医なんだろう？ 先生はえらく太っているのだから人間の医者より獣医のほうがいいんだろうか？」と内心疑問に思ったと笑っていた。まさかね。

今回の皮下注射はもっと簡単である。「皮下」というのは脂肪層の中ということで、腹の皮をつまんでおいて、そこへ皮膚と平行にちょっと針を刺す。腹なら4人出産したあとで十分に皮はたるんでいるし、脂肪に不足はない。だいたい身体（からだ）の前だから、尻よりよっぽどやりやすい。

おもしろかった、と喜んでいるわたしは、やっぱり好奇心が人並外れているのだろう。英語には「好奇心は猫をも殺す」(Curiosity can kill a cat.) という諺（ことわざ）があって、口に出してみると（キュリオシティ キャン キル ア キャット）とkの音を単語ごとに重ねるという洒落（しゃれ）っ気が備わっている。わたしはこの諺を地で行く手合いである。つまり、旺盛過ぎる好奇心にトラブルはつきもの。

うーん、いろいろ思い当たるなあ。

ちょうど年が明けたころから、髪の毛がまた生えてきた。化学療法の前期のきつい薬が終わったのは11月6日なので、副作用が抜けるのにざっとふた月かかったわけだ。12月中は、帽子をかぶっていないと頭が寒かった。特に何気なしに外に出ると、冷気がまともに頭皮にしみた。夜も寒いので、かつら屋さんがくれた薄いぴったりした帽子をかぶって寝たこともある。

2月に入って頭全体を1センチほどの髪が覆うと、タンクトップを着たくらいの温かさだった。3月になってもう1センチ伸びると、Tシャツを1枚着たくらい。そしてその後はセーター1枚くらい温かくなった。

化学療法のあとでは髪の質が変わることがあると聞いていたが、確かに前よりずっと柔らかい。先を切っていないせいもあるだろう。赤ん坊の頭のようなものである。自分で自分の頭を撫でて、ひどく触（さわ）り心地がいい。ほら、触ってごらん、と友だちにも強制する。でも、見かけはなんだか男臭くなったようで、ツルツパゲのほうが色っぽかったような気がする。

といって、まさかもう一度剃ろうとは思わないが。初めて寝癖がついたときは、めんどろと思うよりも、よくぞ髪がここまで伸びてくれたとずいぶん嬉しかった。

そして、ハゲになる前には目についていた白髪が、すっかりなくなっている。それまで白髪を気にしたことはなかったのだが、まあ白髪がなくなっても、文句は言う気にはなれない。化学療法にはそんな影響もあるのね、というくらいだ。

眉毛は、何本、と数えられるほどまで抜けて、人相がすっかり悪くなっていた。眉がこれほど顔の印象に響くとは思わなかった。生まれて初めて化粧用の鉛筆を買って描いてみる。難しい。右左がそろわないどころではなく、きれいな曲線にならない。鏡を睨（にら）んで描いては消し、消しては描いてを繰り返す。慣れの問題なのだろうが、きれいな眉が描けるといのはひとつの能力だとしみじみ思った。

どういうわけか、からだ中の毛が抜けたあと、場所によって毛が新しく生えてくる度合いに差があった。ホルモンのせいだろうか。からだ中の毛というのはほんとにからだ中で、患者どうしでたまに笑いあうのだが、手足も、腋（わき）も、股もで、「髪の毛のことは聞いてたけど、アソコまでとはねえ」「ほんとよ、誰も言わないんだもの」「あら、わたし前からどうなるんだろって思った。言いにくいから言わないだけよね」てなもんである。しかし西洋人は手足がわりに毛深く夏は脱毛をするひとが多いので、手間が省けていい、とあるイ

ギリス人は喜んでいた。

もっと手間が省けていいのは頭を洗うときである。顔を洗うのと一緒に石鹸をぬって流せばそれでおしまい、タオルで拭けば2秒で乾く。ドライヤーも要らなければ、朝鏡を見てアラやだ、このボサボサ、ということもない。これは一番の利点だった。ちょっとはいいことがなけりゃね、とこれも患者同士で笑うことである。

かつらは面倒なので、3月くらいから暖かい日は坊主頭で出かけることにした。幸い、女の短髪、坊主頭はここのところイタリアでは流行らしくときどき見かける。わたしにとっても似合っている、とまでは思えないが、ぎょっとしたようにわたしの顔を見たひとは2人しかいなかったの、澄まして歩いている。

ただ、体力が回復せず、やたらと風邪をひくのには閉口した。家の暖房を高めにしているのだが、ちょっと足元が冷えると、背中に寒気がする。計っても熱はないのだが、熱っぽい感じがしてからだがる。週に3日はこの調子で、外出を半分以上とりやめて寝床でぬくぬくしている。それでも、去年のあのどうしようもないほどのしんどさから比べると天国のようだ。それから化学療法の後遺症で抵抗力が落ちているのだからしょうがないのだが、膣炎も尿道口炎も治らない。毎日トイレに行くたび薬を使うのは鬱陶（うっとう）しい。医者は、「しょうがないわね、ずっと薬を続けなさい」と言うだけである。治るまで結局は3月いっぱいかった。

そして、この闘病中ずっと、レストランに行きたいとはついに思わなかった。以前なら「イタリア料理のおいしいの、今まで食べたことのないのが食べたい！」と、亭主や子どもの食べるものを用意しておいてでも、ひとり国際クラブの外食会に行ったものだが、最近はまるで食指が動かない。自分のつくる日本料理のほうがいい。からだの調子が悪いときはやはり食べ慣れたものに限るのだと痛感した。

体調がしゃんとしないあいだ、子どもたちが手伝いをしてくれると助かる。とはいえ、手伝いをさせるのにもおだてたり叱ったり馬力の要ることで、自分

がやるほうが早い、ということも多かったが。10歳の息子は、何日か米をといでくれた。1週間ほど続けたところで、「ええーっ、またぼくう？」とわめく。そこへ8歳の娘が「わたしやる！」。

これ幸いと2階の寝床から、お米は6杯すりきりよ、と指示したまではよかった。

が、「母さん、お釜にご飯が残ってる」と階段の下から娘が言う。

「え、どのくらい？」

「少し」

「じゃいいわよ。そのままお米といでちょうだい」

わたしはひどい無精で、残っている冷やご飯が2粒3粒くらいなら、釜を洗わずにそのまま次の米をとぐ。きれい好き、いやフツのひとでものけぞりかねないやり方だろうが、わたしに言わせれば、冷やご飯も生米（なまごめ）も米に変わりはなく、炊いてしまえばさして違いはわからない。高温で消毒もされる。

しかし、あとでわかったのだが、娘が「少し」と判断した量は茶碗2杯分ほどで、わたしなら「多い」と考える量だった。

娘は母の指示に忠実に従って、その大量の冷やご飯の上に生米を6合入れ、水を入れてといだ。帰ってきた亭主がスイッチを入れる前の炊飯器の蓋を開け、生米にふやけたご飯が混じっているさまに一瞬目を疑い、次の瞬間2階まで聞こえる叫び声をあげた。

1月、多少体調が戻りかけたか、というころ、半年吹かなかったオーボエを試してみた。話にならない。楽器を吹くという作業は肺も心臓もまともでないと、とうていできることではない。元気だったころでさえ、息が続かず目の前が真っ白になるのはしょっちゅうだった。

何か別の音楽が要る。

ラジオはイタリアだけあって、一日中クラシックだけを流す、それも作曲者と演奏者を告げるだけでほかの能書きを言わない局があり、別にCDもあるけ

れども、聞くだけでなく、自分でやりたい。

ふと、娘2人が弾いているピアノはどうだろうかと思った。わたしが習っていたのは30年以上前で、初歩のバイエルが終わってやめた口だが、暇だけはふんだんにある今、時間さえかければなんとか弾けるようになるのではないか。ピアノの音自体はあまり好きではないが、この際ぜいたくは言えない。

バッハが弾きたい。

家に来てくれる娘の先生に頼むと、呆れ顔ではあったが、指導を引き受けてくれた。

とはいえ、当然指は動かない。先生は速く弾くな、ゆっくり、もっとゆっくり、と言う。1音1音強さがまちまちで、強く弾くとボロがでるから弱く弾け、と。そしてわたしは楽譜を読み慣れていないから、両手で初めて弾くと、1曲終わるのに30分かかる。先生が小学校の高学年で弾いていた曲だそうで、わたしには実は程度が高過ぎる。先生が融通のきくひとだから引き受けてくれたのだろう。

それでも、このインヴェンションという、ヨハン・セバスチアン・バッハが自分の9人の子の中で長男にピアノを教えるために作曲したシリーズは、たとえばようもなくきれいなのである。よくあるような右手が旋律で左手が伴奏という形式ではなく、右手のメロディがきれいで左手のメロディもきれい、両方一緒に弾くともっときれい、という素人（しろうと）には思いつきもしない「二声」とか「対位法」とか呼ばれる形式なのだが、弾いていると、へたでもつつかえつつかえでも、心がやすらぐ。おぼつかないピアノの音と一緒に、自分の心も共振している感じがある。

やめられない。

癒（いや）される。

どうかすると日に3時間ほども弾いている。うまいことにオーボエと違って、いくら弾いても疲れな。ヒーリングとか癒しの音楽とかいう言い方を聞くことがあるが、わたしにはバッハこそがそれであった。

去年わたしが国際クラブでやっていたお出かけ行事係を、今年はマルティンがやっている。冬のさなかに、彼女はダ・ヴィンチの「最後の晚餐」鑑賞を組んだ。世界的な名画である。何年か修復のため見られなかった壁画が、今年から予約人数限定で見られる。

わたしは実は、見に行く気がなかった。有名過ぎるからである。日本人のミラノツアーならまずまちがいなく入っているのではないか。こういうのをヘソ曲がりと言うのだろう。が、あと1年でたぶん帰国、という予定が見えてくると、マルティンが「マドカのためにこの絵を選んだのよ」と誘ってくれていることだし、ま、行ってみるか、という気になってきた。

行ってみて、実によかった。

修道院のただっ広い1室の白壁の上のほうに、キリストが13人の弟子に囲まれて食卓についている絵が、直接描かれている。イタリア訛（なま）りのきつい英語のガイドの説明を聞き、近くからイエスの顔をじっと眺めると、そこには自分の死が近いことをあきらかに知る哀しさと、苦悩の末に受け入れたと見える諦め、そして弟子が自分を裏切ることを確信し、しかもそれを赦（ゆる）している慈悲の心が充ちている。

イエスよ、どうやってあなたは自分の死を受け容れたのか。わたしは彼に問うた。わたしはいやだ。あなたの顔は、あなたが死を承諾していることを示している。どうして死ぬことを納得できるのか。死んだらおしまいではないか。そのうえ、あなたは弟子としてあなたが教え信頼したひとが、あなたを裏切り、あなたを死なせることを、はっきり知っている。なぜそれが赦せるのか。

聖書によれば、イエスは神の子でありながら人間のからだと心を持った、いわば矛盾した存在である。また、人類を救うという父である神の意思を全うするために、すすんで十字架にかかったという、「ありえない」ほどの犠牲精神に満ちたひとでもあった。しかし、そこに苦しみがなかったわけではない。

その苦しみ、哀しみと諦め、愛と赦しを、わたしはひしひしと感じた。がんにかかり「死」が身近なものになったわたしにとって、死を前にしたイエスの表情は他人事とは思えず、しかも、「救世主」として、ただの人間を超えた崇高

な「愛と赦し」を感じさせる。わたしは涙をこらえた。

何歩か後ろに下がって壁画全体を眺めると、美術の教科書で遠近法のお手本として示される、遠くのある1点に視点が収斂（しゅうれん）していき、奥行きを感じさせる見事な遠近法である。またイエスのすぐそばの弟子は、どう見ても長髪の優しげな女性にしか見えない。裏切り者を刺し殺そうと短剣を持っている弟子、腕が異様に長く見える弟子、どれがユダなのだろうか、どれがペテロとかヨハネとかという弟子なのだろうか、と制限時間いっぱい見ても飽きず、さすが世界に誇る名画であった。

化学療法の終わりに、もう一度レントゲン写真をとった。腫瘍は、まったく小さくなっていなかった。しかたがない。レントゲン科の医者は、周囲は変わらなくても厚みが減ったかもしれないし、そうでなくても、中は空洞ができているのかもしれないね、と言うが、わたしには同じことである。手術は「右乳房とわきの下のリンパ節全摘出」そして「乳房再建」となる。

今まで化学療法は腫瘍科医の担当だったが、手術は外科医が担当で、その外科医が来て説明をする。以前ひとに聞いたときには、乳房の中は全部取っても、皮膚は多少たるませて残しておくような話だったが、今日面と向かって尋ねてみると、中を全部取り去るのは同じだが、乳首を含め、眼の格好というかアーモンド型に皮膚を取り去り、両端を縫い合わせると言う。そして乳房を取った同じ日に引き続いて、大胸筋の下に袋を入れ、中に生理食塩水を入れる。この生理食塩水の量をしだいに増やして行ってふくらみをつくり、皮膚を伸ばす。9カ月後、落ち着いたところで袋をシリコンと入れ替える。

乳首は？ と尋ねると、彼は紙の端をちよいとちぎってしわを寄せてみせ、

「あとでこうやって縫い縮めるんだよ」

「色は？」

「そのあとでつけるよ」

「入れ墨みたいに？」

「そのとおり」

「日本じゃ色が似ている股の皮膚を使うなんて読んだこともあるけど」

「ああ、昔はね。今はそんなことはしない」

ふうん、とうなずいておいて、わたしはかねてからの疑問を晴らすことにした。

「ねえ、先生。歳をとるとお乳は自然に小さくなってブランブランするようになるでしょ？」

垂れる、と言いたかったのだがイタリア語でなんと言うかわからなかったから、わたしは「振り子のように揺れる」という意味のことばを使っていた。奥のほうをチラリと見ると、うつむいた腫瘍科の若い女医の顔が真っ赤になっている。声を殺して笑っているのだ。

「でも人工のお乳はいつまでたってもブランブランしないわよね？」

「するとシニョーラ（奥さん）、なにかね？」

髭（ひげ）をはやした中年の外科医は、くりくりした眼をわたしの顔にじっと据えた。まるで世界に10匹としない珍獣を見るような目つきである。

「片っぱの乳は上、もう1個は下、というのが気に入らんわけかね」

「そう。気に入くない」

「じゃもう一方にもシリコン入れりゃいい」

「へっ？」

何を好きこのんで健康な胸まで切り貼りしなければいけないか。女優志願ではあるまいし、40過ぎて豊胸手術をするなんて。

しかし、ここイタリアでわたしと同様に乳がんでオッパイを全摘、再建した日本人はほっそりしたひとだったが、形成外科医に、反対側の胸も大きくしましょ、ね、あなたをもっときれいにしてあげるから、と執拗に勧められ、とうとう最後にうん、と言ってしまい、もう一方にもシリコンを入れた。が、あとになって縫い目から水分が出てきた。あわてて医者に行ったら、拒否反応をおこしたんだね、と再手術になったそうなの。

めんどくさくなる可能性はある。

でも、「もっときれいになる」、ね。

ふむ。

しだいにわたしは、もう片方の乳房にもシリコンを入れて、左右のつりあいをとることを受け入れ始めた。だいたい乳房の再建を決意したのは、ひとえに自分のためである。パッドを入れればいいではないか、温泉でひとに見られるのがいやなのか、なにをいい歳をして、と怪訝（けげん）そうに尋ねられたこともあるが、人目はわたしには問題ではない。それよりも、風呂に入るたび、着替えをするたび、片方の乳房がない、というのは、たとえようもなくさびしいことに思われたのだ。

わたしは「おんな」である。おんなである、ということは、わたしの中の大切な部分である。それはイタリアではあたりまえだが、日本では必ずしもそうでない。司馬遼太郎か誰かも言っていたことだと思うが、儒教の影響であろう。儒教は、男女の愛情というものをまったく重視していない。親への孝行、自分が仕（つか）えるひとへの忠義、恩、そして友情とは少し違うようだが同等のひととの信頼関係は大切であるが、夫婦間の愛情は、特に価値があるとも美しいとも言わない。もちろん人情としてはあるわけだが、伝統的にはいわば下賤な感情として捕えられてはいないか。恋愛は町人の文化ではあっても、武士の文化ではなかった。おとことおんなのあいだは、尊いものだという扱いはない。したがって、男がおとこであり女がおんなであり続けることも、さほど重視されない。日本で昔から聞く、長年連れ添った夫婦は積極的に愛情を表すものではなく、互いに空気に近い、つまりなければ困るがあってあたりまえで、ふだんは意識しない存在に近づく、というのは、西洋人には理解のしにくい感情である。

服装からしても、着物はいわば隠す装いである。からだの丸みはあらわれるが肌は出さない。女らしさは隠された中からにじみ出るもので、さらけ出して強調するものではない。一方ヨーロッパの油絵を見ると、中世の貴婦人の肩や腕、首もとの肌を大きく出している肖像に驚く。既婚女性でもである。むしろ、未婚女性のほうが襟（えり）のつまった服を着るべきだという会話が、トルス

トイだかゾラだかの小説にあったような気がする。

女らしさに限らず、「にんげん」のからだの美しさを追求するのは、西洋ではギリシャ、ローマ以来の伝統で、これも東洋美術とは異なる。日本でヌードと言うと卑猥さや性的な側面が強いが、ヨーロッパでは堂々と、おおらかに、裸を誇る。ダビデやヘラクレスなど均整のとれた男性の大理石像のうつくしいこと。

美しいものは、うつくしい。

しかし中国以来の東洋の伝統では、男の肉体というのもそれほど大切なものではない。アメリカで文化人類学の講座をとったときに読んだ短い論文に、中国人の理想である「大人（たいじん）」の条件にスポーツができる、という要素はまったく含まれていない、武道の修練はあるが楽しむためのものではない、とあった。体力はいわば兵隊に必要なもので、知者には要らない、という考え方である。つまり、東洋では、肉体を軽視する傾向があるのではないか。そのうえに、極めてマジメな文化であるから、精神でいろんなことは克服できる、とくる。

けれど、西洋の文化になじんでみると、わたしたちはからだで生きているのだから、からだのことも大切に考えてやらなければいけない、という考え方は、わたしにはとても合理的で自然で楽だ。

そして日本は男社会であり、特にこの当時、若い女はちやほやするけれども、中年以上の女の女らしさはかなり無視されていた。しかし、日本女性本人が乳房を失うことへの抵抗感は、実際にはかなり強いものがあると思う。抵抗を覚えるほうが、自然なことではないか。少なくとも、「中年で乳房を失うなんて、たいしたことではないではないか」という他人からの声や、「こんなことを口にするのはとても恥ずかしくてできない」、「命が助かるのだから他のことは我慢するのがあたりまえだ」という本人のことばの陰に隠れている「ため息」はかなりあるという感じがする。

イタリアでそう言うと、ある医者は臆面もなく「では亭主を喜ばせるのは、日本では女にとって大事なことではないのか」と問うて、わたしはあまりの直

截さに目を白黒して返事もできなかった。この点に関しては、中年以上の夫婦間の性生活について何カ国かで調査されたとき、日本だけが際立って貧しかった、というのを2度見聞きした覚えがある。働き過ぎを含めた肉体的な原因か、文化的な習慣の問題なのかわからないが、あたりを見渡すとうなずける節がある。

もちろんイタリアでも、乳房を全摘しても再建はしない、と言うひとはいるし、かつて再建は普通には行われなかったのだが、乳房の喪失からくる心理的な問題が大きいことから、今では国民保険でまかなわれているのだ、と聞いた。わたしの二番目の同室患者も、「わたしは63歳よ。そんな大きいお乳でもない。でもわたしには大事なの」と断言していた。

さて、両方の乳房のつりあいをとって、ついでにもっと巨乳にしてもらおうかしら、と冗談めかして友だちに語ると、たいていは何の寝言を言っているかと呆れた眼でわたしを眺め、「健康が一番でしょ」と冷めた調子で言う。ところが、なかでひとりだけ、あら、それもいいんじゃないの？ と言ったのがいた。

アメリカ人のダーリンである。

「マドカ、あなたはずいぶん辛い目にあったわけでしょ。ここでちょっとだけ余計な手術をして、それであなたがいい気持ちになれるなら、それもいいじゃないの」

「補償みたいに考えるわけ？」

「そうよ」

なかなかいいことを言うではないか。辛い目にあったあとのご褒美、とは。

彼女はわたしが個人的に知っている中で、女優にもひけをとらない一番の美人である。それもジーパンよりも絹のブラウスのほうがよく似合う、派手で華やかなタイプの美人である。性格はきわめて優しく、すらりと背は高い。ゆるい巻き毛を肩までたらし、ほどよく肩幅と腰が張り、ウエストもほどよく細い。ところが胸だけはペタンコ。

「ははあ」とこのときわたしは深く納得した。

あの別嬪（べっぴん）にも胸がないというコンプレックスがあったか。

彼女もインテリだから、知性が邪魔をして豊胸手術などという「愚かな」真似はできなかつたに違いないが、この手の肉体にかかわるコンプレックスは、ふだんは自分には他の魅力があると言い聞かせ、気にしなくなっているにしても、実はけっこう根の深いことが珍しくない。チビだとか、足が太いとか、目が小さいとか。そういえばわたしは若いころからずっと、もっと胸が大きければいいのに、と願っていたことを思い出した。

なにせイタリアでは無料（タダ）である。

よし。決定。左の乳房も大きくしてもらおう。わたしは「愚かな」人間として「愚かな」豊胸手術をすることを決心した。

七章 摘出手術

4月10日入院。

しかしこの日付は、あらかじめわかっていたものではなかった。

イタリアの腫瘍科では通常主治医が複数いる仕組みで、わたしの主治医は中年のベテランの女医と若い男女の医師の計3人だった。わたしが受診する際にはそのうちの2人か3人がいつもいた。この仕組みだと、3人の医師のうち1人が休んでいても、ふだんからわたしを知っている医師が同じように診察や投薬を続けることができ、患者は安心だし医療の質も安定する。ただし病院側が医師にかかる費用は、主治医1人の日本にくらべると3倍近くになるだろう。

その若い女医に言われていたのは「4月の第2週」。

わたしは面食らった。

「何それ？ 月曜か水曜か金曜かわからないの？」

「わからない。前の日に電話するから、そしたら次の日の朝、来てちょうだい」

「どうして曜日が決まらないの？」

「どうしてって」と、今度は女医のほうわたしの質問に面食らっている。

「だって緊急の入院だって手術だってあるでしょう？ ベッドが空かなきゃあなた入れないじゃないの」

「日本じゃひと月前から決められるわよ」

「そんなこと言ったってイタリアじゃどこの病院もそうよ」

どこも、というのは、国民健康保険が適用される公立病院はどこも、ということ、国民健康保険適用外の病院はその限りではない。イタリアの公立病院のいいかげんさを見ていると、金持ちと外国人が高い金を払って民間医療保険に加入し、その保険を使って民間病院にかかる理由がよくわかる。もっともわたしの通っている、イタリアで1、2を争う「国立がんセンター」は、民間医療

保険適用の患者も受けつけているらしいが、夫の雇用元のアメリカ資本の会社は、外国駐在員はその国の国民健康保険に加入するべし、という方針なので、わたしには縁がない。

話は少し戻るが、最初、入院予定は4月の第1週と言われていた。化学療法が全部終わった3月中旬のことである。しかし今年は復活祭が早かったため子どもの学校の春休みが4月の第1週いっぱいまであったので、頼んで1週間遅らせてもらったしだい。復活祭の日は毎年違う。どんな由来かは知らないが、辞書を見ると「春分後の最初の満月の次の日曜日」だそうなの。

こうなっては電話を待つしかない。実際は、困った話である。買い物や、おかずの作りおきも、入院が月曜日か金曜日かわからないのでは計画的にできない。幸い、国際クラブの友人が手術はいつ？ 晩ご飯はいる？ と何人も聞いてくれるから、今回も全面的に甘えることにした。でっぴりと太ったマルティンが、「まかしとき。わたしが人数集めて都合のいい日をそれぞれ聞いて、ちゃんと案配して毎晩食事が届くようにしてあげるから、安心して入院してなさい。あんたは自分がよくなることだけ考えてればいいんだからね」と胸を叩いて引き受けてくれた。

マルティンは天使のようにやさしく、美を愛する心と教養に加えて馬のごとき馬力があり、しかも計画をたてて詰めていく、という事務的有能さを兼ね備えた、類（たぐい）まれな女性である。しかもわたしにとって幸運なことに日本轟眞（びいき）。フランス人で英語を話すひとは少なく、ましてやフランス人ばかりで固まっている場合が多いなかで、国際クラブで役員をするような開放的なひとは珍しいのだが、彼女は例外である。ま、それを言うなら、わたしもかなり例外的な日本人ではあるが。

西洋人の、特に男性から「あなたは日本人らしくないね」と初対面で言われる。最初は褒（ほ）められたのだろうか、それとも貶（けな）されたのだろうかかと悩んだが、単に感想を述べただけだとわかってからは気が楽になった。何かを尋ねられたら、わたしは怖（お）じずにはっきり自分の意見なり印象なり

を言う。尋ねられなくてもどんどん自分から話しかける。ものごとを整理して考えて話したり、また知らなかったことを聞いたりするのは飽きない。好奇心が強いから、かなりの範囲の話題に興味を持ってついていけるし、自分からも提供できる。ひとを笑わせるのも好きである。そのへんが日本人らしくないというのだ。

実際欧米では、日本人がものをはっきり言わないことには定評があるらしい。日本にも行ったことがあるらしいジャンフランコは、「ぼくが日本人に、ローマに行ったことはありますか、と聞いたときだよ。『良い所だそうですね』と、こうだよ。もう一度同じ質問をしても同じ答えだ。ぼくは行ったかどうかを聞いてるんだぜ。印象を聞いてるんじゃない。それくらい言ったっていいじゃないか。ほんとに日本人ときたら何を考えてるんだかわからない。イライラするね」

この背後には、日本人が、相手の国に行ったことがないと正直に言うのは失礼ではないかと考えるのに対し、欧米人は、それをまったく失礼ではないと考える、という差があるのだろう。こういう細かな気の回し方は、同じ考え方をする狭い文化のなかでは通用するし必要ともされるが、幅広い異文化のなかでは通用しにくいのもかもしれない。

「でも、いくらものをはっきり言うほうがいいといっても、外国だと、何これ、って思うことがあるでしょ。それを正直に言うのは失礼じゃない？」とわたしは別の機会にイギリス人のニックに尋ねてみた。「それは嫌いだとか馬鹿じゃないかだとか言えば失礼だけれども、どうしてそんなことをするのかかわからない、理由を教えてくれ、と言えば充分礼儀にかなっているよ。むしろ、自国の文化に関心を持ってもらえて嬉しいと、喜んで説明してくれるんじゃないかな」と彼は教えてくれた。

これは役に立つ助言だった。イタリアで当惑したり怒ったりすることは多いが、わたしは相手の立場に立って考えることが苦手で、ストレートに不満をぶつけるしか能がなかった。わたしの態度は幼稚だが、ニックの態度は大人である。ひとつ勉強になった。

また欧米ではいったいに、パーティや食事に招かれたときに、初対面でも楽

しい話題を提供したりユーモアに富んだ受け答えができるというのは、日本ではよりはるかに重要なことのように見える。一度、そんなに親しくないのにどうしてわたしが呼ばれたのだろうかと思議に思ったことがあるが、どうも客の顔ぶれに変化をつけるためだったようだ。幸いそのときは、日本で蛙はケロケロ、クワックワツと鳴くけど、イタリアでは？ ドイツでは？ じゃあ鶏(にわとり)の鳴き声は？ などとくっちゃべって大笑いだったから、たぶん招かれた課題は果たしたのだろう。

あまり頻繁(ひんぱん)に「日本人らしくない」と言われると、ではいったい日本人らしいとは、自分の意見を言わないほかに何があるのだろうか、パトリツィアに聞いてみたことがある。礼儀というものを重んじる彼女は少し上目遣(うわめづか)いにわたしを睨(にら)み、恨めしそうな顔をして笑った。

「あなたのお仲間の悪口は言いたくないけど、あなたが尋ねるから言うのよ。日本人は閉鎖的よね。いつも日本人ばかりで固まって、ほかのひとたちと交わらない」

「それはことばの問題もあるんじゃないのかしら」

「そうね。でも、片言でも話したがるひとはいるでしょう？ でも日本人は話したがる。それから、言っていないかしら、きっちりしていて融通がきかない、堅苦しいって印象があるわね。とてもよく働くけど、こうしなければいけない、ってというのが強くて、縛られている感じ。息苦しくないかしら」

思い当たる節が多々ある。特に日本人の閉鎖性に関連してはすぐに。

わたしがツルツッパゲの頭に帽子をかぶって息子のサッカークラブの練習試合の応援に行き、息子が出るたびに息子の名前を連呼していると、20分後、わたしの闘病事情を知った他のイタリア人の親も、日本人のウチの子の名前を呼び始めてくれた。息子がそのチームに入ってひと月ほどしかたっておらず、わたしと他の親たちとは初対面に近いくらいだったのに、である。

ひどく嬉しかった。感激した、と言っていい。

もし日本で、同じチームとはいえ、新しく入った外国人でがんにかかっている親が子の名を連呼していたとして、その名を同じように呼んでやる日本人の

親がどれだけいるだろう。

横目で見ているばかりではないか？

日本人はよそ者に冷たい。すでにできあがっている集団に新しくひとが入ってきたとき、馴染むまでにおそろしく時間がかかる。日本人がいったいに不親切だとは、わたしは断じて思わないが、身内になら親切でも、よそ者には同じくらい親切でなくてもいい、という感じはある。それに比べると絶対には言わないが、欧米ではよそ者にも、身内にも、わりに同じように親切である。

わかりやすい例が車の運転マナーだ。車を運転していて狭い道から広い道に出るとき、広い道の交通量が多いと、なかなか狭い道からは出られない。しかし欧米だと、広い道を走る車の運転手がそれを察して自分の車のスピードをゆるめ、さああなた出なさいよ、と狭い道から出ようとする車の運転手に合図してくれることが多い。お互い様だからだ。しかし日本では、こういった見知らぬ人に親切にする習慣が、ほとんどない。

キリスト教のせいなのだろうか？ 大陸でひとの移動が多いのに比べ、日本人が鎖国をしてきた島国根性なのだろうか？ それとも単にラテン気質なのだろうか？

そしてわたしはここにおいて、ずいぶん自由であると感じる。性格的に「しなければいけない」より「したい」が先に来るが、ここはパトリツィアの言うとおりそれがかまわないし、積極性が日本よりずっと高く評価される気がする。

「美味しい」と「きれい」が大好きなお国柄では何事にも楽しいことや楽しむことが大切で、義務の遂行は優先順位が低いのだ。ま、その分どうしようもなく、いいかげんでもあるが。

この国に4年住んでいるあいだに、わたし自身がずいぶん変化し、異文化にうまく適応した、というところはある。あるいはわたしに元からイタリア人的な素質があったのか。日本でわたしは「空気が読めない」困ったところがあるのを考えると、元から日本人らしくないのかもしれない。

日本人のママ友からは「あなたみたいなひとは見たことがない」とよく言われる。わたし自身にとっては意外なことだが、実行力がすごい、と言われるの

だ。「日本人の奥さんのなかでも、4人子どもが欲しいとか、今まで経験のない楽器をこの際イタリア人から習ってみたいとか、国際クラブの役員をしてみたいとか、寿司のつくりかたを外国人に教えてみたいとか、思うひとはたくさんいるわよ。でも実際にやってしまうひとはめったにいない。あなたは次々に実行してる」はあ、そんなものかしらん。

で、初めは褒（ほ）められているのだと気をよくしていたのだが、親しくなるとじっくり聞いているとどうも違う。偉い、のではなく、単にひとと違う、のらしい。ハズレているのだ。「あんたは規格外よ」と言われ、おおいに笑い、納得した。夫もわたしも、普通がいい、という考えは、微塵（みじん）もない。

平凡は、つまらない。

4月に話を戻そう。

いつかわからない手術を待つ、というのは精神的に良いものではない。夫は眉を曇らせている。

秋、いっとき眠れぬ夜が続いたようで、わたしには男の更年期だと言っていたが、女房ががんだという悩みのためなのは明白だった。夫はアメリカに出張中に電話で最初の知らせを受けて、頭をぶん殴られたようなショックを受けたらしいが、海を隔てていれば、ショックを腹の中に抱えている以外、何もできることがない。

そのあと8月に日本でわたしがぼろぼろ泣く傍にいて、一緒に医者から図解つきの説明を受けてからはことが現実と腹を据え、前期のきつい化学療法でわたしがひっくりかえていたあいだ、落ちこんでいた。そのあと一時期落ち着いたものの、今回手術を前にまた不安と心配が増してきたらしい。

わたし自身は、手術そのものにたいした不安はなかった。オテンバなのか不器用なのか骨が弱いのか、たぶん全部当たっているだろうが、今まで骨折を5回、脱臼を1回している。スケート、交通事故、合気道、転落、とそれぞれ理由はあるが、うち3回は入院し、1回などは足首に金属片とネジを6本入れる手術をしている。それもアメリカでだった。

アメリカには1年しかいなかったのだが、下の息子は耳の手術をするし、わたしは自動車をぶつけ、裁判所には行く、スケートでは足を折って2カ月松葉杖をつく、夫は車にはねられて救急車に乗る、上の娘は湖に落ちる、買い替えた自転車は盗まれる、旅行に行ったらレンタカーを借りれば1週間で2台故障して取り替える、というなんとも忙しい波瀾万丈な年だった。

あとで気がつくとき、夫は前厄だった。ふだんそんなことは考えもしないのだが、あれだけ災難が続くと「やっぱり、厄年ってあるのかな？」と思うのが人情である。

足に金属のネジを入れたのも、日本で1年後に出したのも全身麻酔でだった。盲腸も切っているし、4回のお産も自然分娩とはいえ病院だから、わたしは入院だの手術だのには、幸か不幸か慣れている。

わたしの両親も、ともに結核で手術をしている。特効薬ストレプトマイシンが出る前の、昭和30年前後のことである。特に母は手術がまだハシリのころで、のるかそるかの生命（いのち）をかけた博打（ばくち）のようなものだったらしい。左の肋骨を2本、肺を5分の1取り去るといって大手術で、一時は死にかけてという。当時付き添っていた祖母からも「もうだめかもしれんと言われての、辛かったっちゃんじゃあない」と聞かされた。母は痛みがひどくて目が覚め、その後あまりの痛みにより再び気を失ったこともあると言っていた。父も母も背中の中肩甲骨に沿って、30センチ以上の長い、切って縫った痕（あと）がある。

それに比べれば、片方の乳房を切り取る、というのは、はるかに簡単な手術である。肺がなければ生きていけないが、乳房はなくても生きていける。加えて、40年前とは設備も、薬も、技術も、何もかも比較にならないほど進歩している。胃や盲腸の手術だと消化機能がひとつおりの回復しなければならないが、乳房はその必要もない。傷が治りさえすればいい。それに、田舎の総合病院ならいざしらず、がんセンターの医師にとって、手術は毎日繰り返してやっている日常的な業務に過ぎない。

心配するほどのことはない。

ただ、わたしは化学療法でからだ弱っていて、調子の悪いときは、今眠ったらこのまま目が醒（さ）めないのではないか、と思うことが何度かあった。気力も弱っていたのである。全身麻酔は三度目とはいえ、ひょっとしてそのまま、永遠の眠りにつくのではないか、というぼんやりとした不安が、誰にも言いはしなかったが、心のかたすみにひっそりとあった。いくら理屈にあわない不安だとわかっている、感じるものは仕方がない。わたしはすなおに泣いた。

さて、金曜日に電話がかかってくると思って待っていればイライラせずにすむ、と思っていたら、火曜日に知らせがきた。夫の会社に電話をする。ああよかった、と夫の声が弾み、

「今なら仕事に差し支えない。2日休みをとるよ」

「あら。手術の日は来て欲しいけど、入院するときにはかばん持って行くくらいだから、ひとりで上等よ」

しかし夫は手術室だって病室だって前もって知っておきたいから、送って行くという。

なに、アメリカでわたしが足の手術をしたときなどは、夫には手術時に来る必要はないと言ったし、実際夫も来る気がなかったのである。わたしは12月30日の夕方に骨折してすぐ入院したのだが、国民皆保険は存在せず、民間保険会社は出費をケチる傾向にある国のことで、翌日の大晦日に手術、翌々日の元旦に退院するという早業であり荒業であった。全身麻酔の手術の翌日に退院させるとはなんて無茶だ、なんて無責任なんだ、と、あとで日本の医者に両手を振り回してわめかれたものである（わたしに言わないでよね）。

外国で年末年始に子守りが急に手配できるわけもなく、夫はわたしのことより、いかに8歳、6歳、4歳、もうじき2歳、の4人の子の面倒をひとりでみるかでテンテコ舞い、頭もいっぱいだった。手術前に家族が誰も来ていないと知った医者は眼を剥（む）いたが、わたしは落ち着いて彼に「説教」した。

「夫はここにいても立ち会う以外の役には立たない。だけど家では4児の面倒をみるという非常な役に立っている。ここに夫がいなくてもわたしには一向

にかまわない。手術するあなたさえいればいいのだ。さあ、さっさと切りなさい」

今回はさすがにもう少し弱気だが、しかし、夫が2日続けて休む必要はなかった。手術は、聞いていたように入院の翌日ではなかったのである。

まったくイタリア人のいいかげんさにはたいてい慣れてきたつもりだが、それでも開いた口がふさがらないことが、いまだにある。商品の品質管理などその最たるものだ。天井の切れた白熱灯を取り替えようとねじったら、電球のガラスの部分だけ手の中であって、口金の部分はガラスからきれいにはずれて差込口に残ったままだった。その光景に、わたしは1分以上自分の眼を疑っていた。ようやく事実を理解すると、脚立（きやたつ）を降りて壁のスイッチを押しに行くのが面倒だが、電源が入ったままだと、口金を介して200ボルトに感電するのが怖い。

いいかげんなのは商品だけではない。トイレの水が出なくて業者に電話したら「明日の午前10時に行くよ」と言う。でも来ない。12時にこちらから電話をすると、「ああ、行けなかったよ」とフツーに言って謝りもしない。業者なら、行けなくなる前に自分から電話するべきでしょ！

携帯電話を修理に出したら「直ったら電話するからね」と店員が言う。ひと月待っても電話がこない。外国語で電話をかけるのは気が重いので店まで行くと、「ああ、直ってるよ」と店員はニッコリ笑う。「ねえ、あんた電話するって言わなかった？」と聞くと、「うん、電話したよ」とうなずく。不思議に思っ「その電話に誰か出た？」と尋ねると、「ううん、誰も出なかった、ってノートに書いてある」と平気で答える。

日本じゃそれを「電話かけた」とは言わないっ!!

とても先進国とは思えない。

万事きちょうめんな日本からすると、ばかりと開いた口の顎（あご）の下を掌（てのひら）で押し上げて閉めたが、たまらずもういっぺんがっくりと顎が落ちてくる、とでも言いたいほどの、ケタはずれのいいかげんさである。

今回の入院では、それが頂点に達したとっていい。

入院の日を決める段取りの悪さなどは、入院してからのあれこれ、特に手術日が決まるまでに比べれば、ほんの序の口に過ぎなかった。

わたしは朝8時に病院に着き、血液検査をすませたあと、病室に案内された。ここまではよかった。

わたしは午後心電図と肺のレントゲン写真をとりにいくのだろうと、戸棚に荷物を入れ、寝間着に着替えてベッドで待っていた。ところが誰も呼びに来ない。呼びに来ないどころか、検査予定が何時なのかも言いに来ない。ましてや、日程や手術、病院の規則の説明すらない。完全にほったらかしである。男女の看護師を捕まえて聞いても、わたしは知らない、と言われるだけだ。

いったい手術はいつなのだ。

明日ではないのか。

イライラしているわたしに、

「正午までに通知がなければ翌日の手術はないわよ」と平然と言ってくれたのは同室の患者である。

「そんな馬鹿な。たいてい入院の翌日、遅れても翌々日には手術と聞いていたわよ」といきまいたが、

「わたしも手術の前に4日待ったのよ。予定なんか説明しやしないって。言ってきたら翌日。言ってこなかったら翌日はない。それだけよ。翌日以降のことなんか誰も言わない。待つしかないわよ」としれっと言う。

信じられない思いで、それでも睡眠不足からうとうとしていると、夢を見た。わたしより頭ひとつぶん背の高い、小山のように大きな女性看護師に、「こんな扱いがあるか、いつ手術をするのか説明くらいしたらどうだ。患者の心理を考えてみろ」と猛烈な勢いでイタリア語でくっつくかかっている夢だった。

明るる日も同様に過ぎた。心電図の検査のみ。通知、説明はいっさいなし。看護師室に聞きに行ったら、医者が「ああ、あなたは5階の乳腺科に部屋がないから、この3階の形成外科にいる患者さんですね。担当じゃないからわたしたちにはわかりませんよ。今に5階の医者が来て説明しますから、待つてなさ

い。何時ごろって？ それはわかりませんね。時間は決まってないですから。大丈夫、今日中に必ず行きますよ」

とんでもない、口からでまかせだった。誰も来ない。昼寝してまた夢を見た。今度は医者にかみついている夢だった。

眼を覚まして、今のは夢だよな、わたしは実際にはなにも怒鳴ってないよな、とぼんやりした頭で考える。半分は怒鳴りつけたような気になっている。

夕方、わたしの主治医のひとりである若い女医が、ふらりと現れた。

「名前を見たから寄ってみたのよ、どう？」

「言っちゃ悪いけどひどいわね、このやりかた」と、調子は抑えながらもわたしは不満を訴えた。

「あら、まあ、それはふうん、困ったもんだわね。わかった。わたし知ってる外科医に話してみるわ。でもね、わたしは腫瘍科で、よその科のことに口を出すわけにはいかないから、今すぐどうこうできるって約束はできない。そこはわかってね」

彼女の態度には思いやりがあって、わたしはホッとした。

しかし今までの経過でいいかげん頭に来ていたから、すぐ外科医と話がつくとは期待してなかったが、予想に反して彼女は30分後にもう一度現れた。この国でものをいうのはコネであった。若い外科医が同行している。

彼はすなおに謝った。わたしたちは5階にいるもんだから、3階のここがほったらかしになったのは申し訳ない、と。ここで初めて聞いた血の通ったことばだった。手術は月曜日か火曜日だと言う。あ、そう、ありがとう、とニコリ言いながら、わたしは内心、「ほんとに月曜日かどうかわかったもんじゃない、麻酔をかけ始めたらそのとき初めて、手術をするって信じてやるわい」とつぶやいていた。

3日目。レントゲン撮影のみ。あとは朝昼晩と食堂に食べに行って、寝るだけ。食堂でくっちゃべっていると、待っているのはわたしだけではないことがわかった。同じ水曜日入院したマリアンジェラも何も知らされず、イライラしながら待っていた。別の女性は金曜日に入って1週間後の今日手術だという。

「1週間!？」

「まだいいんだってよ。わたし聞きに行ったら、あなたは金曜日か月曜日って言われたんだけど、わたしの前にまだ10日も待ってるひとがいるんだって」

「そのひと何か待たなくちゃいけないような問題があったの？」

「それは知らないけど」

「待つほうもたままないけど、病院にしたってとんだ無駄よね。泊まらせて食べさせてるんだから」

「ほんとよ。わたし明日手術がないならあさって家に帰るわ。週末は許可をもらえば外泊ができるんだって。日曜の晩帰ってくればいいんだってよ」

わたしもそうしよう、と決めながら、患者間のほうが情報が手に入るとは、一時代旧（ふる）いのではないのかとあきれた。

この日も正午までに何も言ってこなかった。

つまり、月曜日の手術は、ない。

「へんっ、やっぱり期待するもんじゃない。もう明日か、明日かと待つのはやめにしよう」とわたしは思った。待ちくたびれてイライラするだけ損だ。

入院させたからには彼らは必ずや、わたしの手術をするであろう。いつかはわからないが。それなら、期待、という感情はこの際ちょっと棚の上に上げて考えないことにして、腰を据えて待とう。

気持ちを切り替え、隣の患者が退院する際に残してってくれたイタリア語の雑誌を読むことにした。ある女優が13年前に顔のしわをとるためにシリコンを入れて整形したら、今年になって顔が変形し、もう一度手術をしたら顔が腫れ上がってしまい、今はまだ包帯だらけのミイラのような姿だという記事。イギリスの皇太后が亡くなって、彼女の一生をたどる物語。地下の水の流れる洞窟を、自分の開発した器械で真っ暗な中2キロも溯（さかのぼ）っていく探検野郎の話。核融合の簡単な実験の記事。ふだん何語でも雑誌は読まないのだが、写真が多くわかりやすく、おもしろかった。暇だけはたっぷりあるので、辞書をひいては新しい単語をノートに書きつけ、復習する。

もうひとつ暇つぶし用に、詩のノートを持ってきていた。アメリカで短大に

通っていたとき、小説なるものを一生に一度書いてみたくて「創作」という講座をとったら、詩も書けという。英語の詩なんて韻をそろえなきゃいけないし、日本語でだって 20 年も書いてない。ましてや外国語でできるものかと頭をかかえたが、韻はふまないでもいいというから、四苦八苦した挙げ句なんとか 6 つほどひねりだしたら、ひとつをえらく講師が褒（ほ）めた。こういうのを書いて欲しかったのよ、と授業中皆の前で言ってくれた。四十雀（しじゅうから）という題のもので、ほかにも辛夷（こぶし）、野の林檎（りんご）など、自然とひとの愛情、罪などをからませたものばかりだったが、ぜひとも詩作を続けろと励ましてくれた。日本に帰ってもぼちぼち書いてはいたのだが、いつか英語のままアメリカの雑誌社に送るか賞に応募するかして世に問うてみたい、という野心はその地にいなくては果たされず、6 年が過ぎた。

それが、先日たまたま地元アレーゼの図書館に行った際、コンサートの情報はないかとポスターを眺めていたら、北の町レニャーノで詩のコンクールがあるという。イタリア標準語部門と方言部門のふたつで、1 等は賞金 40 万円。ダメで元々、わたしの詩をイタリア語に翻訳して挑戦してみる価値はあるではないか。万が一わたしの詩に価値があるものなら、何語であってもひとはいいと思うはずである。

幸い、イタリア語学校の先生にひとつふたつ見せたら、「夫婦して読んで感激した。ぜひやってみろ。文法、ことばの選択その他、いくらでも訂正してやる、助言もする」と言ってくれたので、英語からイタリア語への翻訳という作業に、もの好きにもとりくむことにしたのである。ちょうどいい時間つぶしになった。

結局手術は、入院からちょうど 1 週間たった水曜日だった。前の日に、ふだんのように翌日の食事のメニューを選ぶ紙が配られないから、あら、ひょっとして、と思っていたら同意書を渡されてサインをするよう言われ、午後麻酔科の医師に呼ばれ、さらに夕方看護師が「絶食」という札を枕元に置くに至って確信し、夫に電話をした。

マリアンジェラは金曜日か月曜日、と言われて実現せず、次は月曜日か水曜

日、と言われてまた裏切られ、可哀そうに日ごとに顔が暗くなっていった。

「こうやって待たされるの、この病院だけじゃないみたいだよ。わたしの友だち、旦那さんが心臓の手術したんだけど、3週間待たされた、って言ってた」とわたしが言うと、

「冗談じゃないよっ」

日ごろは穏やかな彼女が叫んだ。

血相が変わっている。

「ウチらでさえ、たかがお乳の手術でこんだけ気をもむんだよ。心臓の手術でおんなじことやられてごらん、手術の前に心痛であの世行きだよ！」

まったく。

そのあいだに、イタリアの病院では不必要な入院で年間何百万円だかの無駄使いをしている、というニュースがテレビで流れ、同室の患者と、顔を見合わせてうなずきあったものである。

日本でこんなことをしたら、悪評判が広まって患者が来なくなるに違いないが、イタリアの公立病院は多かれ少なかれどこもこんなものだから、改善されようがない。パトリツィアも、娘が膝のじん帯を手術したときも1週間待ちだった、とわたしを慰めた。あなたたちこれが辛抱できるなんてよっぽど我慢強いよね、と言うと、平気なわけじゃないわよ、でも文句言ったってな～んにも変わらないから、諦めてるだけよ、と答える。

だいたいイタリアは毎日どこかで何かのストをやっているくらい、労働者の力が強い。かなり社会主義的な体質の国である。ここの医者たちも国家公務員だから、何をやっても給料と地位は保証されている。公立だから、効率を考えなくて税金の無駄使いをしても、誰も責めないというわけだ。社会主義の典型的な悪例である。

同室の患者は3人入れ替わった。初めのひとは、腹にも傷があって痛いというので聞いてみると、以前放射線療法を受けたおかげで大胸筋が使いものにならず、代わりに下腹の筋肉を胸に移植したのだと説明してくれた。前にも書いたが、乳房の再建には、大胸筋の下に袋を入れ、中に生理食塩水を何回かに分

けて入れて、徐々に膨らませ皮膚を伸ばしていく。そして数カ月後にシリコンと入れ替えるのである。

2 人目は、その移植した筋肉がうまくつかず腐ってきたので、取り去らなければならなくなったの再入院だった。あなた怖い？ と言いながら服をめくって見せてくれた胸は、10センチ四方ほどの皮膚が赤黒く変色した、ちょっと凄いながめだった。

こんな実例を見せつけられると、「ありゃ、りゃ、乳房の再建なんてやめといたほうがいいのかいな」と思わざるをえない。しかしわたしは放射線療法は受けないから筋肉の移植は縁がないし、冷静に考えれば、こうやって病院でお目にかかるのは、うまくいかなくて帰ってきたわずかの例であるはずで、大多数の成功例は病院に帰って来ないから、知る機会がない。

イタリア人の乳房はいったいに、でかい。わたしの胸の3倍から5倍あるのが珍しくない。再建しても反対側の乳房ほどの大きさにならない場合は、その正常な乳房から一部分を切り取り、左右のバランスをとるのだという。だから、最初の同室患者は左右の乳房と腹の3カ所、同時にメスを入れられたのだった。

特に、歳をとると誰でも乳は垂れるが、痩せたひとの巨乳が垂れると、先が臍（へそ）のあたりまで達する（！）ことがあるという話で、日本人の友人は実際にフランスのヌード海岸でその「惨状」を見たと言っていた。わたしはそれでも半信半疑だったのだが、実際にぽっちゃり患者の手術後のパジャマ姿を病室で見ると、乳房を全部摘出した側の胸がほぼ平らなのにくらべ、反対側はかなり下のほうまでもっこりしている。あの妙な形のでっぱりは何なんだろう？ と考えてみると、垂れた乳以外にはない。日常的にはみなさんブラで支えているから、今まで見かけたことがなかっただけだ。歳をとったら巨乳がどれだけ垂れるか、納得した。

が、臍まで垂れた乳と同じような形のシリコンはない、あるいは、ひよっとしたらあるのかもしれないが、使わない（そりゃそうだ！）。巨乳には巨乳なりの不便があるものだ、と妙なところでふだんの劣等感が慰められた。

で、わたしの場合、大きさはほどほどだし、大胸筋は損なわれておらず、触

診では腫瘍が筋肉にくっついてもないから、悪いほうの乳房と腋（わき）の下のリンパだけ切除すればいい。予定の手術時間は3時間。

当日、朝の8時にはわたしのベッドのシーツの上に、防水布とさらにもう1枚シーツが敷かれた。鎮静剤をのんで病室を出、8時半に手術室に入り、10時に医者が「アリヴェデルチ」（さよなら、またね）と言うので「どうして」と聞くと、「麻酔だよ」。そのことばを最後にすうっと意識がなくなり、病室に帰ってきたとわかったのは午後2時だった。

からだ中が痛い。右の胸から腋（わき）が痛いのはあたりまえだが、ちょっと脚を動かしても腕を動かしてもみな胸に響くのである。枕の落ち着きが悪いので肩をゴニョゴニョと動かそうとしたら、余りの痛さに1センチ動かしたところで止まってしまった。寝返りもうてない。大きめの吐息をついてさえ、大胸筋がつられて動くものだから、一瞬息を止めるほど、痛い。くしゃみなんてとんでもない。

熱をとるために、大きな氷を入れた袋が胸の上に置いてある。朝から水も飲んでいないので口が乾くが、しばらくはだめだと、湿してもくれない。口渇は化学療法の後遺症でもあるのだが。痛いという痛み止めをくれた。多少は効いたが、身動きできない辛さとあいまって、苦しい。イタリア語学校の先生と同級生が3人見舞いに来てくれたのだが、ろくに話もできなかった。

それでも1時間毎に、少しずつからだは楽になっていくのがわかる。頭にきたのは小用を足したいと訴えると、おまるを持ってきてくれたのはいいが、用がすんだあとで男性看護師がパンツを上げてくれないのだ。上げてくれと頼むと、「点滴でたくさん尿がでるからどっちみちまた用を足さねばならない。それなら下したままのほうが楽でいい」という返事である。パンツを上げるのに何分かかるといえるのか。膝の上で丸まっているパンツは、非常に落ち着きが悪い。いくら毛布の下だといってもお断り。不愉快極まりない看護師の態度だった。だいたいこの手術着というのは割烹着（かっぽうぎ）のような格好で、お尻は丸見えなのだがその下は木綿ならパンツも靴下も可、という妙な規則だったから、足が冷えるわたしは両方履いていたのである。

さらにあきれたのは、血圧はその晩測りにきたが、2週間余りの入院中測りに来たのは、その一度だけだったことである。手術前は一度も来なかった。体温測定も手術後の5回だけ。手術室では心電図も多分あったのだろうが、前もって血圧も体温も確認せずに手術室に送りこむ神経がすごい。手術後の晩も、「具合どう？ そう、熱は？ ない？ うん、わかった」と言っただけで、体温を測りもしなかった。体温計を初めてくれたのが、翌日のことだ。それも、測れ、と言っておいてあと何度だったか聞きに来ない。よくもまあこれで入院患者の管理ができるというものだ。日本の看護師が聞いたら卒倒するのではないか。

まだある。シーツの交換は、3日続けてやったり、1週間やらなかったり。わたしが体温計をうっかり落として割ってしまったとき、すまないがかたづけてくれと頼んだら、看護師はああわかったと言っただけ。定時の掃除にくるまで3時間ほったらかしで、ガラスのかけらの上を平気でじゃりじゃりと踏んで歩いている。寒いから毛布をもう1枚くれと夜に頼んだら、もってきてくれたのは30分後だった。看護師室でテレビドラマを見ながら書類仕事をしていた彼は、コマーシャルまで眼が離せなかったのだろうか？

ひどいのは看護師だけではない。わたしだけガーゼ交換にお呼びがかからないのでせっつきに行くと、いやそうに来た女医は手袋もつけずに頭をちょいと搔（か）いたりしながら、その手を洗いもせずに消毒をした。

それでは消毒にならないぞ、おい！

退院や外泊の許可、手術の説明、傷の消毒についても3階と5階の医者として責任のなすりあいをする。手術は当番制であるからと、結局わたしは自分の執刀医の名前を知らないままである。

縫ったあとも醜い。胸はいいのだが、腋の下はしわが寄り、でこぼこができ、ノースリーブの服を着るのがはばかられるほど、目立ってみっともない。退院後に包帯交換をしてくれた別の医者が、30年前から縫い方は進歩してないわね、とのたもうた。

まったくこれが、ヨーロッパでも有数の、イタリア語で言う「背広の衿の穴にさした花のような」第1級の病院というから恐れいったものだ。イタリア中

から患者は来ているのだが。イタリアを長靴に見立てたら、ミラノが一番上の膝の真ん中くらいになるが、踵（かかと）にあたるプーリア州から来ていたひとともいた。

毎晩、というにひとしく、蚊が出た。夜中、プウ〜ンという音に何度も自分の顔や頭をはたいた。わたしは常に蚊に愛されるタチである。イタリア人は「あんたは血が甘いだよ」と笑う。2番目の同室患者は「ここ、いつも蚊が出るのよね。エアコンの出口から出てくるのよ」と用意周到に電気式の蚊取り線香を持参していた。

それを聞いて、ふだんめったに怒らない夫がキリキリと眉を吊り上げた。

「病院が不潔っていうことじゃないか！ 院内のどこかに、ひとの手の届いていない、だけど蚊には利用できる汚水溜まりがあるんだよ。それが国立病院か、冗談じゃない！」

こんなことが前からわかっていたらイタリアでの手術に反対していたな、と夫は断言した。イタリア人がいいかげんなのはよく知っている、でも国立がんセンターまでこんなにひどいとは思わなかった、と。

彼は製薬会社の研究員である。非臨床とか前臨床試験とか呼ばれる一連の作業では、動物を使って実験を科学的に行い、資料を統計的に意味のあるものとして処理するために、常に一定の規則に従っていなければならない。2種類の薬のどちらが効くか試す実験をするとき、動物の部屋の温度が20度だったり30度だったりしたら、その温度差のせいで結果が違うかもしれないから、そのデータは使えない。高血圧の動物が2つの群れの1つだけにたくさん混じっていたら、そのせいで効き目や副作用に違いが出るかもしれないから、その群れは実験には不適當である。つまり、調べたいこと以外には、他のすべての条件を同じにすることが鉄則で、そのためには、細かなことを日常的にきちんとすることが要求される。

夫に言わせると、イタリア人は、この手の「毎日きちんと」ができる人種ではない。「まあいいじゃないか」の国である。彼は職業柄これが一番我慢ならん、と言う。実験の基礎的な条件を毎日保つのがいいかげんなら、時間が守れない

のも常識。夫の会社で会議が 10 時からなら、10 時前に来ているのは外国人だけ。主催者でさえ現れるのは 10 時 10 分、全員が集まるのは 10 時半。

書類は提出期限が過ぎてから書き始める。さらにひどいときには、提出期限後に役所から書類が届く。「おとといまでに記入して出せ」と。嘘ではない。あげく期限を過ぎると罰金、と注意書きがある。

郵便は 10 通に 1 通はつかない。キッチリしているスイスまで、アメリカ人は郵便を出しに行く。車で 1 時間かかるが、それで故国までクリスマスカードが確実に着くならそのほうがいいと。最近宅配便がはやりだし、夫の会社でも「重要書類は郵便で出すな、民間の宅配便を使え」と指示が出ていると言う。

よくこれでイタリアが G7 先進国首脳会議に入っていると感心する。日本から出張にきた夫の上役は、「さすがに上のほうはしっかりしてるみたいですよ」とは言うが。

イタリア人にそれを愚痴ると、「あら、ミラノはまだマシなのよ。南に行くともっとひどいから」とたいてい言い返される。下には下があるということか。都市銀行に勤めていたパトリツィアによると、彼女のいたミラノの本店では、業務開始時間として表示してある 8 時半には、カウンターにひとがいて仕事を始めていた。しかしローマの支店では、9 時にならないと電話が通じなかったという。

給料泥棒、ということばを思い出しますね、はい。

とは言ってもわたしは自分自身がかなりいいかげんで、「毎日きちんと」ができる人間ではないので、このことに関しては「気楽でいいや」というところがある。アメリカは時間厳守の国で、歯医者予約に 30 分遅れて行ったらその日の治療は受けられない。わたしは二度無駄足を踏んだ。ノルウェー人のマリーも故国では同じだと言っていた。しかも、もしも医者の都合で 15 分以上治療開始時刻が遅れたら、治療費はタダになるのだそうだ。

イタリアでは、診察が予約時間より 1 時間早くても遅くても関係ない。たいてい診てもらえる。日本とこの点はよく似ている。病院の受付に行ってから順番待ちだから、1 時間以上待たされることが珍しくない。「なんのための予約時

間か」とため息がでる。一度イタリア人の初老の男性が同じことを受付で怒鳴りつけていて、振り向いた彼にわたしは思わず「よくぞ言ってくれた」とニコリ笑いかけたものだ。

むしろ、わたしがどうにもこうにも腹にすえかねるのは、「こいつら」の「無計画性」である。先を見通すとか、全体を見る、とかいうことのできる人材が、極めて少ない。というより、文化や習慣、仕組みとして、ない、という感がある。

いきあたりばったり。

わたしの手術が入院して1週間後で、しかも前もってまったく通知がなかったのも、がんセンターでは常に、明くる日の手術予定しかたてない習慣だからだった。週間予定とか、月間予定とかいうものが存在しないのである。この、国立病院に週間手術予定が存在しない、ということくらい、今回の入院で信じられなかった事実はない。医者がそう告げた時、謎はとけたが、わたしは呆（あき）れ果てて苦情を言う元気も失せていた。

もっとも、わたしは最悪の時期に入院したらしく、わたしの6日後に同室に入院してきたロセツラは、3日待ちで手術だった。どうも復活祭の休み中、外科医どもがそろって休暇をとって手術数が少なく、わたしの入った復活祭直後に手術待ちの患者がたまっていたらしい。

それなら入院させなければいいようなものだが、入院を管理する部門は患者の数だけを数えるから、手術には関係なしに、ベッドが空くが早いか次の患者を入れるのではないかと思う。ここでも、「全体を見て」判断を下す習慣が見られない。

わたしは化学療法を受けているあいだ、イタリア在住の日本人に「ここはいいですよ。皆さん、もしも乳がんとわかったら、どうぞコルソ・ヴェネツィアンの国立がんセンターなり、ヴィア・リパモンティのヨーロッパがんセンターなりにおいでなさい。無料で、お乳の部分切除か全体切除かのあと再建手術もできますよ」と勧めるつもりだった。しかし、手術がすんだ今では、「いいところもたくさんありますけど、行くならよほどの覚悟をしてからですね」と言わ

ざるを得ない。

ただ、わたしはどういうわけか、いろんなところで他人がまずしないような体験をしている。人並外れた好奇心と無謀さが妙な体験を呼ぶのかもしれない。あとで友人と話してみると、あら、そんなとんでもないことはなかったわ、と言われることが折りに触れあるので、もしかしたら、わたし以外のひとの場合にはもっと楽かもしれない。

一番妙な体験は、家族でフィレンツェに行ったとき、当時6歳の次男が道の向こう側からわたしを見てとび出し、バイクにひかれたときだった。息子が頭を打ってわあわあ泣くので、誰かが呼んでくれた救急車に乗ったら、中に坊さんがいたのである。

へえ、さすがにカトリックの国だ、と思ったが、ミラノに帰ってその話をイタリア人にすると、みんな狐につままれたような顔をした。

「坊さんが救急車に乗るなんて聞いたことがないわね。マドカ、あんた何か見まちがえたんじゃない？」

「黒くて長い服着て、腰のところに紐でしばってたけど」

「じゃまちがいない。神父だわ。偶然かしらね」

「いろいろと指図してたわよ」

「何それ。縁起の悪い」

病院の神父だって、一番用があるのは死ぬときである。ま、息子は無事だったから、祟（たた）られたわけではない。

八章 退院

イタリアの病院でよかったことも、もちろんないわけではない。病室は2人部屋で、シャワー室とトイレがついていた。手術の翌日でも、下半身が流せるのはひどく嬉しかった。じきに洗面台で髪も洗った。不思議なことに、イタリアの病院では携帯電話OKである。禁止の札は見たことがない。おしゃべり好きなイタリア人はメールをあまりせず、よく家族や友人相手に携帯でベッドでしゃべっている。

それから、食事。昼食と夕食がいつも同じボリュームで、プリモ（副菜）、セコンド（主菜）、野菜、デザートとそれぞれ3~5種類の中から前日に選べる。2週間もいればひととおりは食べたような気がするし、みんな薄味で、美味に慣れたイタリア人は肉を「材木みたいやね」「味ないわねえ」とくさす。野菜はサラダでなければヨーロッパの常とて、例外なく「グッチョンチョン」に柔らかく、煮過ぎて風味も失せている。フランス人のマルティンが言っていたが、「歯ごたえのある」野菜炒めというのは、ヨーロッパでは「生煮え」なのだそう。

しかし感心したのは、厚めの皿がかなり温められているうえにぴっちりとした蓋つきで、熱い料理はいつもほんとに熱かったことである。わたしには珍しかったせいか、味も何も満足だった。少なくとも、日本では公立私立合わせて5軒入院しているが、そのうちの4軒よりはずいぶんマシだった。

これが、国民保険ではなく民間保険利用の、日本で言う特別室ばかりの階だと、専門のコックがいて料理がレストラン（レストラン）級、らしい。物好きにも覗（のぞ）きに行った患者が、エレベーターを出たとたん「犬でも追いかうように追い返された」とニヤリと笑って言っていたが、万事ケタ違いに豪華だ、という噂である。

わたしはこっちで充分で、病室ではなく食事室でみんなと食べるのも、気分転換とおしゃべりによかった。イタリア人は開放的で、外国人のわたしが疎外

感を感じたことはない。日本人が閉鎖的といわれるのがよくわかる。しかしどの病院でも食事室があるわけではなさそうだった。

夕食のとき、神父がワインを片手に回ってくる。昔アガサ・クリスティの推理小説で、キリスト教の聖職者はカラー（衿開き）が後ろ向き、と書いてあったが、確かにそのとおりの服だった。一言話し、祈り、みんなでアーメンを言って乾杯すると、ミサの時間を告げて去る。

わたしはこのカトリックの総本山の国にしながら、まだ教会の礼拝（ミサ）に行ったことがなかった。信者でないからだし、また多くの教会でも礼拝の時間は観光客を入れない。見世物ではないのだ。ねえ、暇つぶしに行ってみようよ、とマリアンジェラを誘うと、いいけど、暇つぶし、っていうのはないわよ、とたしなめられた。

教会は9階にあった。さすがに街中の教会ほどではないが、天井が高く、そこここに木を使った、なかなか立派なつくりで、病院にこんな施設があることはいいことだと思った。死期を前にざんげもできるだろうし、悟りが開けないひとは神に救いを求めたくもなる。ひとり静かに祈りもできる。

何せがん病院である。

死は、少なくとも死の観念は、あまり遠くない。

カトリックの国だとはいえ、日本人の機能一点張りでは出てこない発想ではないか。そういえば、以前行った近所の総合病院にも礼拝堂があった。

礼拝そのものは神父の言葉があまり聞き取れず、立ったり座ったりで、へえ、というくらいだったが、この神父はアコーディオンも弾く。左手で和音のボタンを操るタイプの楽器で、土曜の夕方など、廊下の片隅のソファのあるあたりから、映画音楽か古い流行歌かが流れてくる。音を聞きつけて入院患者がひとり、ふたりと増え、即興のペアを組んで抱き合って踊りだすのまできている。一度は上の階から降りてきた男性が、ちょっと貸せ、と神父から楽器をとりあげ、2、3曲得意げに弾いてみせた。

教会ばかりではなく、この病院には地下に劇場まであるのに驚いた。このあ

たりはさすが音楽の国イタリアである。200 人はゆうに入るだろう。木曜の晩ボランティアで喜劇をやるという手づくりのポスターが 10 日ほど前から食事室の扉に貼ってあるので、行こうよ、と声をかけ、何人かで行った。点滴の台をひきずったガウン姿の観客に、家族か看護師か、普通の服のひとも混じる。役者は確かに素人の集まりでそれなりのできだったが、観客はけっこう笑い、湿っぽく退屈な入院生活の中でいい気晴らしになった。

別の夜にはベネツィアから来たという合唱団のコンサートもあった。喜劇に比べて哀れなほど観客が少なく、舞台の上の合唱団の人数とそれほど違わなかった。日本だとクラシックファンは全人口のざっと 1 パーセントだという。イタリアではさすがにそれよりは多いだろうが、やはりポップスのほうが人気があるらしい。わたしの耳には声も歌も悪くなく、コンサートのあとロビーで合唱団とともに出されたワインが術後とあって飲めないのが残念だったが、満ち足りた気分で病室に帰った。

話し相手専門のボランティアのおばちゃんも回ってきた。わたしは特に必要を感じなかったが、内科などで長く入院すると退屈するし、人生の終わりを意識すれば、愚痴や弱音、後悔に思い出話も含めて、話したいことが多いひともあるだろう。

入院一番の「当り」だったのは、同室のロセツラだろう。大柄で、眉が太く目が大きく、人柄はしごく落ち着いて、イタリア人の常でいつも薄化粧していた。日本ではほんとの顔色がわからないから、入院患者の化粧は普通禁じられているのよ、と言うと、へええ、なるほどねえ、効率と正確さを重んじる国らしいわね、(でもそこまでしなくても) という顔をしていた。

ロセツラは、イタリア全土を長靴に見立てたらつま先にあたるカラブリア州から、はるばる 800 キロかけてミラノまで手術のために来ていた。このがんセンターはそのくらい国民の信頼を受けている。造園をやっているという無口な大男の旦那もミラノの親戚の家に泊まり、毎日来ていた。

病室に腰を据えた日に、テレビは？ とロセツラが聞くので、あなたが持って

来なければならないわよ、とわたしが以前言われたとおりに言うと、口をあぐり開けてあきれていたが、たちまち親戚の家から持ってきた。

ロセツラはものすごく親切だった。南イタリアのひとは北イタリアのひとを冷たいと言う、と聞いていたけれど、ロセツラとその家族と知り合ってどういふことかよくわかった。とても温かい。わたしと知り合ったばかりだというのに、十年來の友だちのようにロセツラから発される好意の波が強く、自然なものとして感じられる。他人への壁、というものを感じさせない。

手術の夜、わたしは自分 1 人では起き上がれなかった。右胸から腋（わき）へと切られたあとが痛くて痛くて、からだをねじるのも曲げるのもままならなかったのである。立ってトイレに行きたいが、その夜の男性看護師はおそろしく不親切で怠惰で威張っているヤツで、呼べども呼べども来ない。見かねたロセツラが上手に手を貸してすっとわたしを起き上がらせ、立ち上がらせて、部屋の隅のトイレまで連れて行ってくれ、わたしが用を足すあいだ、点滴のスタンドがじゃまして戸が閉まらないのを、向こうを向いて手で支えてくれていた。恥ずかしかったが、背に腹は変えられず、好意に甘えた。

あまりにわたしの手助けが上手なのに驚くと、いつもやっているから、とサラリと言う。次男のアンジェロに生まれつき心身の障害があり、小さいころは障害を克服するための体操を習いにスイスまで親子で泊りがけで行っていたし、車椅子生活の今でも、車椅子の乗り降りから学校の宿題まで全面的に手伝ってやるらしい。しかしロセツラは事實は言うが、愚痴は言わない。負担だとか耐え難いといった感じはかけらもなかった。まさに献身的な母親だった。

旦那がまた誠実な様子で、ロセツラがわたしより 2 日遅れて手術に行ったときなど、檻の中の熊よろしく巨体で無言のまま狭い病室の中を歩きつめるか、じっと座って聖書を読むかである。心配と、神への祈りが、からだ中から発散されている。ベッドで横になっているわたしが気詰まりなほどだった。

「ロセツラが手術の晩はわたしが手助けするね」と約束していたのだが、旦那が食事はスプーンで食べさせるし、本人もひとりで起き上がる。手術自体が軽く、全摘でもないしリンパも取らなかった、という違いもあったらしいが、

わたしが手を貸す必要はまるでなかった。

退院してからも手紙のやり取りがあったのが嬉しい。

退院は術後 1 週間ほどたってから、と聞いていたら、わたしは少し遅れた。リンパ節を取り出した腋の下はごっそりとえぐれているし、右の乳房をまるまる取り除き、再建にそなえて直径 15 センチほどの生理食塩水入りの円形の袋を代わりに入れたので、切って縫ったあとは直線に過ぎなくても、その両側の皮をはいで中をいじったところはかなりの面積にのぼる。それが全部問題なくくっつかなければならないので、いくら内臓に関係ないとはいっても、やはり小さな手術とは言えないだろう。

傷の長さは 20 センチほどだが、その下のわき腹に穴を 2 カ所開け、膿（うみ）を出すためのチューブがそれぞれ入れてある。日本で言うドレンチューブだ。チューブは 1 メートルほどの長さで、蛇腹型のプラスチック容器まで続いている。ベッドにいるときはこの容器を床に置くが、歩き回るときは、ボランティアが縫ってくれたという長い紐のついた布の袋を肩から下げる。わたしは紫色を選んだ。

毎日看護師が容器の中の液を出し、測る。最初血が混じって赤っぽいのが、しだいに透明な薄黄色になる。この液の量が両方とも 100 cc 以下にならないと退院できない。しかし手術の翌々日が 320 と 120、1 週間後でも 110 に 60。わたしよりあとに手術したマリアンジェラが先に退院していくのが羨ましく、恨めしい。計測が、いいかげんなイタリア人のやることで、容器をよく絞るひとも、さっさと終わるひともいるので、あまり正確ではない。

手術の次の日にはリハビリが始まった。強制ではないから、熱があるひとや興味のないひとは来ない。時間を決めて何人かが集まり、おじいちゃん先生の言うとおりに輪になったりボールを使ったりして簡単な体操をする。

リハビリといえば、日本で手術をすとかしないとかもめて半日入院したとき、隣のベッドのもう手術をすませた初老の女性が、「腕がここまで上がるようになるまでは退院できないと言われて、リハビリをがんばっているのだけれど、

なかなか痛くてできないんですよ」と嘆いていたから、これは気をつけねば、と思っていたのだが、やってみると、1年前肩を脱臼したあとでかなりやったリハビリとよく似ている。

中年以降で脱臼すると、ひとにもよるのかもしれないが、あとでまるで肩が動かなくなる。痛くてかなわない。リハビリに行ったほうがいいわよ、と友人から忠告されたが、どこへ行けばいいのかわからず、しばらくほうっていた。一度国民保険のきかない医者に行って診察のためだけに1万5千円も払い、それ以上法外な金は出せないとしリハビリは諦めていたら、子どものサッカークラブの仲間の親が、懇切丁寧に教えてくれた。

このジョヴァンナは母親ながら、男どもに混じってクラブの世話役を買って出るくらいの積極的で親切なひとで、わたしが国際クラブ以外で最初に名前を覚えたイタリア人でもある。とは言っても外国名前はよく忘れるので、わたしはジョーヴァネ（若い）ジョヴァンナ、と覚えることにした。名前なんだっつけ、という時に、「若い」を思い出せばあとが出てくるのである。本人に言ったら、そうよ、若いのよ、アハハ、と喜んでいた。

「あのね、マドカ、まずあなたの『かかりつけ医』に行っておね、リハビリが要るっていう指示書もらうのよ。それからガルバニャーテ・ミラネーゼの総合病院に行く。整形ならガルバニャーテが一番だからね。行ったらロビーに自動券売機があるから、1回700円の10枚綴りを買う。で、受付に行くの。空いている時間の中であなたの好きな時に予約とってくれる。毎日、1カ月やるのよ。絶対治るから」

毎日1時間は少々面倒だった。しかし、作業療法士は親切な女性で、わたしを横たわらせておいて、自分が手を貸してわたしの腕をいくつかの方向に押し上げる動きを何度もやったあとは、棒や布を使った簡単な体操をわたしにやらせた。すると、こわばっていた肩の関節が行くほどにほぐれるのがわかった。リハビリのコツもひとつ習得した。必ずゆっくり。急な動きはダメ。ゆっくり何度もやる。痛くなる場所の寸前まで動かして、やめる。無理はしない。慣れ

たらそこで初めて、少し痛くなる場所まで動かす。そして、毎日続ける。

連日行くうちに、他の療法士や患者と顔見知りになった。ある日「中国人か？」と聞かれて、「違う、日本人よ」と答えた。定番の受け答えである。イタリアでは初めから日本人かと聞かれることのほうが珍しい。中国人のほうが圧倒的に数が多いのだ。日本料理店よりは中華料理店のほうがはるかに多いし値段も安く、わたしが中華街を歩くと、中国語で話しかけられるくらいである。

すると、「なんで日本人は中国人を嫌うんだ？」と聞かれた。面食らいながら、「別に嫌いじゃないわよ」と答え、ただね、と付け加えた。

そのとたん、おやと思うほど静かになった。部屋中のイタリア人がわたしの答えに耳を澄ましているのを感じる。普通のイタリア人にとって、外国人の生の声を聞く機会はやはり少ないのだ。

「通りで家族連れとすれ違うでしょ。すると子どもが、ほら、チネーゼ（中国人）だ、チネーゼだ、て言う、あれはイヤね」

「そりゃそうだ」「あたりまえだなあ」と口々に声があがった。「俺らだってイタリア人だ。それをフランス人とかドイツ人だとか言われたらイヤだもんなあ、違うって言うぜ」

こういう反応はまだいいほうで、日本は中国の一部だとか、大陸の一部だとか思っているイタリア人もたくさんいる。年齢に無関係で、地理は習っていないのか、と言いたくなるが、何年か前にユーゴスラビアが内戦に陥ったとき、その位置を初めて知った日本人も多いはずだと思えば、いずれも同じ、ということか。

さて、ドレンチューブから出る液の量が術後 8 日目にやっと 70 と 50 cc に減った。あくる金曜日はまた 100 と 70 に戻ったが、週末ではあり、まあよからうと退院することになった。

嬉しい。

これからは家で毎日計り、3 日後の月曜日にまた病院に来いという。病院は街中にあるので、郊外のわが家から通うには、車だと早朝で 40 分、遅く出ると

渋滞で2時間かかる。そうでなければ1時間と少しかけて車、地下鉄、バスと乗り継がなければいけない。それでも家のほうがいい。

5月に入り、庭の赤い薔薇の隣には、名はわからないが可憐（かれん）な白い花と、薄紫のライラックが咲く。メルロが鳴く。この真っ黒い鳥は、春から夏まで半年近くよく歌う。それも、ことばではとても言い表せないが美しいメロディで、「鳴く」のではなく「歌う」という表現がぴったりである。日本の鳥にもホーホケキョだとか、チョットコイだとか、ツキヒホシ（月日星）なんとかだとか長く囀（さえず）るのはいるけれども、こんなに音楽的なのは聞いた覚えがない。オペラで世界的に有名な国にふさわしい鳥というべきか。声も豊かなアルトである。

見ていると、夕暮れ時にあっちのアンテナ、こっちの樹のてっぺんといった高みで、雄どうしが鳴き交わしている。まるで会話をしているようだと言おうが、たぶん現実には、「ここは俺の縄張りだぞ、入ってくるなよ〜」「そうかわかった、こっちはぼくの縄張りだからな、こっちにも入ってくるんじゃないぞ〜」という意味だろう。朝は暁と同時に、この歌声で目を覚ます。夢見心地に鳥の歌を聞いているのは天国である。わたしはこのメルロの歌が、イタリアに来て一番好きなもののひとつなのだ。

暗くて憂鬱（ゆううつ）な秋と違い、春は太陽の光がきらめく。イタリアの5月は1年中で一番きれいな季節である。ところが、16日ぶりに家に帰り、ひさびさの畳に布団で眠り、昼はメルロの唄を聞きながら居間から庭を見て、ああ他人のいない空間とほいものだ、と一息ついていると、だるい。

微熱がとれない。

手術後だからあたりまえだよ、ゆっくりしてなさい、と夫はわたしの入院中と変わらず洗濯などしてくれる。

欧米の会社では、社員が残業せず定時に帰ることが圧倒的に多い。夫は朝8時前に家を出て車を20分運転して会社に着き、夕方6時前後には帰ってくる。そんな余裕のある暮らしだから家事もできるのであって、これが日本だとまず平日に夫の手伝いは期待できない。イタリアで手術できてよかったのである。

まったく、会社員がちゃんと働いたあと、自分のための時間がたっぷりあることがこんなに「豊か」なことかと、イタリアにいると心底思う。その点日本はいくら金があっても「貧しい」と言わざるを得ない。

微熱は1週間ほど続いたあとで平熱に戻り、ドレンチューブも退院3日後と9日後に抜き取られた。チューブを引き抜くときにムチャクチャ痛い。体内の余分な液を取るため、穴がたくさん開いたチューブが10センチ以上体内に入っていたので、からだの内側がそのあたり全部、一瞬とはいえこすられたのだ。家で消毒し、しばらくして穴はふさがった。

腋（わき）の下がえぐれている。しょうがあるまい。触ると骨がわかるのはリンパ節を取ったせいだろうが、皮膚の感覚がない。何かが触れているという感覚も、痛みもない。妙な感じである。無感覚なのは背中に近い部分から、わき腹にいたるまでかなりな広範囲にわたる。反対に、二の腕の内側は、ちょっと何かが触っても飛び上がるほど痛い。おろし金ですられているような、けがをして赤剥（む）けの皮膚を触られたような、鋭い痛みである。腕など手術でいじってはいないのに。

通院の際聞いてみると、無感覚という皮膚の異常は残念ながら完全に治ることはない、とのことであった。しかし腕の痛みはそのうちなくなるそう。夫に聞くと、一度切れた神経がつながる速度は、他の筋肉や皮膚の回復に比べて非常にゆっくりなのだという。デリケートで複雑な組織ということか。

再建にそなえ、乳房を取ったあとで入れた袋に、2週間ごとに注射で生理食塩水を足してふくらませ、胸の皮膚を伸ばしていく。100cc足されると、皮膚が張って痛い。出産後に赤子が乳を十分に吸ってくれないと、できた乳で乳房がパンパンに張って痛いことがあったが、それと同じ痛みだった。苦情を言い、その次は60ccにしてもらった。ロセツラは痛み止めをもらったと言っていた。巨乳のイタリア人ならかなりの量と回数、食塩水を足さないといけなだろう。

大病院への通院でとまどったのは、待合室から診察室に入るときに、椅子と鏡と鍵がついた1畳ほどの「脱衣室」があいだにあって、そこで診察に不要な服を脱ぐことだった。たいてい診察室1つにつき脱衣室が2つあり、前の患者

を医者が診ているあいだに次の患者が脱いで待っているのです、どうも医者の待つ無駄な時間が少ないようである。初めは「脱衣室」というイタリア語がわからず服を脱がずにいたら、看護師さんが教えてくれた。

お乳を診てもらう場合は上半身裸で診察室に入る。ちょっと恥ずかしい。これが婦人科になると下半身裸で部屋に入るので、恥ずかしいを通り越してかなり居心地が悪い。が、そういうものらしい。婦人科で診てもらったとき、下半身むき出しのまま、超音波の画面などを見ながら医者と話ることがあった。なんというか開き直ったら別に平気で、日本の、開脚台の上で医者とのあいだにカーテンがあるのよりは、よほどわたしは好きである。恥ずかしさはあるけれども、わたしのからだはわたしのもので、医者に悪いところを診てもらうのもあたりまえ、ならばそれについてその場で話すのもあたりまえだから。

手術後、摘出したリンパ腺にがんが転移していなかったかどうか検査してわかるまで3週間かかる。幸い、転移はなかった。夫はおそろしくほっとしたらしい。再発率、生存率ともに、リンパに転移があるかどうかで、お話にならないくらい違うからである。転移がなければ再発率は1割以下、当然長生きもかなり多いが、転移があれば5年生存率（非再発率）は半分を切る。実際、あとのことだが、わたしの「戦友」も1年以内に2人死んだ。

わたしは乳房を温存したかったので、化学療法を手術より先にやっている。そのおかげで、リンパにすでに転移していたがんが消えた、という可能性もあるのではないかと夫に聞くと、そりゃそうかもしれないね、と答えた。

夫が、安心したよ、転移してなくて、と友人のジャンフランコに告げたときには、そうだってね、よかったねえ、と彼はもうその事実を知っていた。ジャンは夫のいる製薬会社の研究所でも臨床、つまり新薬が実際患者にどう効くかどうか試す、という部門におり、したがって病院と関係が深いようで、いつもわたしの治療法にしても成果にしてもわたしより先に実に詳しく知っていて、夫に説明してくれたらしい。わたしの担当医についても、病院でナンバー2のベテランだから安心していい、とか院長と話をしたよ、とか語っていたそう。

夫は、よく気を使ってくれていた、とたいそう感謝をしていた。

しかし、日本人と違うところは、ジャンは夫が尋ねなければ告げないところで、決して押しつけをしない。夫はそのほうがいい、気が楽だ、と言っていた。

ジャンは元々会社の副社長をしていたのだが、両親が年老いたので海外勤務を拒否して一時干され、その後降格を受け入れたという、それでも会社では上のほうにいる60歳近い人物である。欧米だと、仕事を離れたら上役でもヘイコラする関係にはない。友人は友人で対等である。夫もわたしと同様、この手の上下関係の少ないヨーロッパの風土が、えらく気に入っていた。

このジャンフランコ、イタリア人には珍しく非常にシニカルな雰囲気をもった皮肉屋で、初めてわたしに会ったときには呆気（あっけ）にとられた表情だった。妻のダーリーンやわたしの夫からわたしのことは聞いていたはずだが、どうもわたしがもっと美人でおしゃれだと（勝手に）想像していて、実際のわたしがブスで垢ぬけない「芋（いも）」なのに驚いたのではないか、という感じだった。わたしの夫は男前である（とわたしは信じている）が、それにひきかえ自分の見栄えが悪いことくらい、わたしは承知している。ジャンの驚愕ぶりは単純におかしかった。それに、彼は「イメージと違う！」という様子は露骨に表していたが、「何だこのブスは」と軽蔑する感じはまるでないところに好感が持てた。

わたしが肩を脱臼して右腕を吊ったまま立食パーティに出たとき、ジャンは「それじゃ食べられないだろう」と食べものを口に運んでくれた。夫でさえそこまでわたしにしてくれたことはなかったのに。イタリア男は基本的にどんな女にも優しい。わたしは当然辞退しまくったのだが彼はものともせず、ほら、口を開けて、と強引にフォークを突き出すから、ま、いいか、と食べさせてもらった。サラダを一皿食べ終わるころ、ふと離れたところにいる夫を見ると、ぽかんと口をあけてこっちを見ている。おかしいやら可哀そうやらでわたしは爆笑してしまった。

化学療法中にも、奥さんの夕食の差し入れについて来たとき、長身のジャンフランコは「おう、マドカ！ 具合はどうか？ よさそうじゃないか！」と叫ん

で、わたしを抱きしめ、持ち上げた。この辺は色男として世界に名高いイタリア男である。ハゲ頭に帽子をかぶったわたしはキャットと言って笑いながら、でも気分は悪くない。色気はかけらもない。奥さんの目の前である。わたしの亭主の目の前でもある。ふたりともニコニコして見ている。

奥さんのダーリーンは一時夫の会社で英語の先生をしていた。ある日廊下で夫と出会い、「あら、元気？」とチュッ、チュッと両頬にキスしあったのはいつもどおりなのだが、その日夫の後ろには、日本から来た同僚がふたりいた。

ダーリーンは派手な美人である。

「誰だ、今の？」

「ん？ 女房の友だちだよ」

「なんでだ?? ただの女房の友だちとチュッするか？」と彼らが怪しがったのは想像に難（かた）くない。

この、友人と出会ったときと別れるときに、「抱きあう、ほっぺにキスをする」というのはイタリアでは普通だが、日本人のわたしが慣れるのには時間がかかった。

相手が女だとまだいい。わたしがニコニコして片言のイタリア語で話していると、すぐに親近感を持ってもらえたらしく、初対面の老婦人にギュッ、チュッとやられたのは、イタリアに本格的に住み始める前に、家の下見に行つて帰るときだった。逃げる間も固まる間もなく引つかまれて頬にキスされた。

はあ、へえ、ほっぺたと言えど女にキスされたのは初めてだわ、こういうことをこっちのひとはいつもやってるわけね、はあ、それにしてもばあ様のほっぺと言うのは柔らかいもんだわ、というのが初体験の印象だった。

見ていると、女性陣は他人の亭主にもかまわず、ギュッ、チュッとやっているが、わたしにはとてもできない。亭主にぼやくと、「あれは握手かキスかは女性に選択権があるんだよ、男性じゃないよ」と言う。そういえばわたしは男性陣とは常に握手だったが、それは積極的に手を出さないでいるわたしに向かって、いつも男性のほうが片手を差し出していたからだった。しかしフランス人

と結婚している日本女性はいつも帰り際に自分から男性に両腕を広げている。もっとも抱き合うといっても、普通はお互いの二の腕に掌をかけるくらいで、抱擁というにはほど遠いし、キスもほんとは唇が頬に触れるとは限らない。音だけというのも多い。

住み始めて1年半後だった。子どもの中学校のスポーツイベントが夕方まで続き、先生や親がハンバーガーなどの屋台も出す。ワインを多少飲んで帰り際、一番仲のよかった、夫の直接の上司でもあるクリスの髭面（ひげづら）にチュッ、チュッとやったあとで、

「結婚以来、亭主以外の男のほっぺたにキスしたのはあんたが初めてよ」と言ったら、クリスはたまげた。

「えっ、初めてだって!? ほんとかい？」

「ほんとよ。日本じゃこんなことしないもの。ふだんからひとに触る習慣ないし、ほっぺにキスなんてお母さんが赤ちゃんにするか、恋人どうしくらいで、友だちは普通しないわ。家族のあいだでもしない。ましてや他人の亭主のほっぺなんてとんでもない。こっちじゃみんなやってるでしょ、でもわたしにはずっとできなかった。イタリアに来て1年半かかったってわけよ」

「へーえ！」

よほど驚いたとみえて、彼はその後3年たっても覚えていた。

この、抱きしめる、という行為。

慣れると、いい。

イタリア男のイヴァンも、奥さんのスウェーデン人のカリーと自宅でのクリスマスパーティにわたしたちを呼んでくれたとき、「ああ、マドカ、マドカ、元氣そうじゃないか。よく来てくれたよ」と玄関でオーバーの上からハゲ頭のわたしを長々と抱きしめた。ああ、気にかけてくれていたのだな、としみじみ嬉しい。

そしてがんにかかったと告げたとき、治療中に出会ったとき、何人もの女友だちが、わたしをギュウウッと抱きしめてくれた。イギリス人のアン、イタリ

ア人のジョヴァンナ、南アフリカ共和国人のトニー、インドネシア人のラニー。
今でも忘れられない。骨組みの大きな、上背のある白人女性に抱きすくめられ
ると、安心感がある。いやらしさなど欠片（かけら）もない。

からだの温もりが伝わってきて、心も温もる。

すごく。

ことばでは表されない、同情、心配、友情、好意、応援、いろいろなものが伝
わってくる。

心の弱っているときに、あんないいものはない。

わたしはいろんなトラブルにもかかわらず、がんの治療を日本でなくイタリ
アでしてつくづくよかったと思っているが、理由のひとつはこの「ギュウウ」
である。

九章 夏の一時帰国

2002年6月末、子どもたちの学校が終わり、例年通り日本に2カ月ほど一時帰国することになった。航空券を見ると、マドカの名前がMadakoつまりマダコになっている。

わたしは蛸（タコ）ではないっ。

慣れない外国名前がまちがわれるのは日本だって同じだが、テロ以後、空港では名前が1字でも違えば別人として処理され、搭乗が拒否される。つくりなおしてもらった。

帰国の前の日、わたしは夫とふたりで市の中央警察に行った。没収されていた夫の日本国内用の運転免許証を「取り返す」ためである。

取り上げられたのは2週間前。

日本の梅雨並に蒸し暑い夕暮れで、わたしは晩ご飯のしたくをしていた。トマトのスパゲッティと、スカロッピーナという豚肉料理用のために、にんにくを大量に薄切りにする。イタリア料理のコツのひとつはにんにくで、スパゲッティ用なら1人につき1片ほどの量を、極上のオリーブ油で5分ほど焦がさないよう煮る。これのにんにく臭さがとれ、なんとも言えない風味だけが残る。オリーブ油も、最初はケチって安いのを買っていたら、どこがあの騒いでるオリーブ油なんだろう、と首をひねるほど菜種油と変わらなかった。が、高いのを試しに買ってみると、う、うまい。たまげた。ものすごいコクがある。で、わたしは一番安いヤシ油と高いオリーブ油の2種類を買って、ここぞ、というときにだけ高いオリーブ油を惜しまず使う。

スカロッピーナは、レストランで食べてうまかったので料理法を聞いて以来、家でもよくつくる、簡単でうまい豚肉料理である。豚肉の味がしっかり感じられるわりに、さっぱりしている。豚カツ用の肩ロースを、豚カツの半分の薄さと大きさに切り、塩胡椒（こしょう）して中火でにんにく風味の油で焼き、火が通ったら4人分で1個分くらいのレモン汁をかけ、水どき片栗粉でとろみを

つけて、おしまい。イタリアだとアミド・ディ・マイズ、つまりトウモロコシでんぷんを使うが、これは日本の片栗粉とほとんど同じである。片栗粉と言っても今どき原料は片栗ではなくじゃが芋だが。

うまいイタリア料理には、絶対ここは手を抜いてはだめ、というポイントがいくつかある。イタリア人は必ずそこに手間と暇をかけ、「便利」な「まずさ」を却下する。6人前の「うん」という料理をつくるには、2時間くらいよくかかった。

その日、いつもなら遅くても6時半には帰っている夫が帰ってこない。はて、おかしい、と何度か時計を見たころ、電話が鳴った。交通事故を起こしてしまって車がないから、迎えに来てくれという。

間の悪いことに、ちょうどわたしの車は修理に出していて家に車がなかった。イタリアで代車が出ないのは普通である。誰に頼もう、と知人友人の顔をあれこれ思い浮かべ、よし、インドネシア人のラニー、と決めて電話をかけた。少し前に彼女のお母さんがインドネシアから来たとき、心臓が悪くて病院に救急でかかるのに通訳かたがたつきあっている。国際クラブを通じた外人どうしの助け合いだ。

ラニーは、わかった、でもちょっと待って、乳母に子どものことを頼んでおくから、と言って電話を切った。この家にはインドネシアから連れてきた住みこみの乳母兼女中がいるのである。

体重40キログラムのラニーが、体重120キログラムの石油関係の会社勤めのアメリカ人と知り合って結婚して、最初の子が生まれた。夜昼問わず赤ん坊は泣く。ときには抱いて歩かない限り、泣き続ける。音（ね）をあげたラニーに、母親は乳母を算段してきて、当時の旦那の赴任地であったクウェートと一緒に連れて行けと言った。あんたにはひとりで子育ては無理よ、と。

だいたいがお嬢様の出である。父親は外務省の事務官で、ラニー自身も子どものころミラノのインターナショナルスクールに通ったと言っていた。第三世界では特権階級のエリートだろう。

が、彼女に言わせると、上には上がいるそうなのよ。

同じ団地に、ということはウチと家の広さは地下室を除けばそんなには違わない、ということだが、父親ほどの歳のイタリア男と結婚した若いフィリピン女性が住んでいる。彼女の家には住みこみの乳母兼女中に加え、運転手までいるのだという。しかも、運転手専用の車まである。

「だからね、彼女は自由なのよ。わたしは行きたいところがあっても、子どもの学校の終わるころには、必ず車で迎えに行くために帰ってなきゃいけない。彼女はね、乳母と運転手を子どものお迎えに行かせて、自分はずっと遊んでいられるの！」

さて、ラニーの運転で夫を拾いに行ってみると、夫は溶けかかったアイスクリームをスーパーの袋にぶら下げて待っていた。いつもの帰り道が事故か工事がえらく混んでいたのだから、車を煮やして違う道から帰ろう、とUターンをしかけたところ、後ろから中央線を越して疾走してきたバイクをひっかけてしまったのだった。

まわりのイタリア人が警察と救急車を呼び、おまえは車を動かしてはいけない、と言うから、車を道の真ん中に置いて渋滞をさらにひどくし、気のいいイタリア人が自発的に交通整理をしてくれるので夫がそのまま待っていると、警察が来た。夫は迂闊（うかつ）にも知らなかったのだが、そこは追い越し禁止区間でUターンも禁止だった。中央線を越したバイクもよくはないのだが、夫のほうがもっと分（ぶ）が悪い。

ここまでなら罰金だけですんでいた。が、イタリア人は警官といえど話し好きである。ふだん夫のおしゃべりの度合いは、特に初対面の人とではわたしよりはるかに低いのだが、このときは興奮していたせいか少しおしゃべりをした。

「いやいや、イタリアに来て4年経つのに、交通事故は初めてだよ、まいったな。女房は何度もやったけど」

この無邪気な一言で、彼は墓穴を掘ってしまったのであった。

「なに、おまえはイタリアに来て何年も経つのに、まだイタリアの免許を取

っていなかったのか」

イタリアの法律では、他国の国外免許（国際免許）でイタリアを運転しているのは滞在開始 1 年以内に限られる。2 年目からはどうするのか。イタリア人同様にイタリア語で試験を受けてイタリア免許を取るか、二国間協定がある場合のみ、それに基づいて他国の免許とイタリアの免許を交換するかの、どちらかである。EU 加盟国については、自国の免許で EU 内はみな運転できる。

来てしばらくは、わたしたちはそんなことは知らなかった。ふだん日本人とマメにつきあっていないと、不便なこともあるのだ。やがて、日本と結ばれていた二国間協定が何かのトラブルで一時停止になり、最近になってまた有効になった、と聞いたような記憶はあった。

近所の、多少のつきあいのある日本人に尋ねると、うん、ウチはね、日本の免許をイタリアの免許と交換しました、と言う。「だけどそれだと日本にちょっと帰ったときに免許がなくて不便でしょう。だから警察行って、なくしました、って嘘ついて、再発行してもらうんです」

なるほど。

が、面倒だった。イタリアで行くべき場所が今ひとつよくわからなかったし、2 万円以上のお金もかかると聞いた。行ったはいいが、窓口がどこかわからない、やっとたどり着いたら、これこれの書類が足りないから出直してこい、でも昼からは開いてないからね、はい今日は時間切れ、というのも充分考えられたので、勝手のわかった日本に帰るたびに、1 年有効な国外免許をとるほうがよほど簡単だったのだ。

もっともその国外免許でさえ、イタリアで万事 OK とはいかなかった。来て間がないころ、ミラノの一方通行だらけの街中を四苦八苦しながらわたしは車を走らせていた。気がつくと、交差点で左折したくて中央線沿いに止まったのに、行く先には左折禁止の標識がある。おまけに対面しているバスの運転手は親切に手を振って先に行けと合図する。ええい、ままよ、と左折したら婦人警官が待っていた。

日本の国外免許を見せると、パラパラとめくって見た彼女、「イタリア語で書

いてないわね。わたしに読めないから、ここでは無効よ」

確かに、アメリカの国際免許は 11 カ国語で書いてあったが、日本のは英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語の 6 カ国語だけで、地球レベルでは読めない人が多かろう。

が、憤慨したわたしはイタリア語で力説した。

「なにを言うか。わたしは合法的にここに来た日本人で、これは日本国政府がわたしに出した、立派な、合法的な運転免許である。わたしがここで運転するのは正当な行為だ」

が、当時わたしのイタリア語は下手だった。わたしがまちがえるたび、彼女は眉をしかめた。英語とイタリア語はかなり近い。英語をローマ字風に読めばいいのがいくつかあるので、わたしがまちがえて政府をゴベルノメントと言ったとたん、彼女は諦めた。

「もう行っていいわよ」

一瞬訳がわからなかったが、どうも彼女は、イタリア語がろくに話せない外国人を相手にする根気がなかったらしい。罰金を払わないですんだ、と理解した瞬間、わたしはバックミラーを見てアクセルを踏み、尻に帆掛けて逃げ去った。イタリア語で政府はゴベルノという。

イタリアで警官に捕まったら、「一言もイタリア語を話すな、イタリア語がわかるふりもするな。自国語でまくしたてろ。そうすればイタリアの警官はたいい諦めて無罪放免になる」とは、外国人の常識である。

日本の警官はどうなんだろう？

さて、夫は許可期間を過ぎていながら国外免許証で運転し（つまり無免許になるのかな？）、事故を起こしたかどで罰金をくらい、さらに国外免許証と、日本の免許証と、ご丁寧に車まで没収された。日本では考えられない処罰であるが、ここで車の没収はかなりフツーにやられる。没収期間は 2 カ月。

わたしとは違い常識人でごねない夫は、おったまげたが、すなおに従った。翌日から、車で 20 分かかる会社へ自転車をこいで行くという。4、50 分は優に

かかるだろう。

「バカなこと言いんさい、わたしが送ってっただけ。あ、でも、あしたはいいけど、あさってはわたし朝から車が要る」

「だろ。いいよ。自転車があるから行くよ」

高緯度のミラノの6月は暮れるのが遅い。午後10時まで明るい。会社の終わる午後5時はまだ、カンカン照りとまではいなくても充分暑い。

夫はみるみる痩せた。中年太りでここ何年かズボンの買い替えやウエスト直しが頻繁（ひんぱん）だったのが、あつという間に腹のでっぱりが平らになった。が、さすがに帰ってくるとシャワーを浴びて長々とひっくりかえっている。

イタリアはそれでいい。2カ月待てば。

問題は日本である。

この夏、夫は珍しく1カ月間東京で仕事をするようになっていた。車がなければ駅まで足がない。田舎住まいなので車は必需品。日本の国内免許証だけは必要だった。

「だいたいさ、国外免許証だけ没収すればいいのに、なんでまた日本の免許まで取り上げたんだらうね？」

「俺にもわからん。見せろというから見せたら取り上げられた」

「見せなきゃよかったのに」

「もう遅いよ。まさか取り上げられるとは思わなかった。返してくれるかな？」

「ふん、わたしが強気で押して、言いまくってやる。何がなんでも、絶対取り戻す」

「頼むよ。しゃべるならあんただ」

「まかしとき」

ミラノ市街の指定された警察の窓口に出頭すると、イタリア人には珍しく、あまりぱりっとしていないポロシャツを着て、頭の薄くなりかけた冴えない中年男が、「日本の免許証は返せない」とぼそぼそと言う。「それは困る。返せ」

と鼻息荒くわたしが言うと、「ではフンツィオナーリオへ行くか？」と聞かれた。

フンツィオナーリオなるものが何のことやらさっぱりわからなかったが、憤然として「行く」と答えると、ちょっとそこで待っているとされた。しばらくすると、何人かで中庭を歩いて移動することとなった。

隣のおしゃれなイタリア中年女性に、「あなたもフンツィオナーリオへ行くのか」と尋ねるとなずく。「ちょっと悪いが、フンツィオナーリオというのは人なのか場所なのか教えてくれ」と頼むと、彼女は珍しげに数秒間またたきもせずわたしを眺め、そして、唇の片端で薄く笑って一言、「人よ」と言った。わたしが無知で無謀なのにえらくあきれたらしい。あとで辞書をひくと、フンツィオナーリオは上級官吏の意味だった。

フンツィオナーリオは受付のしょぼくれ男とは対照的な、しゃきしゃきとしやべる、絵に描いたような官僚風の男だった。ぱりっとした背広に白いワイシャツ、気のきいた色のネクタイ、銀縁のめがね。髪は短く、若い。わりにいい男。

が、傲慢だった。

国外免許も、日本国内免許も、返せない、と言う。

「どうして？ だいたい日本政府の発行した日本国内用の免許を、なんでイタリア警察が没収するのよ。いったいそんな権利あるの？」

彼は、国外免許は国内免許に付随して発行されたものだから、という説明をし、また日本政府の出したものであるから、イタリア警察はこの免許証を日本領事館に返還する、わたしたちには日本領事館から受け取ってくれ、と言った。

「いつ？」

「今から日本領事館へ送るから、連絡があったら日本領事館へ行ってくれ」

「それは困る。わたしたちはあした日本に帰るのよ」

「何？ ほんとうか」

「ほんとうよ。あしたの飛行機のチケットがもう買ってある」

「ではそれを見せなさい」

「ここにはない。家にある」

「では取りに帰りなさい。とはいってもこの事務所はあと 30 分で閉まる。時間がないならファックスでチケットのコピーを送りなさい。それを見せて、あした帰国するということが証明できなければ、免許は絶対返すわけにはいかない」

思いがけない展開に目を白黒させているうちに、わたしたちは廊下につつき出された。「官僚」はすでに次の人と話をしている。

ファックス。チケット。

家にファックスはない。あるのは、家から車で 5 分の文房具店。が、14 歳の息子に、行ったことのないわかりにくい場所を電話で確実に理解させられるだろうか？ 日本とは違い、スクールバスで遠くの学校へ通い、近所にはごく限られた友だちしかいない状況では、彼の頭の中の地図はえらく狭い。チケットを手に道をうろうろ走っているあいだに、まずまちがいなく正午、カーン、タイムアウト、だろう。

どうすべきか夫と言い争いをしながら、わたしはアルゼンチン人のサラに助っ人を頼むことに決めた。サラはなんと、6 人の子持ち。受胎制限をしない敬虔（けいけん）なカトリックだと本人は笑う。姓がまたカサノヴァ。歌劇では色男で名高く、百人切りをしたとかしないとかの手合いと同じ名である。子だくさんになるわけだ。その 6 人の子のうち、2 人がウチの子と同じ学校で同年なので、ガハハという性格も含め、サラはわたしとわりにウマが合った。

わたしは珍しく持っていた携帯電話でサラに、すまないがウチに行って息子の差し出す飛行機のチケットを、ここの番号にファックスで送ってくれないかと頼んだ。ついで息子呼び出し、なんで俺がこんなことを、と文句をたれるのを非常事態だと怒鳴りつけ、飛行機のチケット 6 枚を入れた引き出しを探させる。

時計を見ながらじりじりバタバタしていると、「官僚」がわたしたちをさんづけもせず大声で呼びつける。今さら何だ、と部屋に入ってみると、ほらこれ、と夫の日本の免許証を手を持っている。「今からこの事務官に日本領事館まで持って行かせるから、領事館であなたの免許証を受け取りなさい。領事館に

は連絡をしておく」。そばに受付のしょぼくれ男が立っている。

飛行機のチケットうんぬんの話はいったいどこへ消えたのだ？

狐につままれたような気分だったが、この機会を逃してはならないことだけは、夫もわたしも即座に理解した。

言われるまま下で待っていると、しょぼくれ男が足音高く階段を下りてきて風のように部屋に入っていきながら、事務室の扉をものすごい音をたてて閉めた。彼はわたしたちにか、上役にか、それとも何か他のことにか、猛烈に腹を立てていたのである。

しばらくして、彼はわたしたちに封筒を渡した。自分で日本の領事館に持って行けと言う。わたしは夫と顔を見合わせた。

ま、手間を省いて、要するに返してくれるってということね。

とはいえ、順法精神にとんだ日本人夫婦はその場で封筒を開けるにしのびず、ふたりで首をかしげつつ、「あれは何だったんだろうねえ？」「言うべきことだけ一度言ったらあとはできなくても気にしないんだよ。で、お昼は絶対ちゃんと食べたいんだよね」「勤務時間外に働く気ないもんねえ」などと話しながら、てくてく蒸し暑い石畳の道をご丁寧に日本領事館まで歩いて行ったのであった。

領事館員はもちろん、イタリア警察から何も聞いていない。目をぱちくりとした事務官にわたしたちはざっと事情を説明しながらともかく封筒を渡し、一言説教をくらい、封筒の中身を返してもらった。

イタリア人というのは、本音と建前の使い分けが見事というのか、割り切りが早いいかげんな怠け者というのか、不思議な民族である。

今回の一時帰国のあいだには、子ども4人を日本の小、中学校に夏休みまで20日足らず通わせる、というふだんの仕事のほかに、やらねばいけない大切なことが2つあった。半年後の年末にわたしたちは本帰国する可能性が高く、そうすると帰国するや否や日本で中3にあたる長男は高校受験である。どこなら受験できるか、適当か、願書は、必要書類は、といった情報を、日本にいるあいだにできる限り集めておかねばならなかった。インターネットという便利な

ものがあるとはいえ、細かなことや電話となると国内がいい。もうひとつは慢性の頭痛に悩んでいた中1の長女に、学校が休みのあいだに日本でもう一度医者にかかり検査を受けさせることだった。

いつもであれば忙しさに備えて「一発気合を入れて」帰るのだが、抗がん剤の治療と手術を終えて3カ月も経っていない。わたしの体力はどうしようもなく落ちていて、気合の入れようがなかった。いつも以上に忙しいとわかっているでも。

しかし現在のわたしの本職は「母」である。記入して提出せよと学校から渡される書類には、わたしの職業を「主婦」ではなく「母親」と書きたいとも思うくらいだ。

それを見透かすかのように、8歳の次女がイタリアを離れる当日、「ちゃんと」9度6分の熱を出した。旅行の際の子どもの発熱、というのはもうわが家にとってあたりまえ。強行突破しかない。熱さましをのませ、わたしは飛行場の中をずっと娘をおぶって歩いた。化学療法の後遺症だろう、夏というのに膝が痛い。

ほかの後遺症には、右腕を一番上まで上げると、なんとなく二の腕の内側からわき腹にかけて皮膚がつるような感覚があった。特に、急に腕を上げると違和感がある。洋服などがこすれた時に、皮膚が大根のおろし金ですられたように痛むのも、まだ変わりはない。

切られたほうの腕で重いものを持つな、というのがイタリアでの乳がん全摘、リンパ節切除後の常識だった。7キロまで、と何人かから聞いた。が、飲料水をでかいペットボトル6本セットで買うのがあたりまえのイタリアでは、主婦は重たいものを持たざるをえない。家の外で働いていれば、仕事によってはなおさらである。

頻繁に重いものを持つとどうなるか。腕がむくむ。ひどい場合、反対側の健康な腕の2倍ほどに、指の先まで膨（ふく）れ上がった人をふたり見ている。リンパ節を取られてしまったのでリンパ液の循環がうまくいかず、腕にたまっ

た液が胴体に帰らなくなって、むくむのだ。たちの悪いことに、日本の鍼（はり）が効くらしい、と聞いたほかは治らないと言う。一生ものである。

わたしの場合、重いものは夫が極力持ってくれた。体力がないので、いろんなことはしなくてあたりまえ、と日常生活の水準を下げているので腕がむくんだことはまだない。そのかわり、腕を使ったり振り上げたりしたあと、わきの下の、ブラの横のベルト状の上の部分が、多少むくむことがある。中年になったせいかな、と疑うが、右左を比べるとやはり手術したほうだけなので、やはり手術のせいだろう。

一番の変化は体重かもしれない。前期のきつい化学療法のあいだ、4 カ月で6 キロ痩せた。パンツがずり下がり、からだの丸みがなくなってこれは痩せ過ぎ、みっともない、というところまでいってから、後期のゆるい化学療法に入ったとたん、月に1 キロの割で太りだした。6 キロ増えて元に戻ってもまだ止まらない。だいたい成人してから、わたしの体重は63 キロの高値安定、引越しを機に決心して3 カ月で8 キロ痩せたことが3 回あるが、その後4 年以上続いたことはない。じわじわ戻る。が、63 キロではあまり見た目がぱっとしない。161、2 センチという身長では、ま、55 から58 キロくらいまでが、わたしとして「着映えがする」限度である。これ以上太っては、イタリアで買いまくった服も入らなくなる。11 月を最後に化学療法で生理が止まっていたが、病院では、更年期に入ったせいもあって痩せにくいのかもね、と言われていた。

閉経したのは、化学療法が女性ホルモンにかかわるものだからあたりまえといえそうだったし、毎月のわずらわしさから解放されたのも物理的にすごく楽だったが、心の準備はできていなかった。説明を受けた覚えもない。更年期の早い人は40 歳くらいから、と聞くが50 歳過ぎてからの人も多い。毎月の訪れが順調であった42 歳のわたしは、いずれは閉経するだろうが、そんなものはまだまだ遠い先だと思っていた。妊娠の可能性がなくなる、というのは安心だとも言えるが、なんというか、女として現役ではなくなるような感じも含まれる。さみしい。「ちょ、ちょっと待って」と言いたかった。でも、言えない。もともと自分で選べることもないが、この際生命の確保のほうが先である。

しいて早期閉経のメリットを探せば、浮気しても絶対に妊娠しないことだろうか。ま、幸か不幸か、後にも先にもわたしにその機会はなかったが。

成田空港からは、いつものようにレンタカーの大きいのを2時間運転して自宅まで帰る。へんぴなところに住んでいるのと大人数なので、それが一番安い。時差ボケだろうがなんだろうが、一時帰国はえらく物入りなので、金のかかるタクシーはありえない。腕まくりして慎重に運転する。昨日まで道の右側を走っていたのが今日は左側、ハンドルの位置もウインカーの位置も逆。帰国して1週間ほどは必ず、方向指示器の代わりにワイパーを動かすし、人気のない交差点では反対車線に入る。こっちはちょっと舌を出して「あ、またやった」てなものだが、対向車の運転手は両目を思い切り見開いて口を大きく開け、運悪くわたしの隣の助手席に知人が乗っていた日には、寿命が3日縮んだとわめかれる。

茨城県の自宅は、ありがたいことに遠くの山口県からわざわざ夫の父母が来てくれ、1年分の庭の草を刈り、植えこみの枝を切り、家中を掃除してくれていた。外国暮らしのあいだ、自宅は家具を預けてでも貸す人が多い。ローンの助けになる。しかし、わが家では2年分ほどのローンの額を銀行に残し、空き家のままにしておいた。一時帰国のあいだ住むところを確保しておこうという夫の主張に同意したのである。貸してしまえば一時帰国の際、通っていた子どもたちの小学校からは遥（はる）かに離れた、実家か親戚宅で肩身の狭い思いをするか、狭くて不便なホテル暮らしかになる。6人暮らしのわが家には、どちらも容易ではない。4人の学資保険も2年分払っておいたので、貯金はきれいに底をついた。

ローンと学資保険の残りは、これもありがたいことに義父が「わしが払うちやる」と申し出てくれた。この義父母はホントにわたしたちによくしてくれ、孫たちも目に入れても痛くない、というほど可愛いがっていた。いつぞやミラノに義父から国際郵便が来たときなど、息子であるわが夫に向かって「おまえは『わしのだいじな孫たちの保護者』であるから、からだによく気をつけろ」

とまで書いてあって、夫は慫然（ぶぜん）としていた。この言い方はないよね。

さて、翌日は朝の4時から真っ青な空に、これ以上はない、というほど太陽が輝くカンカン照りとなった。降るほどの蝉の声が余計暑さを感じさせる。熱が下がった次女を次男とともに3キロ離れた小学校へ歩いて行かせたとたん、保健室から電話がかかった。40度の熱だという。「えっ」と言ったきり絶句したわたしは、車を出して娘を学校から医者連れて行き、肺炎だとの診断にもう一度「えっ」と言い、さらに入院しろと言われて三度目の「えっ」を発した。医者は重ねて、日本でこの時期の肺炎ならマイコプラズマ型だと見当がつくが、ミラノから菌を持って帰ったとなると、どの抗生物質が効くかわからないね、と脅かしてくれる。

小児科の名医がいると聞いていた別の病院に、入院のためそのまま回ると、人手不足の折からか小児科は付き添いが必要だという。体力のないわたしはそれを幸い、看護師が去ると同時に、個室の娘のベッドの隣の長いすに倒れこむように眠った。

しかし、実は寝ている暇はないほど忙しい。

日本の田舎の公立小中学校は、たとえ学籍簿に名前ののらない2週間の体験入学であろうと、制服、自転車、雨ガッパ、体操服から体育館履き、上履き、絵の具、習字道具、給食の手拭き、連絡帳、三角定規に至るまで、ほかの子どもたちと同じものを要求する。たぶん、ふつうの国内の転校生と同じ感覚なんだろうと思う。経験の少ないことは、誰だってわからない。が、親が4人分、それをそろえるためには、最初の1週間は時差ボケの中で買い物と借り物に走り回り続けなければならない。娘の夕食が終わるとわたしは家に帰り、買い物に走った。義母が用意してくれた夕食を食べ、シャワーを浴びてから、病院に戻り長いすで眠ると、夜明けとともに近所の農家のにわとりが延々と鳴き続けるのには閉口した。

帰宅し、受け入れ態勢の遅れた中学校に上の2人を連れて行くと、見かねた夫の母が付き添いを代わってくれるという。ありがたかった。義母がいてくれ

なければどうにもならなかった。義父は予定通り3日ほどで帰ったのだが、義母は切符を代えて残ってくれたのである。とはいえ車は1台、義母の送り迎えはわたしである。

いつぶっ倒れるか、と思うような日々で、娘の入院が2日で終わったのにはほっとした。ミラノから持って帰った菌もマイコプラズマ型で、抗生物質がよく効いて半日も経たないうちに熱は下がり始めたのだ。

つけはちゃんと来た。終業式が終わり、今度は頭痛持ちの上の娘を同じ小児科医に連れて行くと、自律神経の検査をしようと言われた。炎天下、別の病院に予約をとりに行った日、わたしは朝から8度の熱を出していた。翌日が検査である。訪れた病院でわたしは意を決して、横になるところを確保できないかと頼んだ。ずうずうしい話である。しかし一時帰国の限られたあいだに検査と診断をすませるには、日にちを替えてもらう訳にはいかなかった。待合の長いすでもよかったのだが、病院側は親切に1室を用意してくれ、娘の検査のあいだわたしは眠った。

娘の頭痛が始まったのは1年半ほど前からで、可哀そうに毎日痛いと言う。ときには学校を休みたいと訴えることもあったのだが、日本の親として、顔を洗って朝ごはんを食べたら治る、学校に行けばよくなる、と叩き出すようにして、実際に休ませたのは3カ月に一度ほどだろう。あとから思うと悪いことをした。

1年前の夏休みに、日本の大きな病院でMRIだのなんだの脳ミソの検査はひとつとおりしてある。イタリアでしてもよかったのだが、どの病院がいいかわからないし、学校を休ませるのもいやだった。腫瘍などの怖い病気はない、とのことではまず安心したが、では何が原因か、となると、誰にもわからない。欧米では偏頭痛が日本より多く、思春期の頭痛がこれまた多い。ミラノインターナショナルスクールで中学校の教頭さんにぼやいていると、

「ウチの娘もそうだよ。思春期のアンバランスだろう」と言われた。

「どういうこと？」

「成長期に身体がどこもかしこも同じように変化成長すればいいけど、ホ

ルモンだの自律神経だの筋肉だの骨だのが、こっちは成長が早い、あっちは遅い、となると、バランスが崩れるんじゃないか。それで頭痛が起こるんだ。成長が止まれば治るよ」

この説は何人かから聞いた。

「ずーっと痛がってたんだけど、それが成長が止まったら、ほんとにウチの子は治ったわね。今はケロツとしてる」

イタリアの小児科医に言わせると、確かではないのよ、ほかに理由が見つからないし、成長期が終わると頭痛もなくなるものだから、そう言ってるだけ、となる。

「痛み止めをのみなさい」

これが効くのがひとつもなかった。日本のも、イタリアのも、片っ端から試し、イタリアのイブプロフェンなど、日本の大人の量の2倍まで試せと薬剤師が説明書を見せて言うから、わたしはそのことばを信じて娘にのませてみたが効かなかった。これにはまいった。毎日頭が痛くては快適でいられるはずがなく、娘は可哀そうだし、親としては無力感を感じる。これが1年後、本帰国したあとでさらに悪化し、不登校となっていよいよ頭を抱えることになるとは、このときは知る由（よし）もなかった。

さて、検査の結果、娘は自律神経の調子が悪いのだと言われた。人間起きているときと寝ているときとでは、違う種類の神経が活発なのだそうだ。そういえば昔、高校の生物の授業でそんなことを習ったような気もする。娘の場合、眠っているあいだに活発であるはずの副交感神経が目覚めてからも引き続き活発で、目覚めているあいだに活発なはずの交感神経が低調である、と検査の結果の折れ線グラフのようなものを見せて医者が解説する。起立性調節障害、という病名がついた。起きた時に調節されるべきところに障害がある、ということか。

体質改善のための日に三度の漢方薬と、痛み止めが処方された。近所のひとに頼んで、もうひと月分はあとで送ってもらうことにする。

次は高校受験を控えた中3の長男。部活をさぼり、ここぞとばかりに遊びほうけている。さらに反抗期まっただなか、よくあることとはいえ、ちょっと許しがたい悪さが家の中で発覚した。私の財布から何度か万札を抜いて使っていたのである。

わたしは大学時代体育会にいて、落ちこぼれ気味ながら合気道の黒帯をとっている。そのうえ、気性としてやることなすことが過激に走る傾向がある。息子を板の間に30分正座させて殴ったり蹴ったりしながら、頭にきて縄で縛って裏の物置にぶち込もうかと言ったら、夫がこの暑いのに殺すなというからやめた。今なら虐待ものである。

それでも、育て方をまちがえたかとわたしは2、3日眠れぬ夜が続き、「あれだけ痛い思いをさせても、喉もと過ぎれば忘れておしまいではないか。ここでよくよく懲（こ）りさせなければ」と考えこんで、強制労働、という手を思いついた。使った金額にふさわしいと思われる50時間分、家で働かせて弁償させるのである。生垣の刈りこみ、庭の草とり、床のワックスがけ、皿洗い、洗濯物干し、トイレ掃除、風呂壁のかび取り……。結局半年がかりで終わらせることとなり、わたしにもよくよく根気が要った。

が、要領のよい息子は「これが終わんなけれりゃ遊びに行けねえんだよ」と、誘いに来た友だちに手伝わせる始末で、わたしが外から帰ってみると近所の子がウチの生け垣をケチョンケチョンに短く刈っていた。

なんのこっちゃない。

勉強はどうか。直前にイタリアで、これまで見たことがないほど悪い通知表をもらってきて、わたしはすうーっと顔が青ざめたが、日本でも息子には受験生という自覚は毛筋ほどもなく、実力テストがあっても習ってないからと先生に言って受けなかった。そうすると、どの程度の高校になら入れそうか、という目安が何にもない。何ひとつ、である。ゼロ。

この田舎の中学校はいいところだが、南米からの移民の子はいても帰国子女は前代未聞で、お世話になるからと重たい缶ジュースを40本も病後の身で担（かつ）いで行って、先生方にひざ詰めで問うてみたが、前例がないし、ろく

に教えてもいない子では見当がつかない、とまるで相談相手にはならなかった。無理はない。先生方も困ったんだろうと思う。

親のわたしがひとりでどうにかするしかないのだ。

バーベキュー・パーティで愚痴っていると、夫の元同僚の奥さんが、塾を活用したら、と提案してくれた。学校は忙しいが、塾は金さえ出せばいろいろしてくれる、と言うのである。

なるほど、とわたしは電話帳でやや都会の隣町の塾を探し、話をして、実力テストを夏休み中に一度、あとはイタリアに帰ってからも月に一度の割でファックスで送ってもらい、回答を送り返して採点、という手はずをつけ、前金で払った。

次は高校の情報収集である。ここ茨城はわたしの故郷でなく、イタリアに来る前にも5年ほどしか住んでないので、基礎知識がない。私立2校と公立1校、そして県の教育委員会に電話をかけ、それぞれ1時間ほどじっくり話を聞いた。別の私立1校には行って、あれこれ聞いた。このあたりの私立には帰国子女枠がなく、公立で枠があるのは地域で一番の進学校だけで、それも「ついていけそうな子しかとりません」と明言する。受験科目が英数国の3科目しかないとは言っても、それを5科目分に計算しなおして他の子と同じように比べるので、国語と数学の劣るのは補いようがない。

能力はあるのだが、外国語で教育を受けていたから、現在において日本でのテストの点がよくない、という子も受け入れよう、そのうち日本のやり方に慣れれば点も上がるだろう、という姿勢がまったくない。ただひとつの日本の枠に、外国育ちだろうがなんだろうがはまらなければ、それでおしまい。

なんという閉鎖的で、柔軟性のない社会であろう。英語のテストでさえ、この子たちは日本語で英語を習ったことがないから、「catのaと同じ発音が含まれる語を下の語から選ちなさい」みたいな問題の意味が理解できないことがある。ましてや日本語に訳す練習なんぞはしたことがない。たとえ意味はわかっても、日本語がきっちり書けないと点はとれない。受験技術に欠ける。

数学は同じだろうと思われがちだが、大学レベルはともかく、小、中学校で

の日本の数学は世界一とっていいほどひねった難しい問題を解かせる。息子はイタリアの通知表では数学がAだった。褒められ、自分でも自信を持っていた。それが日本に帰ると解けない問題ばかりで、文章題はそのうえひっかかる。国語はいうまでもなく苦手で、漢字はろくに書けない。

ここへ来て、わたしはなぜ海外の日本人学校が繁盛するのかやっと理解した。義務教育である小、中学校はともかく、日本で一番閉鎖的なのは高校である。受験が厳しいだけでなく、編入試験が受けられない、受けられても2年生まで、というところがほとんどだった。

やむを得ず、夫の海外赴任が終わっても、上の子どもが海外の高校を卒業し、日本の大学を帰国子女枠で受験するまで母と子だけ外地に残った、という例をミラノで日本人から聞いている。逆単身赴任。会社の補助は住宅にも学校にもつかなくなるから、「1年半で家が1軒建つくらいお金使ったわよ！」と彼女は笑っていた。

ならばと、高校入学の時点で親は海外にいても子どもだけ帰国させ、祖父母宅か寮に入れる家庭もある。しかしウチの息子の素行（そこう）を考えると、とても親の手から離すわけにはいかなかった。寮の居心地がいいとも限らず、「脱走したって連絡が来てね、親があわてて探しに帰国したって人いたわよ」とは別の事例である。

ともあれ、息子がどうにか入れる、かもしれないのは、私立1校だけだった。「お待ちしています」ということばが救いだっただ。それにここは不良が少ないさわやかな感じと評判で、偏差値が低めで入れるかもしれないが不良っぽい服装が眼につく公立校よりは、わが肝焼き息子にとって遥（はる）かに大切な必要条件を満たしていた。

茨城での1カ月が終わり、これも例年どおり山口県の夫の実家に家族6人で帰る。

新幹線から在来線に乗り換えると、めいめいが着替えの入ったリュックを背負った子どもたちに、向かい合わせの座席に座ったばあ様が、あんたらどこか

ら来たんかね、と問うた。「茨城からじゃが、ほんとはイタリアから」と次男が答えると、ばあ様は眼を見開き、「この子頭がおかしいんじゃないだろうか」という顔で母親のわたしを見つめた。わたしがニッコリ笑って「ええ、そうなんですよ」と答えると、ばあ様はまだ半信半疑の態（てい）で、そしたら何かイタリア語の歌を歌うて聞かせちゃくれんかの、と頼んだ。

下の2人の子が愛嬌（あいきょう）好（よ）く、「フラッターリ、ディータリア、リータリア、セーデスタ」とイタリア国歌を歌いだすと、聞いたこともないメロディとことばにばあ様は口をあぐりと開け、これならばイタリアに住んでいるというのは嘘ではないらしいと何度もうなずいて納得し、さらに感激し、財布をさぐって、「ようまああんたら遠いところを帰ってきた、これでジュースでも買いんさい」と4人の子に大枚2千円をくれたのであった。

わたしは子どもたちがこれから先、大道芸人で食っていけることを確信した。

夫の実家は瀬戸内海の近くで魚がうまい。わたしは海で泳ぐのが大好きなのだが、手術前の去年に引き続き、病後とあって、義父母は今回も「まどかさん、泳ぎどもせんことよ（泳ぐなんてとんでもないことは絶対してはいけないよ）」と釘をさす。言わなければ当然の如（ごと）くわたしが泳ぐのは、夫の親もよくわかっている。

そして母が亡くなったあと父だけが暮らしているわたしの実家に顔を出す。男独（ひと）り、さびしいようだがなんとか暮らしている。山口市名物の、雅びて華やかながら、どこか哀れを感じさせるちょうちん祭を楽しみ、母の初盆をすませる。わたしたちが帰って来られない一周忌も同時である。姉の一家も来て、子どもがあわせて7人。とつてもにぎやか。

わたしは坊様のお経が終わったら11人分の茶を出さねば、ということばかり考えていたら、読経の途中で別の部屋の戸がそうっと開いたのに仰天した。うちの三番目が座っていないのにそれまで気がついていなかったのだ。4人の子がいると、2年に一度くらい子の1人が欠けているのに暫（しばら）くのあいだ気づかないことがある。

親戚のところへ顔を出したり、日本の乾物や本を山ほど買いこんだり、あっという間にひと月は過ぎる。

飛行機に乗れば待っているのはミラノ最後の秋……。

十章 ミラノ最後の秋（その一）

2002年8月末、2カ月の日本滞在を終えてイタリアに戻ると、いつものようにミラノはすでに陽射しが弱い。

4月、5月は日光がきらめき、町全体が輝いて見えるほど明るいのに、高緯度とあって秋はどうしようもなく暗い。来た年の落ちこみほどではないけれど、鬱（うつ）になりがちな季節である。

しかし、年末には日本に本帰国することを思えば、惜しむ気持ちを胸にかかえ、去りゆく前になすべきこと、したいことをしておかねばならない。

ひとつはヴェローナという街に、夏の3カ月間だけ行われる野外オペラを家族で見に行くことだった。劇場は今ではアリーナと呼ばれているが、もともとは古代ローマのコロッセオという円形競技場（兼劇場）である。大の建築好きだったローマ人はローマ帝国が栄華を誇ったころ、その広大な版図のあちこちに3階建ての水道橋や、ばかどかい教会、円形競技場、劇場などをつくり、2千年を経て今もなおいくらかを残している。日本の古代建築が木造で、腐ったり焼けたりしてなくなってしまうのに比べ、石や煉瓦ははるかに残りやすい。

このアリーナに実際何人入るのかは、イタリアでは資料を集めるのが難しいのでよくわからないが、1万人は超すのではなかろうか。ローマのコロッセオよりは小さいと思うが、それでも、大きい。外から見ると、ぐるりと城壁がそそり立っているような造りで、雨風に耐え補修を重ねた煉瓦壁が美しい。

ヴェネチアとミラノのちょうど中間辺りにあるヴェローナという町自体も、こぢんまりと美しく、イタリアにはベルガモやルッカなど、中世の姿を残した美しい町があちらにもこちらにもある。ローマやフィレンツェのような大都市も豪華でいいが、大きいだけに、あまりきれいではない区画もある。町としてはもう少し小さめのほうが、まとまった美しさがあると思う。日本人観光客にもぜひおススメである。

比べると、日本にはどうしてこんな古くてたたずまいのある町が残っていない

いのだろうかと思う。山口に長く住むイギリス人が嘆いていた。「京都にはがっかりした。あれを古都と誇るのはおかしい」

「なんで？ 京都の古い立派なお寺は建物も庭もすばらしくて、イタリアの大聖堂並みでしょ？ それにあちこちに『研（と）ぎ屋』とか『染物』とかの古い看板が出てて、ほかの町にはもうないような専門店が昔どおりの店構えで残っているのを見ると、ああ、さすが古い都だなんて感じさせられるわよ」

「そりゃ古い寺や店は残ってるけど、それが全部ぽつんぽつんと散らばってるだろ。すぐ隣には現代的なコンクリートのビルやファストフードの店がばかでかい看板出して並んで、せっかくの情緒がぶち壊したよ。だけど、ヨーロッパの古い町は、ある区画全部が歴史的たたずまいを残している」

「……確かにそうだわ。イタリアでも古い町並みのところは通りが全部石畳で、その地区に近代的ビルはない。新しい店があっても、古い建物の中におとなしくおさまってる。ド派手な看板はなかった」

「だろ」

うーん、たぶん日本人は「かけがえのない歴史」や「町の美しさ」という価値より、「便利さ」という価値のほうを選んでしまったのだろう。それに明治維新以降、欧米の真似をすればいいと信じて、新しいものほどいい、古いものはそれだけでダメ、みたいな風潮があった。今さら日本古来の美しさを再発見しても、一度壊したものをとり戻すのは簡単ではない。

ついでに言うと、日本人の新しいもの好きの根底のひとつには、食文化、なかでも刺身を食べる習慣があるんじゃないかとわたしは思う。鯛（たい）や平目（ひらめ）はねかせたほうがうまいとも聞くが、魚は基本、新しいものが圧倒的にうまい。これはもう、瀬戸内海沿岸に住むと実によくわかる。刺身用なら市場で生きている魚しか仕入れない、と断言する地元の小さな魚屋さんから鰯（ぶり）の切り身を買くと、まな板にのせても反っている。死後硬直がまだとけていないのだ。食べるこりこりとした歯ごたえがするうえに、うま味が強烈である。

脂ののった背黒鰯（せぐろいわし）を梅煮にしても、夏の鱧（きす）を塩焼

きにしても、ことばで説明するのは難しいが、鰯なら鰯、鱈なら鱈の味がしつかりと味わえ、とにかくうまい。この魚屋さんが魚を選ぶ目が確かなのがあるが、新しいからだ。茨城であんなうまい魚を食べたことはない。最近では都会でも新鮮な魚が手に入るとはいうものの、地元で買うのと比べると最低1日は時間が経っている。比べものにならない。

しかし肉は、熟成させたほうがうまいと聞く。新しい必要はない。ヨーロッパの食生活に欠かせないチーズもワインも、上手にねかせると新しい製品にはないうま味が出る。日本はヨーロッパに比べるとはるかに高温多湿だから、食品が腐ったりカビたりしやすく、上手にねさせるのが難しいこともあるかもしれない。

さて、イタリアはオペラの盛んな土地である。ミラノのスカラ座は、オペラ劇場として世界でも第一級で、たとえオペラファンでなくても、昼間の見学だけでいいから一度は見に行ってみよう、という代物である。平土間の一等席の周りを、5階建ての二等、三等席がぐるりと馬蹄形に囲んでいる。天井や壁が、金ぴかの装飾と、フレスコという白漆喰（しろしっくい）に描かれた絵に埋めつくされているが、品は悪くなく、まさに豪華絢爛。歌劇はわからなくても、その雰囲気だけで酔ったようになるほど、いい。欠点は、2階席以上はそれぞれが10人ずつくらい入れる個室になっているのだが、壁で区切られているため、手すりのすぐそばの席でなければんで舞台が見えず、中腰でのぞきこまなければいけないことである。腰が痛くなった。

一方ヴェローナのアレーナは野外だから個室だの壁だのはなく、全部がはるかかなたの舞台を向いている。まわりの階段席でさえ1人1万円くらいするが、これまた、イタリアに住んだなら一度は絶対行ってみるべし、という場所である。最初は近所の音楽店で勧められて2年前、わけもわからず「ナブッコ」を見た。イタリアが生んだオペラの大家、ジュゼッペ・ヴェルディの作品で、日本では聞いたこともなかったが、どうも旧約聖書の出エジプト記を題材にしているらしい。その日はミラノの家を出るのが遅れて、夜の9時から始まる第一

幕はすつとぼしてしまい、しかも何にも予備知識なしで、せりふも筋立てもさっぱりわからなかったが、それでも、すばらしくよかった。

多いときは2百人が舞台に出て、兵士や宮廷の侍女らしい派手な衣装と化粧で、槍やスカートの端をひるがえして踊り、唄う。その迫力。

独唱には凄（すご）みがあふれ、合唱はひたすらハーモニーが美しい。最後の最後まで鮮明なまま、和音が小さくちいさくなって合唱が終わったときの感動は忘れられない。わたしは独唱や重唱はともかく、合唱があんなにきれいだと思ったことは今までなかった。アンコールがかかり、合唱のアンコールが劇中でおこなわれたのも驚きだった。が、それも道理で、その合唱「ヴァ、ペンシエロ」は、百年と少し前にこのオペラ「ナブッコ」が発表されたときに熱烈な人気で迎えられ、以来、第二の国歌としてイタリア国民に愛され続けている、という名曲なのだった。

当時イタリアには多くの都市国家があるだけで、イタリアという「国」はなかった。統一運動が起こり、外国からの干渉があり、戦争があり、という、日本の明治維新を思わせる動乱のさなか、キリスト教徒が迫害を受けエジプトを脱出する筋立てに、イタリア人は自分たちの姿を重ね合わせた、という歴史的背景もあるらしい。

すぐれた芸術は、どんな素人をも、また頭で理解しているとかいないとかに関係なく、ひとの心を感動させるものなのだ。それを知らないのは、ほんとうにすぐれた芸術作品にふれたことがないひとではないか。

今年は日程から「トスカ」を選んだが、残念なことに感動はなかった。「ナブッコが壮大な歴史劇なのに比べて、トスカは愛憎物の室内劇で登場人物が少ないから、野外劇場には向いていなかったね」とは夫の弁である。夜中の12時過ぎてオペラが終わったあと、眠りこけていた子どもたちを立たせて宿に向かい、ゆっくり眠った。翌日、シェークスピアの劇のロミオとジュリエットの舞台というヴェローナの町を歩いてまわったのは楽しかった。

次の「課題」はオーボエだった。イタリアで酔狂にも生まれて初めて手にとっ

た楽器を、2年ほど習ったあと、帰国のつもりで中断したままである。実際は帰国ではなくがんの治療にかかったわけだが、先生のリッカルドはもうわたしが日本にいると思っているのだろう。

わたしより4つ年下で、わたしの倍くらいの体重の持ち主だったリッカルドは、ミラノの名門音楽院ジュゼッペ・ヴェルディ・コンセルバトリーオの出身だが、カトリック大学で吹いていたあと、ヨーロッパのあちこちでも吹いたことがある、と伯母にあたる音楽学院の事務のひとが言っていたと思う。スカラ座でも、師匠の代わりに吹いたことがあると本人は言っていた。が、結婚にあたり、音楽では食えないので会社勤めを始めた、という話で、つまり、第一級のオーボエ吹きではなかったということだ。

しかし、音が美しいとはこういうことか、というほどの音を出した。クラシック音楽の本場イタリアでは、演奏家の層が厚いのだろう。

音が甘い。艶（つや）がある。

しかも哀愁を秘めており、わたしは、自分がなかなか思うように吹けなくても、この先生の音を毎週聴（き）けるだけでいい、この音に少しでも近づきたい、と思っていたものだ。

「いいか、いいオーボエ吹きっていうのは、いい音が出せるやつだ。指がちゃんと動くとか、リズムがあってるとか、そんなのは二の次だ。どんなに正確でも、いい音の出せないやつはいいオーボエ吹きじゃない」

その音がすぐに出せれば苦労はしない。

だいたい、ピアノに小学校のリコーダーくらいしか身近にない、ほとんどの日本人が知らない（少なくともわたしはてんで知らなかった）事実、ピアノ以外の多くの楽器は音程をきちんと合わせるのがえらく難しいことと、同じ楽器でも違うひとが吹くと、まるで音が違うことである。あまり音色の変わらないピアノでさえ、イタリアで娘のレッスンについて行って先生が弾き始めたたん、あまりの音の違いにぶん殴られたような思いをした経験があるが、オーボエなどその比ではない。

まるで、音が違う。ただの1音、ドならドを吹いても、うまいひとのオーボ

エのドは、しみじみと聞きほれる豊かな音である。それだけでも芸術というにふさわしい。しかしわたしのオーボエのドは、ただの音、ただのドに過ぎない。

オーボエは名前が知られてない割には、テレビドラマのい〜いところでバックでソロで流れる、ヴァイオリン級の旋律楽器である。しかも、先生いわく「ヴァイオリンなんてオーケストラに 20 人からいるだろ、オーボエは何人だ？ 1 人か 2 人だ。よっぽど目立てる主役だよ。ま、オーケストラで管楽器やってるやつなんて、みんな俺が主役だと思ってる気はあるけどな」。つまり、劇場の隅々までとおる、いい音が出る、はずの楽器なのである。

オーボエよりもクラリネットのほうが「クラリネットを壊しちゃった」の曲のおかげで名前だけは有名だが、わたしに言わせると、「オーボエによく似ていて、オーボエよりパツとしない、ぼけたような柔い音色がする」楽器である。もっとも、クラリネットのほうがはるかに吹きこなすのが簡単らしい。

わけは、オーボエの口にあたる部分の 2 枚重ねのリードにある。これをうまく震わせてきれいな音を出すのが難しい。クラリネットはリードが 1 枚。リードというのは河原にはえる葦（あし）の茎で、オーボエの祖先はギリシャ時代にまでさかのぼるらしい。

わたしはイタリアにいるあいだに、この楽器の美しい音の出し方だけでも、ものにしたかった。日本では、「うーん、ピアノとヴァイオリンは日本人でも世界的な奏者がいるが、管楽器はねえ……」と先生が言うので、たとえ帰国してから続けるにしても、リッカルドほどの先生が見つかる見込みは薄かった。

中古ながら 15 万円ほど出して、清水の舞台から飛び降りる覚悟で買った楽器がある。プロフェッショナル、と刻まれたプロの演奏会用で、日本で新品を買ったら百万はするだろう、との代物である。先生の「ふん、いい楽器だ。俺のオーボエより高音がきれいに出る」とのお墨つきなのだが、哀しいかな、まだわたしにはその高音がきれいに出せないどころか、音程がとれない。楽器がもったいないのである。

1 年ぶりに先生に連絡をとり、自宅を訪ねて行って奥さんも交え病気の話をし、もう一度教えてくれと頼んだ。音楽学院のほうでも、この 1 年の間に、こ

こらでは知られたパイプオルガン弾きで、ローの町の大きな教会の聖歌隊の指揮も振る、リッカルドの伯父のトイヤ院長が卒中で倒れたとのことで、奥さんはたいへんな苦勞をしたらしい。

11月には再建手術が控えている。わたしに残された期間はわずか3カ月。

3番目の楽しみは詩だった。アメリカでもイタリアでも、詩を書き、発表するひとは結構多い。しかし日本では小中学校で詩を書かせるわりには、おとなの世界に普及していない。どうしてだろう、と考えてみると、俳句、短歌といった伝統的な形式の詩が、現代詩の世界を食っている感じである。あとは歌謡曲やポップ、シンガーソングライターなどの分野だろう。中島みゆきなんて今や中学校の教科書にも載（の）っている。

前にもふれたが、8年前に英語で書いていた詩を、イタリア語学校の先生レナータ夫妻の助けを借りてこの春イタリア語に書き直し、推敲（すいこう）して3つ選び、少し北の小さな町の、イタリア標準語部門の詩のコンクールに送っている。ダメで元々ではあるが、その一方で入賞の可能性は大（おお）いにある、と2人とも強気で信じていた。

ついに10月、電話がかかった。

「もしもし、こちらはレニャーノの詩のコンクールの係ですが、マドカさんですか」

「はいっ！」 声が思わず鋭くなる。

「あなたの詩が最終20人の選考に残り、薔薇賞となりました。」

やった……

「ところであなたの名前は外国人のようですが」

「はい、日本人です」

「イタリアにはどのくらいお住まいですか」

「4年です」

「そんなわずかのあいだにこんな詩を書かれるなんて。素晴らしい」

実際彼は表彰式のときに、わたしの名を読み上げたあとで特別にコメントを

つけてくれ、わたしは非常に嬉しかった。残念だったのは最優秀作品などを印刷した小冊子には、薔薇賞受賞者の名がなかったことと、レナータ同様、「最優秀ではなかった！」ことだった。レナータなぞ、電話したとたん、一等だった？と聞いたくらいである。

四十雀（しじゅうから）

恋を失い命が尽きて
女は
小さな鳥にその身を変えた

一羽の四十雀に

そしてあなたの窓にやってきて
色の淡いあなたの瞳を
小首を傾げのぞきこむ
——それは彼女の癖だった

もしもジ ジ チュイルリ ジ との囀（さえず）りに
あなたが耳を傾けるなら
それは一度もあなたを貫かなかった
彼女の恋の唄（セレナーデ）

もしもきゃしゃな灰色の翼を
あなたが丸い親指で二度撫ぜるなら
それは彼女を爪先立ちで回らせ続けた
火のように熱い夢

羽毛（はね）の頬に流れる冷たい涙を
もしもあなたが見守るなら
それは彼女の鼓動を最後に止めた
暗い色の石

時を超え
何千キロを越え
小鳥はあなたのもとへ飛ぶだろう
ただ一度

枝垂れ桜

この想いを断ち切ろう
と彼が決心した日
一本の桜の樹が
満開だった

樹を見あげ
かすかに揺れている
何千もの薄桃色の花びらの下に
むくわれなかった恋を埋めていいかと尋ねると
桜の樹は
一番長い指で彼の左の頬をそっと撫ぜ
いいよと言った

むきだしの指と爪で穴を掘り
傷んだ心臓を
瘦せた肋骨のあいだから
音きしませてひきずりだした
穴の底にそっと置く
黒い土がくぼみを埋めた

どこか遠くで
何も知らない想われ人が
ふと微笑み
歩き去っていく

春の雨が始まった
新しい墓を
寛大な樹を
うつろな胸の男を
静かにぬらす

水仙

樅の木が七度芽ぶいて葉を落とした後でさえ
あなたが振りはらう虫ほどの重みすら
わたしにはない

一つ空の下にしながら
違う色の太陽がわたしたちを照らす

同じ土の上で

異なる名前の空気をわたしたちは吸っている

水仙が黄色い頭をゆらすとき

あなたが踏みにじる草の葉一枚ほどの厚みも

わたしにはない

ほととぎすが高らかに鳴き誇るとき

わたしの声は

風に揺れる梢のざわめきよりも

あなたの耳には届かない

あなたが振りはらう小虫ほどの重みも

わたしにはない

珍しく翻訳の仕事が入ってきた。イタリアに来て 20 年になる日本人デザイナーが、不況で仕事が少ないから、あらためて自分を売りこむためのパンフレットを作るにあたり、原文の日本語を英語にしてくれないかと言う。今まで翻訳の仕事のほとんどは英語から日本語だったが、アメリカの短大に 1 年いたときにレポートはずいぶん書いたし、イタリアで国際クラブの月報にほぼ毎月何か英語で書いていたから、そろそろ日本語から英語への翻訳をしてみたいと思っていたところだった。日本語のニュアンスを隅々まで理解する能力と、それを今度は読む側から見て、そこそこ英語らしい表現に変える自信はわたしなりにある。

なるべく安くと言うことで結局はタダ働きだったが、洋服から家具、台所小物までデザインする世界は知らないことも多く、おもしろかった。それにこの

デザイナーは、わたしのこの『ミラノで乳がん切りました』の最初の原稿をおもしろいと認めて、北イタリア日本人会報に1年以上連載してくれた、恩人でもある。私とはママ友である彼の奥さんが以前イタリアの病院事情を詳しく教えてくれたお返しとして、しばらくしてからわたしが治療経過をまとめて奥さんへ書き送ったのが発端だが、彼が連載してくれなかったら、わたしはどうして自分の書くものに自信を持てなかったろう。

国際クラブにも、半年の限定ながら役員として復帰した。化学療法のあいだ、晩ご飯を持ってきてくれた20人に感謝するためにも、何か恩返しがあった。それにイタリアでのわたしの生活はクラブなしには考えられない。

年度初めの役員挨拶で、わたしは生まれて初めて英語でだじゃれを言った。

「去年わたしは役員会（ボード、board）にいなかったので、退屈しました（ボアド、bored）。だから今年はまた役員をやります」クスクスと笑いが洩（も）れ、あ、通じたんだ、と嬉しかった。

日本に帰る前に、新しく来たひとのための便利帳のようなものを、どうしても国際クラブで英語でつくっておきたかった。たとえば「健康保険証を手に入れるためには、どんな書類を用意してどこの役所に何時から何時までのあいだに行けばいいか」とか、「もし夜怪我をしたり子どもが高熱を出したりしたら、どこの病院に行ったら何とイタリア語で言えばいいか」から、薬局、靴の修理、ピアノレンタル、水道修理、鍵のコピー、スポーツ教室の場所まで、つまりわたしがアレーゼに引っ越してきてわからず困ったことすべての解決法と注意点を、書き残しておきたかったのである。

引っ越したことの無いひとにはわからないだろうが、この手の情報は新しい土地、ましてや外国では、ないとおそろしく不自由なものである。わからないことだらけで、わたしはどれだけ途方にくれ、落ちこみ、だまされ、怒り狂い、二度足をふんだことか。

おまけにイタリアは開いている時間が役所により違う。町役場が午前中しか開いていないなんて日本人には想像もつかない。道路わきの駐車場の仕組みも、

道路に引かれた線の色で無料か有料か分かれていることや、支払い方法についても教わらなければわからない。車検があると知らないからやらないでいて、高速道路で罰金どころか警察に車を没収されたロシア人もいる。

書き出したらあれもこれもと項目が増え、おまけに電話したり行ったりして細かなことを確認しなければきちんと書けない。結局ひと月たっぷりかかり、20 ページの大作になった。抗がん剤治療の副作用で、まだ何となくだるい日もあったが、今しかない、という事実が、わたしにエネルギーをくれたのだろう。

ところが、役員会にかけ、新しく来たひとのための集まりで配ったところ、どうも反応がぱっとしない。がっくりきた。あの努力は何だったのか。

わたしはボロを着て侮辱された経験が痛く、それを防ぐには、などという項目や、同国人がたくさんいる場合には必要ない情報も多かったためかもしれないが、一部の、たとえばチリから来ていたユージーニアや、イギリス人のアナスタジアなどは喜んで使ってくれた。

意外だったのは、一番利用頻度が高かったのは「子守名簿」だったことである。月報の編集者のドイツ人は、この「子守名簿」だけを毎月掲載した。

日本人には馴染みが薄いのが、欧米では母親が外出しているあいだの子守を、近所の信頼できる中学生や高校生に時給 500 円程度で頼んだりしている。それを聞いて初めはとても驚いた。しかし、たとえば両親がおよばれで食事に出るときに、6 歳の子をひとりで夜 11 時過ぎまで置いておくのは物騒だし寂しがる。が、自分のことは充分自分でできるから、いてくれるだけなら子守は 13 歳でもかまわない、と言うのだ。落ち着いて考えてみれば、確かにそうかもしれない。

国によっては、小さな子どもひとりだけで家に留守番させるのは親の怠慢・虐待であるとして、法律で禁止されているという事情もある。もちろん、赤ん坊がいるからせめて子守の年齢（とし）は 18 歳くらい、というひとはいるが、母親の経験があるひとのほうがいい、とはあまり聞いたことがない。そんなことを言うのは、自分が子守をやったことのない日本人くらいのものであろう。

こちらでは他人を家に入れることも平気である。その理由として、子守には、

子どもが過ごす居間や子ども部屋だけ開放しておいて、親の寝室など他の部屋には鍵がかけられる、という家の造りがある。わたしたちのイタリアの家では、3つの寝室だけでなく、居間、台所、トイレ、風呂、ボイラー室、車庫のすべてに、中と外の両方からかけられる鍵と鍵穴がついていた。それを最初に見たとき、わたしは唐突ながら「前方後円墳」を思い出していた。

仁徳天皇陵（と伝えられている）古墳の形である。昔英語で日本史のさわりを勉強したとき、前方後円墳のことを、フロント・スクエア・バック・サークルなどと訳すのだろうか、といぶかっていたら、英語ではいとも簡単に「キーホール（鍵穴）型古墳」と呼んでいて、あまりの発想の違いに、わたしはしばらくポカンとしていた思い出がある。ホームズやポワロなどの推理小説にもよく鍵は出てきたが、鍵と鍵穴が日常生活に密着しているからこそその呼び名だろう。

話がそれた。

子守。

外国から新しく越してきた幼児連れの家族が必ずといっていいほど最初に尋ねるのが、「ね、ドイツ語を話す子守いない？」「スペイン語話すのは？」である。親が英語を話せても、自国を離れたことのない幼児は普通、母国語しか解さない。今まで国際クラブで何度も「子守募集中」の記事を出しているが、いたためしがいない。

わたしは電話を10本あまりかけた。10代から20代の子どもを持っている各国のひと、アメリカンスクールとインターナショナルスクールのスクールバスの世話をしているひと、その知り合い、それから人づてに聞いていたプロの、イタリア人元保育士。結局男の子も入れて（そう、男の子の子守もアリなのだ。男の子だって弟妹の面倒をみなれている子はあるし、幼児が男なら子守も男のほうがいい場合もある）、12歳から51歳まで、13人集まった。対応できることばが、英語、イタリア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、アフリカーンス、トルコ語の7つ。もちろん、2つ3つしゃべれる子が多い。われながら、自分の人脈の広さと手際、それから国際的な仕上がりのおもしろさにほくそえんだ。

その名簿を印刷に回したら、印刷担当のイタリア人が、
「やっぱり日本人はやることが違うわ、と感心して眺めたのよ」とニヤリと笑
う。

「何よそれ」

「だってさ、名前、苗字、年齢、しゃべれる言語、電話番号、その他、の一覧
表でしょう。おまけに相場まで書いてある」

「それが？」

「イタリア人じゃここまでいたれりつくせり書かないわ」

「そう？」

「そうよ」

わたしは日本人らしくない、と言われ続けてきたが、どうも日本人だったら
しい。この手のそつのなさというか隅々まで詰めがきいたやりかたが。意外な
評価のされかただったが、わたしの最大の置き土産になったのは嬉しかった。

今年わたしが務める役員はお出かけ行事係である。すでに頭に計画はいくつ
かあった。わたしの最後の寿司教室。人気のあるイタリア料理教室。それから
去年計画していたのだが、雨で行けなかったスイスのモンテ・ジェネローゾと
いう山行きである。ここはミラノから近くて、1時間ほどのハイキングが楽し
めるだけでなく、古代の熊の化石が出てきた洞窟があるのだ。ガイドつきで見
学できる。

こんな妙なものをどこで見つけ出したのかと聞かれるが、夫の同僚に三度の
飯より山が好きという男がいて、登山電車と、ハイキング、360度の眺望の3つ
が全部楽しめる山を教えてくれた。家族で行ってみると、登山電車で頂上寸前
まで行ってもよし、最後の1駅の区間を歩いてよし。そこは5歳の子は多少
おぶったものの、7歳の子の足でも1時間半ほどのゆるやかな道で、広々とし
た草原を見おろし、放牧の牛の鐘の音をゴロンゴロンと遠く近くに聞きながら、
山羊が道に出てくればおずおずと撫（な）でてやる、というまことに牧歌的な
コースだった。最後の頂上への登りは険しかったが、三度行ってみて、晴れた

日ならドイツのmatterホルンからフランスのモンブランまで見える。頂上駅の建物にはレストランがあって、絶景を眺めながらの食事が中でも外でもできる。そのパンフレットで、古代の熊の化石が出土した洞窟、とあるのを見つけたのである。

今まで国際クラブでハイキングを計画したことはなかったが、蓋を開けてみるとスペイン人とドイツ人が大挙して申しこみ、空前の30人という数になった。

遠くの空にパラグライダーが豆粒のように小さく、風に乗ってすうっと舞うのを見ながら、草原をドイツ人のモニカと歩いていると、ウチの旦那がね、と彼女が言う。

「40歳を前にやっとかなくっちゃ、ってスカイダイビングを始めたのよ。そしたらあっという間に病みつきになっちゃった。降りる様子を友だちがビデオに撮ってくれたんだけど、飛び降りる直前はまあ彼、真っ青な顔をひきつらして、唇がピクピク震えてんの。マジで恐いのよ。ところが、えいやって飛び降りてしばらくするとね、まああ、ニコオと笑ってね、楽しそうにパラシュートでゆっくり降りていくの」

「あんたはやんないの？」

「わたしはいいわ。冗談じゃない。初めはふたりで降りてくりゃいい、って旦那は言うんだけどね。ちょおうっとね」

「ふうん。わたしパラシュートは怖いけど、パラグライダーはやってみたいわ。落ちるんじゃなくてゆうらゆら飛んでいけるんでしょ。すごく気持ちよさそうじゃない？ 空を飛ぶのって小さいときからの夢よ。空からの眺めも魅力だわ」

外人連中と楽しくおしゃべりをしていると、わたしは家族とすっかり離れてしまった。だいたい、企画者であるからには、全体の面倒をみるほうを優先しなければならないではないか。それに夫も子どもたちも、わたしの友人に愛想をふりまこう、という気はあまりない。

欧米の男どもだとたいていは社会的で、女房の友だちも愛想よくもてなすし、

話題が合いさえすれば結構もりあがるのだが。そういう文化、習慣なのだな、と思う。わたしとしてはウチの夫ももう少し社交をしてくれたら、と思わないではないが、元々の性格もあり、強制できることではない。

家でも、化学療法のあいだ夕食を持ってきてくれた友だちが、子どもたちに、名前はななに、学校はおもしろい？ などと話しかける。そのときの子どもたちの受け答えの愛想の悪いこと。「はい」「いいえ」程度でさっさと2階へ逃げる。叱ると、「だってみんな同じこと聞くんだもん。3べんも言ってりゃうんざりくるよ」。

結局、モンテ・ジェネローゾでは昼こそ家族と一緒に食べたものの、それぞれのペースで頂上へ行き、降りていると、あつというまに夫や子どもがどこにいるかわからなくなった。まだ携帯電話が普及していないころである。わたしはガイドの時間を気にして熊の洞窟に先に行ってみたが、家族は誰もいない。洞窟は思ったより小さく、まだ発掘している最中のようなだった。わたしひとりで熊の化石を見て、子どもたちからずいぶん恨まれた。

十一章 ミラノ最後の秋（その二）

夫族の社交で思い出すのが、スウェーデン人のカリーの家である。月報の配達に行くと、イタリア人の旦那がにこにここと「マドカ、何を飲む？」と尋ね、カリーはでんとソファに腰掛けて「あたし紅茶」などと言っている。「え、そんな」とわたしが恐縮していると

「あのね、マドカ、僕の友だちが来たら、カリーが茶を入れてくれるから、僕は友だちと話してる。カリーの友だちが来たら僕が茶を入れる。そしたらカリーはずっと友だちと話ができるだろう？」

なんと合理的。

なんと男女平等。

感心して家に帰って夫にその話をすると、夫は納得し、以後、わたしに来客があるときに家にいれば、夫が客に茶を出してくれるようになった。日本の男にしては、ものにこだわらない、面子（メンツ）を気にしない、いい男なのである。女房の女友だちに茶を出したくらいで、彼の「おとこ」は下がらない。

面子といえば、カレンとクリスの夫婦がこれまたいい例である。共にイギリス人で、クリスは夫の直属の上司、カレンは国際クラブにわたしを引き入れてくれた恩人で、役員を一緒にやった。このカレン、半分黒人の血をひきながら成績優秀、若くして小学校の校長をしていた、というだけあって、気も押し出しも猛烈強い。友人と話をしているときに亭主が口を挟（はさ）むと、「あんたは黙ってなさい！ もういつも余計なこと言って！」とぴしゃりとやりこめる。蠅（はえ）叩きで蠅をたたき殺さんばかりの勢いで、国際的大企業の間管理職を務める夫の顔をつぶす、なんてものではない。

それがクリス、「ちえっ、これだからなあ」とは言うものの、友人や同僚、部下の目の前で蠅並みに扱われているのに、面子を傷つけられたとか、すねて卑屈になる様子がかけらもない。見ていてこっちは冷や冷やするのだが、当人は、こんな些細なことでは男の価値はまったく下がらない、といった感じで、度量

の広い男とはこんなものかと感心したものである。

イギリス人のニックも、この「男の面子」について興味深いことを言った。

アラブ圏から、イタリアのわたしと同じ団地に越してきたニックは、世界を股にかけて仕事をしている。棚の上にわたしの故郷の大内人形が飾ってあるところを見ると、日本にもずいぶん仕事で行っているらしい。

そのニックが、「人情なんて西洋だろうが東洋だろうがそんなに変わりはないよ」と言う。

「だけど、面子は違うな。それくらいだよ」

メンツ、英語では顔（face）という。日本語でも顔をたてるとか顔をつぶすとか言うから同じことである。

そのときはわかったような、わからないような気がして生返事ですませたが、わたしの亭主があとで、俺も同感だと解説してくれた。彼はここイタリアで、イタリア人を始め、イギリス人、スウェーデン人、アメリカ人などの何百人という社員の中で、唯一の日本人どころか唯一のアジア人として働いている。その亭主いわく、

「西洋の『おとこ』にも誇りはあるよ。それは自分が自分に感じるものだ。だけど、他人が自分をどう見ているかにかかわる面子は、そもそも概念としてないね。だから、人前で失敗したら恥ずかしいと思うことはあっても、自分の面子がつぶれたとは思っていない」

「それ、いいね。めんどくさくなくて」

「そうだよ。日本人の面子を立てるのははめんどくさいよ」

西洋のおとこにただあるのは、日本のおとこのメンツよりはるかに傷つきにくく、したたかで、しなやかで、肩に力の入らない、自尊心である。

つけ加えると、夫がこの時期からよく言っていたことに、「完全無欠な人間はいない」という台詞（せりふ）があった。人間は失敗するものである、と。

たぶんこの背景には「完全なのは神のみ」という一神教の考えがある。古くからの格言でも「過ちはひとの常、赦（ゆる）すは神の業（わざ）」と言う。夫

は欧米で仕事をするあいだ、よく「人間だから失敗するよ」という台詞を聞いていたのではないか。

が、絶対神の考えの薄い日本では、人間が完璧を目指して努力する。

それ自体は悪くない。が、人間が完璧であり得るという前提も、そのうえに立った、失敗を考慮しないシステムもまちがっている、と夫は言うのだ。

「だって、人間なんだからどっかで失敗するのはあたりまえじゃないか。コンピュータだってトラブルも入力ミスもある。絶対失敗しないなんて無理だよ。システムをつくるなら、どっかに失敗を織りこんでおかないと、実際に失敗が起きた際に対処できない」

確かになあ。

日本人はマジメ過ぎるから、「失敗してあたりまえ、なんて心の隅で思ってるから気がゆるんで失敗するんだ。ダメダメ、絶対失敗しちゃいけない」なんて考えちゃうんだよなあ。頑張れば完璧になり得る。だからとことん頑張れ、って。

あ一息が詰まる。

だけど、柔軟に考えれば、「頑張る」と「失敗し得る」は両立するし、現実的だ。

システムだけじゃなくて個人的にも、最善を目指して努力する一方で、人間だから失敗することはある、と思っていれば、うまくいかなかったときに、いちいちひどく落ちこむ必要もない。また努力を積み重ねていけばいいだけの話だ。落ちこみやすいわたしは、ずいぶん気が楽になっていった。

国際クラブの行事係としてはもうひとつ、お出かけの計画があった。キリスト教国では教会だけでなく、僧院もあちこちにある。中世、ヨーロッパの貴族や金持ちは、一方で世俗の金儲（もう）けや悪事を働きながら、他方では多くの子どもたちの中から男でも女でも1代に1人は僧院へ送りこみ、やがて教会権力の一端を担わせることで一族の力を高め、また多大な寄付をして一族の罪を浄化させようとした。平安時代の日本の貴族も同じようなことをしている。

現代ではさすがに世俗世界を捨てようとする候補者はぐっと減ってしまい、カトリック世界の頂点に立つイタリアの僧院には、アフリカや南アメリカ、アジアなどの第三世界出身者が増えてきているらしい。

わたしが通っていたイタリア語学校にも、白いスカーフに黒い僧服の 20 歳前後の女性がひとりいて、見た瞬間、この人は日本人か、いやわたしに対する素っ気ない態度から日本人ではない、では韓国人か、と思った。どう見ても黒髪に東アジア人の目鼻立ちだったのである。が、実は南米パラグアイの出身で、アメリカ大陸のインディアンとかインディオと呼ばれる先住民が、アジア人とひどく近い関係にあることをまざまざと感じさせられた。

わたしが小さいころ、日本では世界の 3 大人種として、白人、黒人、黄色人種があると習ったが、フィンランド人のキルシは、あら、4 人種って習ったわよ、白、黒、黄、赤よ、と言う。赤はアメリカインディアンである。インドあたりの「茶」も入れて 5 人種という説もあった。

さて、ミラノの南東の郊外には、キアラヴァッレ僧院の華麗な煉瓦の塔が空高くそびえ立つのが、環状道路からでも見える。

僧院めぐりをしよう。

僧は昔、知識階級であった。日本でも同様だが、皆が字を読めるとは限らない前期中世の社会で、ラテン語の経（聖書）を読む僧はほかの本も読める。インテリで、知識がある。しかし王族や貴族を含む他の階級は基本的に文盲だったらしい。

たとえばフランスにシャルルマーニュという、8 世紀から 9 世紀にかけて権勢を誇った王がいる。彼は文盲でなかったとしても有名なのだが、その父親の小ピピンと呼ばれた王は文盲であった。このことをイタリア語の授業中に知ったときには信じられないほど驚いた。

「王様が読み書きできない？ 文書や手紙はどうしたの？」

「そんなものはご祐筆（ゆうひつ）というのか、書く専門の家来がやればよろしい。王にとって大切なのは政治力や統率力であって、読み書きではないの

よ」

「教養は必要でなかったの？」

「なかったのねえ」

ましてや女性は王妃だろうが公爵の娘だろうが、文盲であるのが長いことあたりまえだったという。日本では 200 年ほどあととは言え、西暦 1000 年ころに紫式部が源氏物語を書いているというのに！

日本では伝統的に圧倒的な男尊女卑、ヨーロッパはそうではないと思っていたのは、誤解だったらしい。少なくとも分野によるのだ。文字に関しては、日本の中世は世界に誇れるほど男女平等であったのである。ヨーロッパで王や公爵などの相続権が娘にもあったのは、日本と大違いだが。

文盲というと、イタリア語学校に通っていたとき、時間割の都合でわたしたち上級者組が初心者組と合併されてしまったことがあった。アフリカのモロッコからの移民のおばちゃんや少年のクラスである。先生のレナータが、あの男の子はともかく、おばちゃんの方はたぶんイタリア語が読めるようにはならないだろうね、教えるけど、と言う。どうして？ とわたしが尋ねると、

「だって母国語で読み書きできないのよ。ことばと文字との関係がまるきりわかってないのよ。それが外国語でできるわけがないじゃないの」と答える。彼女の説明によると、文字と話しことばとの間をイコールでつなげることは、すごく抽象的な問題で、そのジャンプは成人してからでは無理だという。

「今までにも 50 歳代の文盲のイタリア人を教えたことがあるの。彼は熱心だった。だけどどうしても書いてあることがそのとおりに読めなかった。何でも食べ物に読んでしまうのよ」

ふむ。文字と話しことばとの関係。確かにその 2 つには根本的に違う要素があって、変換するには発想の一大転換が要るかもしれない。

英語は字と発音が必ずしも一致しないが、イタリア語は、日本語のひらがなカタカナ同様、字と発音が対応している。そのイタリア語でさえ、成人してからでは文盲を克服できないとは。しかし昔日本では、成人してから読み書きを覚えたひとについて聞いたことが何度かあると思うのだが、そこは個人差の間

題だろうか。

イタリア語といえば、学び始めて、なぜ日本語のアルファベット表記を「ローマ字」というのかわかった。イタリア語の表記方法とほぼ同一である。ローマはどこにある？ イタリア。が、イタリア語とローマ字の表記法はまったく同じではなく、たとえばカキクケコはローマ字では ka ki ku ke ko だが、イタリア語では ca chi cu che co となる。ci はチと読み、ce はチェと読む。イギリス人のアナスタジアがこれを嫌がり、ch をカ行で読むのが許せない、と嘆いていた。英語では確かに church (チャーチ、教会)、chalk (チョーク)、child (チャイルド、子ども) など、ch はチャ、チュ、チヨになることが多い。一方で chaos (ケイオス、混乱状態)、character (キャラクター、性格) などケイ、キヤ、とカ行で読む場合もあるのだが、英語ではこれを「硬い」K 音だと呼んで少し違う扱いをするらしい。

イギリス人とアメリカ人がもっと苦手なのがイタリア語のエとエーの発音で、ふたつともほぼまちがいなくエイと発音する。エーやエが入るイタリア語、たとえば地名のアレーゼは、アレイゼイになってしまう。

同様にオとオーの発音がオウになる。カルチヨ (サッカー) はカルチヨウ、ヴィーノビアンコ (白ワイン) はヴィーノウビアンコウ。彼らの英語訛 (なま) りのイタリア語はひどく聞き取りにくく、どうしてだろうと考えていたら、昔わたしが英語の発音で一生懸命気をつけていたことを思い出した。

日本語でエイという発音は、映画 (えいが) だとか指名 (しめい) だとかの単語の中に存在するのだが、英語の発音となると、tape がテイプではなくテープ、cake がケイクではなくケーキになってしまう。だから日本人が英語らしく発音しようと思うと、かなり意識してエイと言わねばならない。同じように、Coca Cola はコカコーラではなく、コウカコウラと、オウの発音で言わねば英語ではなく、和製英語である。

これを英語人の立場から見ると、彼らにとってエーは不自然で、自然にエイになってしまうのではないか？

しかし、一番英語人が苦手なのは、実はイタリア語の発音ではない。イタリア語、あるいは外国語そのものである。

イタリアに住む外国人を、わたしは少なくとも 30 カ国から来ているひとを知っているが、一番、断トツに、まちがいなくイタリア語が下手なのは、アメリカ人とイギリス人である。英語の習得に汗水たらして苦しんだ日本人のひとりとしては、根性悪を丸出しにして「ざまあ見やがれ」と舌を突き出してあっかんべーをしたいほどで、何年イタリアにいてもまるで話せない、というのがあっちにもこっちにもころがっている。

なぜか。

世界中どこへ行っても、英語を話してくれるひとがいる！

自分が精出して他のことばを覚えなくても、他人が代わりに自国語を話してくれるから、英語だけでかなり生活していけるのだ。

それに比べ、小国の人間ほど、自分の言語は狭い範囲でしか通じず、他のことばを話さなければ他国では生きていけないから、必死で外国語を学ぶ。フランス人、スペイン人のほとんどが、同じラテン系のことばであるイタリア語を、3 カ月かせいぜい半年もすれば、ろくに習わずとも流暢（りゅうちょう）に話しているのを別にすると、スウェーデン、ノルウェーなどの北欧系が、次に上達が早い感がある。

どうももうひとつの理由は、すでに外国語を知っているかどうかではないか。イギリスやアメリカの義務教育に外国語が含まれているのかは、大きな疑問だ。

母国語以外の言語を習う、ということは、もうひとつ別の文化を学ぶ、ということである。頭が柔らかくないとできない。

どうしてイタリア語には名詞に女性名詞と男性名詞があるの？ ドイツ語なんてそれに中性名詞が加わり、北欧言語のひとつにはさらに中性名詞が 2 種類あるらしい（ウツォー）。どうして英語は同じ食べるでもわたしが食べるとき（eat、イート）と、彼や彼女が食べるとき（eats、イーツ）で動詞の最後が違うの？

いやいや、イタリア語なんてそんななまやさしいもんじゃない。

食べる、というイタリア語の原型は mangiare (マンジャーレ) だが、現在形だけでも、主語によって動詞が 6 とおりに変化する。わたしが食べる(mangio、マンジョ)、あんたが食べる(mangi、マンジ)、彼が食べる(mangia、マンジャ)、わたしたちが食べる(mangiamo、マンジャーモ)、あんたたちが食べる(mangiate、マンジャーテ)、彼らが食べる(mangiono、マンジャノ)と。迷っても無駄、しゃべりたかったら拒絶反応は蹴っ飛ばして、丸ごと受け入れるほかない。

だから第 3 言語の習得は、すでに頭が柔らかくなっているぶん、第 2 言語より楽である。わたしの場合、英語は 3 年前アメリカの短大で A (優) をいくつか取ったくらいだから、そのあとのイタリア語はずいぶん楽だった。

スウェーデン人のエヴァにその辺を聞いてみると、スウェーデンでは、テレビ番組で子ども用も含め英語の放送がかなりあることと、大学などで使われる専門書は読むひとが少ないから、特に理系の場合、もうけにならないスウェーデン語の翻訳はまずないこと、よって大学生なら英語の専門書が読めてあたりまえになる、と言っていた。

彼女自身はスウェーデン語と、スウェーデン語に近いドイツ語、それから英語、イタリア語の 4 カ国語を話す。ゴッテンブルグ (スウェーデン語ではイエテボリ) 交響楽団の経理か事務かを勤め、7 年間世界中を回って日本にも来たと言っていた。フィンランド人のキルシもフィン語、英語、滞在していたスペイン語、そしてイタリア語の 4 カ国語を達者に話す。

日本にいたころそれを聞いたらおったまげていたと思うが、3 カ国語を話すトリリンガルの今となつては、ああ、できるだろうな、と思う。

もちろんわたしも 3 カ国語がみなネイティブなみにできるわけではなく、日本語のレベルが 100 としたら英語は 80、イタリア語が 50 くらいにあたる。たとえば日本でわたしが誰かと話している後ろで、別のふたりが話しているとす。わたしは自分の相手と話しながらも、後ろの会話の 3 割くらいは理解している。それが英語だと 5%くらいで、イタリア語だとまったく無理。英語はリスニングが今ひとつ苦手、たぶん、他人が言うことに耳を傾けるより、自分が

話したいという欲求のほうが強い、というわたしの性格が影響しているんじゃないかと思う。イタリア語のほうはまだ文法を完全制覇していないし、ポキャブラリーも乏しい。

ま、バイリンガルだのトリリンガルだのというのは、そのことばで生活できる、というレベルをさすので、それは、なんとかできる。

ただし、わたしのイタリア語のまちがいは、相変わらずすさまじい。

秋に林を散歩していると、夫が、ここには蕨（わらび）が生えているから今度春に採（と）りに来よう、と言った。夫は生物学を専攻していたせいもあって植物にかなり詳しいのだが、わたしはどうして夫が秋の枯れた羊歯（しだ）の葉を見て、それを蕨が成長した姿と断言できるのか、そして、きわめて日本的だと信じていた蕨がヨーロッパにもホントに生えているのか、半信半疑だった。

春になって家族で行って見たら、確かに日本で見た蕨と同じものが生えていた。それでもまだわたしには100%の確証がなく、煮て食べてみたあとで初めて、これはまさに蕨だと納得し、知り合いの、これも半信半疑の日本人家族を誘って採りに行った。

それを見ていたイタリア人が、あんたたちいったい何を採ってるんだ？ と尋ねてきた。わたしはそのとき羊歯をイタリア語でなんと言うか知らなかったから、「しいて言えばアスパラガスに似たもの」だと答えた。土から出たてで、まだ葉があまりはえていない長い莖、というところが似ていると思ったのである。

「それ、うまいのか？」男性はいぶかしげに尋ねた。

「そう、とっても美味しいのよ。ただね、この植物には苦味（にがみ）があるの。炭酸を入れたお湯で茹（ゆ）でて、その苦味をとらなくちゃいけないのよ」

わたしはそのとき、蕨の「えぐみ」とか「あく」とかいうものをイタリア語でどう説明したらいいかわからなかった。以前英語で調べたときには、「えぐい」

はビターという語のようで、「苦い」は「えぐい」とは少し違うんじゃないかと首をひねったが、広い意味ではあてはまるようだった。

この「苦味」をわたしは盛大にまちがえた。

イタリア語で「苦い」はアマーレというのだが、わたしはアモーレ、つまり「愛」と言ったのである。

「この植物には愛があるから、茹でてその愛をとらなくちゃいけないの」と大マジメに言ったわけだ。背広を着たこの紳士は眉間に深〜いしわを2本よせて、わたしの説明を聞いていた。「この外国人は絶対、何かまちがえてる！しかし、何を、どう、まちがえたんだ!? まるきり見当がつかない」と悩んでいたに違いない。あとで謎は解けたらどうか？

それから、わたしが肩から白い三角巾で右腕を吊っていたとき、「高い窓を拭（ふ）いてて、脚立（スカーラ）から落っこちて肩（スパッラ）を脱臼したの」と2時間で10人のひとに会うごとに説明をしていたら、終いには「肩（スパッラ）から落っこちて脚立（スカーラ）を脱臼しちゃったの」と言っていた。

別のときには、「歳をとるとお乳が垂れるのも重力のせいよね、地球の重力には勝てないわ」と言おうとして、重力（グラヴィタ）を妊娠（グラヴィダンツァ）と言いまちがえ、「地球の妊娠には勝てないものね」と言ってしまったこともある。ありえない。その場は爆笑に包まれた。

こんなまちがいの結果、たいてい雰囲気になごむから、それなりに役には立っていると思うことにしている。外国人が生活していることばをまちがえるのはあたりまえではないか。恥ずかしがってる余裕なんかない。

ま、何カ国語、といっても、ヨーロッパ言語である限り、近い。何せ字が同じ。これは大きい。見たとたん、ずっと字が目にも、つまり脳ミソに入っていく。日本で駅の掲示板の中国語を隣の日本語とよくよく見比べると、半分くらいは見当がつくようなものである。それに、大陸では車で数時間走れば言語が違うことが珍しくないから、異言語は身近である。

字が違うロシア語、ギリシャ語は多少敷居が高いが、それぞれラテンアルフ

ァベット(英語のアルファベットをこう呼ぶ)に1字1字置き換えられるので、それさえ覚えればそんなにひどいものではない。わたしが20代で当時のソ連、今のウズベキスタンのあたりを母と旅行したとき、広場の建物の上を書いてあるロシア語を、持参のロシア語即席会話帳でラテンアルファベットに置き換えてみると、ひとつの単語はレーニンで、もうひとつは革命だった。

これがまるで字が違う言語を3つ、たとえばアラブ語と英語と日本語だとか、タイ語とフランス語と韓国語の読み・書き・話す・聞くができるとなると、ちょっと「尊敬する……」が、そういうひとにはわたしはまだ知り合いがない。

僧院に話を戻すと、1000年近く前のヨーロッパでほんの一握りの知識階級に属していた僧の知識には、キリスト教だけでなく薬草や医学、そして意外なことに科学や農業の分野も含まれていた。

カリーの旦那のイタリア人のイヴァンによると、キアラヴァッレ僧院の始まりは、12世紀にフランスからやって来たベネディクト派の僧たちで、沼地であったミラノ南部の土地に溝を掘って排水をよくし、肥沃な耕地とさせたという。農民の生活改善と食糧増産に多大な貢献をしたのだ。

その話をもうひとつの、すっきりと簡素なモリモンド僧院の僧に話した。見学の許可と予定を組むための下調べのときである。当時もっぱらの話題であったイスラム教の過激派の話から、わたしが政教は分離すべきだと言うと、彼はそれはいいが、自分は、宗教が精神的な支えとなるだけでなく、実際の生活の中でも役に立つ、行動する存在であるべきだと信じている、と、たくましい体格に目を光らせて述べた。

カトリック教会では慈善がひとつの柱である。教会前の広場には決まってカリタ(慈善)と大きな字で書かれた、おとなが「気をつけ」をして立ったら2人くらい入れそうな、背の高い黄色い箱がある。「あなたがもう着なくなった服、靴、かばん、シャツなどを入れてください、貧しい人々に届けます」とあり、わたしも何度か古着を入れた。

活動資金は寄付でまかなわれている、らしい。大きな教会では、ひざまずく

ためのクッションが前についた、硬い木の椅子の背もたれの後ろに、献金用の封筒が置いてあるのを見ることがある。坊主の孫であるわたしの亭主は、坊主はどこも金儲けが得意だとくさすが、一般庶民がなけなしの金をはたいているふうでもない。十代の子ども用に堅信札（けんしんれい）の前の講義をかってでている、うちに掃除に来てくれているシルヴィアはまちがいなく庶民のひとりだが、そんなに寄付していない、と言っていた。一方で金持ちは古くから巨額の寄付をしたり、聖書の1場面を大きな油絵で描かせて登場人物のひとりの顔を自分に似せさせ、教会の壁にかけさせたりしている。

そこで日本の「葬式仏教」を考えると、本気でお坊さんに問いかけたくなる。

あなたは宗教者ですか？

あなたも世の中をよくするために、積極的に何かしようとは思いませんか？

できるとは思いませんか？

あなたたちがもう少しまともな活動をしたら、怪しい、大金をはたいて壺を買わせる「宗教」や、たくさんの人殺しをさせたオウムに、迷いこむひとが減るのではありませんか？

心の闇を抱える人々、自殺したいと悩む人々に、インターネットを通じて魂を照らす灯りをさしのべられませんか？

他国の貧しい人々、地震の被災者に救援物資を集めて送る活動はしないのですか？

日本の貧しい子どもたちを探し出し、一方で寄付を集めて、教育や食べ物の援助をしないのですか？

僧院めぐりの下見には、結局2週間かけて3度も出かけるはめになった。イタリアの教会の多くは昼の12時に閉まり、もう一度開くのは夕方の4時、5時になる。自宅からミラノ南部まで車で1時間はかかるので、朝、えいやっと早く出ないと1回にひとつしか入れないのだが、手術と化学療法のあとでなんとなく馬力に欠け、家を出るのをぐずぐずしてしまう。夕方は鍵を持たない子どもたちが帰ってくるので家を空けられない。わたしに昼寝はあたりまえでもあ

る。

12時半から4時前後まで閉まるのは個人商店も同様で、家に帰って昼ご飯をきちんと食べるためだ。ミラノ中央部の観光案内所でさえ屋閉まっていた時には、眼を疑った。並んで開くのを待っていたイタリア人に愚痴ると、イタリアで食べることは聖なることよ！と冗談で返された。

1日のツアーには3カ所くらい回りたかった。ミラーソレの僧院は農場に近い状態になっていて却下。ヴィボルドーネの僧院はいまだに35人の尼が暮らしており、建物も可愛らしい印象だった。「尼の日課を邪魔してはいけません」「尼の生活場所には入れないですよ」、と釘をさされながら、ここに決定。

ツアーを組むには、昼飯場所も確保しておかねばならない。あいにくその日、間抜けなわたしは財布を家に置いていて、ここぞと目をつけた小さなレストランの試食をすることができなかった。しょうがないから外のメニューと電話番号をメモし、道を通るひとに評判を聞いて、見当をつけた。

最後に、英語のガイドをつければ手配は完了する。以前、しかけ噴水の見事なライナーテの庭園で英語のガイドをしていた女性に頼むと、割に低料金で引き受けてくれた。

日程の都合上、この僧院めぐりはわたしの2度目の入院中になってしまった。ドイツ人のカリンにあとを託したのだが、秋の長雨にぶつかって低地であるミラノ南部は水没しかけ、惜しくも延期。実施はわたしの日本への帰国後となった。

子どもたちの通っているインターナショナルスクールには、毎年秋休みが1週間ほどある。夏休みが2カ月と1週間、冬休みも1週間、春休みが1週間あって、カリキュラムは違うといえど、どうして日本とおんなじような子どもの教育が成立するのかまったく不可解だが、ともあれ、この秋はぜひとも夫と一緒に休みをとってもらって、旅行に行きたい。

シチリアへ行こう！

寸前にエトナ火山が噴火し、「マドカが行くから噴火したのよ」とイタリア人

にからかわれた。飛行機が飛ぶか危ぶんだが、パレルモにはなんとか着けた。レンタカーで移動するが、各地の都市地図を買っておかなかったおかげでかなり迷う。ふだんからミラノで車の運転にまごついていたら、「南の交通事情はもっとすごいよ」と何度か聞かされていたが、実際、シチリアの古くからの商店街での一時駐車はセンターライン上。片側1車線の道のど真ん中に1列に車が止められ、両側をのそのそとフツーに車がすれ違う。これが、日本のように道の端に車を止めると追い越しが難しく渋滞する元（もと）だが、センターライン上に止めると車はずっとその両側を通れるので、渋滞にはならない。合理的である。とはいえ、目を疑った。

道路が5本交わる大交差点に、工事中で信号がない。ぎっしりと各方向向けの車がメチャクチャに詰まり、亭主は悲鳴をあげるのでわたしが運転を替わった。割りこむコツは、抜け目なくあたりの様子をうかがっておいて、すこし空間ができたその瞬間に、別の車の鼻先を抑えるようにスーッと自分の車を前に出すこと。ただし急発進、急ブレーキは厳禁。

アメリカ人向けの英語の安旅行ガイドを参考にしてホテルを選んだら、道路に面した高い木の塀に、ペンキの剥（は）げかけたアーチを描く大きな木の扉。中庭は真っ暗なうえ、ここに車を止めろといわれた場所は乱雑で、まるで資材置き場。貴重品は絶対車内に残せそうになかった。正面階段はすり減っているとはいえ確かに朱の大理石だったが、中も外もロクに灯りがなく、ほとんど幽霊屋敷。

トイレのあかりとりの窓枠にはガラスがはまっておらず、寝室の窓は廊下側。もう1室の窓は高くて空しか見えない。さすが安旅行ガイドのご推薦。ホテルの親父の紹介してくれたレストランも、紙のテーブルクロスにテレビがつきっぱなしという、ミラノではありえない庶民的な雰囲気だったが、味はミラノを超える絶品だった。あんなうまい煮魚は食べたことがない。「海水」と名づけられた澄んだ塩味の煮汁が、料理法は想像できなかったが信じられないほどうまかったうえに、魚自身が新鮮で風味がよく、しかも魚に火が通った瞬間に火を止めたとおぼしき、魚の味を最大限とどめる絶妙の煮方だった。

その後どうにもあの味を再現したいものだと思ひ、洋の東西を問わず出汁（だし）の基本は動物性材料と植物性材料の組み合わせだから、あれは香味野菜であらかじめ出汁をとっているに違いないとあたりをつけた。で、玉ねぎと人参（にんじん）、セロリ、それに庭から採（と）ってきた茎付きのパセリや月桂樹の青い葉、茎付きのローズマリーを水に入れてしばらく煮たあとで、洋風だしの素（マギーブイヨンが一番）を足し、塩胡椒（こしょう）をしておいた鯛（たい）や鰈（かれい）を入れると、満足する味に仕上がった。鯖（さば）や鰯（いわし）などの青魚なら、これに缶詰のトマトを入れてもうまい。いっぺん試してごろうじませ（ごらんなさい）。

翌日、古代ローマ遺跡を訪ねながら走っていると景色が荒涼としている。北のミラノ周辺だと米や麦、ポローニヤあたりだと牧草地やぶどう畑が続くのだが、ここシチリアでは火山灰のせいか土がいかにも痩せていて、耕地が少なく荒地が多い。農家であろうか、点在する家の造りが、いかにも貧しい。マフィアを産んだ貧困がひしひしと感じられた。

そのくせ町に入ると家はひしめきあって道は狭く曲がりくねっている。一戸建てが少なく集合住宅が多いのは、都市国家の名残りか。ミラノも同じではある。ヨーロッパの町はどこも、歴史上何度も、東から攻めこまれたり西から攻め入れられたりしている。その侵略軍から家を守る術（すべ）だったのだろうだが、今なら郊外に出ればいくらでももっとゆとりをもって家が建てられるだろうに、と思う。

カタコンベと呼ばれる地下墓地在（すき）まじかった。娘は夢に出そうだと嘆いた。洞窟の両側の5段ベッドとでもいうべき棚に、ミイラの実物が何百体も残っていたのである。ローマのカタコンベではさすがに実物は置いていなかったのだが、ここではミイラが目鼻が骸骨の黒い穴となっていて、ぼろきれと化した服から突き出した手の骨も足の骨も見える。一番新しいのは1930年代で、かわいらしい写真まで添えられた小さな女の子のミイラだった。遺族は見世物になっている遺体に文句を言わないのだろうか、と、見ているほうが義憤

を感じる。

ともあれ、シチリアで一番よかったのは青い海と空だろう。ミラノの秋がどんよりと暗く気が滅入るのに比べ、ここの明るいこと！

朝海岸を散歩していると、むこうから犬を連れて水着姿の女性のふたり連れが来る。ひとはビキニなのだが、どう見てもふたりとも60歳はとうに越している。ひょっとしたら70過ぎかもしれない。で、ビキニにふさわしい、凹凸（おうとつ）のある肉体なのである。

ずるい。

にこやかにわたしがおはようを言い、「ここはいいわ。きれい、海も空も青くて！」と笑いかけると、「でしょう、ほんとにきれいよね。でもそれしかないけどね！アハハ」と彼女たちも豪快に笑った。

このひがんだところの微塵も感じられない陽気さがイタリア人のいいところだ。

ミラノに帰って、疲れたわたしは予定通り（？）1週間寝こんだ。

それでいい。

人生は一度きり。楽しまなければ損である。

十二章 再建手術

11月の乳房再建手術の入院予定日になっても、例のごとく病院からの通知は1週間遅れるというものだった。まずはすなおに1週間待ったあとで、わたしは病院に電話をかけた。手術の予定であるが、と言うと、係の女性はひどく驚いたようすで、入院の日取りを決めるのは病院であって患者ではない、と居丈高に告げた。

これで引きさがっていても、イタリア暮らしはつとまらない。

「よく聞いて。わたしの名前はマドカ。その予定表のどこかに特にメモがあるはずよ。わたしは暮れには日本に帰るの。待てないわ」

「何ですって。そんなバカな」

主導権と威厳を奪われた彼女はあわてふためき、それでもわたしに関するメモを見つけてくれ、入院は3日後と決まった。

イタリア最後となる国際クラブの会報の記事をまだ書いていなかった。わたしはノートパソコン、息子から借りたCDプレイヤー、バッハのCD、本、雑誌など、暇つぶし用の道具と着替えをかばんに詰めた。日本で入院患者がベッドでパソコンを叩（たた）いているのはそんなに珍しい光景ではないが、イタリアでは皆無である。アメリカ人もそうだったが、イタリア人も公私を混同しない。私生活は大切なもので、仕事などというものに侵入を許しはしないのだ。

2人部屋の病室の隣の女性は、あきれてわたしを見ていた。乳がん患者はいつたいに40代以降が多いが、このモエラはまだ若かった。30歳前後で、彼氏がいい男だった。出産も結婚もまだだと言う。あまり話がはずまなかったのは残念だったが、代わりに別の病室の女性たちと数人でおっぱいを見せ合うことになった。

中年以降でなければあんなにあっけらかんとはいくまい。乳房を今から切ろう、とか再建しよう、という患者にとっては非常にいい情報交換である。なかに、すでに数年前に乳房を再建したのだが、横のわき腹のたるみや変形がひど

くなったので再手術、という女性がいた。彼女は乳首も再建していたが、ぱっと見にはあると思わなかった。本物の乳首が、赤ん坊が乳を吸いやすいように太く立っているのに比べ、偽の乳首は一応それらしい格好をしてはいたが、ヘナンと横を向いて、いかにも頼りなかったのである。皮膚をつまみ上げて輪に縫い縮めることで隆起させ、入れ墨のように色素を入れる、というやり方だと聞いていたから、芯があるわけでもなく、しょうがあるまい。たぶんもうひとつの理由は、白人は黄色人に比べ乳首の色も薄いから、際立って見えないことだろう。

「これなら要らない」とわたしは思った。乳房の再建手術の半年後という乳首の手術時期にはもう日本に永久帰国しているから、元から乳首は再建しない予定だったが、それを残念に思う必要はなさそうだった。

もうひとつの発見は、ホットケーキをくっつけたような、日本人のペッターコ級の小さい胸のひとつも中にいたことだった。「あらあんた小さいのね」と言われ、そうなのよ、小さいのよ、お乳はちゃんと出たんだけどね、と笑っている。そうか、イタリア人でも全員がポインではないのか、と安心する。

手術の前日、中に入れるシリコンを選ぶため、わたしは上半身はだかで数人の形成外科医の前に立った。せいぜい胸を張り、腹をひっこめる。シリコンのカatalogを見ると、まん丸ではなく、自然の乳の形のように、上がやや薄く下が厚い。大きさと垂れ方（！）で何種類かある。そうか、歳をとったひとには垂れた形のシリコンを入れるのか、と感心した。反対側の、まだ残っている乳房にシリコンの形と大きさを合わせるのだが、わたしがついでにこっちにも少しシリコンを入れて豊胸手術をしてくれと頼んでおいたものだから、医師たちの議論が長引いた。

イタリア人は議論好きである。というより、単なるおしゃべり好きというべきか。現状を正確に理解して必要な条件を組み立て、手早く結論を出す、という論理的かつ効率的な思考法はかけらも持ち合わせていない。ヨーロッパ諸国の中でも最悪である。

以前息子のサッカークラブの年度初め、1 チームを組むにはその年齢の子の

人数が足りなくなったので、今までのチームを解散するか、隣町のチームにそろって入れてもらうかについて、十数人の親で話し合ったことがある。ミラノでは基本、チームは年齢別だった。だから先輩後輩の上下関係がない。息子のチーム名はずっとオタタセツテ、つまり生まれ年の 87。

最初の親が俺はこういう理由でこの意見だ、と穏やかに言ったあとで、まったく同じ理由と同じ意見を、次の親が同じくらいの時間をかけて、手を振りまわし熱を込めてしゃべった。「あいつと同じ意見だ」と言えば一言ですむのに、である。わたしは最初自分の耳、つまりイタリア語の理解能力を疑った。が、その後、女親だろうが男親だろうが何人も同じ理由と意見を繰り返すのを聞いているうちに、自分の耳が正しいとわかり、英語で言う（下）顎ががくんと落っこちた状態になった。日本語で言う、あいた口が塞がらなくなったのである。

しかも、じゃあまとめようね、というときになっても司会役の母親までが、もう一度同じことをまくしたてねば気がすまない。「コイツらに耳と脳ミソはないのか？ 口しかないのか!？」とうんざりしていると、ドイツ人の父親が少し離れて立っている。「長いよね」と話しかけると、「おんなじことを何度も繰り返して。ドイツなら 5 分で話はずいてるよ」と苦々しげに首を振る。結局全員が、そろって隣町のチームに合流、という同じ意見だったのに、1 時間半かかった。

その記憶から考えると、今回のシリコン決定も、たぶんあんなに時間をかける必要はなかったのだろうと思う。医師たちはシリコンの大きさを右 420 グラム、左 90 グラムと決めたあと、型番をわたしの胸にマジックで書いた。これならいくらイタリア人がいいかげんでも、手術時にまちがえることはなかろう。右と左の乳房の位置が違わないように、シリコンを入れる上端と下端の線も書き、ガーゼで覆った。病室に帰ったわたしは、ほかの手術前の女性たちにそれを見せて回った。ついでに反対側の乳房も見える。あら、きれいなおっぱいしてるじゃないの、と言われ、ちょっと嬉しかった。ホルスタイン級のおっぱいが、歳をとると容赦なく臍のあたりまで垂れるのに比べ、小さめのおっぱいは

垂れにくい。

街ではときに、乳と尻が歩いてきた、とでも言いたいほど見事な体型の若い女性が、それを見せびらかすようにぴったりしたＴシャツとジーパンでツンとすまして歩いていて、横を見るとじい様が口をあけて見送っていたりする。

地中海沿岸特有の、とイタリア人は言うのだが、街を歩く女性の多くは肩幅が広く、手足が長く細く、そして砂時計のようにウエストがキュッとくびれている。あれはもう、日本人がどう逆立ちしてもできない生まれつきの体形で、「ずるい……」と言いたくなる。

男性のからだも同様で、この生まれながらの美しいからだがあるからこそ、ギリシア彫刻以来、芸術作品でも連綿と人間のからだの美しさを大事にするのだなあ、と思う。変化に富んだポーズの、あちこちの広場の武人や神話の神々の像、教会の屋根の聖人像、噴水を囲む女神や天使の像を見ると、そのモデルになった均整のとれた人間のからだがいかに美しいかは、日常生活にしみわたっている。

日本に帰ると、正直、少女像や青年像にずいぶん違和感がある。日本人の体型では見栄えがしない、という理由もあるだろうが、何も、格好がいい、が美しいとは限らない。なんともいえず、いい、存在感がある、目が離せない、というのが「うつくしい」「いい」芸術作品ではないかとわたしは思う。別の強固な美意識が必要なのではないか。

現代イタリア人にも肥満はいる。日本と同じくらいの割合か。しかし、きつくてボタンがはちきれそうになるような服を着ているひとはいない。あれは余計肥って見えるし、みっともない。わたしのオーボエの先生のリッカルドなど、たぶん体重はわたしの倍以上の130キロくらいあると思うのだが、背広にしろポロシャツにしろ、いつもちゃんと自分のサイズの服を着ているのには感心した。サイズの合った服を着ていると、太っていてもきちんと見える。デブ、とは言いにくくなる。

アメリカだと肥満はまるで珍しくないうえに、スウェットスーツのような伸

び縮みする気楽な服を着て、余って垂れた尻の肉をポヨヨン、ポヨヨン、と揺らしながら歩いているひとがよくいた。髪もしばらく美容院に行っていない気配で、もうおしゃれは諦めたのかしら、と思ったものだ。

イタリア人は肥えてもおしゃれを諦めない。髪も常に短め、こざっぱり。これだけでまず違う。わたしがアレーゼで4軒目にしてやっと見つけたお気に入り美容院で順番を待っていると、同じく待っているとおぼしき若い男の髪が、わたしの目にはどう見ても昨日切ったばかりくらいの長さである。いったいこの男は何をしに来たのだろう、彼女にでもくっついて来たのだろうかといぶかっていると、いやいや、やっぱり髪を切りに来たのだった。短い髪をさらにバリカンで刈り上げ、格好をつけ、なるほどシャキッといい男になった。

こうしてみると、髪がちょうどいい長さを通り越してしまっている、というのはそれだけでおしゃれではないのだとつくづく思う。不精者のわたしにはきつい習慣だった。

もっとも、ミラノのおしゃれで最初に驚いたのは色だった。徹底的に同色系で合わせる。ヨーロッパに「色を着る」ということばがあるのは知っていたが、これかと思った。よく見るパターンは、濃淡や多少の柄の違いを含め、赤なら赤系、青なら青系で上から下までそろえる。灰色や白などを除いて基本、服の色は1系統。中年男性でも、服だけでなく帽子から靴、かばんまで緑系、あるいは茶系、というのを見たことがある。この場合、前にも少し書いたが、単に単色系というだけでなく「色調をそろえる」がミラノファッションの基本中の基本で、たとえば同じ緑でも黄緑は青緑と合うとは限らないが、町で不似合いな緑の組み合わせのひとを見たことはない。朱色でも、赤紫とは合うが青紫とは合わないから、彼らは絶対に一緒に着ない。

どちらかと言えば不美人で、ひどく不愛想な中年太りの郵便局員が、モスグリーンのセーターにほぼ同色のスカート、さらにはそれにピッタリの薄い色のモスグリーンのスカーフを首にさらりと巻いているのを見たときには、わたしは数分間見とれてしまった。一つひとつの色そのものが実にきれいだったうえに、統一感が見事だったのである。別々に買ったらしいのに、どうやってこれ

だけ合う色を探し当てたのか舌を巻いた。

すると、しばらくして、市場の屋台に吊るされたくすんだ青のスカートに、自分が持っているバッグから灰青のセーターをちらりと出して合わせている女性を見た。ははあ、こういう手間を惜しまないのがミラノっ子のおしゃれの秘訣か、と納得がいった。そして、小さいころから両親祖父母が色に敏感ななかで育っているから、10代の子が前衛的で崩した格好をしていても、どうにもならないほどみっともないのはほとんどいない。

ブティックでも、ショーウィンドーに並べたいくつかの服の色の統一感といったら、ため息が出るほど美しい。さすがミラノ。店員も、服のサイズや色が客に似合っていないと判断すると、客に聞かれた場合には正直にそう言う。プロである。日本の店員は売り上げが第一なせいか、客の機嫌を損ねないことが大事なせいか、たとえ内心まるで似合わないと思っても、客に「やめておいたほうが……」とはまず言わないのと大違いである。

それを考えると、微妙な色合わせや試着のできない通信販売は、イタリアではまず流行らないのではないか、と夫は言う。

そして、アクセサリ。どうもミラノでは不可欠らしい。もちろん、服と色をそろえる。

サファイヤやルビーのような「ほんものの」宝石はとても高くて買えないが、半貴石と呼ばれる安いものなら、わたしでもネックレス、ピアス、指輪が同じ石でそろえられる。緑の服ならマラカイト、青の服ならラピスラズリ、紫の服なら紫水晶（アメジスト）、茶の服なら琥珀（こはく）、と安い店を見つけてせっせと買った。

そうでなかったら、ウチに週1で掃除に来るシルヴィアのように金のピアスやネックレス。これなら服の色を選ばない。わたしも帆立貝型の金色のピアスを買ってつけていたら、息子が「あ、母さん、ガソリンスタンドのマーク！」と言ってくれたのにはがっかりしたが。

田舎者のわたしも毎日がんばって服の色調をそろえた。ある日、黒のサンダル以外は全部、ブラウスとスカート、ハンドバッグからネックレス・ピアスマ

で同系統の緑色の濃淡で統一して歩いていると、近所の仕立屋さんから「モルト・ミラネーゼ（まさにミラノ的）」とニコリ笑って言われた。努力が報われた嬉しさに、わたしも「グラッツィエ・ミレ（どうもありがとう）！」と満面の笑みを浮かべて答えた。

ときには着物を着て外出することもあった。

アメリカに住んでいたころ、最初は欧米の生活に合わせることにしか考えていなかったのだが、寿司のように、日本らしさをうまく出せば歓迎されるということがわかってきた。ならば着物はウケるに違いないと考え、イタリアに来る前に、まず安物の着物と着付けの本を適当に買って着付けを猛練習した。

しかし、それまでほとんど着物を着たことがなかったわたしの独学では、あちこちおかしい。子どもの保育園の先生に「あ～らあら、肌襦袢（はだじゅばん）がないわね～」と冷やかされるまで、わたしは上半身だけの短い肌襦袢と、足元まである長い襦袢との違いさえ、よくわかっていなかった。恥ずかしさに顔が赤くなるだけでなく全身が熱くなったが、おかげでひとつ学習した。

で、イタリアでの1年目、夫の同僚のイギリス人宅に招かれた際その着物を着てみたのだが、我ながらどうもパツとしない。着物の柄がまるでダサかった。

そこで次の夏の一時帰国の際にもっとおしゃれな着物を買うことにし、ミラノファッションの基本どおり色調を合わせて、鶯（うぐいす）色の地に大輪のクリーム色の花を散らした着物と、薄緑色の帯、それに深緑の帯締めの一式を選んだ。なぜかそのころは緑づいていた。もちろん全部化繊の安物である。

冬のパーティで着ると、狙いどおり大人気。

3年目の12月、同じ日の昼間に国際クラブのパーティ、夜に子どものサッカークラブの打ち上げが近所で開かれる予定だったので、わたしは両方着物を着て出ることにした。すると子どもの歯の治療のため、そのあいだの午後、ミラノ中心部の歯医者に予約が入ってしまった。

では、そこにも着物で出かけるの？ それとも2度着替える？

迷ったが、どう考えても着替えるのはめんどくさい。着付けに慣れていない

わたしは途中でやり直しが多く、1回着物を着るのに1時間半かかるのだ。ええい、ままよ、と着物でミラノの地下鉄に乗った。バッグも当然緑。

すると電車の中で見知らぬ2、3人から「ステキ」と褒められた。

そのうえ駅では、「見て、ナンてきれい」という声が聞こえる。振り返ると、若い女性がふたり、賞賛の眼差しでわたしを見ているではないか。

きゃー、ミラノっ子から「なんてきれい」とまで言われた！！

そのときほど、わたしの鼻が高くなったことはない。

イタリアで、日本人と違うな、と思うのは、日本人は細くさえあればスタイルがいい、と言われる傾向があるが、その手の細さはイタリアでは「鉛筆みたい」と褒められないことだ。曲線が必要なのである。胸だけではなく、尻もある程度大きいほうが釣り合いがとれる。イタリアでは丸く突き出た尻を、楽器のマンドリンのような、と言うそう。確かに似ている。その見事な曲線をあらわすパンツ姿には、スカートよりよほど色気が出る。日本人のペタンコな尻では絶対に出ないセクシーさである。

アメリカに住んでいたときも不思議だったが、白人だけでなく黒人も含め、男も女もパンツ（ズボン）姿がやけにかっこいい。あれは中身が違うのか「外身」が違うのか、考えこんだ。日本に帰って母に話すと、戦後進駐軍がいたころ、母も同じ疑問を抱いたという。

「そのうちわかったいね。しばらくしたら、進駐軍のお下がりをも日本の男も履（は）きだしたんよ。つああらなかった（ダメだった）。格好がええのはズボンのせえじゃあなかった。中のお尻が違うたんよ」

確にかっこいいイタリアのパンツをわたしが履いても、鏡を見るとお尻の下にしわというかたるみができる。見方を変えれば、そのパンツはわたしの体型に合っていないということだろうか？ その疑問を近所の仕立屋さんに、夫が背広をオーダーメイドしたときに尋ねてみた。小柄な彼は趣味にクラシックギターを爪弾き、すわり仕事のからだを伸ばすのにサイクリングに出るという、年配ながらしゃれたイタリア男で、丁寧に説明してくれた。やはり、型紙が違

うと言う。尻の大きさと形に合わせて、後ろ中央から股下にくるカーブの角度と長さを変えらると言っていた。

あいや、型紙から違うのでは、わたしのお尻に合わないパンツを、どうにか自分でちょこちょこっと縫い直してカッコよくしてやろうと思っていたのに、とても無理だ。がっかり。そのうちわたしもオーダーメイドしてみるか。

イタリア人はちゃんと、しわやたるみの出ない、からだにあった服を着る。きれいに見せるコツをよく知っているのだ。男のズボンの裾も同様で、長さを合わせるときに、前が靴でひっかかってたるんでしまわない、短めの丈を選ぶ。日本人は丈を踵（かかと）に合わせる傾向があるから、足の甲の上でしわがよっても気にしないが、イタリアではこれは長過ぎてみっともないらしい。慣れるのに少し時間がかかったが、慣れると、甲の上でたるみが出ないズボンはきれいだということがよくわかる。頭の前から爪先まで、ずっと一直線に形が落ちる。

また、買った服を体型に合わせるための縫い直しをマメにする。これもおしやれには欠かせない。たいていのクリーニング屋で、補正の受付をしてくれから便利である。

さて、乳房の再建手術に話を戻すと、前回と同じく、入院させておいて手術はいつかわからない、たいてい1週間後、という患者がぞろぞろいるなかで、1カ月後日本に帰る、というわたしの手術は早かった。といっても日本ではあたりまえの日程で、入院の翌日である。

絶食絶飲したあとで手術着に着替え、ストレッチャーに乗せられて扉をいくつもくぐり、エレベーターや廊下をずいぶん遠くまで運ばれた。麻酔医に静脈注射を打たれて「じゃあお休み」と言われ、「1、2、3」まで数えるのを聞いたのを最後に、何もわからなくなった。次に目をあけた瞬間には、すでに病室のベッドに戻っている。

そうっとからだを動かしてみる。幸い、それほど痛くない。最初の摘出手術のあとは痛くて身動きもならなかったが、それに比べると段違いに楽だ。傷も、

前回はリンパ節を取るため腋（わき）のくぼみの中央部から斜め下に向けて乳房を貫通し、20センチはたっぷりあったのが、今回は乳房の部分だけなので半分ほどに過ぎない。ドレンと呼ばれる膿（う）みを出すチューブも1本だけ。

前回の手術が一緒だったマリアンジェラが見舞いに来てくれた。さほど巨乳ではない彼女はわたしの話を聞いて、もう片方の乳房にもシリコンを足す、という考えに興味をそそられたようだった。なんせ無料（タダ）である。

彼女は普通どおり摘出手術後に化学療法を受けて、ハゲ頭から髪が伸びかけの時期に入り、かつらをつけていた。

「ほら、これだけ伸びたのよ」

嬉しそうにかつらをずらして髪を見せる。

「あら、よかったわねえ。順調じゃない。でもわたしは髪が2、3センチのころよりはツルツパゲのときのほうが色っぽくって好きだったわ」とわたしが言うのと、

「そうそう、短い髪があるよりは、ハゲのほうがきれいよね」

マリアンジェラだけでなく隣のベッドの愛想なしのモエラも意見が一致して、3人で大笑いした。

今回は順調に1週間で退院し、しばらく休養したのち引っ越しの準備にかかることになった。2、3回通院して傷口のガーゼがなくなってみると、再建手術をした乳房はイメージと少し違って、「あれ？」と思わされた。

まず形。自然のお乳には乳首がついているせいもあり真ん中が尖り気味なのに比べ、シリコンのお乳は「肉まん」型で、真ん中が平らである。ブラジャーの真ん中にしわができる。パッドを切って当てて縫わなければ。

それから柔らかさ。シリコンは張りがあり過ぎるといえるのか、やや硬い。わたしが40代だし、4人の子が乳を吸ったあとだから、20代のお乳に比べたら柔らかい、というのはあるだろうが、それでもシリコンのお乳は自然のお乳の柔らかさとは違う。

皮膚が無感覚なのも相変わらずである。性的ななまめかしい感覚にまるで欠

けるのも、ま、当然。しょうがない。

とはいえ、わたしがもっと自然のお乳に近いものを想像していたのが、勝手だったのかもしれない。なんだ、こんなものだったのか、という期待外れの感じだが、では、もし再建していなかったら、と考えると右の胸はまるで平らであつたはずで、それに比べたらやはり、なんであれ丸いでっぱりがあるというのは、かなりいいことなのだろう。

左の健康なお乳に足したシリコン 90 グラムの効果は、ブラのサイズがひとつ上がったことだった。これはおおいに満足である。が、切って縫われた線が、元々のお乳の一番下の部位からまっすぐ横に伸びているので、今まで曲線だつたお乳の下側が直線になって、お乳が横流れ気味になってしまった。

そしてシリコンはどちらの胸も大胸筋の下に入れてあるので、ガッツポーズをして腕に力を入れると、大胸筋がクイクイと動くのがわかる。ボディビルダーがやって見せるヤツに近い。わたしは学生時代運動部にいて腕立て伏せを床に鼻がつくまで1日100回、なんてやっていたので以前から大胸筋は動かせたが、シリコンのおかげで余計はっきりしたようである。

ついでに立って尻に力を入れると、左右の尻の筋肉がクイクイと上下する。小鼻をヒクヒク大きくしたり小さくしたりもできるので、3点セットで宴会芸にしようかしらん。

もうひとつ、困ったものだと言を眺めることがある。きつい化学療法が終わるやいなや、6キロ痩せたのをとり戻すべく1カ月1キロの割で太り始めたのはよかったのだが、1年過ぎてもそのペースは止まらず、とうとう体重が12キロも増えてしまったのだった。自分の考える適正体重より4キロも多い。すると、ウエストのくびれは乏しく、下腹のでっぱりはかなり大きい。

おかげで迷った末に大きくした胸がさっぱり目立たない。おしゃれでない。複雑な気分である。

ま、がんに比べたら、はるかに平和でぜいたくな悩みだ、ということにしておこう。

十三章 さらばイタリア

イタリアを去る準備のひとつは車の処分である。夫の会社の規定では、1台は持って帰ってもいい、ということだったらしいが、あんな大きい車は日本のわが家の車庫には入らない。左ハンドルも不便である。金銭的には損でも売れない。が、これが大事（おおごと）だった。

日本では想像がつくまい。中古車店に持って行きさえすればいいのだから。が、イタリアでそうすると、誰かがそれを買うまで、中古車店は代金をくれない。預かるだけなのだ。トルコ人のフリヤなど帰国して半年になるのに、まだ車が売れていないという噂だった。売れたら、代金を取りにわざわざイスタンブールからミラノまで来るのである。冗談ではない。

買い手が見つからないときはどうするのか。アメリカ人のロクサーンは最後の最後まで買い手が見つからず、とうとう明日は飛行機に乗る、という日にまでイタリア人の友人とその車に乗ってあちこち売りこみに行き、教会に行ったら神父がもらってやってもいいと言ってくれた。やれやれとホッとしたが、神父はタダという条件なら、と頑固にゆずらないので、所有者を変える手続きの費用までこっちが払うハメになった、という悪夢のような話を聞いている。

中古車情報誌を買い、5人乗りのフォードと7人乗りのフィアットの型式と生産年から相場を見て、少し低めに値段を設定し、「売ります」という広告を国際クラブと日本人会の月報に出す。さらに3色のマジックインキで10数枚のビラを書いて近所の店に貼らせてもらう。

が、買いたいという人間は現れない。

たまに来て、ざっと話を聞いて車を見て、それっきり。ひとりだけフィアットにかなり興味を示したアルゼンチン人の銀行員は、何度も来ては型が古い、ABS ブレーキがついていない、と値切り、フィアットは電気系統が弱いのが通説だが今まで故障はなかったか、と聞いてまた値切り、挙句（あげく）にわたしの行きつけの修理業者に連れて行かせ、修理が必要な箇所までちゃんと聞き

出し、さらに値切った。たいした商売人である。結局、希望値段の半分以下になった。

わたしはがっくりし、泣きたくなり、頭にきたが、別の買い手は現れない。日本に帰る日は迫り、わたしの愚痴を聞き続けて胃が痛くなりかけた亭主殿は「もういいよ、廃車にしよう！」と叫ぶ。それではこっちが料金を払わなければいけないし、やり方を知らない廃車手続きをイタリア語で調べて書類をイタリア語で書き、知らないところへ地図を見て行くのは亭主ではなく、わたしである。こっちのほうがよっぽどめんどくさい。

「わたしが必死で交渉して売れそうなのに、何もしてないあんたが余計なことを言わんといてちょうだいっ！」と怒鳴り返し、今度は中古情報専門新聞に広告を出す。が、申しこんでから掲載まで1週間ほどかかると言われた。交渉を考えると引っ越しに間に合いそうにない。

誰も見に来なかった、古いが故障の少ないフォードはとうとう捨て値の5万円で、息子のサッカー友だちのお母さんのグラッツィエラに売った。15万円は欲しかったのだが、彼女が母子家庭で清掃の仕事をして息子を育てているのは知っているし、今までずいぶんわたしに親切にしてくれた。ま、いい。廃車よりはるかにマシだ。免許取りたての彼女はわたしに抱きついて喜んだ。

フィアットはやむなくアルゼンチン人に20万円で売った。5年前に買ったときは150万円したのに。頭にきていたわたしは体力がないせいもあって泥汚れを洗いもしなかったのだが、引っ越しのドタバタのさなか、怒り狂った彼から電話がかかってきた。車を洗ったらひっかき傷が出てきたというのである。

あらあら、それはお気の毒様。でもわたしの知る限り傷はなかった。もう取引はすんだ。残念でした！

続いて電気製品。日本で100ワット、アメリカで110ワットの電圧が、ヨーロッパ大陸のイタリアでは200ワットである。日本製品、たとえばこの「ミラノで乳がん切りました」を最初に書いたころに使っていた700ワットのプリンターは、日本語で印刷して家族や知人に送るのにどうしても必要だったので、

1万円ほど出して変圧器を買って電圧を下げて使った。が、反対に200ワット用のイタリア製品は、100ワットの日本では使えない。まるでダメということはないらしいが、変圧器がえらく高くつく。だから帰国する日本人やアメリカ人は、イタリアで新しく買ったほとんどすべての電気製品を売り払ってしまう。

これも国際クラブ、日本人会の月報双方に「売ります」の広告を出した。日本人会のほうは、実は締切が過ぎていたのだとあとで知った。今までのつきあいから特別な好意で会報とは別刷りの広告を出してくれたのだった。

そのとたん、「買います」の電話が猛烈な勢いでかかってきた。わたしのつけた値段が破格の安さだったためらしい。以前、帰国になりかけたときの「売ります」の広告に夏休み中でほとんど反応がなかったので、今回は恐れをなして安くしていたのだ。スチームなしのスイス製アイロンなんてたったの500円である。そしてフロア電気スタンド、天井灯、卓上スタンド、テレビ、韓国製の1升炊きの炊飯器、ミキサー、掃除機、電子レンジ、トースター、ラジカセ、扇風機、変圧器数台……。

が、売る約束はしても、炊飯器などは引っ越しギリギリまで使いたい。結局、荷造りで忙しいまっただ中に、お人好しのわたし自身がかなりの品物を車で配達するはめになった。

引っ越し業者はどこでもよかったのだが、会社の指定があった。最初の打ち合わせに来たのは、日本企業なのに中国人だった。日本への留学経験があるとかで、日本語は達者。実によくしゃべった。日本人で仕事の話に来てここまでしゃべり続けるのはそうはいまい。

肌の黄色い東アジア人はミラノのあちこちで見るが、日本人かどうかはたいていわかる。まず、日本人は姿勢が悪い。そして、わたしと目が合うならば、日本人だと、しゃべらなくてもなんとなく、「あ、日本人ですよ」という親近感のオーラを互いに出していることが多い。そして、狭いところですれ違おうと、かすかに会釈したり相手に道をゆずったりと遠慮を示す。これが中国人や韓国人などの他の東アジア人だと、遠慮感ゼロ。極端に言うとなんか「わたしが通るんだ

からあんたよけなさい」みたいな強気である。欧米人も基本的に強気タイプだが、相手が自分のために道をゆずってくれたとわかると、小声で「ありがとう」と言うことが珍しくない。わたしも「いいえ」と返事する。日本人だとすみません、と下手から詫びを言うのに欧米人は対等に感謝を口にする。わたしはこの感謝のほうが好きだ。

で、日本人以外の東アジア人はすみませんもアリガトウも言わない。むしろ、ひよっとしたら赤の他人に道をゆずられることを意外に思っているのではなからうか、という感じさえする。さすがに中国人と韓国人との区別はわたしにはつかないが、どちらも日本の隣国なのに日本とは違うことが多く、文化や暮らしぶり、人情について知らないことも多い。好奇心に満ちたわたしのなかでは、もっと知りたい領域だった。

今までわたしの中国人の知り合いは、ここミラノでひとりしかいない。イタリア語学校で知り合った、ホア（華）という名の女子ソフトボールのプロ選手である。プロスポーツ選手！ しかも異国で！

わたしはよく、あんたもまあ妙な知り合いが多いわね、と言われるが、こんなおもしろそうなのがいたら、ね、今度一緒にお昼食べない？ と誘っているいろ聞いてみたいというものではないか!? ホアはいいわよ、とニッコリ笑ってOKした。

ピザをつつきながら中国人と日本人とがイタリア語でしゃべってるというのも妙な風景だが、これもイタリアでの暮らしならではだ。彼女は中国にいたころに大阪のチームとミラノのチームのふたつからスカウトされ、イタリアを選んだ。

理由は？ とわたしが興味津々（しんしん）で尋ねると、ホアは日本人のわたしに気兼ねして少しためらいながら、日本のチームだと、選手個人の自主性を大切にするとか、自由で個人を大切にする（欧米風の）ムードがないところがどうもね、と説明した。

これを聞いて、わたしはいつだったか国際クラブのメンバーのスウェーデン人で、卓球のナショナルチームにいたという女性が言っていたことを思い出し

た。

「国際試合で日本のチームを見てると、いわば軍隊調なのよ。コーチの『命令』に選手は直立不動で『ハイッ』、『ハイッ』とだけ答えて、きつい機械的な練習にも無駄口たたかず全面服従してる。緊張感といえばそうかもしれないんだけど、わたしたちだとリラックスしてしかも集中しているのがいいなんて感じがあるのに、そんな雰囲気はまるでない。あれには強烈な違和感があったわ」

中国人とスウェーデン人が日本チームに同じ印象を抱くところがおもしろい。

ホアはイタリアチームに入ったものの、給料はいったん中国政府に支払われたあとで選手個人に送られるという生活だった。そのほかにもいろいろと自由にならない生活に嫌気がさしたので、性根を据えてイタリアに帰化し、チームを替わった。イタリア人コーチとも結婚し、シドニーオリンピックにもイタリア代表で出ている。

そこまで身の上話を聞いたあとで、わたしはホアに、ミラノの中華料理店はけっこう繁盛しているように見えるのに、どうしてスキー場や観光地で中国人を見ないんだろう？ と以前からの疑問をぶつけてみた。わたしは昔から国際的な文化比較に少々興味があって、自国以外で暮らす外国人についても、どこで見かけるか見かけないか、という行動パターンによってある程度、背後の思考パターンを推測することができると考えていた。

「中国人は遊んでお金を使うようなことしないの。お金稼いだら、週末はマージャンやってもっとお金稼ぐのよ。料理店の2階の狭い部屋で何人も一緒に暮らして、また中国から親戚や知り合いを呼び寄せてね、ひたすら稼ぐのよ」とホアは言う。

中国人が利にさとく、積極的に海外に進出しているのは昔から有名だが、今も変わっていないらしい。

引っ越しの打ち合わせに来た中国人にも、この際かねてからの疑問を晴らす

ことにした。

「ね、ミラノの中華街にいる中国人、みんな合法？ 蛇頭（じゃとう）とかいう中国マフィアが密入国させてるとか聞くけど、あのひとたち滞在許可持っているの？」

ああ、あれね、と彼はニヤリと笑った。

「外国人がここで滞在許可とるのに、ミラノ市警察の窓口で並ぶでしょ。中国人たいてい書類そろってないね。窓口のひと、『ほら、これとこれと、この書類要るのに、おまえ、この書類しか持っていない、こっちとこっち用意して来なさい』って言うね。中国人、『はいはい』って頭下げる。で、また同じ窓口の行列の一番最後にそのまんま並ぶのよ」

「え？ 書類ないのに？」

「そう。絶対同じ係のひとのどこね。これ大事。順番来ると、係のひと、『おまえ、さっき来たよね』って中国人の顔見て変な顔して、『さっき言ったでしょ、これとこれ必要ね』って言う。中国人、『はいはい』って言うね。で、また、同じ係のひとの行列の一番最後に並ぶのよ」

「え？ また？」

「そう。今度は係のひと怒るね。『さっき言ったでしょ！ どうしてまた来るの！ これと、この、書類、要るの、わかった！』 怒鳴るのに、中国人、『はいはい』って頭下げるね。で、もう一度並ぶ」

「えっ、まだやるの？」

「そう。今度は係のひと顔真っ赤にして怒るね。中国人、『はいはい』ね。もう一度並ぶと、係のひと、ぶち切れるね。『おまえ、いいかげんにしろ！ もう、おまえの顔見たくない！』 で、スタンプ押してくれる」

「嘘……」

「ほんと。中国人の勝ちね。これで合法」

なんとずうずうしく、そしてたくましいことか。今のひ弱で恥をかきたがらない日本人にはとてもできまい、とあきれ、かつ感心して、帰ってきた夫にこ

の話をする、彼もひと笑いしたあとで、

「いいかげんなイタリア人の役人と、ずうずうしい中国人の申請、っていう組み合わせでないと、ありえないよね。きちんとした日本人の役人相手じゃ絶対通用しない」

確かに。

外国人が滞在許可を得るための窓口は、この当時いつも混んでいた。2、3時間の行列はザラで、申請後に許可証を受け取る時には赤ん坊でも家族全員そろっている必要がある、子どもの退屈をしのぐおもちゃや多少の飲食物など用意して、かなりの覚悟で行かないといけない。もう少し前からいる日本人は、建物の中に行列が入りきらず、寒風吹きすさぶ中で半日並んだこともある、と言っていた。

並び方にもお国柄が出て、「アラブ人と中国人は行儀が悪い。特に中国人はわかってんのかわかってないのか、わかっててわかってないフリしてんのか、何気なく列の割り込みしてくるのが頭に来る」とは別の日本人の言である。

イギリス人も滞在許可の取得では同様に苦労していて、「だいたい、窓口に来てから、これとこの書類が要るのにおまえはこれがないって言うじゃない？ どうしてその一覧表を用意しといて配らないのよ。時間の無駄よね。そんな簡単なことができないなんて、イタリア人は外国人が嫌いなのよ」とクソ味噌にけなす。

まったく、イタリアの芸術と工芸品は世界第一級なのだが、行政的管理はお世辞にも先進国とは言い難い。

ヨーロッパ共通の小話（こぼなし）によると、「フランス人が料理人、イギリス人が警官、ドイツ人が技術者、スイス人が政治家、イタリア人が愛人、という組み合わせが最高。反対に最低なのはイギリス人が料理人、スイス人が警官、フランス人が技術者、イタリア人が政治家、ドイツ人が愛人」である。

完璧なひとも、完璧な国もないさ、と夫は言う。

日本への帰国前に、わたしたちはママ友と「夕食配達サービス」をしてくれ

た国際クラブのメンバー、計 20 人のための立食パーティを開いた。招待しても来れなかったひともけっこうあったが、イタリア人、イギリス人、スウェーデン人、フランス人、ドイツ人、アメリカ人、アルゼンチン人、ロシア人が来た。

スウェーデン人が教えてくれた「ヤンセン（英語ではジョンソン）の誘惑」という、じゃが芋と油漬けアンチョビ（片口いわし）と生クリームだけで作る簡単で美味しいグラタンや、日本風のほうれん草のおひたし、例によって握り寿司、鶏のから揚げ、フランス人が教えてくれたカスタード焼きなどを作るには、買出しから 3 日かかった。イギリス人から教わったローストビーフのつくり方を応用した、にんにくやハーブをまぶして赤ワインに漬けたまま焼くというローストポークも考えたのだが、オープン料理がふたつとなると、出すときにどちらかは冷えてしまっているし、日本の料理も食べさせたかったので、和風（中華風？）の鶏のから揚げにしたのだった。和洋中ごちゃ混ぜである。

が、料理をがんばったわりには、今ひとつ盛会でなく、客はひととおりに食べ、飲み、話すと長居をせず次々と帰って行った。学んだのはまず客の選択が大切、ということである。わたしは最後の恩返しのもりで呼んだので、国際クラブの友だちと子どもの学校友だちの親（ママ友）というふたつのグループに分かれてしまい、しかも 2 歳違いの子ども 4 人の親となるとママ友どうしは知り合いでなく、この場が初対面というひとたちが何組もあった。これではもてなし役がかなり積極的に会話をつなげなければ、盛り上がらないのは当然である。

今までわたしは 1 家族や 2、3 人の友人を呼んだことがあったし、スウェーデン人やイギリス人、イタリア人の食事会やパーティに呼ばれた場合は、多少人見知りをする夫はともかく、わたしは初対面でも会話をしかけたり笑わせたりして、気詰まりなことはあまりなかった。子どもの誕生日パーティを家でやったときも、こちらの習慣に従って小 2 の 1 クラス全員に招待状を出したら、15 人の子どもと 15 人の親、さらにばあ様（祖母）と犬までついてきたときには目をパチクリしたが、てんやわんやでも家中子どもたちは遊び歩き、親たちとはおしゃべりして楽しかった。が、大人ばかりの大人数のパーティの主催者となるには、わたしは少々経験不足だったようである。

そういえば、昔トルストイの『アンナ・カレーニナ』を読んだときだったと思うが、帝政ロシアの時代に貴族が何人か自宅に呼んで食事会をする際に、もてなす側が、あのひととあのひとはよく口論を始めるから、座席は少し離しておいて、隣にそれぞれ仲介役になりそうなひとを配置しなくては、とか、座が盛り上がらないときのためにこの話題を用意しておけば安心、とかいう一節があった。つまり、ひとを招く際にはごちそうを出すことと客を選ぶことだけでなく、楽しい会話のお膳立ても必要なのだ。それをわたしが学習したのがイタリアを去る直前というのは、少し残念だった。

引っ越しには持ち物の整理と家の掃除がつきものである。しかし、このふたつはわたしがとことん嫌いで、とことん苦手な分野でもある。6年半前アメリカから日本に帰るときにも、整理のできていない荷物に引っ越し業者は怒るし、当時8歳、6歳、4歳、2歳の子と猫が汚し、傷めた家と家具の修理代は莫大なものだったらしい。が、家賃関係は会社持ち、という契約だったので会社が全部文句ひとつ言わず払ってくれた。これは欧米の会社のいいところで、契約は絶対である。

今回はこの契約どおりが裏目に出た。夫はイタリアに来る前、日本の会社を一度退職し、イタリアの会社の現地雇用になっていた。給料そのものには海外赴任手当に当たるものがあったので、なんとか郊外の一戸建てにも住めたし、4人の子を私立のインターナショナルスクールに通わせることもできたのだが、借家契約の中には、イタリアを去るときにもらう退職金の中から、家の修理費を払うべし、という一項があった。

イタリアの大家は、外国人のあいだで評判が悪い。「ぼる」のである。借家人に責任のない、ガスボイラーが動かなくなったとか、ドアが壊れた、というような家の修理費を出さないとか、退去にあたって余計な金を払わされた、とかいう話をいくつも聞いている。

わたしは樂觀視していた。わたしたちの大家は奥さんがドイツ人だったせいとか、今まで雨漏り、生垣の刈り込み、水道の修理などを全部大家指定の業者に

させ、文句ひとつ言わず払ってくれていたのである。

が、退去の際の立会いに来ないと言った。

クリスマスという理由で。

ここで灯った黄信号に、わたしたちは気づいているべきだったのだ。

わたしたちは掃除がきれいにできなかった。4人の子と猫が汚すのを、借家だからとふだんから気を使ってきれいにしていればよかったのだが、性格的にわたしの辞書に「こまめに掃除」は、ない。それにここ1年は闘病中だった。

「埃（ほこり）で死んだものはいない」と何もかも片目をつぶって過ごしてきた。

ましてや今は再建手術後1カ月、化学療法終了後8カ月とあって、衰えた体力が回復していない。昔懐しウルトラマンの胸ランプのピコピコではないが、「元気」から「ちょっと疲れた」になると、そこから「もう駄目」までが猛烈速い。ある程度疲れてしまうと「気力でもうひと踏ん張り」はありえない。「気力で体力をカバーする」というのは基礎体力のあるひとの話で、基礎体力がなければ気力で補いようはない。

それにいつものことだが、寸前までバカみたいに忙しかった。いや、このことばには語弊がある。事實は、寸前までしっかり遊ぶのにバカみたい忙しかった、だ。最後のスキーに行った。最後のコンサートにも、ノルウェー人が呼んでくれたクリスマスパーティにも行った。つまりは、わたしのなかでイタリア暮らしを楽しむ、ということに比べたら家の清掃というものの優先順位が格段に低かった、ということだろう。このツケは、日本に帰ってからしっかり払うことになった。

家のかたづけにまるで熱が入らなかったのには、もうひとつ大きな理由がある。

わたしは日本に帰りたくなかったのだ。

帰っていく茨城がイヤというのではない。好きで買った土地に好きで建てた家である。田舎で空は広く青く、人情に大雑把（おおざっぱ）なところはあ

がその分気さくで、新興住宅地でのつきあいもわりと風通しがよく、楽だった。

そんなことより、イタリアで見たり聞いたりした数々の美しいもの、苦勞して得たイタリア語、あけっぴろげでひとなつっこく陽気なイタリア人、各国の友人。それをみんな失うのが辛い。今のわたしの生活の、半分以上ではないか？

それに日本は確かにわたしの母国だが、こっちで過ごした4年半のうちに苦勞しながら日本と違う考え方、暮らし方になじんで、わたしはずいぶん変わってしまった。わたし自身が半分日本人でなくなっていて、半分はイタリア人、あるいはヨーロッパ人的なところがある。

日本に帰れば、もう一度、日本のやり方に慣れるという苦勞をしなければいけない。日本では日本人が「みんな同じ」ことが当然とされる。「外国帰りの妙な日本人」ではなく、「純国産日本人」が要求される。それを満たすには、かなりの苦痛を伴う努力が必要なのだ。以前アメリカから帰ったときには、「ああ、やっとまた日本での暮らしになじんだ」と思えるまでに、ゆうに半年はかかった。それを繰り返すであろう、というのは充分予測できる。

イギリス人のパムも言っていた。

「イギリスの故郷に帰っても、そこを離れたことのない近所のひとたちはずっと同じ。でもわたしだけは、外見はともかく内側がまるで違う。でもまわりのひとたちにそれは見えないで、前のわたしと同じだと考え、自分たちと同じことを要求する。だから帰ったら違和感と疎外感のかたまりよ」

日本の商社員の奥さんなどは、もっとすごいことを言う。

「社宅住まいだと、あら、イタリアにいたの、いいわねえ、どんなだったの？って聞かれたりするけど、『ロチャック』に限るわよね。下手にイタリアのことをしゃべり散らそうものなら、いつも自慢話ばかりしてるとか、自分だけ違うと思って、とか陰口をきかれて、村八分にされるのがオチよ。ええ、まあね、なんてごまかして、イタリアのことは何にも言わないでいるのが一番！」

わたしの場合は社宅ではなし、そこまではいかないだろうと思ったが、憂うつなのに変わりはない。

しかし、どうしようもない。

何にでもいつかは終わりが来る。

アカシア

また逢えるよ
と わたしの眼をじっと見ながら
あなたが言う

南へ渡る燕が
海を越え
この軒にまた巣をかけるように

六月になれば
道に沿ったアカシアが
また甘い香りでわたしを抱きすくめるように

この小川の水のこの一粒が
海へ流れ
空へ昇り
雨となってまたここへ戻ってくるように

それとも
この花壇中の白ばらが
悉（ことごと）く黄のばらに変わる
その日に

また

逢えるよ……

引っ越し屋さんが来るまで残り1週間、家中のカーテンと、最後のスキーに行ったあとのスキー服6人分を洗ってしまおう、というときになって、洗濯機が動かなくなった。3千円の出張費を払って修理屋さんに来てもらおうと、修理には最低3日、3万円かかると言う。洗濯機はわたしのものではない。大家に電話をかけて修理費を出すか、と尋ねてみると、意外なことに洗濯機は大家のものではない、と言う。前の借家人の誰かが置いていったのだ。つまり、大家から修理費は出ない。

まさか今さら新品の洗濯機は買うわけではない。よりによってこんなときに、と目の前が真っ暗になった。毎日膨大な量の洗濯物を、洗剤つきで友人の家に持って行って洗濯してくれと頼む。が、続けて同じ家に持っていくのは悪くてできない。1日分が洗濯機3回分である。友人の多いのを幸いと思おう、と自分に言い聞かせながら、友人の顔を代わるがわる思い浮かべ、あちこちの家に電話をかけて朝と晩に通った。

とうとう引っ越しの日が来て、3日かけて家中の家具と持ち物を梱包していった。そのすべてに引っ越し業者と共同で番号をつけ、日本の家の「1階食堂」「2階子ども部屋」などの行き先と、「食器」「本」「おもちゃ」などの中身をマジックで書く。一方で全部のリストをつくり、大ざっぱな保険金額を計算する。貴重品は別である。

日本に航空便の荷物が着くのは3週間後、船便は2カ月後。コンテナがイタリアの空港や港へ行き、税関を通り、飛行機や船に積み込まれて運ばれ、日本に着いてまた税関を通過してトラックで運ばれるとなると、長い時間がかかる。同じ時期にイタリアからスウェーデンに帰る友人が、家に家具が着くまでに陸路で1週間かかると嘆いていたから、「1週間なんてまだ短いわよ、あなた、同じヨーロッパじゃないの」と慰めた覚えがある。ちょうど同じ日に、イタリア

に引っ越してきたばかりで不安がるフランス人とも出会って話をした。1日のうちに去るひとと来たひとと話をすると、いかにも海外駐在員の多いアレーゼらしかった。

ふとんが運び出された時点で、一家6人が近所のホテルに移った。引っ越し業者が出入りする中に貴重品を置いておくのは物騒だからとホテルに置いていたら、宝石類がいくつなくなってしまうていた。わたしはそんなに高いものは持っていないのだが、母がタイの山奥で安く買った、ダイヤつきの大きなルビーのペンダント、夫がアメリカで買ってくれたきれいな緑色のブラックオパール指輪、などという数少ない高価なものだけがアクセサリ入れの中から消えていたのは、ホテルで掃除のひとか誰かがかばんの中を探したとしか思えない。わたしは整理が悪いので、ひょっとして荷物に梱包されているかとあとになって日本で念入りに探したのだが、出てはこなかった。フロントに預けておかなかったわたしのミスである。とはいえ、フロントがそんなに信頼が置けるわけでもない、という感じがあったのだった。

ホテルから、残る荷造りと掃除をしに家まで通う。まあこれでもか、これでもか、というほどゴミが出る。今までかたづけをしていなかった報（むく）いである。そしてあっちもこっちもシミやらカビやら汚れやらすごい。

ここへ来て夫が東京へ3日ほど出張した。何も帰国直前のこの時期に、と思うが、夫の会社は「食われる」ことが決まっていた。大企業の常で、会社はこの10年のあいだに4回合併吸収を繰り返して2回名前を変え、本社もアメリカ国内で何回か移動している。その吸収されるための準備として、海外駐在員はすべて、この時期に日本支社まで呼び戻されたようだった。

わたしに体力がないときに夫がいないのはこたえる。子どもたちを叱り飛ばして働かせても、なかなか能率はあがらない。半端に残る食べ物をもらってくる友人が来て、あきれて掃除を手伝ってくれる。

とうとう掃除もかたづけも終わらなかった。

夫はしょうがない、いいよ、と宣言し、2002年12月28日、わたしたちは6個のスーツケースと手荷物を持ち、汚い家をあとに、空港へと向かった。

飛行場にはイギリス人のアンを妻に持つドイツ人のフランクがたまたま父親を迎えに来ていて、わたしたちは最後の友人に別れを告げた。パトリツィアに言わせれば「マドカの人生のひとつの章」であったイタリア暮らしは、こうして淡々と終わったのだった。

十四章 ふたたび日本

豆腐がうまい。

こんなにうまかったか、と思うくらいうまい。

イタリアでは6カ月保存可能、という「豆腐のようなもの」を豆腐として食べていたから、ほんものの豆腐の味には感激した。日本再発見である。ずっと食べられなかった蓮根（れんこん）と牛蒡（ごぼう）も、歯ざわりといい風味といい、うまい。イタリアにないラーメン店のラーメンも実にうまい。

一方、わたしの舌は、日本のレトルト食品やコンビニ弁当を受けつけなくなっていた。味のない素材を調味料でごまかした既成の惣菜もダメである。そういえば欧米人には、日本の典型的うま味調味料であるグルタミン酸ソーダ（通称 MSG）の味が嫌いだというひとが多い。以前日本で近所に住んでいたカナダ人は口がしびれる感じがするとまで言っていた。わたしは4年半のイタリア暮らしのあいだに、考え方だけではなく味覚まで欧米化してしまったのである。

イタリア料理が食べたくてイタリアンレストランに行くと、香辛料を控えた肉料理や、サラダドレッシングにも砂糖を入れた「日本風のイタリア料理」が出てくる。欧米の料理と日本料理との大きな違いのひとつは、欧米では基本的に料理に砂糖を入れないことなのだ。肉料理やサラダに砂糖の味がしては、まるでイタリア料理らしくない。行くたびにまずい、違う、と首を振ってはため息をつく。息子には「母さん、日本のイタリア料理がイタリアのイタリア料理と違うのは、ミラノの日本料理店の日本料理がおかしかったのと同じだよ。諦めなきゃ」と諭（さと）される。

ましてや当時の日本の田舎では、うまいチーズとうまいサラミ、それに小麦粉と塩と酵母だけでつくったうまい食事パンには、まず出会えなかった。そのせいか、日本のレストランではパンにバターがついてくることが多い。が、欧米では朝食でない限り、パンにバターがついて出てくるのをわたしは見た記憶がない。

食事パンの代わりに日本で存在感が強いのは菓子パンという、ヨーロッパにはあまり存在しない分野だ。

ヨーロッパの食事パンと日本の白米のうまさには共通するものがある。他の食べ物と共存できる控えめなところがありながら、それだけで食べても充分味が深い。風土と歴史でつくりあげたうまさである。日本人は米のうまさにすごくこだわり、うまい米は塩だけかけて食べてもうまい。コンビニでおにぎりを売っているのを見ると、ああ日本だな、と思う。

同じように、たぶんヨーロッパでは小麦そのものにも、日本のコシヒカリやひとめぼれみたいな品種がいろいろあって、パンのために各地で厳選しているのではないか。村によってパンの味が違うと言うからには、酵母にもいろいろあるに違いない。あの食事パンのうまさときたら、「そうか、パンというものはこんなにパンだけでうまかったのか」と堅いのを噛みしめかみしめ、感心するほどである。

そういえば、欧米人は白米を味が無いと言って苦手とする傾向がある。アメリカ人はよくしょうゆをかけて食べていたし、韓国人の経営するイタリアの日本料理店では、定食のご飯が寿司飯だったこともある。

そう考えると、食文化の中でも、肉や野菜のように最初から味の主張がはっきりしているものより、白米や食事パンといった、味が一見控えめで、おかずと一緒に食べる「主食」に関する部分のほうが根が深く、かつよそ者には受け入れがたいものなのかもしれない。

久しぶりの日本の書類は書きにくい。学校の書類などは、わたしも保護者であるのに夫の名を書かなくてはいけないことがあった。気に食わない。保護者名が世帯主である必要はないと思うが。イタリアでは保護者ならどちらでもよかった。わたしは自分が自分の責任において書類に記入するのなら、自分の名を書きたい。銀行口座もイタリアやアメリカなら夫婦連名だったが、日本だと当時、わたしが手続きに行っても夫の名を書かねばならなかった。

名前にこだわるのは、名前がひとを表すからだ。わたしはマドカであって夫

ではない。日本に帰ると、家族の1員として姓で呼ばれ、子どもの母として何とかちゃんのお母さんと呼ばれるが、マドカと呼ばれることは少ない。妻だとか母だとか嫁だとかの役割としてのわたしは、わたしの中で一番大切なところではなく、一番大切なのはマドカの部分である。それが否応なしに無視されているような気がする。

日本の書類にはサインではなくハンコも必要だ。役所に手続きに行っても自分のハンコがなかったら、家まで取りに帰らなければならない。それに公的書類はみな西暦でなく元号で書かなくてはいけない。計算がめんどくさく、不便だ。

わたしはすっかり日本人じゃなくなってしまった。

イタリア語でしゃべる相手がいらない。英語でしゃべる相手もいない。イタリア語につきまとう派手な身振りや大きな笑顔、英語特有のユーモアもない。そして、予想どおりとはいえ、外国に住んだことのないわたしの周囲の日本人に、帰国したてのわたしの逆文化ショックとでもいうものの辛さを理解してくれというのは、とうてい無理な話であった。周囲にはわたしが外国に住み始めたときの大変さは容易に想像がつくが、日本に帰って来たら万事スムーズで楽だろうとしか考えられない。

わたしは孤独だ。

ひどく疲れやすい。だるい。2度目の手術からふた月もたたないうちに国を越えた引っ越し、という動き過ぎがたたったのだろうか。化学療法の後遺症ならば1年たてば消えるというのだが。からだが重くて、炊事と洗濯をしたらあとはろくに動けない。毎日昼寝が必要だ。どこかへ1カ所でも出かけると、そのあとは必ず休憩がいる。

わたしは何をしているんだろう？

日々無益に、無為に、過ぎていく。

空虚だ。

少し背景は違うが、故郷の詩人中原中也の「ああお前は何をしてきたのだと、吹き来る風が私に云う」の感じだ。

買い物に出かけるのもひどく億劫（おっくう）で、あるとき、この次はいつまたスーパーに来るのだろうか？ と思うとつい、カートに入りきれないほど買い物をしてしまった。山ほどの食料品を前に、「わたしは精神に異常をきたしているのではないか」と本気で心配した。

たまりかねたわたしは心療内科医に行った。抗鬱（うつ）剤をくれと頼んだのである。医者はよく話を聴いてくれ、引っ越しは鬱をひきおこすストレスの原因の上位 10 位以内にありはするが、ぐっすり眠れてよく食べられているなら、鬱病という病気ではない、と言った。

それ以上、打つ手がない。

しばらくして、イタリアの大家から家の修理費の請求書が来た。

120 万円。

浴室には浴槽の蓋（ふた）と換気扇がなかったから、壁がカビで黒ずんだのはわたしたちの責任と言おう。白い漆喰（しっくい）壁が全体に薄汚れたから塗りなおすというのもわかる。息子がスプレーでいたずら書きした外壁の清掃も当然だろう。引っ越しの寸前に使えなくなって残した電気洗濯機の処分代もハイと言おう。洗面所の棚を取り替えたいというのもよしとしよう。責任逃れをしようというつもりはない。

が、以前からの住人が残していったもろもろの家具の処分、10 年以上かけて傷んだはずの廊下のじゅうたん、住み始めたときからひどかった庭の芝生のやりかえ、そんなものまで全部修理費につけられていた。それを、最初の約束どおり、夫の退職金から差し引く形で払えと言う。

わたしは激怒した。

3 日経っても怒りで腹の中がチリチリと沸騰を続けている。

わたしの計算では、なんぼなんでも 3 分の 1 の 40 万。それでも、どうみても少ない金額ではない。1 週間ほどかけ、これは払うが、あれはわたしたちに責

任はない、と1つひとつ例をあげ、一生懸命イタリア語で4ページの手紙を大家に書いた。

返事はない。代わりに修繕が必要な場所の写真を送ってきた。

話にならない。

5月にもう一度わたしだけイタリアに行くことになった。というのも、電気や水道料金など、日本なら引っ越し際には日割りで現金精算できるものが、イタリアではできずに最後まで自動引き落とし。そのために引っ越し後もそのまま置いていた銀行口座を、行って閉めるためだった。

加えて、大家との交渉。幸い、わたしの3代前に国際クラブの会長をやったイタリア人のサビーナは、外国人相手の不動産紹介とトラブル処理をしていたので、手紙を書いて交渉を頼んでおいた。直接会って話をしよう。

またイタリアに来ることができた嬉しさと、からだの不調の不安の両方を抱え、ミラノ郊外のマルペンサ空港に着いてレンタカーを運転し始めると、高速道路の両側のセアカシアの樹が白く花盛りで、延々と甘いにおいが風に乗ってわたしを包みこんだ。まるで「マドカ、よくイタリアに帰ってきたね」と暖かく歓迎してくれるように。わたしはひとり笑みを浮かべて喜びをかみしめた。

にセアカシアが咲くのはひと月早い。えらく暑い。5月というのにノースリーブでちょうどいい。ヨーロッパ全部が春先からずっとひと月前倒しで暑くなり、夏はフランスで1万人が死ぬという猛暑にそのまま突入したとは、あとになって知った。泊まれと言ってくれたアルゼンチン人のサラの家の3階の屋根裏部屋に荷物を置き、さっそくサビーナに会って話をすると、ダメよこれは、と彼女は首を振る。

「どうしてよ？ わたし自分に責任のあるものは払うわ。でも、じゅうたんなんてわたしたちの前の前の家族から、10年以上かけて傷んできたものじゃない？ 芝生だって4年半前に来たときひどいのにびっくりしたの覚える。こんなの借家人の責任じゃないわ。車庫の棚の折りたたみ机だとかガラクタなんか、みんな最初からあったのよ。そんなものだと思って住んでた。どうして前

の住人のぶんまで払わなきゃいけないの！」

「車庫のガラクタはね、あなたたちが前の借家人から個人的に引き継いだもので大家のものではないのよ。あなたたちに処分する責任がある。それに庭とか、来たときどうだったか写真なんてないわよね」

「あるわけないわ。こんなお話にならないようなイチャモンをつけられるなんて思ってないもの」

「じゃ証明しようがないわ。向こうは芝生もじゅうたんも最初はきれいだったって言うてる」

「そんな馬鹿な！ 会社の人事のひとが立ち会って全部一緒に見たのよ。中年の男性がふたり来た。わたしコーヒー出したの覚えてる。イタリアに着いてすぐだったけど、わたし全部イタリア語でなんとか話したのよ」

「彼らはもうみんな辞めてる。今いるのは去年来たばかりの何にも知らない女の子。規定どおりにやるしかできない。大家の代理は誰？」

「ロベルト」

「ますます駄目だわ。彼は外国人のあいだで悪名高いの。徹底的にイタリア人大家の肩もつのよ」

「大家の奥さんはドイツ人よね。わたしたちが住んでるあいだずっと、ボイラーだとか戸の蝶番（ちょうつがい）だとかの修理費も全部出してくれたわ。庭の木の刈り込み代も。えらく話のわかるひとだと思った。わたしラッキーだって。それがどうして今になってこんな理不尽なこと言うの？」

「あのね、彼女はあの時分大家が責任のないものまで、あなたたちが言うから出したって言うてるの。だから今度は払ってもらって」

「金額の桁が違い過ぎるわよ。大家が出したのはせいぜい数万よ。わたしたちの120万はおかしいとあなた思わない？」

「向こうは1つひとつ金額をあげて合計してる。マドカ、わたしベストは尽くすけど、勝ち目はないわ」

「住み始めたときの保証金があるはずよね。請求書の中に話が出てこなかった。あれで30万は違うはずよ」

「そうね。確かめてみる」

結局、100万円について。

普通、借家人が払わない、そんな金はない、と言えは交渉の余地はもっとあるのだが、なにせ契約が会社経由で、退職金の中から差し引かれるのではどうしようもない。会社が従業員側につかず、大家側についた格好である。

甘かった。

イタリア暮らしのとどめに、一番の損がきた。

これもイタリアらしいということか。

ところで、落ちこんでいるのはわたしだけではなかった。夫は会社で、日本語と日本人はなんとややこしいのかと胃を痛くしていた。イタリア人と違って日本人がきちょうめんで信頼できるのはいいのだが、そのぶんこちらも重箱の隅までキッチリ仕上げることが当然とされる。アメリカでもヨーロッパでも、他人の仕事の批判は仕事の批判でおしまいが、日本では人格の非難まで含みかねない。母国語だというのに、イタリアにいたときの3倍くらい気を使ってものを言わねばならない。パソコンも漢字変換がめんどうくさい。おまけに、ちょうど今までの会社が大きな別会社に吸収されたところで、社風も今までと違って何やら落ち着きが悪い。

イタリアにいるあいだ、呆（あき）れはてることや怒り心頭に発することがあると、わたしと亭主はふたりで歌をうたったものだ。いや、歌というほどのものではないが、「ここはイタリア～！」と節をつけて大声をはりあげ、怒りや憂さを発散させ、自分たち自身に諦めるよう言いきかせるのである。今ではふたりして「ここは日い本～！」である。

そして長男は中3の冬休みというきわめてビミョーな時期に日本の田舎の中学に入り、年明けの実力テストをほとんど白紙で出した。無理はない。日本語のテストなんてほとんど受けてなかった。担任の先生に、どの高校を受けたらいいでしょうかとわたしが尋ねると、どこでも好きなところをどうぞと言われた。

生徒が高校入試寸前の帰国、実力テストは白紙、ときには、日本での学力がまったくわからない。ミラノのインターナショナルスクールの通知表はコピーして簡単な日本語訳をつけて提出していたが、そのレベルがわからなければ、日本でどの程度に当たるのかも推定できない。先生もお手上げだったのだろう。しかし親は途方に暮れる。

息子に公立高校は難しかったので、雰囲気良く、ここなら行かせてもいい、と思う私立を受けさせはしたが、通るかどうか、誰にも読めない。

通るかな、と思う。落ちるかな、とも思う。が、わたしがどう気をもんでも、結果には何の影響も及ぼさない。無駄である。そう気づいてからは、懸念を棚上げすることにした。考えないで、運命にお任せするよう腹をくくった。が、合格発表までのわずか1週間をおそろしく長く感じたのは、棚上げが完全にはできなかった、ということだろう。

通ったからよかった。夫は中学浪人まで考えていたのである。

その後しばらく息子はおさだまりの反抗期がきつく、嘘のように落ち着くまでの2年ほど、わたしは何度も息子を正座させてぶん殴った。正座させて一息ついてから殴るのは、急にわたしが手を出すと、息子も反射的にわたしに手を出してしまうのを防ぐためである。とはいえ、今では親から子への暴力、すなわち虐待に相当するのかもしれない。

しかし息子はわたしの財布から万札を盗むのを続けていたうえ、わたしのつくった弁当の中身を捨て、代わりにコンビニ弁当を買って食べていた。二重に許せるものではない。夫は盗難といっても家の中だけだからと安心していたが、わたしは将来息子が横領でもしはしないかと気が気ではなかった。「クソばあ、死ね」と怒鳴られたときには、わたしは怒り狂って息子をひと晩家から追い出した。

あとからわかったのだが、息子もイタリアでつくった友人たちから強制的に引き離され、日本の学校では「イタリアン」と呼ばれてなじめず、友人関係で苦勞していたのだった。とくに帰国したてのころ、中3の冬休み明けという時期では、すでにクラスの間人間関係が完全にできあがっているうえに残りの期間

はごくわずかだから、新しく友情が育つ余地は少ない。おまけにほとんどの生徒は入試を前に神経質になっている。そんなときにひとり異分子が紛れこみ、まるで居心地が良くなかったらしい。もちろん日本語での勉強も大変で、その原因をつくった親を恨んでいる部分があったことだった。

帰国子女なんてカッコいいと思われがちだが、そう簡単なものではない。

そして気がついてみると、中1の長女は学校を休みだしていた。3年越しの慢性の頭痛に親と同じ逆文化ショックが加わり、不器用にも日本の習慣に「なんでそんなバカなことするの?」と言えば、まわりの子は白い目で見ると。ここはかなりの田舎で、いいところはたくさんあるがずいぶん閉鎖的でもあった。ひどい頭痛とだるさのため、娘は半年後には朝起きて学校に行く日が、月に1日もなくなった。

悪夢のようだった。

子どもが毎日学校に行くのはあたりまえではないか。それが行けない。

何カ月も。

そしてたぶんこれからも。

しかもこの子は4人の子の中で一番まじめながんばり屋なのだ。高校受験も気になるが、中学校で習って、一生役に立つことは山ほどある。漢字はもとより、理科の電気や電圧、天気図の読み方、日本や世界の地理、歴史。この子はそれを全部身につけず、大人になっていくのか?

毎日病気の子と暮らす親は辛い。

そしてわたしがしてやれることが、ほとんどない!

これまでわたしは「わが子が病気で苦しんでいると親は代わってやりたいと思う」という台詞(せりふ)を美談として聞いていた。利己的なわたしは子の代わりに苦しみたいと思ったことがなかったのだ。しかし今回だけは、自分が具合が悪いほうが楽だと思った。ま、がんは別としてもだが。

コンピュータのトランプ遊びをしながら、鼻をすすりすすり、わたしは娘に聞こえないようにぼろぼろ泣いた。

地球

山は元旦がいつかを知らない
空は降誕祭（クリスマス）がいつかを知らない
わたしの息子が高校に入れるかどうか
娘の病がいつ治るか
どの木も知らない

わたしが生まれる前から
そこにあるものたち
わたしが死んだ後も
そこにあるものたち

風よ
雲よ
わたしが滅びたらわたしを迎えてくれ
わたしをおまえたちの一部にしてくれ

娘を連れて医者に行く。

娘を起立性調節障害だと診断した医者が以前処方した漢方薬は3カ月のませても変化がなく、おまけに娘は不味（まず）過ぎると不平を言い、朝昼晩3回のませるのにも無理があったので諦めた。

カウンセリングなるものにも行ってみる。

娘自身はまるでのってこなかったが、わたしの役にはたった。これからの見通しや親の心構え、親が子に言っていいことと絶対口にしてはいけないこと、

そして「あれはざる休みだ」とわめく兄弟への対応などをわきまえておきたかったからである。

当時、ものすごく運がよかったのは娘の最初の担任の先生だった。先生自身が不登校と長期の自律神経の不調を別々に経験していて、娘は「この先生ならわたしのことを理解している」という絶対の信頼感をもった。稀有（けう）なことである。娘はとうてい朝起きられないときでも、先生に会って話をするためだけに放課後の学校へ行ったことが何度かあった。

そして一番効果があったのは、心療内科も看板にあげている近所のかかりつけの医者だった。この医者は娘に何が得意か、外国語は何ができるのかと尋ね、娘の「英語は得意、イタリア語も多少できる、スペイン語もほんの少し」という答えを聞いて目をぐるりと回し、「君の最大の強みはその語学力だ。4カ国語ができるなんて日本の子にはまずいないよ。今の中学校に自分をあてはめようとするより、その語学を生かす方向で何か考えたらどう？」と言い、それを聞いたわたしは、転校させることを考えついた。やっと、突破口になるかもしれないものが見えてきたのである。

イタリアにいたころと少しでも近い環境に、娘を置いてやろう。

それならわたしにもできる！

幸い隣のつくば市には、教師陣に外国人がいて国際クラスがあるらしいという魅力的な私立の中学校があった。が、欠員補充の試験に落ちた。

私立がダメなら公立だ！

わたしはつくば市の教育委員会に電話をかけ、事情を話して「この市の中で一番外国人と帰国子女、そして転出入の多い中学校を教えてください」と頼んだ。動きのないところが閉鎖的になると逆に、転校生の多いところは雰囲気開放的になる。

ありがたいことに職員は同情的だった。条件に合う学校を順に3つほど教えてくれたあと、「外からでもいいから見に行ってみて、娘さんが『行きたい』というところを選ばれたほうがいいですよ。気持ちで違いますから」と助言までしてくれたので、わたしは即刻その学校に電話をかけ、見せてくれるという約束を

とりつけ、娘をたたき起こして一緒に見学に行った。娘は乗り気になった。

よし、転校だ。

これで救われるかもしれない！

とはいっても、娘は新しい学校を気に入りはしたが毎日行けるわけではなく、最初の1週間は、娘が行けばわたしは夫の勤務先まで知らせて喜び、行かなければ胃が痛くなるという繰り返しだった。

結局、娘の中学校3年間の出席率はちょうど半分だった。が、少しずつ、少しずつ体調が上向いていくのは、娘が何も言わなくても、食べる量でわかった。転校したてのころは学校から帰るともうくたびれはて、晩ご飯も風呂も抜いて夕方から翌朝まで眠る日が週に2日はあった。それが数カ月単位で少しずつ減っていった。

朝ごはんもパンは駄目、ご飯もみそ汁も駄目、おにぎりならほんのひと口、というのから、半年たつとおにぎりひとつ丸ごと、みそ汁もひと口食べられるようになり、そしてパンも大好きな卵サンドなら半分、そしてひとつ丸ごと、と増えていった。わたしはどんなに嬉しかったことか。

元来短気なわたしは、この期間にずいぶん、「辛抱」ということを勉強したと思う。子を育てるあいだに親も成長するというのはほんとうである。

こうやって上のふたりの子に心痛が続くあいだ、小5と小3で帰ってきた下のふたりの子が順調で、どれだけ家の中が救われただろう。笑えることがあるのだ。小学校のあいだは帰国子女でも大丈夫である。毎日の生活がよければそれでいい。子どもを4人産んでおいてつくづくよかったね、と夫と話す日々だった。

とくに3番目の子は、イタリアにいるあいだ英語での生活に不適應で、友だちがひとりもない、と学校から親に呼び出しがくるほどだったのが、日本に帰ると何の問題もなく、友だちと遊び、友だちの家にも遊びに行く。この子には帰国ほどいいものはなかった。

日本に帰って2年近くして、がんの再発防止のホルモン薬の種類が変わり、

ひと月ほどしてみると、だるさが軽くなっていた。だるいのは副作用だったのか！そしてこの新しい薬の説明にも、脱力感の副作用が伴うことがある、とあった。

副作用はひとによって出かたが違うし、乳腺外科の医者は腫瘍があるかないかしか見ず、「外科的には問題ありません」というばかりで、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）なんて頭がない。どうしてだるいのか、という疑問に彼は答えられなかった。彼の守備範囲ではなかったということらしい。

イタリアにいた腫瘍科の医者なら答えられたらどうか。

イタリアの病院のいいかげんさには頭にきていたが、夫はそれでも、あの国立がんセンターにはそこだけで 20 人以上の腫瘍科の医者がいたが、日本では全国でもそれくらいの数に過ぎないから、やはりわたしはイタリアで手術してよかったと言っていたのだ。日本のやり方でわたしに理解できないのは外科医が化学療法を担当するというので、いわば切ったり貼ったりの職人的な外科に比べ、体調も含めて病気を見るのには内科医のほうが向いているように思う。

仕事柄抗がん剤に詳しい夫は、日本では外科が中心で化学療法は遅れ気味だと言っていた。理由は副作用への対処が難しいから。いったいに医者は副作用を重視しない、とも言う。患者にとってはかなりの問題なのだが。困ったことだ。

だるさと同時に、「ほてり、のぼせ、というのはこれか」という更年期によくある症状が日本に帰ってから始まっていた。急にからだ熱くなり、汗が出るというほどひどくはないが、冬でもふとんをしばらくはねのける。数分で元に戻る。わたしはホルモン系の抗がん剤のため 42 歳で閉経しているから、更年期障害が出ていても不思議ではなかった。

乳がんのあとで出やすい子宮がんの早期発見のため、乳腺外科と同じ日にかかる婦人科の医者に、だるいのも更年期障害なのか、どのくらい続くのか、と問うても、医者は「ひとによって違いますから、いつまでと言われてもねえ。70 歳になって更年期、というひとはいませんから」と言うくらいで、煮え切らない。出口のない思いが続いた。

がんの再発は生命（いのち）にかかわるから、副作用が辛（つら）くてもこの薬をやめるわけにはいかない。術後 5 年間のまねばならないから、さらに 3 年近くはこのだるさを覚悟するより、ない。副作用が出ないひとはまるでだるくないのだから、不公平だ、とも思う。

辛抱である。

まったくだるい日は、「もう長くないな」と思うくらいだるい。経験したことのないヤツにこれがわかるか、と思う。

朝から目が窪（くぼ）み、からだが重い。何にもやる気が出ない。ご飯のしなくと洗濯だけはするが、あとは横になって眠ったり、本を読むか数独（すうどく）という数字パズルをするかで、それが 3 週間も続くと、「どこか悪いんじゃないか」「ひょっとして再発か」などと、なかば本気で心配する。

あとで気がつけば、このときは直前に 2 日間スキーに出かけて思い切り滑りまくっていた。医者には「泊りがけでスキーに行けて結構なことです。だいたいがんが再発してもだるさなんて症状は出ないんです」と冷やかされ、叱られた。しかし、2 日のスキーで 3 週間もひどいだるさがとれないのでは、さすがにイヤになろうというものだ。

わきの下のリンパ腺を取ったことによるむくみも少し出始めた。よくあるように腕ではない。わきの下から横腹にかけてで、ブラのベルトの上がぽっちゃりとふくらみ、醜（みにく）い。シリコンの入った右の乳房の、縫った線の右側も、固めのゼリーでも入れたように膨（ふくら）んでいる。夏に庭の草取りを本気でしたあとは、右腕全部にむくみがきた。横になって休む際、医者に言われたとおり、腕を上にあげて指先から肩へとマッサージをする。リンパ液が降りていきますように。

二の腕の内側の皮膚の、触った瞬間にぴりぴりする痛みは、気がつくとなくなっていった。が、わきの下のくぼみの無感覚はそのままである。ムダ毛を始末するときにまちがって毛抜きで皮膚をはさむと、左側のわきなら痛くて涙が出るが、右側はまるで痛くない。ならばこれはいいことじゃないか、そう思うことにした。

1年1回の定期健診に行って検査をしたあと、結果を聞きに行く日の前はいつもイヤな感じだった。がんを経験したひとはみんな同じではないかと思う。「たぶん大丈夫だとは思いますが、ひょっとして再発していないよね、まさか明日また告知されないよね」という不安な気分である。そして再発していないと聞けばホッとすする。その繰り返しだった。

だるさが続く一方、わたしは次から次へと「会長」をしていた。国際クラブの会長に味をしめたわけである。半日動いて3日寝こむ、1日動いて1週間寝こむのを覚悟するなら、なんとか動けた。何か活動していれば、心の空虚さがない。

最初はなんと、売春ビラをはがす団体の会長だった。家がたまたまラブホテル街のはずれにあり、イタリアから帰ってみると、けばけばしく電話番号を記したデリヘルビラが子どもの通学路に何十枚も貼られていた。デリヘルとは和製英語のデリバリーヘルスの略語だが、何がヘルスだか、実態は「売春婦の宅配」である。元校長のカレンではないが、「通学路だけは勘弁してよ」だ。

たまりかねて近所のひととビラをはがし始めたが、2人や3人ではラチがあかない。広範囲に仲間を募ったら、「ヤクザが出てこない？」と恐がられた。市役所に相談すると、「県登録のボランティア団体を設立しませんか？ そうしたら『身分証』が出せます。県の後ろ盾があるという証拠です」と言われた。なんだか大げさな話になったなと思ったが、しょうがない。団体を設立して会長になった。

メンバーを増やそうと、娘の高校でも呼びかけた。学級懇談会の最後に話を出し、「一番許せないのは、デリヘルビラに『日本人の女の子募集中』とあることです。携帯があれば、小学生でも親の知らないあいだに連絡して売春できます。まさかこの学校でやっている子がいるとは思いませんが」と言ったとたん、赤川次郎流にいうならば、教室の温度が3度くらい急に下がった。雰囲気は凍りついたのである。教師と親の誰もが、やりかねない女の子の顔をひとりふたり想像したに違いない。がぜん、みなさん真剣な顔になった。

その数日後、娘が「友だちのママが母さんのファンなんだって。母さんまた学級懇談会で何か言ったんでしょ」とわたしに言う。

「？ そのママはあの日学級懇談会に出てなかったし、わたしと話もしてないわよ？ ……わかった。そんなカワイイもんじゃないわ。わたしね、体育館でのPTA総会で、あの蛍光ピンクのビラを高く両手に振りかざして、『みなさん一緒にビラをはぎましょう！』って思いっきり怒鳴ったのよ。で、そのあとメンバー募集のチラシを配った」

「……そら、カワイくないわ」と娘は首をすくめた。

活動家の母を持つ娘も楽ではない。

売春ビラをはがしていると、イタリアでの会話を思い出した。英語でもイタリア語でも、腹をたてて相手を罵（ののし）するときのことばには性的なものが多い。英語だとまずファックユー。ファックというのはセックスするという意味だが、どうしてその後に「おまえ」を意味するユーがつくのがわたしにはわからない。一度カナダ人のアンナをつかまえて、俺がおまえをファックする、つまりホモが男をレイプするという意味か、と尋ねてみると、そうではないと言う。じゃあ何かと押して尋ねてみると、彼女はそんなことは考えてみたこともないという顔で眼をパチパチさせながら、一生懸命考えて答えた。ファックというのはセックスの中でも非常に良くないセックスの意味だから、おまえがひどいセックスをする、という意味になる、と。すると傍にいたイギリス人のカレンが付け加えた。

「マドカ、あんたの子どもが腹たてた時に絶対このことばを言わせちゃダメよ。意味がわからないことばでも子どもは他人のまねして言うことがあるけど、言ったら殴られてあたりまえ、っていうくらいのひどいことばだから。中指立てるのも同じ意味だから、絶対ダメよ」

わかったようなわからないような説明だったが、ほかの罵詈雑言（ばりぞうごん）はもっとわかりやすい。英語でバスタード、イタリア語でバスタルドは私生児の意味である。イタリア語ではもっと念入りに「フィリオ・ディ・バス

タルド（売春婦の私生児）」。

もうひとつ大人の男に対する悪口にはコルヌートというイタリア語がある。角（つの）を生やした、という意味で、鬼の意味か、とイタリア人に尋ねると、違う、亭主が女房に浮気されて怒って角が出た、ってことで、おまえの女房は浮気してる、おまえは寝取られ男だ、っていう意味だよ、と説明する。言われた男はまちがいなく腹を立てるだろう。

寝取られ男？

そういえば昔高校生か大学生のころゾラか誰かのフランス小説を読んだとき、コキユということばが寝取られ男という意味だった。

おまえがひどいセックスをするとか、私生児とか寝取られ男とか、日本語の悪口としてはほとんど聞かない。

わたしがそう言うと、フィンランド人のキルシが言った。

「それは日本の文化が性に寛容だからじゃない？」

「西洋の文化では性に寛容じゃないの？」

「キリスト教があるもの」

「キリスト教は性に寛容じゃないの？」

「ないわね」

なるほど、そういうものかもしれない。禁忌があるからこそ、それに反することばが悪口になり得るのだ。悪口の背後にも文化の違いがある。

計3千枚ほどの「売春ビラ」をはがしているうち、40人の子ども会の会長が回ってきた。子ども会の年に1度の旅行では、親付きで遊園地に行く。会社員の親は日曜より土曜を好むが、接客業や職人は土曜も休めない。ウチのバッチ（茨城弁で末っ子）の同級生の保護者がふたり、どうにも仕事を休んで遊園地に行くわけにはいかないと言うから、わたしは腹をくくり、絶対にわたしの指示に従うという条件で男の子ふたりの世話を引き受けた。案の定（あんのじょう）、男の子ひとりには2発ビンタを食らわせることになったが、その子は自分が悪いことをしたとわかっていたから文句は言わない。この子たちふたりとは、

そのあと何年も顔を見れば「よう、元気してる？」と笑顔でつきあう仲である。

末っ子の中学校で卒業式で親の謝辞を読んだら、かなり型外れだが正直な内容がウケて、今まで話したこともない先生からも涙が出そうだったと感謝された。

さらに2年して、84軒の町内会の会長も引き受けた。やり手がない、というのを聞き、天皇でさえ男だの女だの言ってるんだから、町内会長くらいわたしでよけりゃやるよ、と言ったら、ほんとに話がきた。ただ、「まどかはときどき突っ走るから、役員の中に抑える人間が絶対要るぞ」という話があったらしいのをあとで耳にして、苦笑いした。

そうなのかしらん？

確かにわたしは昔から要領が悪く、方向をろくに考えもせずに突き進んでは、玉砕したり、ごうごうたる非難を浴びたりすることも多い。

それでも、わたしは20代で最初の仕事に失敗して以来、心の底にある絶望感と劣等感にさいなまれ続けていたが、イタリア暮らしを転機にして生まれ変わった、という実感がしている。他人が嫌がる会長職がわたしにはできる。それに、わたしは日英伊の3カ国語が話せる。わたしは自信を、生きる力をとり戻しつつあった。

オーボエを再開したのは帰国後1年近くたってからだった。

だるさを抱え、やっとこさ先生を探しあて、芸大出の若い先生のオーボエを聴いてわたしは愕然（がくぜん）とした。イタリアで聞きなれたオーボエの音と、まるで違ったのである。先生が言うには、同じオーボエでもドイツ系の音とフランス系の音の出し方があるらしく、この先生の音はドイツ系だった。イタリアの音はフランス系なんだろうと言う。

教え方も日本とイタリアとではずいぶん違い、わたしはどうして母国語で話す先生のことばが理解できないのだろうか、よく首をひねった。音が開（ひら）いているとか、ころんでいるとか言われるのだ。尋ねてみると、開いた音とはオーボエらしくないラッパのような音で、ころんでいるとはリズムが早く

なったときの表現である。

それでも2年、3年と同じ先生についていると、当然、先生の音がきれいに聞こえてくるようになる。大好きなバッハの教会カンタータの楽譜を銀座の店で見つけ、にんまりとしてそればかりやりたがるので、先生にはあきれられた。バッハの「ヨハネの受難曲」の一節を発表会で吹いたときには、昔から好きだったメロディだけに、当時理想としていた「下手なりにきれい」が実現でき、全6回の発表会のなかでただ一回、自分で満足しただけでなく音楽教室長にも褒められた。

しかし次の発表会で「チェロと合わせたい」と先生にねだってアンサンブルにしてもらったところ、当日舞台の上で、オーボエが何小節か休んだあとで再開するところがわからなくなってオタオタしてしまう、というひどい出来で、かなりガックリきた。どうもわたしには曲全体の流れというものが、まるでわかっていなかったらしい。

一方、がんの再発予防薬が変わってだるさが減ると、オーボエでも少しいい音が出せるようになり、その後近所のひとが捨てていった犬を飼うはめになって毎日散歩を始めると、格段にいい音が出るようになったのには先生もわたしも驚いた。中年で楽器を始めたはいいが、ずっとできなかった腹式呼吸が、散歩という運動のおかげでできるようになったのだった。犬はずいぶん言うことをきかず頭にきたが、オーボエに関してはお犬様さまである。風が吹いて桶屋がもうかるというが、犬を飼ってオーボエがうまくなるとは思わなかった。

管楽器を吹くとからだが温まる。夏はかなり熱くなる。けっこう運動になるのだ。それは血液の流れをよくしてからだの免疫を活性化させるから、がんの再発予防にもいいと夫は言っている。そう告げるとオーボエの先生は、はあ、と、かなり妙な顔をした。初めて聞いた管楽器演奏の効用だろう。

犬を飼い始める直前に山羊を飼い始めた。空き地の雑草を食べさせるためだったが、種つけにつれて行って仔山羊を産ませ、母山羊の乳をしぼってチーズまでつくった。その楽しさとトラブル満載の顛末（てんまつ）については、『猫と山羊と犬』という別のエッセイに書いた。気が向いたら読んでいただけると

嬉しい。

町内会長になって2年目、地区の夏祭の女神輿（みこし）のかつぎ手の名簿に、知らないあいだにわたしの名前が入れられていた。ままよ、とゴム底の足袋（たび）をはき、お囃子（はやし）の笛と太鼓を背中に聴きながらセイヤ、セイヤ、と声をあげて神輿をもんでいると、すごく気分がいい。結局休憩を入れて3時間半かついでしまった。

ヤバイ。

わたしは神輿かつぎが好きだ。

次の年、また神輿をかついでいると、脳ミソの中に麻薬物質が出ているのではないか、というくらい恍惚として気分が良かった。「祭、命（いのち）」という祭バカが世の中にいるのは知っていたが、これか！ と実感した。ところが、その翌々年は女神輿のかつぎ手が少なく、女としてはやや背の高いわたしの肩には神輿の重さがずっしりとかかり、翌日から3日間、からだ中の関節が痛んだ。これには参った。

ところが祭というのはいいもので、神輿だけでなくお囃子も魅力的なことに気がついた。お囃子の列について歩いていると、「おめえやってみっか？」と小さな鼓（つづみ）を持たせてもらった。ところがどっこい、思ったよりずっとリズムが複雑で難しい。練習せずに叩（たた）けるような代物（しろもの）ではない。

本気でお囃子がやってみたい、とわたしは思い始めた。

それにはお囃子会に入れてもらって、毎週の子どもたちのための練習会に出なければならない。しかし、この閉鎖的な田舎で、よそ者のわたしが50歳にもなって、土地のひとばかりのお囃子会に入れてもらえるのだろうか？ やっていけるのだろうか？

なかなか勇気が出ず、実行するまでには丸2年かかった。

お囃子の練習会に出始めても、お囃子の楽譜は○と△だけで書いてある独特なもので、ひとりでは練習もできない。練習会で、横にいるうまいひとの手を

ずっと見ながら小鼓（こつづみ）を叩いていると首が痛くなる。お囃子会の中にも親切にしてくれるひとがいてありがたかったが、依然冷たいひともいた。

しかし続けていれば慣れてくる。慣れてくると、祭はお囃子で実に楽しい。お囃子会のひととも少しずつ仲よくなっていった。どこだって飛びこんでいけば、なんとかなるものだ。

術後5年が無事にたち、再発予防薬をのまないでよくなって、たるさがほとんどなくなった。しみじみと、すごく嬉しい。

からだの調子がいいと、現金なもので、考えることが暗くならない。気分を左右する元には体調があると、改めて思う。新聞記事などで、がんをやりました、10年になります、2度やりました、などとケロリと書いてあると、どうしてあああつけらかんと言えるのか不思議だったが、体調が良くなってみるとよくわかる。人間、喉（のど）もと過ぎると熱さを忘れられる。そしてそれは幸いなことである。

よし、これで仕事にかかれる。

翻訳学校に通って技術を磨き腰を据えて、とはいえ大家族の主婦をしつつだからポチポチだろうが、翻訳をしたい。

翻訳屋になることは20代からの夢だった。まずは翻訳学校に通おう。東京まで片道2時間半はかかるが、夫が毎日通勤しているのだからわたしにもできなくはなからう。

夫の勧めに従って医薬専門の技術翻訳を選び、週1で8カ月翻訳学校に通った。が、そのあとの試験には落ち、しばらくは開店休業が続いた。そのうち、料金は安いと定期的な案件を受けることができるようになり、専門用語にもじわじわと慣れていった。

そうなる仕事に追われ、毎日オーボエの練習をしたり、半日かけてレッスンに通ったりする時間がとれない。わたしはオーボエをやめる決心をした。日本に帰ってからはイタリアにいたときほど練習に熱が入らず、少しずつうまくなってきたとはいえ、存分に吹きこなせるレベルにはまだ達していない。が、

管楽器を吹くには体力が必要で、歳をとればとるほど難しくなるから、これから飛躍的にうまくなれるとも思えなかったのである。

ミラノはずいぶん遠くなった。

思い出すとせつなくなる。

わたしたちの人生はイタリア前とイタリア後に分かれるんじゃないかと思うほど変化したのだが。

わたしの父が山口から茨城に来て、7年同居した。母が亡くなったときに、親孝行は生きているうち、ということばが身に沁（し）みたから、わたしが父に孝行ができるのは幸いである。とはいえ、家族は7人。洗濯物も食事も、毎日大量。今晚は豚カツ、という日は10枚のカツを揚げた。その日の分が7枚、あくる日の子どもふたりの弁当とわたしと父との昼食用に2枚、将来の弁当のおかず用にさらに1枚である。

父といると、母のことも考える。

母は大学を出ずに大学教授になったひとであった。非常な勉強家で、家にいるときもたいてい机についていた。若い時分から熱心に俳句をつくり、父とふたりで、といっても母が主になって句会を始めて30年主宰し、句集を何冊か出し、俳人であると同時に俳句の評論もしていた。テレビや講演に出ることもある地方名士だったので、わたしは結婚するまでどこへ行っても、母の子だとして見られた。誇り高い気もあるにはあったが、「マドカ個人として扱って欲しいのに」という、うっとうしい気も強かった。

そのうえ、それだけ「お偉いさん」だと母の頭（ず）も高い。わたしはずいぶん肝焼き娘で、親ほど出来もよくなかったので無理もないが、よく叱られた。その叱り方が上から目線どころか、雲の上から見下ろしているような権高（けんだか）さである。わたしは反発し、怒りをそのままぶつけてキツイことばを返し、母を泣かせることがままあった。40歳を過ぎるまでその繰り返しである。

が、亡くなられてみると、勤勉さ、きちょうめんさはともかく、わたしのこの好奇心と馬力はなんと母に似ていることか。母は油絵を描いたり卓球をしてみたり、結核の手術で片肺しか残っていないのに同僚に誘われると山に登ることもあり、御嶽山（おんたけさん）にはわたしもついでに行った。萩焼が好きで、窯元（かまもと）に出入りもしていた。名のある作家の売りものにならない焼き物がほうってあるのをよくもらってきて、いいでしょうこれ、と飾っていると、素人目に焼き物の欠点はわからず、なかなかいい。床の間の軸を季節ごとに取り替え、花を欠かさなかった。美しいものを愛し、人生を楽しんだひとでもあったと思う。

だから、この「ミラノで乳がん切りました」をもし誰かに献じるとしたら、よく喧嘩をしたこの母しかいまい。

十五章 現在

乳がんを切って15年が過ぎた。

この手記はもっと早く世に出したかったのだが、一度「あなたの書いたものを本にしませんか？」という新聞広告を見て原稿を送ったら、150万円出せと言われた。そのころは4人の子の教育費に金がかかる盛りで、わたしもまだ翻訳屋を開業しておらず、金が惜しかったから諦めた。昔アメリカで「創作」の講義をとった際、「最後に言うておくけど、あなたたち作品を活字にしたいって思うでしょ？でもね、出版と印刷は違うわよ。あなたがお金をもらうのが出版、あなたが金を払うなら、それは単なる印刷」という講師のことばが頭に残っていたせいもある。

で、それきりになったのだが、最近になって、「いや、あれからどれだけ時間がたっているにしろ、このままでは気がすまない。ではインターネットで発表するか」と思い立った。が、わたしの世代でネットの世界はハードルが高い。ちょうど編集を仕事にしている同級生がいたので相談したところ、思いっきり背中を押された。

「小林麻央さん（海老蔵さんの奥さん）が乳がんを公表してメッセージを届け続けたように、まどかも乳がんサバイバー（経験者）としての生きざまを世に問うべきやわ」と。

これで決心がついた。

わたしの右腕からわき腹にかけてのむくみはずっと続いているものの、歳をとるとあちこち醜くなるのにまぎれて、しょうがないわねえと諦（あきら）めがつく程度だ。もっと気になるのは、痩せたあとで左のお乳が垂（た）れてきたことだった。シリコンで全部再建した右のお乳はまったく垂れていない。イタリアの医者が「シリコンを入れた乳は垂れない」と言ったから左側にも90グラム入れたのにも、限界があったわけだ。

白髪は相変わらず少ない。それはいいが、髪のパリュームがとんでもなく減ってしまったのが情けない。全体がペシャンコで貧相に見え、とくに後ろ頭の一番上のあたりの髪が少ない。よく男性がハゲ始めるあたりで、こうなると、誰も好きでハゲルわけではないことが実感され、ひとのハゲをバカにはできなくなった。もちろん歳をとると、たいていの女性の髪は細くなってパリュームもなくなるのだが、わたしの場合はあきらかに化学療法を境に変化した。一種の後遺症というべきか。しかし単に美容上の問題だから、まあ騒ぐほどのことではなからう。

ついでの話だが、欧米では日本ほどハゲを気にしない。ひとつには白人に若ハゲが多いからだろう。イギリスのウィリアム王子なんて 30 代であの見事なハゲっぷりである。トルストイの『アンナ・カレーニナ』でも、恋人のウロンスキーが後ろ頭が薄くなってきたと友人にからかわれる場面があって、日本では主人公の恋人が若ハゲという設定はありえない、と絶句した覚えがある。もうひとつの理由は、金髪は地肌と色が似ているから、黒髪ほどハゲが目立たない、ということだと思う。髪が薄くなってきたら、彼らは潔く坊主に近いほど短髪にして、おしゃれしている。日本人の若ハゲも、かつらや増毛をせずに短髪でもいいのにな。

幸いなことにがんは再発していない。

10 年再発なしとわかったとき、夫はスーパーで買った可愛らしい花束をわたしにくれ、わたしも夫につきあって赤ワインを 1 グラス飲み、ふたりで静かな祝杯をあげた。

これで「完治」である。

イタリアから帰国するときに「マドカの人生のイタリアの章」が終わるのねと言われたのに習えば、わたしの人生の「がんの章」が終わったわけだ。いや、今からも再発する可能性がないわけではないが。

ひとまず終わってみれば、がんは人生の一部分でしかない。

闘病中は人生のすべてに思えたのに！

今のわたしは茨城を離れて山口県の夫の実家に住み、技術翻訳を続けている。最近やっと英訳が上達してきて、たまにクライアントからご指名で（といっても「前の訳者と同じひとで」という程度だが）仕事ができることがあるのがとても嬉しい。母が生きていたらさぞや喜んでくれただろう。

父を一昨年見送った。

それまでは自宅に戻った父のもとへと、毎週泊りがけで2年半通っていた。そうして、ああ人間とはこういうふうに弱り、少しずつできないことが増えて、そして最期を迎えるのか、と時おり重い気分を抱えながらわたしは父を見ていた。

ひとは誰も一度は死ぬ。わたしはどんなふうに老いて死を迎えるのだろうか？ 延命治療はイヤだ。高齢になってからの抗がん剤治療も、副作用を考えるとゴメンだ。これだけ好きなことをやってきたのだから、悔いはない。若いときからあった死へのあこがれのようなものも、ひそかにずっと続いている。

しかし、告知直後に死ぬのはいやだと泣きわめいたことを思い出すと、苦笑いが出る。たぶん、わたしはいくらエラソーなことを言っても「悟りをひらいた」わけではない。

ま、人間、そんなものさ。

一方、明るくさっぱりしていた義母は、義父が事故で急死したあとでひとり暮らしの不便と不安にさいなまれ、ひどく怒りっぽくなってしまった。認知症も進み、わたしの父が山口に帰ったあとで茨城の家に同居に来た。

その最初の1年でわたしは8キロ痩せた。それくらい大変だったわけだが、それまで十数年、何をがんばっても痩せられなかったことを思えば、認知症の姑（しゅうとめ）との同居は最強のダイエットだった。そう、どんな最悪と思える事態でも、探せば何かステキなことが必ずひとつはある！

義母は今では、わたしが乳がんになったことを覚えていない。過去の悪い思い出も忘れられるのだから、認知症にもいいところがあるじゃないか、とは夫の弁である。夫が早期退職して介護の主戦力となった2年後、義母は施設に入

所し、わたしたちの人生の「介護の章」は一段落ついた。

わたしの現在の一番の楽しみは庭木の刈り込みと草取りである。とくに太い枝を鋸（のこぎり）で切って落とすのが快感。人間に元から備わっているという破壊衝動が有益な形で発揮されている感じがして、最高のストレス発散になる。今年は草刈り機デビューもした。緑の中での作業はこれ以上ない精神的癒しになるばかりでなく、からだを使い、汗をかくから肉体的健康にもいい。裏の崖を含めて農家の敷地は広く、翻訳の合間の手入れでは、なかなかいきとどかないのが悩みの種ではあるが。

居住している築90年の古民家は内部が暗く、寒い。内部のリフォームはするつもりだが、白壁と板、瓦の外観を変えるつもりはない。イタリアにいるとき、イタリアにあるものと同じくらい美しい伝統建築が今の日本にもあるのか？という疑問があったのが、山口のこの家を見たとき氷解したからである。

これだ！ この古民家は美しい！ これは守らなければいけない！

もちろん、単なる古い農家に過ぎず、一般的に見てとりたててすばらしいというものではない。しかし、わたしにとっては日本特有の美しさのひとつである。

お囃子は細々ながら続けている。山口から茨城に毎夏行って、祭で大・中・小2つの4種類の太鼓を叩きながら歩くのだ。あんなすばらしいものをやめる気にはなれない。

そのうち、子どものころ弾いていた古いピアノを今の家に移して修理し、バッハのインベンションをまた弾きたいと願っている。日本の民間伝統芸能であるお囃子と、西洋のクラシックであるバッハの音楽とは、どちらも伝統的な音楽、ということを除けばなんの共通点もない。が、ともにわたしの心を深く魅了し、満ち足りた気分にしてくれる。

ここまで読んでくださったあなたは、ひょっとしてがんの闘病中だろうか。それとも単にミラノ暮らしに興味を持たれたただけだろうか。どうであれ、わた

しがあなたに望むことはただひとつ。

あなたにも、あなたの人生をできるだけ楽しんでほしい。

人生は一度きりだから。

そして…

ここに書いたことはすべて事実ですが、あくまで個人の、それも 2002 年前後の、主にイタリアでの経験です。がん治療の最新情報については専門家にお尋ねくださいね。